

江戸川乱歩の世界
(完全版)

目次

江戸川乱歩の世界 (完全版)

- 一、 人間椅子
 - 二、 盲獣
 - 三、 D坂の殺人事件
 - 四、 心理試験
 - 五、 屋根裏の散歩者
 - 六、 陰獣
- ※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
① 人間椅子

目次

江戸川乱歩の世界

人間椅子

- 一、一通の手紙
- 二、妄想の世界
- 三、人間椅子の完成
- 四、奇つ怪な快樂
- 五、新しい經驗
- 六、新たな展開
- 七、奥様の反応
- 八、更なる妄想

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
人間椅子

人間椅子

例えば、江戸川乱歩の『人間椅子』という作品は、その数多くとある作品の中でも、今なお「高い人気」を誇っているものであり、それゆえ、例えば、映画やテレビドラマなどで何度か観た経験のある人も非常に多いかと思うが、一方、本（書物）に書かれた「文章」として読む機会は、意外に少ないのではないだろうか。そこで、今回は、江戸川乱歩の『人間椅子』の「本文」にできるだけ寄り添いながら、その「魅力」を少しばかり探ってみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」は、次のようなものである。「……佳子は、毎朝、夫の登庁を見送ってしまうと、それはいつも十時を過ぎるのだが、やつと自分のからだになって、洋館のほうの、夫と共用の書斎へ、とじこもるのが例になっていた。美しい閨秀作家としての彼女は、この頃では、外務省書記官である夫君の影を薄く思わせるほど、有名になっていた。彼女のところへは、毎日のように未知の崇拜者たちからの手紙が、幾通となく送られてきた。その多くは、極まりきったように、つまらぬ文句のものばかりであったが、彼女は、女のやさしい心遣いから、どのような手紙であろうとも、自分にあてられたもの、ともかくも、一通りは読んでみることにしていた」のである。

一、一通の手紙

さて、今日も、いつものように簡単なものから先にして、二通の封書と、一葉のはがきを見てしまうと、あとはかさ高い原稿らしい一通が残った。それは、思った通り、原稿用紙を綴じたものであった。が、どうしたことか、表題も著名もなく、突然「奥様」という、呼びかけの言葉ではじまっているのであった。……

*

*

奥様、奥様のほうでは、少しも御存じのない男から、突然、このようなぶしつけなお手紙を差し上げます罪を、幾重にもお許しくださいませ。こんなことを申しあげますと、奥様は、さぞかしびっくりなさることごさいますし、私は今、あなたの前に、私の犯してきました世にも不思議な罪悪を告白しようとしているのでございます。私は数ヶ月のあいだ、全く人間界から姿を隠して、ほんとうに悪魔のような生活を続けてまいりました。もちろん、広い世界に誰一人、私の所業を知るものはありません。もし、何事もなければ、私はそのまま永久に、人間界に立ち帰ることはなかったかもしれないのでございます。ところが、近頃になりまして、私の心に或る不思議な変化が起きました。そして、どうしても、この、私の因果な身の上を、懺悔しないではいられなくなりました。ただ、かように申しましたばかりでは、いろいろ御不審におぼしめす点もございませうが、どうか、ともかくも、この手紙を終わるまでお読みくださいませ。そうすれば、なぜ、私がそんな気持ちになったのか、またなぜ、この告白を、殊さらに奥様に聞いていただかねばならぬのか、それらのことが、ことごとく明白になるでございませう。

*

*

まず最初、「奥様」と親しく呼びかけている。この「奥様」という親しい呼びかけの「言、

葉」こそは、まさに実に生々しい「肉声の響き」となって、最後の最後まで、「読む人」（奥様や読者たち）の心の奥深くまで直接的に言葉が響き入るのである。しかも、いかにも「手紙の書きぶり」（つまり「自分の罪の告白文」）のように見せかけていながらも、しかし、その実は、すでに「作品（小説）の冒頭の書き出し部分」になっているという、いわば「二重構造」になっている、それは、「……どうか、ともかくも、この手紙を終わるまでお読みくださいませ。そうすれば、なぜ、私がそんな気持ちになったのか、またなぜ、この告白を、殊さらに奥様に聞いていただかねばならぬのか、それらのことが、ことごとく明白になるでございましょう」となるのである。——つまり、ふつうに「小説の原稿」などを送っても、まともには読んでもらえないだろう。そこで、まさに「手紙形式の内容」にして送れば、最後まで読んでももらえるのではないかという、そういう「一つの試み」であるとともに、最後まで読んでももらえれば、それは、作品としては、まさに「大成功」（つまり「出来映えのよい作品」という実証にもなるということである）。

*

さて、私は生れつき、世にも醜い容貌の持主でございます。これをどうか、はつきりとお覚えなすっておいてくださいませ。そうでないと、もしあなたが、このぶしつけなお願いを容れて、私にお会いくださいました場合、たださえ醜い私の顔が、長い月日の不健康な生活のために、二た目と見られぬひどい姿になっているのを、なんの予備知識もなしに、あなたに見られるのは、私としては、たえがたいことでございます。

私という男は、なんと因果な生れつきなのであります。そんな醜い容貌を持ちながら、胸の中では、人知れず、世にも烈しい情熱を燃やしていたのでございます。私は、お化けのような顔をした、その上ごく貧乏な、一職人にすぎない私の現実を忘れて、身のほど知らぬ、甘美な、贅沢な、種々さまざまの「夢」にあこがれていたのでございます。

私がもし、もっと豊かな家に生れていたら、金銭の力によつて、いろいろの遊戯にふけり、醜貌のやるせなさを、まぎらすことができたでもありません。それともまた、私にもっと芸術的な天分が与えられていたら、たとえば美しい詩歌によつて、この世の味気なさを忘れることができたでもありません。しかし、不幸な私は、いずれの恵みにも浴することができず、哀れな、一家具職人の子として、親譲りの仕事によつて、その日その日の暮らしを立てて行くほかはないのでございました。

私の専門は、さまざまの椅子を作ることでありました。私の作った椅子は、どんなむずかしい注文主にも、きつと気に入るというので、商会でも、私には特別に目をかけて、仕事も、上物ばかりを、廻して入れておりました。そんな上物になりますと、凭れや肘掛けの彫りものに、いろいろむずかしい注文があつたり、クッションのぐあい、各部の寸法などに、微妙な好みがあつたりして、それを造る者には、ちよつと素人の想像できないような苦心があるのでございますが、でも、苦心をすればただけ、できあがつたときの嬉しさというものはありません。生意気を申すようですけれど、その心持は、芸術家が立派な作品を完成したときの喜びにも、比べべきものではないかと存じます。

*

*

さて、これらは、一体、何を意味するのだろうか？ それは、いわゆる『人間椅子』という「物語」（ストーリー）が成立するための、まさに「必須の条件」なのである。それは、一体、どのようなことかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、ま

ず、「……私は生れつき、世にも醜い容貌の持主でございます」とある。これは、もし「ふつうの容貌」であれば、ふつうに「恋愛」ができてしまう。それでは、わざわざ「人間椅子」など作り出す必要などどこにも生じてこないのである。しかも、「……そんな醜い容貌を持ちながら、胸の中では、人知れず、世にも烈しい情熱を燃やしていたのでございます」とある。これは、例えば、自分はこんな醜い容貌を持っているのだから、女性と「恋愛」などできるはずもないとあきらめているのなら、同じく「人間椅子」などを作り出す必要などどこにもないのである。ところが、「……そんな醜い容貌を持ちながら、胸の中では、人知れず、世にも烈しい情熱を燃やしていたのでございます」とある。それを、敢えて一言で言えば、それは、「……世にも美しい女性との恋愛を夢見ていたのです。もっと具体的に言えば、世にも美しい女性の肉体に触れてみたい、さわってみたい、もっと言えば、抱いてみたいと夢見ていた」のである。「……私がもし、もっと豊かな家に生れていましたら、金銭の力によって、いろいろな遊戯ができただろうし、また、私にもっと芸術的な天分が与えられていたら、たとえば美しい詩歌によって、この世の味気なさを忘れたり、美しい女性たちを惹き付けることもでき得たでしょう。しかし、不幸な私は、いずれの恵みにも浴せず、哀れな、一家具職人の子として、（しかし、腕の優れた椅子職人として）、親譲りの仕事によって、その日その日の暮らしを立てて行くほかはなかったのでございます」。それゆえ、自分の「夢」を実現するためには、どうしても「人間椅子」のようなものを造り出さなければ、自分の「夢」は達成されないという、そういう「前提条件」が、ほぼ出そろったということである。それに、幾つかの「妄想」などをつけ加えるならば、それは、次のようなものである。……

二、妄想の世界

さて、一つの椅子ができあがると、私は先ず、自分でそれに腰かけて、坐りぐあいをためてみます。そして、味気ない職人生活のうちにも、そのときばかりは、なんともいえないぬ得意を感じるのでございます。そこへは、どのような高貴の方が、或いはどのような美しい方がおかけなさることか。こんな立派な椅子を注文なさるほどのお屋敷だから、そこには、きつとこの椅子にふさわしい、贅沢な部屋があるのだろう。壁には定めし、有名な画家の油絵がかかり、天井からは、偉大な宝石のようなシャンデリヤが下がっているにちがいない。床には高価なジュウタンが敷きつめてあるだろう。そして、この椅子の前のテーブルには、眼の醒めるような西洋草花が、甘美な薫りを放って、咲き乱れていることであろう。そんな妄想に耽っていますと、なんだかこう、自分が、その立派な部屋のあるじにでもなったような気がして、ほんの一瞬間ではありますけれど、なんとも形容のできない、愉しい気持になるのでございます。

私のはかない妄想は、なお、とめどもなく増長してまいります。この私が、貧乏な、醜い、一職人にすぎないこの私が、妄想の世界では、気高い貴公子になって、私の作った立派な椅子に腰かけているのでございます。そして、そのかたわらには、いつも私の夢に出てくる、美しい私の恋人が、におやかにほほえみながら、私の話に聞き入っております。そればかりではありません。私は妄想の中で、その人と手を取り合って、甘い恋の睦言を、ささやき交わしさえするのでございます。

ところが、いつの場合にも、私のこのフーワリとした紫の夢は、たちまちにして、近所のおかみさんのかしましい話し声や、ヒステリーのように泣き叫ぶ、そのあたりの病児の声に妨げられて、私の前には、またしても、醜い現実が、あの灰色のむくろをさらけ出すのでございます。現実には立ち帰った私は、そこに、夢の貴公子とは似てもつかない、哀れにも醜い自分自身の姿を見出します。そして、いまの先、私にほえみかけてくれたあの美しい人は……そんなものが、全体どこにいますのでしよう。その辺に、埃まみれになつて遊んでいる、汚らしい子守女でさえ、私などには、見向いてもくれはしないのでございます。ただひとつ、私の作った椅子だけが、今の夢の名残りのように、そこにポツネンと残っております。しかし、その椅子さえも、やがて、いずことも知れぬ、私たちとは全く別の世界へ、運び去られてしまい、すべては消えてしまうのであります。

*

*

さて、彼の唯一の「自慢」は、腕の優れた椅子職人であり、彼の作った椅子は、どんなむずかしい注文主でも、きつと気に入るといので、商会でも、特別に目をかけてもらい、仕事も、上物ばかりを、廻してもらっていたのです。そして、苦心してできあがつた椅子を見るときの嬉しさは、芸術家が立派な作品を完成させたときの喜びにも、比すべきものであり、そのできあがつた椅子に腰掛けて夢見る「妄想」は、「……貧乏で、醜い、一職人にすぎないこの私が、妄想の世界では、気高い貴公子になって、私の作った立派な椅子に腰かけていて、しかも、そのかたわらには、いつも私の夢に出てくる、美しい私の恋人が、におやかにほえみながら、私の話に聞き入っており、しかも、そればかりではなく、私は妄想の中で、その人と手を取り合つて、甘い恋の睦言を、ささやき交わしさえするのでした」。しかし、そのような夢見る「妄想」は、現実の騒々しい音などにより、たちまちかき消され、現実には立ち帰った私は、「……そこに、夢の貴公子とは似てもつかない、哀れにも醜い自分自身の姿を見出し、しかも、先ほどまで私にほえみかけてくれたあの美しい人は……そんなものが、全体どこにいますのでしよう。その辺に、埃まみれになつて遊んでいる、汚らしい子守女でさえ、私などには、見向いてもくれないのです」。

*

*

私は、そのような「妄想」と「現実」との余りにも「大きな隔たりの間」を幾度となく彷徨ううちに、言い知れぬ味気なさに襲われるのでした。その、なんとも形容のできない、いやあな、いやあな心持は、月日がたつに従つて、だんだん、私には堪えきれないものになつてまいりました。「……こんな、うじ虫のような生活をつづけて行くくらいなら、いつそのこと、死んでしまつたほうがましだ」と、私は、まじめに、そんなことを思いました。仕事場で、コツコツと鑿を使いながら、釘を打ちながら、或いは、刺激の強い塗料をこね廻しながら、同じようなことを、執拗に考え続けるのでした。しかし、ある時、——「だが、待てよ、死んでしまうくらいなら、それほどの決心ができるなら、もっとほかに、方法がないものであろうか」と、考えるようになったのです。

そうして、私の考えは、だんだん恐ろしいほうへ、向いて行くのであります。——ちようどそのころ、私は、かつて手がけたこともない、大きな革張りの肘掛椅子の制作を頼まれておりました。その椅子は、同じY市で外人の経営している或るホテルへ納める品で、一体なら、その本国から取り寄せるはずのを、私の雇われていた商館が運動して、日本にも舶来品に劣らぬ椅子職人がいるからというので、やっと注文をとつたものでした。それ

だけに、私としても、寝食を忘れてその制作に従事しました。ほんとうに魂をこめて、四つの肘掛椅子^{ひしかけ}を、夢中になって創り上げ、その中の一つを徹底的に改造して、一人の人間が中に入れるような、まさに「人間椅子」へと仕上げたのでございます。

三、人間椅子の完成

それでは、その「動機と作り方」であるが、それをここで再確認しておきたいと思うが、それは、次のようなものである。つまり、「……最初は、ただただ、私の丹精こめた美しい椅子を、手放したくない、できることなら、その椅子と一緒に、どこまでもついて行きたい、そんな単純な願いでした。それが、うつらうつらと妄想の翼を広げているうちに、ふとすばらしい考えが浮かんでまいりました。悪魔の囁き^{ささや}というのは、多分ああしたことを指すのではありますまいか、それは、夢のように荒唐無稽^{こうとうむけい}で、不気味な事柄^{ことばら}でした。でも、その不気味さが、言いしれぬ魅力となつて、私をそのかすのでございます。そして、私はまあなんという気ちがいでございますよう、その奇怪きわまる妄想を、実際にやってみようと思ひ立ったのであります。私は大急ぎで、四つの内でいちばんよくできたと思ふ肘掛椅子^{ひしかけ}を、バラバラに毀^{こわ}してしまい、改めて、それを私の妙な計画を実行するのに、都合のよいように造り直しました。

*

*

それは、ごく大型のアームチェアですから、掛ける部分は、床にすれすれまで革を張りつめてあり、そのほか、凭れ^{もた}も肘掛^{ひしか}けも、非常に部厚にできていて、その内部には、人間一人が隠れていても、決して外からわからないほどの、共通した大きな空洞^{くうどう}があり、むしろ、そこには頑丈^{がんじょう}な木の枠^{わく}と、沢山なスプリングが取りつけてあるが、私はそれらに適当な細工をほどこして、人間が掛ける部分に膝^{ひざ}を入れ、凭れ^{もた}の中へ首と胴^{たな}を入れ、ちょうど椅子の形に坐れば、その中にしのんでいられるほどの余裕を作ったのです。——そして、例えば、呼吸をしたり、外部の物音を聞くために、革の一部に、外から少しもわからぬような隙間^{すきま}をこしらえたり、凭れ^{もた}の内部の、ちょうど頭のわきの所へ、小さな棚^{たな}をつけて、何かを貯蔵できるようにし、そこに水筒と軍隊用の乾パンとを詰めこみ、その他、様々な考案をめぐらして、食料さえあれば、その中に二日三日入り続けていても、決して不便を感じない、いわば、その椅子が、人間一人の部屋になつたのでございます。

*

*

さて、すべての「準備」ができ上がると、あとは、「……私はシャツ一枚になり、底に仕掛けた出入口の蓋^{ふた}をあけて、椅子の中へ、すっぽりともぐりこみました。それは実に変てこな気持であり、まっ暗な、息苦しい、まるで墓場の中へはいったような、不思議な感じがしましたが、考えてみれば、墓場にちがいありません。私は、椅子の中へはいると同時に、ちやうど隠れ蓑^{かくみの}でも着たように、人間世界からは消滅してしまうのですから。

やがて、商会から使いのものが、四脚の肘掛椅子^{ひしかけ}を受け取るために、大きな荷車^{にぐるま}を持ってやってまいりました。私の内弟子が（私はその男と、たった二人暮らしたたつたのですが）、何も知らないで、使いのものと対応しております。車に積みこむ時、一人の人夫が『こいつはばかに重いぞ』とどなりましたが、もともと肘掛椅子^{ひしかけ}そのものが非常に重いものですから、別段あやしまれることもなく、結局、何事もなく、その日の午後には、もう私の

いった肘掛椅子は、ホテルの一室に、どっかりと据えられておりました。それは、私室ではなくて、人を待ち合わせたり、新聞を読んだり、煙草をふかしたり、いろいろの人の頻繁に出入りする、ラウンジとでもいうような部屋でございました。……

四、奇っ怪な快楽

さて、ホテルのラウンジに、人間の入った肘掛椅子が、どっかりと据えられると、彼がまず最初に行なったことは、何と「盗み」であり、人のいない時を見すまして、椅子の中から抜け出し、ホテルの中をうろつき廻って、盗みを働くことであり、椅子の中に人間が隠れているなどと、そんなばかばかしいことを、誰が想像いたしました。私は、影のように、自由自在に、部屋から部屋を荒らし廻ることができ、そして、人々が騒ぎはじめる時分には、椅子の中の隠れ家へ逃げ帰って、息をひそめて、彼等の間抜けな搜索を見物していればよいのです。そして、ホテルに着いて三日目には、もうたんまりと、ひと仕事すませていたほどであり、いざ盗みをするという時の恐ろしくも楽しい心持、うまく成功した時の、なんとも形容しがいい嬉しさ、それから、人々が私のすぐ鼻の先で、あっちへ逃げた、こっちへ逃げたと、大騒ぎをやっているのを、じっと見ているおかしさ、それがまあ、どのような不思議な魅力をもつて、私を楽しませたことでございましょう。

*

*

しかし、今の私は、そんな盗みなどよりは、十倍も、二十倍も、私を喜ばせたところの、奇怪きわまる快楽を発見したのでございます。そして、それについて、告白することが、実は、この手紙の本当の目的なのでございます。——さて、いろいろな人たちが入れかわり立ちかわり腰をおろしますが、彼らが柔かいクッションだと信じきっているものが、実は私という人間の、血の通った大腿であるということは、少しも悟られなかったのでございます。——まっ暗で、身動きもできない革張りの中の天地、それがまあどれほど、怪しくも魅力ある世界でございましょう。そこでは、人間というものが、日頃目で見ている、あの人間とは、全然別な生きものに感ぜられます。彼らは声と、鼻息と、足音と、衣ずれの音と、そして、幾つかの丸々とした弾力に富む肉塊にすぎないのでございます。私は、彼らのひとりひとりを、その容貌のかわりに、肌ざわりによつて識別することができます。それは、異性についても、同じことであり、普通の場合は、主として容貌の美醜によつて、それを批判するのでしょうか、この椅子の中の世界では、そんなものは、まるで問題外であり、そこには、まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりであり、私はそこで、一人の女性の肉体に（それは私の椅子に腰かけた最初の女性でしたが）烈しい愛着を覚えたのでございます。声によつて判断すれば、それは、まだうら若い異国の乙女であり、彼女は、何か嬉しいことでもあった様子で、小声で、不思議な歌を歌いながら、踊るような足どりで、そこへはいってきて、私のひそんでいる肘掛椅子の前までくると、いきなり、豊満な、それでいて非常に、しなやかな肉体を、私の上へ投げかけました。しかも、彼女は何がおかしいのか、突然アハア笑い出し、手足をバタバタさせて、網の中の魚のように、ピチピチと跳ね廻るのでございます。

女は神聖なもの、いや、むしろ怖いものとして、顔を見ることさえ遠慮していた私でございませう。その私が今、身も知らぬ異国の乙女と、同じ部屋に、同じ椅子に、それどころ

ではありません、薄いなめし皮ひとつ隔てて、肌のぬくみを感じるほど密着しているの
でございます。それにもかかわらず、彼女は何の不安もなく、全身の重みを私の上に委ね
て、見る人のない気安さに、勝手気儘な姿勢をいたしております。私は椅子の中で、彼女
を抱きしめる真似をすることもできます。革のうしろから、その豊かな首筋に接吻するこ
ともできます。そのほか、どんなことをしようと、自由自在なのでございます。

この驚くべき発見をしてからというのは、私は、最初の目的であった盗みなどは第二
として、ただもう、その不思議な感触の世界に惑溺してしまつたのでございます。私は考
えました。これこそ、この椅子の中の世界こそ、私に与えられた、ほんとうのすみかでは
ないかと。私のような醜い、そして気の弱い男は、明るい光明の世界では、いつもひけ目
を感じながら、恥かしい、みじめな生活が続けて行くほかに、能のない身でございます。
それが、ひとたび、住む世界をかえて、こうして椅子の中で、窮屈な辛抱をしていさえす
れば、明るい世界では、口を利くことはもちろん、そばへよることさえ許されなかった、
美しい人に接近して、その声を聞き、肌に触れることもできるのでございます。

椅子の中の恋！それがまあ、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つか、実際に椅
子の中にはいつてみた人でなくては、わかるものではありません。それは、ただ、触覚と、
聴覚と、そして僅かの嗅覚のみの恋でございます。暗やみの世界の恋でございます。決
してこの世のものではありません。これこそ、悪魔の国の愛欲なのでございますまいか。
考えてみれば、この世界の、人目につかぬすみずみでは、どのような異形な、恐ろしい事
柄が行なわれているか、ほんとうに想像のほかでございます。

*

*

さて、主人公の家具「職人」は、最初は、人のいない時を見すまして、椅子の中から抜
け出し、ホテルの中をうろつき廻つては、何と「盗み」を働くことに夢中になっていたの
である。むろん、その「目的」は、「金品」を得ることではあるが、それに加えて、「…
：いざ盗みをするという時の恐ろしくも楽しい心持、また、うまく成功した時の、なんと
も形容しがたい嬉しさ、それから、人々が私のすぐ鼻の先で、あっちへ逃げた、こっちへ逃
げたと、大騒ぎをやっているのを、じっと見ているおかしさ、それがまあ、どのような不
思議な魅力をもつて、私を楽しませたこととございましょう」と、その「得意」を感じて
いたのである。——ところが、「…：今の私は、そんな盗みなどよりは、十倍も、二十倍
も、私を喜ばせたところの、奇怪きわる快樂を発見したのでございます。そして、それ
について、告白することが、実は、この手紙の本当の目的なのでございます」となるので
ある。——では、それは、一体、どのようなことであるのかと問えば、それは、まさに次
のようなことになるのである。

例えば、女性に対しては、「…：一般に、主として容貌の美醜によつて、それを批判す
るのでしようが、この椅子の中の世界では、そんなものは、まるで問題外であり、そこに
は、まるはだかの肉体と、声の調子と、匂いとがあるばかりであり、私はそこで、一人の
女性の肉体に（それは私の椅子に腰かけた最初の女性でした）烈しい愛着を覚えたので
ございます」とある。——それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、彼の人生の中で、
かつて一度も経験したことのないようなことを、初めて生で経験していたからである。つ
まり、彼は、世にも醜い容貌だったので、まともに女性に近づくことすらできず、まして
や、女性の「肉体」に直接触れるようなことは全くなかったのである。

ところが、それは、「椅子の中」からではあったが、彼は、一人の女性の肉、体、「……それは、声によって判断すれば、まだうら若い異国の乙女であつたが、彼女は、何か嬉しいことでもあつた様子で、小声で、不思議な歌を歌いながら、踊るような足どりで、そこへはいつてきて、私のひそんでいる肘掛椅子の前までくると、いきなり、豊満な、それでいて非常に、しなやかな肉体を、私の上へ投げかけました。しかも、彼女は何がおかしいのか、突然アハアハ笑い出し、手足をバタバタさせて、網の中の魚のように、ピチピチと跳ね廻るのでございます。——女は神聖なもの、いや、むしろ怖いものとして、顔を見ることさえ遠慮していた私でございます。その私が今、身も知らぬ異国の乙女と、同じ部屋に、同じ椅子に、それどころではありません、薄いなめし皮ひとつ隔てて、肌のぬくみを感じるほど密着しているのです。それにもかかわらず、彼女は何の不安もなく、全身の重みを私の上に委ねて、見る人のない気安さに、勝手気儘な姿勢をいたしております。私は椅子の中で、彼女を抱きしめる真似をすることもできます。革のうしろから、その豊かな首筋に接吻することもできます。そのほか、どんなことをしようと、自由自在なのでございます」という、彼の人生の中で、かつて一度も経験したことのないようなことを、今、まさに初めて生で経験していることになるのである。……

そして、「……この驚くべき発見をしてからというものは、私は、最初の目的であつた盗みなどは第二として、ただもう、その不思議な感、触の世界に惑溺（わくでき）（我を忘れ夢中になつて）しまつたのです。私は考えました。これこそ、この椅子の中の世界こそ、私に与えられた、ほんとうのすみかではないかと。私のような醜い、そして気の弱い男は、明るい光明の世界では、いつもひけ目を感じながら、恥かしい、みじめな生活を行くほかに、能のない身でございます。それが、ひとたび、住む世界をかえて、こうして椅子の中で、窮屈な辛抱をしていさえすれば、明るい世界では、口を利くことはもちろん、そばへよることさえ許されなかった、美しい人に接近して、その声を聞き、肌に触れることもできるのでございます。——椅子の中の恋！それがまあ、どんなに不可思議な、陶酔的な魅力を持つか、実際に椅子の中にはいつてみた人でなくては、わかるものではありません。それは、ただ、触覚と、聴覚と、そして僅かの嗅覚のみの恋でございます。暗やみの世界の恋でございます。決してこの世のものではありません。これこそ、悪魔の国の愛欲なものでございますまいか。考えてみれば、この世界の、人目につかぬすみずみでは、どのような異形な、恐ろしい事柄が行なわれているか、ほんとうに想像のほかでございます」となるのである。——つまり、考えてみれば、この「椅子の中の恋！」どころではない、この「俗世界」（その実に様々な「欲望や感情」その他などが生々しく蠢いているこの「俗世界」の、人目につかぬすみずみでは、一体、どのような「異形な恐ろしい事柄」（それは「想像すら出来ないような異様な恐ろしいこと」）が行なわれているか、分かつたものではない、ということである。

五、新しい経験

むろん、はじめの予定では、盗みの目的を果たしたならば、すぐにもホテルを逃げ出すつもりでいたのですが、この世にも奇怪な喜びに夢中になった私は、逃げ出すどころか、いつまでも椅子の中を永住のすみかにして、その生活を続けていたのでございます。

夜々の外出には、注意に注意を加えて、少しも物音を立てず、また人目に触れないようにしてしまいましたので、当然、危険はありませんでしたが、それにしても、数ヶ月という長い月日を、そうして少しも見つからず、椅子の中に暮らしていたというのは、我ながら実に驚くべきことでした。——ほとんど一日じゅう、ひどく窮屈な場所で、腕を曲げ、膝を折っているためにからだじゅうが痺れたようになって、完全に直立することができず、しまいには、料理場や化粧室の往来を、壁（足が不自由で立てない人）のように這って行つたほどでございます。私という男は、なんという気ちがいでありましょう。それほどの苦しみを忍んでも、不思議な感觸の世界を見捨てる気にはなれなかつたのでございます。もちろん、ホテルのことですから、絶えず客の出入りがあります。そして、女から女へと移って行くあいだに、私はまた、それとは別な、不思議な経験を味わいました。その一つは、ある時、欧州の或る強国の大使が、その偉大な体軀を、私の膝の上にのせたことであり、それは、政治家としてよりも、世界的な詩人として、いつそうよく知られていた人ですが、私は、その偉人の肌を知つたことが、わくわくするほど誇らしく思われたのでございます。——一方、その時、私はふとこんな事を想像しました。もし、この革のうしろから、鋭いナイフで、彼の心臓を目がけて、ぐさりとひと突きしたなら、どんな結果を惹き起こすであろう。彼の本国はもとより、日本の政界では、そのために、どんな大騒ぎを演じることだろう。そんな大事件が、自分の一挙手によつて、やすやすと現実にできるのだ。それを思うと、私は不思議な得意を感じないではいられませんでした。そして、もう一つは、有名な或る国のダンサーが来日した時、偶然、彼女がそのホテルに宿泊して、たった一度であります、私の椅子に腰かけたことでございます。その時、私は、大使の場合と似た感銘を受けましたが、それ以上に、彼女は、私にかつて経験したことのない理想的な「肉体美」の感觸を与えてくれました。私は、そのあまりの美しさに、卑しい考えなどは起こす暇もなく、ただもう芸術品に対する時のような敬虔な気持で、彼女を賛美したのでございます。……

*

*

さて、主人公の「椅子の中」での「生活ぶり」は、一体、どのようなものであつたのかと問えば、それは、次のようなものであつたらしい。つまり、「……むろん、はじめの予定では、盗みの目的を果たしたら、すぐにもホテルを逃げ出すつもりでしたが、この世にも奇怪な喜びに夢中になつた私は、逃げ出すどころか、いつまでも椅子の中を永住のすみかにして、その生活を続けていた」のです。——そして、夜々の外出には、注意に注意を加えて、少しも物音を立てず、また人目に触れないようにしていたので、当然、危険はありませんでしたが、それにしても、数ヶ月という長い月日を、そうして少しも見つからず、椅子の中に暮らしていたというのは、我ながら実に驚くべきことでした。——それは、ほとんど一日中、ひどく窮屈な場所で、腕を曲げ、膝を折っているために、からだ中が痺れたようになって、完全に直立することができず、しまいには、料理場や化粧室の往来を、壁のように這って行つたほどです。私という男は、なんという気ちがいでありましょう。それほどの苦しみを忍んでも、不思議な感觸の世界を見捨てる気にはなれなかつたのです。もちろん、ホテルのことですから、絶えず客の出入りがあり、そして、女から女へと移って行くあいだに、私はまた、それとは別な、不思議な経験を味わいましたということで、一つは、世界的にも有名な詩人の「偉人の肌」を知つたことが、わくわくするほど誇らし

く思われたり、また、一方、もし、この革かわのうしろから、鋭いナイフで彼の心臓を目がけて、ぐさりとひと突きしたなら、一体、どんな結果を惹き起こすだろうかと思像してみたり、また、或る国の有名なダンサーが来日した時には、その彼女の、かつて経験したこともないような理想的な「肉体美」の感触にふれて、そのあまりの美しさに、卑しい考えなどは少しも起こらず、ただもう芸術品に対するような敬虔けいけんな気持で、彼女を賛美さんびしたことをなどを挙げてゐる。——これらは、話の「内容」が一本調子の狭いものにならないように、話にいろいろ具体的な「経験談」などを書き加えて現実じつ味を醸し出しながら、いよいよ本題へと入っていくのである。

六、新たな展開

さて、私がホテルへ参りましてから、何ヶ月かの後、私の身の上にひとつの変化が起きました。と言うのも、ホテルの経営者が、何かの都合で帰国することになり、あとは、ある日本人の会社に譲り渡したのであります。そして、従来の贅沢な営業方針を改めて、もっと一般向きの旅館として、有利な経営を目論むことになり、そのため不要になった調度などは、競売にかけることになり、その競売目録のなかに、私の椅子も加わっていたのでございます。——そして、競売がはじまると、仕合わせなことには、私の椅子は早速買手がつきました。買手は、Y市から程遠ほどからぬ、大都会に住んでいた或る官吏でありました。買手のお役人は、可なり立派な屋敷の持ち主で、私の椅子は、その洋館の広い書齋に置かれたが、わたしにとつて非常な満足であったことは、その書齋は、主人よりも、むしろその家の若くて美しい夫人が使用されるものだったのでございます。それ以来、約一ヶ月間、私は絶えず、夫人とともにおりました。婦人の食事と、就寝の時間を除いては、婦人のしなやかなからだは、いつも私の上にありました。それというのも、夫人は、その間、書齋につめきつて、ある著作に没頭しておられたからでございます。……

*

*

さて、話ストーリー(物語)は、いよいよ「本題」へと向かうが、そのためには、次のような劇的な「変化」(つまり「私の身の上に一つの大きな変化」)が起こることが、どうしても必要不可欠であり、それは、ホテルの経営者が本国へと帰国して、日本人の経営者に代わると、「……従来の贅沢な営業方針を改めて、もっと一般向きの旅館として、有利な経営を目論むようになり、そのため不要になった調度などは、競売にかけることになるが、その競売目録のなかに、私の椅子も加わっていたのである。——そして、競売が始まると、仕合わせなことには、私の椅子は早速買手がつくことになる」が、その「買手」こそは、まさに「……Y市から程遠ほどからぬ、大都会に住んでいた或る官吏であり、その買手のお役人は、可なり立派な屋敷の持ち主であり、私の椅子は、その洋館の広い書齋に置かれることになる」とともに、さらに劇的なことは、「……わたしにとつて非常な満足であったことは、その書齋は、主人よりも、むしろその家の若くて美しい夫人が使用されるものだった」のである。そして、「……それ以来、約一ヶ月間、私は絶えず、夫人とともにおりましたが、それというのも、夫人は、その間、書齋につめきつて、ある著作(それは『K雑誌のこの夏の増大号に載せるための長い創作』)に没頭していたからである」という展開になっていくのである。

さて、いよいよ「女主人公」（美しい閨秀作家佳子）の登場であるが、夫人は、約一ヶ月間、書齋につめきって、ある「著作」（それは「K雑誌」のこの夏の増大号に載せるための長い創作）に没頭していたが、一方、「椅子の中」の主人公の家具職人も、同じように、「……それ以来、約一ヶ月間、私は絶えず、夫人とともにおりました。それは、婦人の食事と、就寝の時間を除いては、婦人のしなやかなからだは、いつも私の上にあり、ました」とともに、次のような過激な「展開」（告白）へと連なっていくのである。

*

*

さて、私は彼女をどれほど愛したか。彼女は、私のはじめて接した日本人であり、しかも、充分美しい肉体の持ち主でした。私は、そこにはじめて、ほんとうの恋を感じたのです。それに比べれば、ホテルでの、数多い経験などは、決して恋と名づくべきものではないかもしれません。その証拠には、これまで一度も、そんなことを感じなかったのに、その夫人に對してだけ、私は、ただ秘密の愛撫を楽しむのみではあきたらず、どうかして、私の存在を知らせようと、いろいろ苦心したのでも明らかなことです。

私は、できるならば、夫人のほうでも、椅子の中の私を意識してほしかったのでございます。そして、虫のいい話ですが、私を愛してもらいたく思ったのでございます。……でも、それをどうして合図いたしましたでしょう。もし、そこに人間が隠れているということを、あからさまに知らせたなら、彼女はきっと驚きのあまり、主人や家のものに、そのことを告げるに違いありません。それではすべて駄目になってしまうばかりか、私は、恐ろしい罪名を着て、法律上の刑罰さえ受けなければなりません。

そこで、私は、せめて夫人に、私の椅子を、この上にも居心地よく感じさせ、それに愛着を起こさせようと努めたのです。芸術家である彼女は、きつと常人以上の微妙な感覚を備えているにちがいありません。もし彼女が、私の椅子に生命を感じてくれたなら、ただの物質としてではなく、ひとつの生きものとして愛着を覚えてくれたなら、それだけでも、私は充分満足なのでございます。

私は、彼女が私の上に身を投げた時には、できるだけフワリと優しく受けるように心掛けました。彼女が私の上で疲れた時分には、わからぬほどにソロソロと膝を動かして、彼女のからだの位置を変えるようにいたしました。そして、彼女が、ウトウトと居眠りをはじめするような場合には、私は、ごくごく幽かに膝をゆすって、揺籃のような役目を勤めたのでございます。

この心遣いが報いられたのか、それとも、単に私の気の迷いか、近頃では、夫人は、なんとなく私の椅子を愛しているように思われます。彼女は、ちょうど嬰兒が母親の懷に抱かれるときのような、または、乙女が恋人の抱擁に応じるときのような、甘い優しさをもって私の椅子に身を沈めます。そして、私の膝の上で、からだを動かす様子までが、さも懐かしげに見えるのでございます。

かようにして、私の情熱は、日々に烈しく燃えて行くのでした。そして、ついには、アア、奥様、ついには、私は身のほどもわきまえぬ、大それた願いを抱くようになったのでございます。たったひと目、私の恋人の顔を見て、そして、言葉を交わすことができたなら、そのまま死んでもよいとまで、思いつめたのでございます。

奥様、あなたは、むろん、とくにお悟りでございましょう。その私の恋人と申しますのは、実は、あなた様なのでございます。あなたの御主人が、Y市の道具店で、私の椅子

をお買いになつて以来、私はあなたに及ばぬ恋をささげていた、哀れな男でございます。奥様、一生のお願いでございます。たった一度、私にお逢い^あくださるわけにはまいらぬでしょうか。そして、ひとことでも、この哀れな醜い男に、慰めのお言葉をおかけくださるわけにはまいらぬでしょうか。——私は決してそれ以上を望むものではありません。そんなことを望むにはあまりに醜く、また、汚れ果てた私でございます。どうぞ、世にも不幸な男の、切なる願いをお聞き届けくださいませ。……

そして、いま、あなたがこの手紙をお読みなさる時分には、私は心配のために青い顔をして、お邸^{やしき}のまわりを、うろつき廻^{まわ}つております。

もし、この世にもぶしつけな願いを聞き届けくださいますなら、どうか書斎の窓の撫子^{なでしこ}の鉢植^{はちう}えに、あなたのハンカチをおかけくださいまし。それを合図に、私は、何気なく一人の訪問者として、お邸^{やしき}の玄関を訪れるでございましょう。

そして、この不思議な手紙は、ある熱烈な祈りの言葉をもつて結ばれていた。

＊

＊

さて、長い引用になつたが、しかし、ここは主人公（家具「職人」）の「心の高揚」（高まり）の「クライマックス」部分であり、それゆえ、ここは切らずに、一気に読み進むことが何よりも大事なことになるのである。——まず、主人公は、「……私は彼女をどれほど愛したか」と言っている。その「理由」としては、「……今まではすべて異国人の異性であり、たとえ、それがどんな立派な、好ましい肉体の持ち主であっても、精神的な妙な物足りなさを感じていて、やはり、日本人は同じ日本人に対してでなければ、ほんとうの恋を感じることはできないのではないかと思つていた」ので、今度は、まさに「……彼女は、私のはじめて接した日本人であり、しかも、充分美しい肉体の持ち主でした。私は、そこにはじめて、ほんとうの恋を感じたのです。それに比べれば、ホテルでの数多い経験などは、決して恋と名づくべきものではございません。その証拠には、これまで一度も、そんなことを感じなかったのに、その夫人に対してだけ、私は、ただ秘密の愛撫^{あいぶ}を楽しむのみでは飽き足らず、どうかして、私の存在を知らせようと、いろいろ苦心したのでも明らかなことです」とある。——しかし、自分の「存在を知られる」ことは、この主人公にとっては、本来、まさに「禁忌^{タブー}」なはずであるが、それは、「……もし、そこに人間が隠れているということを、あからさまに知らせたなら、彼女はきっと驚きのあまり、主人や家のものに、そのことを告げるに違いありません。それではすべて駄目^{だめ}になってしまうばかりか、私は、恐ろしい罪名を着て、法律上の刑罰^{けいばつ}さえ受けなければならぬ」からであり、また、もともと自分の醜い「容貌^{ようぼう}」を見られることも望んではないのである。

そこで、最初は、「……せめて夫人に、私の椅子を、この上にも居心地よく感じさせ、それに愛着^{あいせき}を起させようと努めたのです。芸術家である彼女は、きっと常人以上の微妙な感覚を備えているに違いありません。もし彼女が、私の椅子に生命を感じてくれたなら、ただの物質としてではなく、ひとつの生きものとして愛着^{あいせき}を覚えてくれたなら、それだけでも、私は充分満足である」とともに、その実践として、「……私は、彼女が私の上に身を投げた時には、できるだけフワリと優しく受けるように心掛けました。彼女が私の上で疲れた時分には、わからぬほどにソロソロと膝^{ひざ}を動かして、彼女のからだの位置を変えようにいたしました。そして、彼女が、ウトウトと居眠りをはじめするような場合には、私は、ごくごく幽かに膝^{ひざ}をゆすつて、揺籃^{ゆらん}のような役目を勤めた」のである。

その結果、「……その心遣りが報いられたのか、それとも、単に私の気の迷いか、近頃では、夫人は、何となく私の椅子を愛しているように思われます。彼女は、ちょうど嬰兒が母親の懷に抱かれるときのような、または、乙女が恋人の抱擁に応じるときのような、甘い優しさをもつて私の椅子に身を沈めます。そして、私の膝の上で、からだを動かす様子までが、さも懐かしげに見えるのです」と、その「手応え」を感じているのです。

かようにして、「……私の情熱は、日々に烈しく燃えて行くのでした。そして、ついには、アア、奥様、ついには、私は身のほどもわきまえぬ、大それた願いを抱くようになったのでございます。たつたひと目、私の恋人の顔を見て、そして、言葉を交わすことができたなら、そのまま死んでもよいとまで、思いつめたのでございます。——奥様、あなたは、むしろ、とっくにお悟りでございましょう。その私の恋人と申しますのは、実は、あなた様なのでございます。あなたの御主人が、Y市の道具店で、私の椅子をお買いになつて以来、私はあなたに及ばぬ恋をささげていた、哀れな男でございます。——奥様、一生のお願いでございます。たつた一度、私にお逢いくださるわけにはまいらぬでしょうか。そして、ひとことでも、この哀れな醜い男に、慰めのお言葉をおかけくださるわけにはまいらぬでしょうか。——私は決してそれ以上を望むものではありません。そんなことを望むにはあまりに醜く、また、汚れ果てた私でございます。どうぞ、どうぞ、世にも不幸な男の、切なる願いをお聞き届けくださいませ」と言うのであった。

これは、まさに「主人公」（家具「職人」）の「心の高揚」（高まり）の「クライマックス」部分であるが、それを敢えて一言で言えば、それは、ただもうひたすら「奥さんに会いたい、会って話したい」という「一念」であり、そして、「……もし、この世にもぶしつけな願いを聞き届けくださいますなら、どうか書斎の窓の撫子の鉢植えに、あなたのハンカチをおかけくださいまし。それを合図に、私は、何気なく一人の訪問者として、お邸の玄関を訪れるでございましょう」となつて行くのである。

七、奥様の反応

佳子は、手紙の半ばほどまで読んだとき、すでに恐ろしい予感のために、まっ青になつてしまった。そして、無意識に立ち上がると、気味のわるい肘掛椅子の置かれた書斎から逃げ出して、日本建ての居間のほうへ来ていた。手紙のあとのほうは、いっそ読まないで破り棄ててしまおうかと思つたけれど、どうやら氣掛りなままに、居間の小机の上で、ともかくも、読み続けた。——彼女の予感はやつぱり当たつていた。

これはまあ、なんとという恐ろしい事実であろう。彼女が毎日腰かけていたあの肘掛椅子の中には、見も知らぬ一人の男がはいつていたとは。——「おお、気味のわるい」、彼女は、背中から冷水をあびせられたような悪寒を覚えた。そして、いつまでたつても、不思議な身震いがやまなかつたのです。彼女は、あまりのことに、ボンヤリしてしまつて、これをどう処置すべきか、まるで見当がつかなかったのであります。その時……

*

*

「奥様お手紙でございます」と、一人の女中が、いま届いたらしい封書を持ってきたのである。佳子は、ハツとして、振り向くと、無意識にそれを受け取つて、開封しようとした時に、思わずその手紙を取り落したほどに、ひどい驚きに打たれたのでした。それは、

さっきの無気味な手紙と寸違わぬ筆癖をもつて、彼女の宛名が書かれてあったからである。彼女は、長いあいだ、それをどうしようかと迷っていたが、とうとう最後にそれを破って、ビクビクしながら中身を読んで行つた。手紙はごく短いものであったが、そこには、彼女を、もう一度、ハッとさせるような、奇妙な文句が記されてあつた。……

*

*

突然御手紙を差し上げますぶしつけを、幾重にもお許しくださいまし。私は日頃、先生のお作を愛読しているものでございます。別封お送りいたしましたのは、私の拙い創作でございます。御一覽の上、御批判がいただけますれば、この上の幸いはございません。或る理由のために、原稿のほうは、この手紙を書きます前に投函いたしましたから、すでにごらんずみかと拝察いたします。如何でございましたでしょうか。もし拙作がいくらかでも、先生に感銘を与え得たとしますれば、こんな嬉しいことはないのでございますが。

原稿には、わざと省いておきましたが、表題は「人間椅子」とつきたい考えでございます。では、失礼を顧みず、お願いまで。……(完)

八、更なる妄想

さて、江戸川乱歩の『人間椅子』という「作品」(本文)は、ここで「完結」しているのである。そして、「……私は生れつき、世にも醜い容貌の持主であること、また、椅子職人としてはすぐれた腕も持ち、その出来上がった椅子に腰掛けながら、色々な『妄想』に耽っているうちに、世にも奇つ怪な人間椅子を創り出した」というような内容は、すべて「創作」(フイクション)であり、それゆえ、この『人間椅子』を書いた作者というのは、日頃から、先生の作品を愛読しているファンであるとともに、自分もできれば作家になろうとして、その「原稿」を先生に送って、読んでもらい、その読んだ後の先生の「感想」(或いは「批評」)がぜひとも聞きたいということである。——それは、本文の中にも、「……いま、あなたがこの手紙をお読みなさる時分には、私は心配のために青い顔をして、お邸のまわりを、うろつき廻っております。もし、この世にもぶしつけな願い(それは「一度だけでも逢つてほしい」という願い)を聞き届けくださいますなら、どうか書斎の窓の撫子の鉢植えに、あなたのハンカチをおかけくださいまし。それを合図に、私は、何気なく一人の訪問者として、お邸の玄関を訪れるでございましょう」となるのである。

そこで、奥様は、書斎に戻り、なにげなく窓の下の方を見た時に、そこに、なんと一人の男性、しかも、(貴公子のような)、若くてハンサムでたくましい男性の姿が「上の方」(奥様の方)をじつと見ていて、二人の「眼と眼」は自然とふれ合い、お互いに見つめ合うような状態となり、一方の男性は、「なんて美しい人なのだろう」と思い、そして、もう一方の奥様の方も、「えっ! なんてハンサムな人なんだろう」と思ったとしたら、一体、どうなるのだろうか? 奥様は、何とも不思議な想いに深く襲われて、あれこれ迷いながらも、何か大きな力に導かれるように、玄関へとおそろのおそろ降りて行き、そして、ついにはドアを開けてしまい、二人は、直接、出逢うことになってしまうのだろうか? もしドアを開けなければ、話はここですべては終わりであり、一方、もしドアを開けるならば、二人は恐らく、恋に深く落ちてしまう可能性は高いのだろう。なぜなら、作者である男性は、言うまでもなく、奥様にはっきりと「恋心」を抱いているのであり、一方、奥

様は、その手紙（作品）を読むことで、その「告白」をはっきりと聞いているからである。そして、若しも二人が恋に深く落ちていくとすれば、その作者の「妄想」は、まさに「現実のもの」となり、それは、「……世にも美しい女性（奥様）」との恋愛を夢見ていたのである。それをもっと具体的に言えば、世にも美しい女性（奥様）の肉体に触れてみたい、さわってみたい、もつと言え、抱いてみたいと夢見ていた」のである。その「夢」（妄想）は、今、まさに「現実のもの」となっていくのである。——それは、木と革とで出来た「人間椅子」からの妄想的な間接的な「触れ合い」（愛撫）などではなく、むしろ生身の人間で出来た生々しい「人間椅子」からの、まさに直接的な「触れ合い」（愛撫）へと変わっていくのである……。

*

*

江戸川乱歩の世界
② 盲獣

目次

江戸川乱歩の世界

盲獣

- 一、 レビュー団の女王
- 二、 うごめく触手
- 三、 執念の花束
- 四、 鏡の裏
- 五、 悪魔の曲線
- 六、 地底の盲獣
- 七、 天地晦冥
- 八、 地底の恋
- 九、 情痴の極
- 十、 雪女郎
- 十一、 足のある風船
- 十二、 冷たい手首
- 十三、 クモ娘
- 十四、 めくら湯
- 十五、 真珠夫人
- 十六、 肉文字
- 十七、 紫檀の太もも
- 十八、 巨人の口
- 十九、 女どろぼう
- 二十、 怪あんま
- 二一、 砂遊び
- 二二、 寡婦クラブ
- 二三、 ゴム人形
- 二四、 女怪対盲獣
- 二五、 裸女虐殺
- 二六、 イモムシごろごろ
- 二七、 鎌倉ハム大安売り
- 二八、 盲人天国
- 二九、 盲人の彫刻家
- 三十、 悪魔の遺産
- 三一、 触覚芸術論
- 三二、 結び

※
参考文献

江戸川乱歩の世界
盲獣

江戸川乱歩の「盲獣」

例えば、江戸川乱歩の『盲獣』という作品は、彼の数多くとある作品の中では、それほど有名な作品ではないかも知れないが、しかし、映画やテレビドラマなどで観たという人は、意外と数多くいるのではないかと思う。しかし、その「内容」は、どうしても原作の内容とは少し違うものであり、それゆえ、原作の「本文」では、一体、どのような内容になっているのか、それをできるだけ「本文」に寄り添いながら、順を追って考えてみたいと思う。――まず、冒頭の「文章」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……十年前、浅草歌劇全盛時代に、少女歌手として売り出した水木蘭子は、今レビュー全盛の浅草に――浅草の中でもレビュー第一の帝都座に帰り咲きをして、みずみずしい肉体と美しい声で、浅草のレビュー界の女王とうたわれていた」とある。つまり、今、浅草で最も光り輝いている踊り子こそは、まさに「水木蘭子」ということになるのである。

一、レビュー団の女王

さて、その水木蘭子は、いつもよりも早起きをして、午前十時ごろ、上野公園の美術館に自動車でのりつけたのである。同伴者は、内弟子の沢君子、君子は美貌では座中第一、当時十六歳であり、一方、先生の蘭子は、すでに三十歳を越した、あらゆる意味で今を盛りと輝きわたる爛熟の花であつたとある。そして、その美術館では、秋の展覧会が開かれていて、そこには彼女のなまめかしい肉体をモデルに制作された問題の彫刻『レビューの踊り子』なども展示され、その大理石にきざまれた彼女自身の肉体美をつくづくながめ楽しむために、わざわざ雨の中をやって来たのである。

そして、蘭子は、途中の西洋画、日本画には目もくれず、彫刻陳列室へと急いだ。そこには男性の筋肉隆々とした裸像などをはじめ、女性の胸や恥部などを大胆にさらけ出した裸像などいろいろと展示されていたが、雨が降っているせいもあり、見物人は、あちらにひとり、こちらにひとりという、恐ろしいような静けさであつたとある。すると、君子が突然、「……先生、ちよつと、まあ、気味がわるい、あれ、ごらんさい」と言うのであつた。見ると、蘭子の彫刻の台座にのぼりつくようにして、なめらかな大理石の膚を、両手をひろげてなでさすっているのであつた。その人物は、むろん男性であり、もう三十四、五歳の分別盛りの年配である。黒の外套を着て、黒い鳥打ち帽をかぶり、大きな青ガラスのメガネをかけている。なるほど、盲人なのだ。それにしても、あんなでまわし方は、あまりにも執拗である。――なめらかな大理石の膚を、五本の指が「クモの足」のように不気味に這いまわっていた。目――鼻――口、男はその花びらのような唇を長く楽しんでた。それから、胸――腹――ももへと、全身をなでまわしていたのである。

一方、蘭子は、それを見ているうちに、不思議な錯覚に陥っていた。男のぶきみな手のひらが、直接わが肉体をなでまわしているかのように感じられるのだ。やがて、くすぐったい感じが、だんだんと焼きつくような痛みに変わっていった。彼女は、からだのあらゆる部分にそれを感じ、真っ青な顔になって、あぶら汗がにじみ出して来た。君子が、「……こここの番人に言いつけましようよ」と言うと、蘭子も、「……ええ、そうしましょ」と応え、そして、二人して制服の男を見つけて戻って来ると、そこにはもう盲人の姿はなか

ったのである。蘭子は、一日中、このことが頭から離れず、「……ああ、いやなものを
てしまった。美術館などへ行くんじゃないかった」と、彼女は、それが何か恐ろしい出来事
の前兆のように思われて、氣に止まないではいられなかったのである。

*

*

さて、これは、実に見事な「書き出し」部分であり、というのも、水木蘭子という踊り
子は、まさになまめかしい肉体美の持ち主であるがために、今、浅草でも最も人気の高い
踊り子の一人となっているが、その蘭子のなまめかしい肉体をモデルに制作された大理石
の彫刻を、あまりにも執拗になでまわす盲目の男というのは、当然なことながら、その水
木蘭子の噂をよく知っていて、それゆえ、わざわざ美術館へと観にやってくるというよ
りは、むしろ自分の「手の感触」で、その一つ一つの「肉体の部分」（パーツ）を、まさ
に評判通りなのかを執拗に確かめていたのである。それをたまたま見た、まだ十六歳とい
ううら若い乙女（君子）の目には、ただただいやらしい中年男の気味の悪い行為として見
えているだけであつたが、一方、三十過ぎの今を盛りと輝きわたる爛熟の蘭子という女
性の肉体は、逆に、その執拗な行為になぜか敏感に反応してしまい、最初は、ただくすぐ
つたいような感じに過ぎなかったが、だんだんと焼きつくような痛みに変わり、それは、
蘭子のからだのあらゆる部分にそれを感じて、真つ青な顔になり、そして、あぶら汗がに
じみ出して来たのである。これは、一体、どういうことなのか？ それは、水木蘭子自身、
まだ自分でも気づいてはいなかった、自分自身の奥深くに眠る何かが呼び覚まされるよう
な感じに襲われていたのである。だからこそ、一日中、そのことが頭から離れず、ただた
だ、「……ああ、いやなものを覚えてしまった」という思いに深く襲われているのである。

二、うごめく触手

さて、それから三日後の夜、蘭子は、いつものように舞台を終えて、自宅の部屋へと戻
ると、その疲れた身体を癒やすために、近くのアーマを呼ぶのがいつもの習慣であつた。
その夜も、楽屋ぶろ上がりのまだそのほとぼりの冷めやらぬ身体を寝まきに替えて、寝
室のふとんの上にすわつてアーマを待っていると、やがて女中に手を引かれたアーマが入
つて来たので、そのままのアーマに身をゆだねていると、どうもそのもみ方がいつもと
は違つて下手であり、そこで、蘭子は、「……アーマさん、初めてだね、近ごろアーマさん
家へ来たんですか？」と聞くと、「……へえ、二、三日前に参りまして、今晩は、いつも
の人は他に仕事がありましたので、私が代わりに参りました」と言うのであつた。

蘭子は、「……そこを、もつと強くしてくださいな」と言うのと、アーマは、「……へへ
へへへ、ここんどころでございますか」と、妙な笑い方をして、ちよつと力を入れては、
また、元の下手なもみ方になり、それは、もむというよりは、むしろなでまわすのであつ
た。そして、「……ああして一日舞台では、さぞかしお疲れでしょう」と言うので、蘭子
は、「……おまえさん、わたしの商売知っているの」と聞くと、「……そりやもう、近所
でも評判ですから。めくらの悲しさで、その美しいお顔を見ることはできませんが、しか
し、一方、こうして有名な踊り子さんとお話ができますし、そのうえ膚にまで触れさして
もらえるのですから、あんまり商売は、考えてみれば、ありがたいものです。舞台姿に
あこがれている若い人たちが聞いたら、さぞかしうらやましがることでしょう」と言うの

であつた。蘭子は、なんていやらしいと思ひながらも、しばらくそのあんまの全身をなでまわすようなもみ方に身をゆだねているうちに、ふと、三日前の美術館でのあの盲人の、あの蘭子のなめらかな大理石の裸像の膚を不気味な五本の指でクモの足のようにあまりにも執拗になでまわしていた、あの時のあの男のやり方そっくりに感じられて来て、ぞつと寒気が走り、もうどうにもがまんができなくなった、蘭子は、「……あんまさん、かつてだけれど、きょうはもう、それまでにておいてください」と言つて、すぐにも金を支払つては、そのまま帰つてもらひ、その晩は、それだけで済んだのであつた。

さて、翌日の晩には、今度は、いつもの顔なじみの若いあんまがやつて来たので、蘭子は、「……きのうは、おまえさんが来てくれぬものだから、困つてしまつたわ」と小言を言ふと、その若いあんまは、何かげんそうな顔をしながら、「……だつて、あなたの方からお断りにいらつしやたんじゃありませんか」と言うので、蘭子は、「……いいえ、お断りになんかやるものですか。……」ということになるが、その経緯は、次のようなものであつたのである。つまり、「……ゆうべ、こちらへ何うつもりでうちを出ると、出会いがしらに、こちらのお使いだという男の人が、先生は今晚帰りが遅いので、来なくてもいいと言うので、ほかへ回つたのです。しかも、最近来た新しいあんまなんかいませんよ」と言うことであつた。それを聞いた蘭子は、「……道理で、あいつ、やけにからだをなでまわす」と思つた。もしかしたら、あの美術館で蘭子の彫刻を愛撫していたあの薄気味のわるい男と同一人物ではあるまいか。大理石のはだざわりだけでは満足ができず、大胆にも、あんまに化けて、蘭子の触感を盗みに来たのではないかしら。「……きつとそうだわ。そうにちがひないわ」と思ふのであつた。

三、執念の花束

それから数日後の、ある日、蘭子は、これから舞台に出ようとして、半裸体の姿になつて、鏡の前で最後の化粧をしていると、花屋の若い者が、「……蘭子さん、ごひいきさまからです」と、恐ろしく立派な花束を持ち込んできた。蘭子は、「……まあ、すてきな花束ねえ、一体、どなたから」と聞いても、それは、「……蘭子さんの方が先刻ご存知でしょう」ということで、帰つてしまふ。さて、誰かしらと思う間もなく、舞台へと出ていくと、一斉に、「……水木、蘭子ちゃんあーん」と、行儀の悪い不良少年やはんでん着のにんさんたちの野太く濁つた調子はずれの下品な声が、その場に響き渡り、一方、スポットライトを浴びて踊る一人舞台の蘭子は、思いきり足をはね上げたり、また、腰をふり動かしながら、耐えがたき流し目で、見物客をちらちらとながめてみると、どの顔もどの顔もあほに見えて来る。――まるで彼女は、光り輝く女王様で、見物客のすべては、その女王様にはかない思ひを寄せている、身分いやしき家来どもか、或いは、取るにも足らぬ奴隷どものように見えて来たが、そのなかで、一人だけあほに見えない男がいた。

その男は、大きな黒めがねをかけ、一向にこちらを見ている様子がない。全視線がいつせいに蘭子を見つめているなかに、ぼつんと一人だけ、不気味な異端者であつた。蘭子は、踊り始めると間もなく、その男に気がつき、そして、これでもか、これでもかと悩ましき姿態の限りを尽くすのだが、男は不感症のように見向きうともしない。しばらくすると、男は何を思つたか、ひよいと黒めがねを外して、彼女のほうへ顔を向けたのであつた。そ

して、男は、「……蘭子さん、わしだよ」と言わぬばかりの面持ちで、のび上がるように舞台を見上げていた。蘭子は、ハッと息を呑むと、蘭子の歌は途絶え、踊りの手も乱れ、足も崩れた。彼女は、すべてを悟ったのだ。——あの美術館で大理石をなでまわしていたのも、にせあんまになって彼女の肌をもて遊んだのも、そして、さつき花束を贈って来たのも、みんなこの男であったのだと。……ああ、なんという恐ろしい執念、ヘビは、獲物を前にして、じっと息を殺し、機会の来るのをただひたすら待っていたのである。

*

*

これは、まさに「ストーリーカー行為」そのものであり、その「定義」は、まさに「特定の人に対する異常なほどの執着心」であり、それは、何らかの「好意の感情」（或いは「怨念の感情」）などから執拗なまできまとい、例えば、まちぶせをしたり、押しかけたり、或いは、無言電話や迷惑メールなどを執拗に発信するのであり、その執着心は、（本人にも）なかなか歯止めがかからずに、或る特定の「女性」（或いは「男性」）を執拗に追いまわし、その果ては、殺人事件にまで発展してしまう場合もあるのである。それは、価値観の相違、恋愛感情、思い込み、誤解、身勝手、妄想、支配欲、独占欲、異常精神（性的倒錯）、その他、いろいろな要因（要素）が複雑に絡み合ったものであり、例えば、同じ江戸川乱歩の『蟲』という作品も、まさに「ストーリーカー行為」をテーマにした内容になっているかと思うが、ただ違いがあるとすれば、『蟲』の場合には、相手の女性を殺してから、その「死んだ女性」を自分の家の「蔵」へと運ぶのに対して、本編の『盲獣』の場合には、まさに「生きた女性」のままに「地下室に監禁」という内容になっている。

*

*

さて、蘭子は、病気をよそおい、舞台を途中で切り上げると、楽屋へと駆け込んでしまった。そして、君子に、例の花屋の若い者をすぐにも連れて来させ、そして、誰があの花束を頼んだのかと聞き出すと、それは、黒めがねをかけた人だということになり、やつぱりと蘭子は、あまりの気持ち悪さから、もらった花束を窓の外へと投げ捨ててしまったのである。そして、君子に客席をのぞかせてみると、もうあの不気味な盲人の姿はないと聞くと、病気を理由に帰宅するつもりでいた蘭子も、気を取りなおして、それからは、レビューがはねるまで、何も変わったことはなかったのである。ただ、蘭子のところへ、彼女の恋人、若いパトロンの、小村昌一から電話がかかって来た事以外はある。

それは、「……今夜、つごうはどう？」という電話であり、蘭子は、「……ええ、いいわ、どこ、いつものところ？」ということになり、自動車が迎えに来ることになったのである。——これは、座がはねると、踊り子たちにはそれぞれパトロンがあつて、毎晩、その時分になると、楽屋口には、さまざまなお迎えがやって来るのである。むろん、自動車のお向かいもあり、やがて、自動車から運転手が走ってきて、蘭子の耳に、「……小村さんからございます」ということで、蘭子は、その自動車に乗って、走り出すのであった。ところが、その丁度その時に、もう一台の自動車から運転手が降りて来て、「……水木蘭子さんのお向かいです」と言うのであった。……とすると、先の車は、どこから来て、しかも、何も知らぬ蘭子は、一体、どこへ連れて行かれたのだろうか……。

四、鏡の裏

まず、蘭子は、自分が乗った車は、若いパトロンの「小村昌一」からのものと信じきっていた。そして、その車が止まったのは、麴町のある住宅街であり、そこは大家らしい立派な門構えの屋敷であった。車が玄関に横づけになると、しとやかな女中さんが一人出迎えて、その女中さんに案内されて、蘭子は、長い廊下を歩いて行くと、その突き当たりには、壁いっぱいの大鏡がはめ込まれていた。その大鏡は、いわば「がんどり返し」の仕掛けになっていて、すうっと回転して中へと通路が続いていたのであった。

さて、案内の女中から、「……ここからはわたくしどもは中に入れませんので、どうぞ」と言われ、蘭子は、「……でも、この中、真つ暗じやありませんか」と言うと、「……ええ、でも、少しもあぶないことはありません。壁を伝わってまっすぐに行けばよいのです」と言うのであった。蘭子は、「……唱ちゃん、いたずらが過ぎるわ。この夜ふけに、こんな真つ暗なところへ入ってこいなんて」と思いつつも、一方では、なにかおもしろそうと思って、壁に右手を当てて、暗闇の中へとおずおずと進んでいくのであった。そして、二間ばかり進んだとき、暗闇がいつそう暗くなり、振り向いてみると、いつの間にか「がんどり返し」の鏡が元通り締まっていて、駆け戻って、鏡の裏を押してみても、機械仕掛けとみえて、手で押したぐらいではびくともしない。ああ、とうとう閉じ込められてしまったと思いつつも、まだ昌一の「悪いいたずら」だと思っていたのである。

蘭子は、不安に強く襲われながらも、なおも奥へと進むと、そこは行き止まりであり、どうしようとしていると、がたつと床が下へと降りていくエレベータになっていて、床は一丈（約三メートル）ほど下がって、ぴたりと止まるのであった。すると、「……蘭子さん、驚いたかい」と、どこからか男の声が聞こえて来る。「唱ちゃんなの」、「うん」、「……ひどいわ、ここ、いったいだれの家なの」と聞いていると、蘭子を残して、エレベータだけが上へとはね上がってしまう。——これは、一体、何を意味するのと問えば、それは、もう二度とは外へは出られない、いわば複雑な「地下室」へと閉じ込められてしまったということである。そして、蘭子は、「……暗くて、何がなんだかわかりやしない。ここにありかないの」と聞くと、「……うん、今つけて上げるよ」という言葉と同時に、パツと天井に電灯がつき、見ると、地下にこんな立派なへやが、二十畳も敷けそうな広い空洞であり、しかも、それは、出入口のない、まるで別世界へでも来たような不思議な構造だったのである。

五、悪魔の曲線

では、その奇怪な地下室の構造であるが、まず最初、パツと目につくのは、何とも形容し難い、不快極まる色彩の混乱であった。強い色彩はないが、全体が陰気な灰色の感じであり、種々雑多の異なった色彩が、全く不統一にめちやくちやに入り乱れ、のたうちまわっていたのである。それは、塗料を塗ったものではなく、その材料の生地の色の違いから生じた色彩の混乱であった。——つまり、この地下室の住人は、まさに「盲人」であったので、目に見える「色彩」には全くこだわらず、むしろ手に触れる「感触」（つまり「手ざわり」）にすべてをどこまでも執拗にこだわって作られていたのである。

それゆえ、壁も床もけっして平面ではなく、恐ろしくでこぼこであり、この入り乱れ波うつでこぼこの壁や床は、人をおかしくするような種類のものではあった。例えば、蘭子が

何気なく壁にさわると、それは、おわんをふせたような突起物がうじゃうじゃと群がっていて、蘭子^{らんこ}は、思わずギョツとして手を引つ込めるが、それは、「……まあ、これ人間の乳房とそっくりの手ざわりだわ、気味が悪い」ということになるのである。そして、それは、女性のあらゆる「肉体の部分」(パーツ)をそのままそっくりに形づくったものであり、例えば、「……目なら目、鼻なら鼻、口なら口、耳なら耳、胸なら胸、脚から脚、手なら手、その他」、それら実に大小様々な形をしたものが、壁一面にそれぞれ目なら目、口なら口、その他が、一かたまりになつてうじゃうじゃ群がっていたのである。しかも、蘭子^{らんこ}が踏みしめている床^{ゆか}も、何と実物の十倍ほどの大きさの「女性の裸体」が、まるで妖しく波打つようにほんものそっくりに作られていたのである。そして、その材料は、あるものは(温かい)ゴム、あるものは象牙^{ぞうげ}のような物質、あるものは黒檀^{こくたん}、紫檀^{したん}、あるものはビロード、あるものは冷たい金属、あるものは柔らかいキリの木と、種々雑多で、それがうごめき、おどり、乱れて、実に様々な色と形と音との不気味な不協和音を奏でていたのである。つまり、その地下室全部が女性の実にありとあらゆる「肉体の部分」(パーツ)でできていて、しかも、それらすべてが生身の女性の手ざわりとそっくりに作られていたとともに、そこには女性の肉体が放つ「甘い香り」のジャスミンや麝香^{じやこう}のかおりのようなお香の匂いまで立ち籠めていたのである。やがて、蘭子^{らんこ}は、この地下室の住人が誰であるかはつきりと知るのであった。

六、地底の盲獣

それは、「……誰です。あなた、いったい誰です」と叫ぶと、「……おわかりになりませんか、あなたのよくご存じの者ですよ」と言うのを聞いて、蘭子^{らんこ}は、初めて相手の男があのいやらしい中年男の盲人であることにはつきりと気づくのであった。そして、その盲人は、「……では、今そこへ行って、あなたの美しいからだに、さわらせてもらうことにしましょうかね」と言いながら、大きな唇^{くちびる}の、その喉^{のど}の奥の暗闇^{くらやみ}から、異様な虫のように、一人の人物がはい出して来るのであった。蘭子^{らんこ}は、「……ちくしように、ちくしように、おまえはわたしをどうしようというのだ。さあ、返しておくれ、でないと、女だって、水木蘭子^{みずらんこ}だ。何をするかしれないよ」と叫びながら、逃げまどうのであった。

一方、そのいやらしい中年男の盲人は、アハハハと笑いながら、あわてることはない、やがて、自分の「身の上話」を始めるのであった。それは、次のようなものである。

実を言うと、おれは、ある明治の大富豪の一人息子なのだ。おやじが死んで、恐ろしいほど財産を手に入れた。そこで、一つの「念願」を起こしたのだ。まず、盲目の悲しさは、きれいな女性を直接見ることができない。また、美しい景色も直接見ることができない。その他、すべて同じことである。おれは、その境遇を憎み^{にく}、そして、神様を恨んだ^{うろ}。だが、どうなるものでもない。盲人の世界に残されているのは、音と、匂いと、味と、触覚ばかりだ。音(音楽)は、おれには吹き過ぎる風のように物足りない。また、匂いは、人間の鼻(嗅覚)は、犬のように鋭敏ではない。そして、食べ物は、ただ腹がふくれるばかりだ。そう考えると、触覚こそ、おれたち盲人に残された唯一無二の享樂であることがわかった。おれは、このたった一つの享樂にとりすがったのである。いろいろな物の中でも、生き物の手ざわりがおれには一番楽しかった。最初は、犬や猫をはじめ、いろいろな動物たちの

手ざわりを楽しんでいたが、どんな生き物も、人間の、それも女性に及ぶものはないことが、はつきりとわかつて来たのである。

おれには女房がいた。顔はきれいだっただ、肉体はやせっぽっちだった。女とはこんなものかと数年一緒に暮らしたが、あるとき、別の女のからだを知った。それが闇つきになって、おれはたくさん女の手ざわりを楽しむようになった。女のからだの美しさには、いつまでたっても、際限がなかった。おれは世界じゅうの女のはだに、ひとりひとり触れてみないではがまんができないほどになった。そのうち、財産も少なくなり、最後に思いついたのがこの部屋であり、五年と残りの財産のほとんどを費やし、あまり有名ではない彫刻家に、過去の女のからだの中で、すぐれた部分を選び出して、彫刻家に詳しく話しては、その通りに作らせたのである。その苦心はどれほどであつたろう。そして、半年間は、ここに入りびたつて、昼も夜も、一つ一つの彫刻をなでまわして、有頂天になっていた。しかし、相手は死物だ。やがて、生きた人間（女性）が恋しくなつて来たのである。

その頃、まさに「お前の噂」を聞いたのである。そして、あの美術館会場でお前の大理石の裸像に触れ、また、あんまに化けて、お前の身体に直接触れて、評判は間違ひではなく、今まで会ったどの女性よりも、おまえは美しかった。おれは一刻も早くお前を手に入れたくなり、お前が舞台で倒れたとき、舞台裏にこっそり忍び込み、そして、小村という男からの電話を盗み聞いて、あの自動車の計画を思いついたのである。そして、まんまと、こうしてお前を手に入れることができたということである。

＊

＊

さて、蘭子は、彼のあまりの「執着振り」に何だか変な気持ちになつて来た。心では盲人の境涯に同情しながらも、そのいやらしい顔に目を転じると、あの恐ろしくもいまわしい行動が予期されて、ゾツと総毛立つのであつた。そして、囚われの身の蘭子には、次の「三つの道」しか残されてはいなかった。一つは、あくまでも相手を拒み続けるという道である。これは、相手次第で明暗は大きく分かれる。一つは、表面的には（ある程度までは）相手を受け入れながらも、相手の反応を見ながら、その時々に対応していくという道である。そして、もう一つは、最終的には、相手を受け入れざるを得ないという道である。この三つの内のどれを選ぶかは、相手の性格に大きく左右されるのである。何よりも大事なことは、相手の「性格」をしっかりと見極めることである。相手がどれほどの凶暴性を秘めている人間なのか？ 何が真の目的なのか？ どこまで妥協できる性格なのか？ つまり、折れやすいのか、それとも強靱な性格なのか？ その他、それらをしっかりと見極めなければならない。真に凶暴な性格であれば、一番は、危険な選択になる。二番は、相手の様子見であり、そして、最後は、最悪の事態を避けるためという選択と、もう一つは、相手に好意を持ち始めて、自分に心変わりが生じて来るという可能性もある。

七、天地晦冥

さて、蘭子に迫る、盲人の触覚のような指先は、蘭子の腕にまといつき、虫がはうように、腕から肩へ、肩から後頭部へのぼつていった。そして、ナメクジみたいなぬるぬるしたくちびるが、彼女のくちびるを求めてうごめき始めたとき、蘭子は、激しく相手の手を払いのけ、悲鳴を上げて立ち上がった。盲人は、「……おまえさんには、このわしのせ

つない心がわからんのか。頼みだ。どうぞ、このとおりだ」と、両手を合わせて拝みながら、「……わしをおまえさんの奴隷にしてくれ、踏みにじつてくれ。けとばされても、決しておこりはしないのだ。蘭子さん、頼みだ。頼みだ」と言うのと、「……いけないいたら、ちくしょう。おまえなんか、踏みつけるのも汚らわしい」と、蘭子は毒々しく言い放し、「どうしてもか」、「ああ、どうしても」と、とうとう二人は、激しくいがみ合うのであった。男は、ここで開き直り、「……お前がどうしても受け入れないなら、おれもお前を二度と娑婆には返さない」と言い放ち、その激しくでこぼこでぬるぬるした床の上を必死でハアハア言いながら哀れにも逃げ惑う蘭子を、男は、どこまでも執拗に追いまわし続けるのであった。そして、終に蘭子は、もう息が切れて、目もまわって、今にもぶつ倒れそうになり、「……ああ、もうだめだ。わたしはどうとう、けだもののいけにえにならなければならぬのか」と、観念の目を閉じるのであった。

その時、突然、部屋中がぐらぐらと動き始めた。それは、半ば意識を失いかけた蘭子の、物狂わしき幻覚であったのか。それとも、この地下室には何かの動力で動く仕掛けができていたのか。いずれにせよ、蘭子の目には、へや全体がムグムグとうごめき出したように見えたのである。それは、腕の林、手首足首の草むら、太ももの森林が、いつせいに、ゆらゆらとゆらめき始めた。また、巨大な鼻は小鼻をピクピクさせておいをかぎ、巨大な口は歯をむき出してうめき声を発し、蘭子の倒れ伏している黒檀の巨人は、太ももをふるわせて、異様な波動運動を始めた。それは、地下室全体が、怒濤にもまれる船のように、ゆれひしめいた。必死に逃げるものも、それを必死で追うものも、もはや目も見えず、耳も聞こえず、もつれ合ったまま、右に、左に、天地晦冥の大動乱のただ中にゴロゴロ、ゴロゴロところがりまわり、壁に群がる無数の乳房は、顔赤らめて、風船玉のようにふくれ上がり、千の乳首から、暖かい乳汁を、ころげまわる二人の上に滝つ瀬と降り注ぐなか、蘭子は、その乳汁の津波にもまれるように、いつしか気を失ってしまうのであった。

八、地底の愛

さて、「……さすが強情がまんの水木蘭子も、身も魂もしびれるようなこの大刺激には、ヘトヘトになって、ついに凶暴なる猛獣の威力に屈服してしまう。屈服したばかりではなく、彼女はおぞましくも、このたぐいもあらぬ地底の別世界に、限りなき愛着を覚え始めて、いまわしい盲獣さえも、今は何かしら不思議な魅力をもって彼女の感覚をくすぐるようになり、蘭子はいかに怪盲人の妻たることを承諾した。そして、日とたち月と過ぐるうちに、地底の愛人の情交はますますこまかになっていった」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、あれほどまで頭の「知性や理性」などでは嫌っていたものでも、その身体への強い「刺激や快感」などを無理やりでも一度受け入れて心を許してしまうと、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」が忘れ難くなり、それゆえ、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」を渴望して、次第に自ら積極的にその世界を受け入れるようになってしまうのである。それが、まさに「マゾサド世界」（つまり「被虐・加虐」世界）の非日常的な強烈な「刺激世界」や「感覚世界」が成り立つ理由の一つになるのである。そして、蘭子は、かれと離れてはもはや一日も生きていけないほどに、うち込んでしまったのだ。そして、「……おまえさん、あたしを見捨てないでくださいね。ほんとうに、

いつまでも、いつまでも見捨てないでね」と、蘭子^{らんこ}ともあろうものが、そんなことをいうほどにかわっていた。そして、蘭子^{らんこ}は視覚を失っていった。目の病をわずらったのではない。健全な目を持ちながら、彼女はほとんどそれを使用しなかった。それほど、盲人の触覚の世界が、彼女には気に入ったのである。視覚を忘れてこそ、はじめて、ほんとうの触覚の「味」がわかるのだ。神秘で、幽玄で、微妙きわまる手ざわり、はださわりの快^{こころよ}さが、しみじみと味わたるのだった。「……あたしは今までどうしてこんな楽しい世界を知らないで過ごしてきたのだろう。ああ、目のある人たちに教えてやりたい。あたしの目に目はあるながら触覚ばかりの世界に住んでみた者には、それがはつきりわかるのだ。かわいそうな目あきさんたち、おまえさんがたは、この何ともいえぬ不思議な、甘い、快^{こころよ}い、盲目世界の陶酔を味わったことがないのだ」と。

そして、「……ああ、わたしは今こそ、触覚ばかりで生きている目のない下等動物どもの、異様な、甘い、なつかしい感覚がわかるような気がする。かれらはけっして不幸ではないのだ。不幸どころか、かれらこそ、この世をお作りなすった神様の第一番の寵児^{ちようじ}なのだ」と。――例えば、目のある人間には、指先で小さな点字を読むことはとうていできないのだ。しかし、盲人は、あの微妙な小突起物を、すらすらと目で読むように読み下すではないか。昆虫の触鬚^{しゆくしゆ}の驚くべき敏感について知らぬ人はなからう。盲人の指や皮膚は、あの触鬚^{しゆくしゆ}と同様の不思議な感覚を持っているのだ。かれらの触覚は、通常人にはまるで想像もつかない、全然別種類のものなのだ、と考えることはできないだろうか、少なくとも水木蘭子^{らんこ}は、それを信じて疑わなかった」とある。

*

*

これは、もちろん、江戸川乱歩の「見解」であるが、例えば、われわれ人間の場合、四つ足から「直立二足歩行」へと進化することによって、一体、何がどう変わったのだろうか？――まず、立つことによって、「目」（視覚）と「耳」（聴覚）との「発達」を促すことになった。が、一方では、「嗅覚」や「触覚」などは、むしろ「後退」してしまったのである。そして、われわれ人間の場合、七割から八割近くは、まさに「目」（視覚）に依存しているのであり、それゆえ、どうしても「見た目のよいもの」を何より優先的に選ぶことにもなるのである。――一方、「目」が不自由になれば、今度は、何より「耳」（聴覚）が発達して来ると同時に、まさに「嗅覚」や「触覚」なども敏感になって来るものである。特に手ざわりの「感触」というものは、まさに「物」を直接認識する上では、最も大事な「感覚」になるものであり、それゆえ、手ざわりやはださわりなどは、目の見える人たちに比べれば、遙かに「敏感になつている」ことは、全く疑いようのないものである。――かようにして、やみとはだざわりのみの数ヶ月が過ぎ去った。彼女が地底の生活を始めたのは秋の終わりであつたが、いつしか年が過ぎて、極寒の季節がやって来た。

九、情痴の極

その頃になると、触覚世界の男女は、遂に情痴の極みに達していた。そのような「異常な生活」を続ける感覚のみの人間に、当然、来たるべき運命がやって来た。かれらは微妙なる触覚の限りを尽くして、お互いの全身の微妙なる特徴を知り尽くした結果、いまやその微妙なるものに飽き果ててしまったのである。そして、相手を取り替えるか、何かどぎ

つい刺激を求めるほかに、方法はなくなってしまったのである。盲目の夫のほうは、もう蘭子にあきあきしていたけれど、蘭子のほうはまだ未練があつて、相手を取り替える相談は、いつも蘭子の涙によつて、お流れになつていた。そこで、かれらはもう一つの方法を選んだ。今までの微妙な触覚遊技を廃して、思いきりどぎつい刺激を求め合つたのである。そして、ついにかれらは、やみの中の二匹の猛獣のように、お互いにお互いの肉体をかみ合い、殴り合い、そして、傷つけ合うことを楽しむまでになつた。それはそれで、また言いがたき魅力があつたのである。やみの中の盲獣夫婦は、かくして、最後の血のはだざわりという無上の快楽を発見しては、どこまでも際限がなくなつていくのであつた。

そして、傷つけられるのは、いつも蘭子であつた。彼女のなめらかな太ももからほとばしるなま暖かいねっとりとした血潮の感触が、盲獣を喜ばしたのはもちろん、傷つけられた彼女にも、こよなき快楽であつたとは、なんという驚くべき事実であろう。彼女は痛みを感じないではなかつた。悲鳴を上げて、のたうちまわるほど、激しい苦痛を感じた。だが、その苦痛そのものが、とりも直さず快楽であつた。ドクドクと脈うちながら吹き出す血潮も快かつた。彼女は傷つけられることを望んだ。その傷が大きければ大きいほど、苦痛が激しければ激しいほど、彼女是有頂天になつた。盲目の夫も、最初の間は、妻の血のりを喜んだが、やがて、それにも退屈を感じ出した。蘭子の予期だにしまかつた執拗と貪欲にほとほとあきれ果ててしまつた。蘭子の存在がうるさく感じられ、いとわしくなつて来た。はてはあのように恋い慕つた彼女を憎悪し始めたのである。

そして、「……さあ、もつと、もつとひどく、傷つけて！　いつそ、その肉をえぐりとつて！」と、身悶えする蘭子を前にして、かれはどうとう恐ろしい計画を立てるのであつた。それは、「……そんなに傷つけてほしいのかね。そんなに痛い目があったのかね。よし、よし、それじゃ、おれにいい考えがある。お待ち、いまにね、おまえが泣き出すほど、うれしいめに合わせてやるからね」と、かれは刃物を蘭子の腕に当てて、ぐんぐん力を込めていった。蘭子は、「アツ、アツ」と悲鳴とも、快感のうめき声ともつかぬ叫びをたてて、激しく身悶えして、「……もつとよ、もつとよ」と、「……よしよし、さあ、こるか」と、盲目の夫は、終に刃物に最後の力を加えてしまつたのである。メリメリと骨が鳴り、そして、アツと思う間に、蘭子の腕は、彼女の肩から切り離されてしまつた。滝つ瀬と吹き出す血潮、まるで網にかかつた魚のようにピチピチとはねまわる蘭子の五体。「……どうだね、これで本望かね」と、夫はやみの中で、薄気味わるい微笑を浮かべていた。蘭子は答えなかつた。答えようにも、彼女はすでに、意識を失つてしまつていたからだ。それから数十分後、やみの中で、手は手、足は足、首、胴とばらばらに切り離された蘭子の五体の上に倒れ伏して、号泣している盲獣の姿があるだけであつた。

十、雪女郎

それから二、三日後、場面は一転して、雪の銀座街であるが、それは、宵から降り出した大雪のため、深夜の銀座通りは、一夜で雪景色へと変わつていたのである。そして、スキー用具を持ち出して、スキーを始める人や、店の小僧さんたちは、大きな雪だるまなどをつくることに忙しかつた。その中に、等身大の婦人裸体像をせつせとつくつてゐるひとりぼっちの盲人があつた。かれは、断髪裸体の雪女郎をつくつてしまつと、近くに待たせ

ていた自動車に乗って、さっさとどこかへ引き上げてしまった。……

翌日、早朝から人だから絶えなかった。盲人手細工の断髪雪女郎は、銀座一帯での最高傑作として、人気の中心となった。新聞社の写真班も、しばしばカメラを向けたとある。それは、一体、なぜか？ それは、彼は、まさに裸婦像専門の「彫刻家」であり、それゆえ、雪だるまでもその「技量」は遺憾なく發揮されているのである。そして、午後になると、暖かい陽光のために、断髪と顔面の見境がつかなくなり、片腕ももげて醜くなってしまうが、その人気は衰えなかった。それは、会社帰りの紳士が立ち止まり、学生が立ち止まり、そして、小僧たちが立ち止まった。さらに、女学生までが、クスクス笑って立ち止まった。やがて、いたずら小僧が、雪女郎（雪女）のおへそをめがけて、雪つぶてを投げつけると、その断髪雪女郎は、おへそから上の方が倒れて碎け散ってしまった。

すると、一人の盲人が、「……もしもし、今のは雪だるまのこわれた音ですかい？」と聞くので、隣の人は、「ええ、そうですよ」と応えると、その盲人は、「……あなた、その雪だるまの足をこわしてごらんなさい。足だけ残しておいたって、つまらないじゃありませんか」と言うので、隣の人は、言われるままに、二、三步前に出て、くつで雪女郎の二本の足をけとばすと、なんとコロコロところがりながら一尺（三十センチ）ほどの青白いかたまりが出てきて、一人の学生が、なんだろうと近づいて見てみると、それは、なんと「人間の足」であり、ギャツという叫び声とともに、群衆の視線がいつせいにその一物に集まるが、それは、たしかに人間の、しかも女の片足であった。たちまち群衆の数が増えて、知らせを受けた警察が駆けつけるといふ展開になるが、盲人は、「……おや、この騒ぎは、いったいなにごとですかい？」と聞くと、隣の人は、「……なにね、雪女郎の中から、ほんとうの女の片足がころがり出たという騒ぎさ」と言うので、「……へええ、女の片足がね、驚きましたね、いったいなんの気で、そんなとんでもないいたずらをしやがったのでしょうね」と、不気味に低い笑い声をたてたかと思うと、ひよいと向きを変えては、つえを力にとぼとぼとその場を立ち去るのであった。

十一、足のある風船

ところで、水木蘭子には、まだ「首と、胴体と、二本の腕と、一本の足」が残っていることになる。盲獣は、それらのものをいかに処分したか、それについて書いてみたいとある。——それは、雪だるま事件があつてから四、五日たつと、雪どけのぬかるみもかわき、変わつて朗らかな小春びよりが来た。舞台は浅草公園、観音さまのお堂の前だ。敷石道には、数十羽のハトが、子供の投げ与える豆をつついていた。露天商人の客を呼ぶ声やジャンタジンの古風な楽隊の音が聞こえる中で、ハトのまわりには、五、六歳から七、八歳のわんぱく小僧が十人ぐらい群がっていたが、そのうちの一人が空を見上げては、「……やあ、風船だ、風船だ」と騒ぐと、なるほど、青いの、赤いの、白いの、二、三十もある風船玉が、ひとかたまりになつてふわふわと飛んで来るのであった。その結び目になんとか大きなものがくくりつけてあり、その重みで、風船は徐々に浮力を失い、いまにも落ちてきそうに見えた。「……おい、追っかけて拾おうよ」と、ひとりの子供が言うと、子供たちは賛成をして、みんなでその風船をおいかけることになった。

やがて、その風船は広っぱの大イチョウの枝に頭をぶつけながら、子供たちの手がうじ

やうじやと群がる中へと降りてきた。そして、おびただしい競争者たちに打ち勝って、その大きな包みを抱え込んだのは、案外にも、七つばかりの小さな子供であり、みんなに奪われまいと走り出したが、行く手の鉄柵てつさくのところまでまごつき、みんなに追いつかれて、奪い合いになるが、やがて、一人の老人が、「……おい、おい、よさないか、おまえたち何を争っているのだ。風船なら、みんな飛んでいってしまっただじゃないか」と言いながら、折り重なっている子供たちを起こしては、一番下の子供に、「……さあ、起きた、起きた、お前は何かをつかんでいるんだ」と言いながら、「……おい、おまえ、それはいったいなのか」ということになるが、それは、その子供が抱きしめている一物に、五本の指がはえていたからである。それを見て、老人は、「……人間の足だ。おい、たいへんだ。早くおまえを呼んでおいで」と、どもりながら、指図するのであった。そして、そのうわさは、たちまち公園じゅうにひろがり、ひょうたん池のふちの高台のベンチでも、「……ゴム風船を二十も三十も集めて、それに切り離れた人間の足をぶらさげて飛ばしたやつがあるんですって、美しい女の足首だったということですよ」と、職人風の男が話すと、「……ほう、ひどいやつですね。してみると、人殺しがあつたのでしょうかね」と、ベンチに腰かけていた醜い盲人が言うのと、「……てつきり、そうだね。女を殺しておいて、手足をばらばらに切りきざんだのかもしれないね。おお、いやだ」と言い、「……で、その足首を、よりによってこのにぎやかな浅草の空へ捨てたってわけですかね。フフフフ、飛んでいくところは、さぞかし見物みものだったでしょうね」と、陰気な含み笑いをするのだった。

十二、冷たい手首

さて、同じ日の夜ふけ、日比谷公園裏の官庁ばかり建ち並んだ非常に寂しい往来を、ひとりの青年紳士がぶらぶらと歩いてた。付近のシナ料理店で開かれた宴会の帰り道であり、かなり酔っ払っていたのである。十二時近かつたので、まったく人通りがとだえていた。青年紳士は、ふと行く手に何かしらうごめいているものを発見するが、それは、だれか一人の男が大地に四つんばいになって、まるで犬のように地面をかぎまわっている様子であった。「……きみ、きみ、そこで何をしているんだ。しつかりしたまえ、みつともないじゃないか」と言うのと、「どなたですえ」と言いながら、「……へへへ……犬のまねじやございせんよ。実は、つえをなくしましてね。わたしやめくらなんです。つえがなくてはひと足も歩けないのです。へへへ……」と言うのであった。そこで、酔っ払いの紳士は、街灯の明かりをたよりに、いっしょになって探してやるが、どこにもつえらしいものは見あたらなかった。そこで、「……きみ、どこへ行くんだね、遠方かね」、「……へえ、〇町まで行くんで」と言うので、「……〇町だつて？ わかんないな、まあいいや、連れて行ってやろう。その辺でつえを買ってやろう。来たまえ、手を引いてやるから」と言うのと、「へへ……恐れ入ります」と、盲人は、恐れ入りながら右手をさし出すと、紳士は、盲人の手を握って歩き出すが、「……ワーツ、なんて冷たい手だ。君の手はまるで死人みたいだね」と言うのであった。もちろん、それは、蘭子らんこの「右手」であつたのである。

そして、歩いて行くと、立派なショーウィンドーの雑貨店があつたので、「……さあ、きみ、ここできいてみよう。ステッキがあるかどうか。ね、きみ、ステッキさえあれば、ひとりで歩けるね……おい、返事をしないか、あんまさん」と、びつくりして振り返って

みると、今までいたはずの盲人が影も形もなくなっている。そして、右手を持ち上げてみると、主人なき手首もいっしょについて上がった。「……おい、いたずらはよせよ。いやだせ、おどかしちゃ」という展開から、「……だれか来てくれ、助けてくれ」となり、たちまち人だかりになるのであった。そして、その人だかりのうしろに、帽子をまぶかにした黒めがねの男が立っていて、「……なにごとですえ？ 酔っ払いがどうしたのですかね」と聞くと、隣の人は、「……人間の腕をつかんでいたんですよ。どこで拾ってきたんだか、物騒な男ですね」と応え、「……へえ、人間の腕をね、酔っ払って、人でも殺してきたんじゃないませんか。それで、男ですか、それとも、若いべっぴんの手首ですかい」と聞くので、「……」とこらんなさい。白くてスベスベした若い女のらしいですね」と応える。すると、「……」ところが、わたしや目が見えませんでしたね。へへ……若い女の手首ですか、すごすごさんすね」と、笑ったかと思うと、盲人は、どこで手に入れたものか、もうちゃんとつえをついて、さっさとその場を立ち去っていったのである。

十三、クモ娘

また、それから二日ばかりのち、今度は、両国国技館裏の見世物小屋で、またしても異常な珍事が起こった。その広っぱには、常小屋^{じょうぶ}ではなく、ときどき地方回りの小さな見世物がかかることがあり、ちょうどそのとき、クモ娘の見世物がかかっていた。その「クモ娘」というのは、妙な階段のようなものの中ほどに娘の首が乗っていて、その首を中心にクモの糸になぞらえたひもを張り巡らし、首の周辺には作り物の大グモの足が八本ひろがっている。つまり、網の上を、人間の首を持った大グモがはっている形に見せかけたものであり、娘は、階段のような箱の中へ身を隠し、首だけを上部に現わしているものである。そして、夜の九時ごろ、クモ娘とて、食事すれば、ご不浄へも行くので、ちょうど娘の合図があったので、一時客止めにして、中の客の出るのを待って、娘を箱の中から出してやったのだが、小屋の裏へ出ていったかと思うと、知らぬ間に帰ってきて、ひとりで箱の中へ入ってしまった。ふだんは少しでも外に出ていたがる娘が、きょうはばかに神妙だと思ひながら、親方はまた客を集めはじめた。

それは、「……さあ、いらはい、いらはい、これが有名なクモ娘、胴体がなくて、首から八本の足がはえている。さあ、これからちょうど浅草小唄^{こゑた}を歌うところです。首ばかりのクモ娘が歌をうたう。こらんなさい。これが、この看板どおり一分一厘違わない恐ろしいクモ娘だ」と、親方は、いつものしわがれ声で、陰気な口上をしゃべり続けるのであった。——これは、遠い昔、子供の頃、祭りや縁日の時などには、よくサーカスをはじめ、おばけ屋敷やいろいろな見世物（例えば「へび女や珍獣何々」とか）がかかったものであり、大きな絵の看板とともに、独特の口上で巧みに客を集めていたものである。

さて、客が集まると、「……さあ、愛ちゃん、浅草小唄を歌うのだよ」と言っても、いっこうに歌い出そうとしない。客たちは何か変だぞという異様な感じに襲われていると、突然木戸口^{きどぐち}のところで、「……アッ、おまえどうしたんだ。どこへ行ったんだ」、「……ごめんなさい。ちょっとあすこの夜店を見ていたんです」、「……うそをいえ、また焼き鳥の立ち食いをしてきたんだらう。これからそんなことをすると、承知しねうぞ」という展開になるが、そうすると、中の階段に首をさらしているやつは、いったい何者だというこ

となり、親方は、「……おい、おまえだれだ」と、どなったが、階段の首は黙っている。そこで親方は、つかつかと階段に近づいて、娘の髪の毛を持ってぐいっと力いっぱい持ち上げると、なんと娘の首の下には、何も無い、胴体のない生首だけであり、「ワッ」といって、思わず手を離すと、生首は何か生き物のように、コトン、コトンと階段をころがって、見物たちの足下へ飛びついていった。「キヤッ」ということで大騒ぎになり、近所の交番のおまわりさんも駆けつけることになるが、例によってそこにひとりの盲人がまじって、いて、「……いったい、どうした騒ぎでございますね」と聞くが、誰もその盲人を相手にしようしない。やがて、木戸口から、とんきような叫び声が響き、それは、「……ああ、こ、この女、おれは知っていますよ。こりや、もと浅草の帝都座に出ていたレビューの踊り子でさあ、水木蘭子という女でさあ」と言うので、「……ああ、そうですか、水木蘭子ですか、かわいそうになあ、フフフ……」と、盲人はひとりごとをつぶやきながら、とぼとぼとどこかへ立ち去っていくのであった。

十四、めくら湯

さて、水木蘭子殺害さるといううわさは、パツと東京じゅうにひろがった。警察はめざましい活動を開始したが、下手人は少しもわからぬ。下手人の代わりに、蘭子のからだの部分、すなわち、二本の足と一本の手、そして、一つの生首、それらを寄せ集めて調べてみると、確かに同じ年配の、同じ体質の、美しい女のからだであることがわかった。では、残りの片手と胴体はどうなったのか。これも必ずどこか意外な場所にころがっているに違いないと、刑事は血眼になって走りまわるとともに、新聞の方も大きな見出しで、書きたてたのである。すると、さっそく、ある屠牛場から届け出があった。血まみれの牛の臓物のおけの中に、こまごまに切り刻んだ人間の骨や肉がまじっていた。その分量を合わせてみると、どうやら蘭子の胴体と片手に相当するということであった。

やがて、事件は迷宮入りになるが、それは、犯人は、まさに警察たちの目の前にいたのであるが、つえにすがった不自由な盲人が、まさかこんなだいたいそれた罪を犯そうなどとは、誰も想像さえし得なかったからである。それから三ヶ月ほどたつたある日のこと、新宿の盛り場の、滝の湯という大きな銭湯の勝手口へ、ひとりのめくらがたずねてきたのである。そして、「……ごらんのとおり、あんまを渡世にしている者でございしますが、この節の不景気で思わしく仕事もなく、そこで思いついたのがお湯屋さんの三助でございます。お湯であたたまったからだを、裸のままもみほぐすのは、それは気持ちのよいもので、こちらのようなご繁盛のお湯屋さんには、そういうあんまがあつてもじやまにはなりますまいし、また、流しの方も、なあに、できないことはございませぬ」と言うのと、「……なるほどね。あんまの三助か、こいつは存外あいきようがあつておもしろいかもしれないね」ということで、翌日から滝の湯の流し場で、めくら三助が働き始めるが、それが評判になり、めくら三助に一度もませてみようじゃないかと、遠方からわざわざやって来る客もあり、女湯では、最初気味わるがつていたが、顔に似合わぬひょうきんもので、おもしろいむだ口で人を笑わせたりするものだから、あんまの三助、あんまの三助、と、ひっぱりだこになり、今では「滝の湯」よりも「めくら湯」で通るほど有名になっていたのである。

十五、真珠夫人

ところで、女湯のなかに、真珠夫人と呼ばれるきわだって美しいからだの持ち主があった。『パール』という有名なカフェのマダムで、もう三十をよほど過ぎた年増ではあったが、顔も美しく、ましてそのはだはまるで小娘のようになめらかで、健康に張りきっていて、まるで男を知らぬかと疑われるほど、ういういしく見えた。そして、真珠夫人は、滝の湯の常連であり、来れば流しをとり、流しをとれば必ず例のめくら三助に頼むことにきめていた。ある日のこと、例によって、銭湯にやってきて、めくら三助に流させていたが、まだ十時を少しまわったばかりでひとりの客もなく、黙っているのも変なので、ふたりは何か世間話を始めた。「……番頭さん、こうして毎日、女の子のからだをなでまわしているのも、いいかげんうんざりするだろうね」と聞くと、「……どうして、どうして、わたしやこんな楽しいことはありやしませんよ。めくらのことで、女の顔を見て楽しむということはありませんが、わたしどもは、女は顔じゃありませんよ。からだです。からだのかつこう、はだのよしあし、それを手の平で探って、ははあ、この人は美人だな、この人はさほど美しくないなどと、ちょうど目あきが顔を見て品定めをするように、めくらは指先で女を見るのです」と言うと、真珠夫人は、わたしはどっちかね、と聞くので、「……エへへ、ご冗談でしょう。奥さんが評判の美人だつてことは、いくらめくらでも、ちゃんと知っていますよ。お顔は分かりませんが、からだでいやあ、あたしや、こんな美しいからだは、生まれてから初めてです。このお湯へ来る何百という娘さんを束にしたつてかないっこない、千人にひとり、万人にひとり、いや、千万人にひとりっておからだです」と褒めながらも、「……だがね、たったひとりだけ、奥さんとよく似たからだを知っていますよ。それは、レビューの踊り子の水木蘭子だ」と言うと、「……エ、水木蘭子だつて、あのむごたらしい死に方をした。おお、いやだ」と、夫人は、ぞつとしたように肩をすくめるのであった。

十六、肉文字

やがて、一人ふたりと新しい客がやって来たので、この不思議な会話はそれきりになつてしまったが、そのことがあつてから、三助の指の動きぐあい、夫人のからだのくねらせ方で、冗談を言い合ったり、あいさつをし合ったりできるほどになったのである。真珠夫人は、この醜い盲人に異様な好奇心を持ち始めたように見えた。それというのも、めくら三助の技術には特殊の魅力が潜んでいたからでもあった。かれは、裸体あんま術にかけては、不思議な腕まえを持っていた。ぬめぬめとすべる石けんのおぼくの上を、十本の指が、大グモのように、快い拍子を取ってはいまわる。その指の下で、客の肉体は、水まぐらのようにダブダブと波打つのであった。そして、客たちは、まるで催眠術にでもかかったように、目を細めて、かれらの裸体をめくらの三助のもて遊ぶがままに任せていた。不思議な陶酔境である。真珠夫人も、その陶酔者のひとりであった。ことに彼女に対しては、三助のほうでも腕によりをかけて、普通客の二倍三倍のもてなしをするものだから、その効果もいっそう大きく、今では真珠夫人は、「めくら湯」に来るのが楽しい日課になっていたほどである。めくらの三助は、まさにそうなることをずっと待っていたのである。

そして、めくらの三助は、その真珠夫人の背中に今度は文字を書き始めるのである。それを毎日毎日繰り返すことによって、最初は、それが何であるかまったく分からなかったが、やがて、それと気づくのであり、真珠夫人は、なにくわぬ顔をしながら、背中にはだに注意力を集中して、一字一句拾ってみると、それは、「コンヤ一ジミツコシノウラデマツ」（今夜一時三越の裏で待つ）というものであった。真珠夫人は、最初、「……このわたしにあいびきをもとめているのだわ。なんてこっけいなんだろう」と思い、相手にもしなかったが、やがて、このめくらの三助にやさしいことばの一つもかけてやれば、それをうれしがって、奴隷のようにわたしの足にひざまずくのだろう。それも一興だと思い、ひとりごとのように、「……ええ、そうするわ」と、いろよい返事を与えてしまうのである。まさかこのめくらの三助が、あんな恐ろしい男とは知る由もなかったのである。

その夜の一時、真珠夫人は、約束の三越の裏へと出かけて待っていると、やみの中から、つえにすがった盲人が、まっすぐに夫人のそばへ近づいてきて、「奥さんですか」と、異様なささやき声がし、「……ええ、そうよ。おまえさんの頼みを聞いて、わざわざここまで来てあげたのよ」と言うのと、「……ありがとうございます。わたしやこれで本望ですよ。でもよく、わたしみたいなものの頼みを聞いてくださいましたね。ありがとう、ありがとう」とうれし涙にむせぶのであった。「……で、どうするの？　こんなとこに立っていたってしょうがないわね」と言うのと、「……まあ、わたしにお任せください。車を雇っておきましたから、ともかくあれに乗ってください」と誘っては、美しい三十女と、醜い盲人、なんとも形容のできない不思議な取り合わせの客を乗せた車は、深夜の大通りを、いずこともなく走り去るのであった。

十七、紫檀の太もも

さて、それからどのようなことが起こったか、それは、真珠夫人もやつぱり例の不気味な人体彫刻のあるあの地下の密室へと連れ込まれては、そこでありとあらゆる情痴の遊技をし尽くしたことは、かつての水木蘭子の場合と大差はない。ほとんど同じ狂態が演じられ、ほとんど同じ会話がとりかわされ、真珠夫人もこの恐ろしき盲獣の前に完全に降伏してしまったのである。それは、一体、なぜか？　それは、たとえ頭の「知性や理性」などでは嫌っていたとしても、その身体への強い「刺激や快感」などを無理やりでも一度受け入れて心を許してしまうと、相手が誰であるかよりも、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」が忘れ難くなり、それゆえ、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」を渴望して、次第に自ら積極的にその世界を受け入れるようになってしまう傾向があるのである。それが、まさに「マゾサド世界」（つまり「被虐・加虐」世界）の非日常的な強烈な「刺激世界」や「感覚世界」が成り立つ理由の一つになるのである。そして、真珠夫人も、それを離れてはもはや一日も生きていけないほどにのめり込んでしまったのである。

さて、盲獣の奇怪なる魅力におぼれつきた真珠夫人は、床の巨像の冷たい紫檀のはだにぐったりと身を投げて、目を細め、筋肉の力を抜いて、全身を相手のもてあそぶがままに任せていた。すると、盲人は、「……わしはこうしておまえのからだをなでていると、どうもあの水木蘭子を思い出してしかたがないのだよ」と言う。すると、真珠夫人は、「……まあ、おまえさん、どうもあやしいよ。わたしみたいにして、あの蘭子を手に入れたこ

とがあるのじゃない？」と聞くと、「……うん、実はね、驚いてはいけないよ。わしは蘭子（らんこ）をここへ連れ込んだことがあるのだ」と言い、さらに加えて、「……わたしたちは半年近くもここでふざけ暮らしていたのだよ。そして、わしはもう飽き飽きしてしまったのだ。そこで、とうとう決心したのさ、蘭子（らんこ）を殺してしまおうとね」と薄気味わるく告白するのであった。夫人は、「……まあ、こわい。むろん冗談（じょたん）でしょ。わたしびっくりするじゃないの」と言うと、盲人（めくら）は、「……蘭子（らんこ）もそう言ったよ。『冗談（じょたん）でしょ』ってね。だが、冗談ではなかったのさ。いつの間にか、あの女の腰に太いなわを巻きつけていたのさ」と言いながら、ほとんど裸体の真珠夫人の腰に麻（あさ）なわを巻きつけていた。もちろん、蘭子（らんこ）の殺害の時には、そんなことはしなかったが、何もかも蘭子（らんこ）の時とそっくりだと思わせることが、犠牲者をどんなに震え上がらせるかをよく知っていて、その恐怖（おそ）がながめたかったのである。それは、「……美しい女の死にも狂（くる）いの恐怖（おそ）をながめる、必死（めいじ）に身悶（もだ）え喘（あえ）ぎ苦し（さ）み叫（さけ）ぶ表情（へいしやう）をながめる、あの限り（かぎり）なき悦（えつ）楽（らく）に耽（ふけ）りたかったのだ」と、まさに「加虐（性、的、サ、デ、イズム）心理（しんり）」そのものを語っているのである。

十八、巨人の口

さて、真珠夫人は、「いけない、いけないたら……」と、夫人の腰に食い入るなわをはずそうともがきながら、さらに、「……おどしちやいや、ねえ、あんた、うそだわね。うそだとおっしゃい。でないと、わたし……」と言うと、盲獣（めくら）は、「……妙だね、蘭子（らんこ）もやっぱり、そのとおりのことをいって、わしに哀願（あいがん）したものだよ。だが、わしは許（ゆる）さなかった。許（ゆる）すかわりに、隠（かく）し持（も）っていた短刀（たんとう）を抜き放（はな）つて、ギラギラと振（ふ）って見（み）せた」と言いながら、横（よこ）たわっている真珠夫人の首筋（くびすぢ）へ、その氷（こ）のような刃先（はさき）を、ぺたぺたと当てるのであった。夫人は思わず「ヒイ」と悲鳴（ひい）を上げて、やっぱりほんとうだ。このぶきみな盲人（めくら）は、本気で私（わたし）を殺（ころ）そうとしているのだと、あまりの恐ろしきからだじゅうの血（ち）が凍（こ）るかと思（おも）われたほどであった。そして、真珠夫人は、死（し）にもの狂（くる）いで盲人（めくら）の手（て）をはねのけて、巨人（きょじん）のもの滑（な）り台（だい）を、こけたりすべったりしながら逃げまどうのであった。

それは、まるで真（ま）つ白（しろ）な大きな猿（さる）まわしのサルのように、木（き）製（せい）のおしりの山（やま）をよじ登（のぼ）り、あるいはゴム製（せい）のお乳（ちち）にすがり、あるいは手（て）や足（あし）の林（はやし）を分（わ）けて、哀（かな）れに逃（に）げまどつていたが、盲人（めくら）の手（て）には麻（あさ）なわがしっかりと握（にぎ）られていたのである。そして、「……ほら、逃げろ、逃げろ、さあ、今度はそこへよじのぼ（ぼ）ろだ。その大きな口のほらあなへ逃（に）げ込むのだ。蘭子（らんこ）もやっぱりそこへはいったものだよ」と追い立てられながら、真珠夫人（まじゆふじん）も、結局（けつくり）は、ヤドカリ（やどかり）が貝（かい）がらにもぐりこむように、ゴソゴソと巨大（こっけい）な口のどのほうへはい込んでいった。すると、盲獣（めくら）は、「……ハハハ……そこでどうとう袋（ふくろ）のネズミだね。ハハハ……こわいかな。震（ふる）えているね。ほら、どうだ、少しはチクチク痛（いた）むかもしれないね」と言いながら、巨人（きょじん）の口（くち）からはみ出（で）している夫人（ふじん）のあしとしりをチクリチクリと突（つ）くと、突（つ）かれるたびに、真（ま）つ白（しろ）な皮膚（ひふ）に、美（う）しい紅（べに）の絵（え）の具（ぐ）がにじみ出（で）て、巨大（こっけい）などの奥（おく）からは、ヒイ……ヒイ……と悲鳴（ひい）が漏（も）れてくるのであった。

十九、女どろぼう

それから、真珠夫人（死後）は、一体、どのような運命を辿ったのか？ それは、次のような内容になっている。――まず、小石川区のS町に絹屋という古風な呉服店があった。それは、昔ながらの店構えで、番頭小僧が前だれがけで、畳敷きの店先にそろばんを前に控えているという呉服屋であり、その店に、深夜、大胆不敵な女賊が押し入ろうとしたのである。その絹屋では店をしまうと、昔風の戸をおろして、店員たちは、とりかたづけた店の間にふとんを並べて、番頭から小僧にいたるまで（合計五人が）昔風に休むことになっていった。そして、夜の十二時を過ぎると、表通りにはぼったりと人の足がとだえ、三十分ごとに拍子木をたたいて回る夜番のほかには、店員たちの大小のいびきや歯ぎしりなどが聞こえてくるだけであった。

さて、深夜二時、さつきから、表の戸の下にコソコソと異様な物音がしているが、熟睡していて、誰もそれに気づかない。三十分ほどそのひそかな物音が続いていたかと思うと、戸の下にトンネルみたいな穴ができて、そこから白いものが、へびのかま首のようにニョーツとのぞいた。それは、どろぼうの手首であり、戸のくるるをはずそうとしていたのである。一方、小僧の一人がたまたま寝返りをうった拍子に、若い番頭の腹の上へ、ドシンと乗っかり、それで番頭が目をさますことになる。最初、寝ぼけていて、それを見た時は、何か白い犬かダイコンのお化けかと思ったが、やがて、どろぼうだと気づき、そこでもう一人の番頭を起こしては、二人でどろぼうを捕まえようとしめし合わせて、一、二、三で、その手首に飛びつき、またたくまに手首をグルグル巻きにしぼり上げては、「……おい、だれかだんなさまに申し上げろ、それから警察へ電話をかけるんだ」と、どろぼうを見事に捕まえて有頂天になるが、一方、外のどろぼうはウンともスンともいわず、不気味に黙りこくって、ただ縛られた手首だけが踊り狂っている。やがて、ぐつたりとなり、外で何かゴソゴソと音がするので、なにか変だと思い、力を込めて手首をひっぱってみると、その手首はズルズルとこちらへ抜けてくるのであった。

それを見て、「ア、血だ、血だ」、「やりあがったな」ということになり、それは、どろぼうがわが身を全うするために、われとわが腕を切り離して逃亡したのだ。「……なんとこの荒療治、なんとという大胆不敵なしわざであろう」と、震え上がるのであった。しかも、「……おい、これは男じゃないぞ。すべっこい女の腕だぜ。この細い指を見たまえ」ということで、どう見ても女の腕だ。では、女盗賊だったのか。女のくせに、こんな思いきった荒療治をやつてのけたのか、と、一同シーンと静まり返ってしまったのである。

二十、怪あんま

さて、「……腕を切つて逃亡した大胆不敵の女賊」記事が、翌日の新聞をにぎわせることになった。むろん、警察はこの片腕の主を手を尽くして捜し求めたが、女賊は影さえ見せなかった。しかも、驚くべきことは、その事件の翌々日、今度は河岸を変えて、大森のある質屋に、同じ手口の賊が押し入ろうとした。そして、絹屋呉服店と同じ惨事がひき起こされたのである。あとでわかったことであるが、その同じ夜、女賊は大森で三力所も、例の土を掘って手首を入れるやり方で忍び込もうとしたが、どこでも家人に騒がれて目的を果たせず、最後にねらった質屋で、その若い番頭は、同じように室内に侵入した手首になわをかけるが、女賊はまたもやわが手を切り離して逃げ去ってしまった。そして、絹

屋の手首は右、大森の質屋の手首は左、共に軟らかい女の腕で、両方とも同一人物のものであることが確かめられたのであった。

「……もつともね、質屋へ入った時には、もう右手はないのだからね。きつと相棒がいて、女賊の腕を切ったのだろうといううわさだよ」と、絹屋呉服屋の奥の間では、主人があんまに肩をもませながら、新聞を前にして、女賊の話をしていた。あんまは、「……すると、なんでございますね。その女賊は、両手とも切ってしまつて、あの妻吉という芸者みたいな姿になってしまったのでございますね」と、あいつちをうった。「……うん、恐ろしいことだよ。なんという強情がまんやつだろうね。それに、驚いたことは、大森へはいったのは、わしの家で右手をなくした翌々日なんだぜ。たいていのものなら、傷の痛さに熱を出してウンウンうなっていなければならぬはずだからね。こわい女だよ」、「そうでございますね。人間じゃありませんね。それで、そいつはまだつかまらないのでございますか」、「……うん、少しも手がかりがないのだそうだ」と続くのである。

ところで、「……おまえさん近所かね。はじめてのようだが」と聞くと、「……いえ、だいぶ遠方でございますよ。不景気でございましてね。こうして笛を吹いて流して歩かないと、おまんまがいただけませんので、へへ……」と言い、一方、主人は、しばらくすると、「……ああ、ちよつと待つておくれ、ご不浄へ行つてきますから」と、主人は立ち上つて、縁側へ出ていくのであった。すると、あんまは、スルスルとうしろのタンスへはいよつては、小引き出しに手をかける。実は、さつき使いの者が持つてきた大金が、その引き出しにしまわれたことを、目こそ見えぬが、鋭い勘の方で、ちゃんと覚えていたのである。そして、サツと中の一物を取り出してはふところのねじ込むと、引き出しをしめて、もとの席へもどり、なにくわぬ顔で指をボキボキ折りはじめるのであった。盲獣が彼の「悪行の資金」を調達する方法は、およそかくのごときものであったのである。

さて、盲獣は、なぜ、いつも「手や足」などを捨てた現場、現場にその姿を現わしては、その現場にいる人と「会話」を交わしているのだろうか？ それは、人々にどれくらい大きな「驚きや衝撃或いは恐怖やその他」などを与えているのかを自ら生で実感して悦に入りたいからであると共に、もう一つは、目の前に犯人がいるのに、それに気づかない警察を初めとして、世間の人たちの愚かさを見てあざ笑ひ、そして、「……誰にも自分が犯人だとわかるはずがない」という、いわば「完全犯罪」を気取った（自慢するような）一種の「優越感や達成感」などからも自ずと生じて来る「犯罪者心理」の一つになるのだろう。

二一、砂遊び

さて、大森の事件から二、三日後、舞台は鎌倉由比ヶ浜の海岸へと変わる。その日はひどくむし暑い日で、まだ六月なかばというのに、海は気の早い遊泳者でかなりにぎわっていた。そして、色とりどりのパラソルが、砂浜に五色のキノコとはえて、肥えたの、やせたの、白いの、黒いの、あらゆる形の肉塊が、寝そべったり、座ったり、泳いだり、走ったり、はねたりしていた。また、砂遊びに興じるものもあり、例えば、砂の中へ埋められている人や、大小様々な砂山や砂の城を作ったり、また、砂で大きな裸体の臥婦を描いて曲線を楽しんだり、その他、それらの砂遊びの人々のなかに、紅白だんだらの水着を着た奇妙な盲人がいて、かれは朝早く、海岸に人気もない時分から、もう砂遊びを始めて、終

日それを楽しみ、夕暮れ人々が帰り去ったあとまで居残っていた。この醜い盲人にも、とびきり美しい恋人がいて、その首まで砂に埋まった美しい人のそばに寝そべって、あきず話し合っていたが、女は美しい胴体を砂に埋めて、首と足だけを出して、その足の先をピンピンさせながら、かん高い声で笑った。「……なんとむつまじいんだろう。あのめくら、きつと金持ちなんだぜ」と不良どもがささやき合っていた。そして、夕方になると、海岸の人々やパラソルなどは、どんどんと減って、盲人もいつの間にかいなくなった。広い夕暮れの浜辺に、見渡す限り三人きりであり、そのうちのふたりは、恐らく、生まれてはじめてのあいびきで帰りを忘れた若い男女であり、そして、もう一人は、首まで砂に埋まっている美しい人だけであった。

さて、あいびきの若い男女は、夢中で話し合っていて、気がつく、「……まあ、だれもいなくなっちゃったわ。もう日が暮れそうだね」と、少女が言うと、青年は、「……うん、でも、もうひとりいるよ」ということになり、「どこに?」「ほら、向こうの浜辺に」となり、少女は、「……あの人何をしているのかしら? リュウマチの療法、それとも苦行をしているの?」と聞くと、青年は、「……ぼくはね、お昼頃から、あの人を見ているんだよ。少し変だね」ということになり、そこで「オーイ」と呼んでみても、何の返事もない。そこで二人は、その女性のところまで行って見ると、「……おい、ごらん、眠っているんだよ……でも、おかしいね、この人、化け物みたいな大女だよ。足があんなところにあるよ、この人、七尺(約二肘十寸)もあるぜ」と言うと、「キヤー」と、おびえた娘さんは、砂を蹴っていちもくさんに逃げ出してしまう。そこで、青年は、「……きみ、きみ、カゼをひきますよ。起きたらどうですか……おや、こいつはいけない。死人だ」ということになり、だれか呼んでくれ! と叫び、やがて屈強の浜の若者三、四人が駆けつけ、その砂に埋まっている美しい女性を掘り出してみると、何とその死美人には胴体がなかったのである。首はある、足もあるが、中間の胴体が空虚であった。一同はゾーンとして、夕やみの浜辺は、今までの寂しさにひきかえて、たちまち黒山の人だかりとなり、「殺人事件だ、殺人事件だ」と、群衆の間に恐怖の聲が騒然としてわき起こったのである。

二二、寡婦クラブ

さて、東京市中には、例えば、まじめな、あるいは淫蕩な未亡人たちのクラブが幾百となく存在することだろうが、美人寡婦「大内麗子」が加入していた小クラブは、その後者に属する極端なものであり、会員は年長四十歳から、最年少二十五歳の麗子を加えて四人、赤坂区のとある家を借りて、月に二回ずつ秘密の寄り合いをし、今夜もその会合があつて、四人のあぶらぎった未亡人たちは、しめきつた二階座敷に車座になって、奇怪な秘密話にふけていた。時は、初秋、この前の「海岸生首事件」から二ヶ月ほど後の話である。

まず、「……で、そのめくら三助っていうのは、いったいどんな男ですの?」と、最年少の「大内麗子」が聞くと、「……あんた、ごらんになったらゾツとするわよ。きつと」と、四十歳の「松崎未亡人」が応え、「きたない男?」「……ええ、きたないよりも、恐ろしいのよ。あたし、上野動物園でいつかあんな顔を見たことがあるわ、虎やランオンとは違う、もっと小さく、陰険な、それはいやらしいけどものよ」と言うと、「……でもどこかたまらなくいいところがあるんでしょ。あんたが、わざわざ今夜紹介してくださる

くらいだから」と、三十五、六歳のつやつやとしたあから顔の「下田未亡人」が口をはさんだ。すると、「それはモチよ」、「……あんまり評判が高いもんだから、わざわざそのお湯屋へ行って見たのよ」、そして、「……番が来て、そのめくら三助があたしの肩につかまると、驚いた。とても口では言い表わせやしないわ、あのじょうずなみ方っていうものは」、「……ほんとうに目が細くなっちゃうの……とにかく、あの指はすばらしいものよ」と、四十歳の「松崎未亡人」は言うのであった。

やがて、当の「めくら三助」が到着をして、案内されて二階へと上がり、スーツとふすまを開けて、盲目の醜怪物が顔を出すと、初対面の三人の未亡人たちは、ややわくわくした気持ちで、この珍重すべき盲人をながめ、そして、もう一人の四十歳の「松崎夫人」は、「……ご苦労様、ここには、わたしのほかに三人のお若いご婦人がいらつしやるのよ。あなたの話をする、ぜひ一度もんでもらいたいと、首を長くしてお待ちかねなのよ」と言うので、「……へえ、ありがとうございます。わたくしも、ご婦人をもみますのが道楽でしてね。こんなうれしいことはございません。エへへ……」と応えるのであった。

そして、最初は、三十五歳の「下田未亡人」からであり、「……いかがでございますね、このくらいでは？」と、盲人はムカデの足のようにめまぐるしく動く指で、豊満なる未亡人の肩から背中、背中から腰、腰からおしり、おしりから太ももと、もみ下げ、もみ上げながら、腕の躍動のため妙に震える声で尋ねると、「……ええ、けっこうよ。あたし強いほうですから」と言うと、盲人は、ひとしお力を加えて、グイグイともみはじめ、生きて這いまわる十本の指の下で、下田夫人の肉塊は、まるで巨大な水まぐらのようにダブダブ揺れ始めるのであった。そして、盲人は、「……失礼ながら、お顔はわかりませんが、あなたさまのおからだは、実に美しくうございますね」と言うと、「……そう、手ざわりで、美しいか、美しくないかわかるの」と聞くので、「……エへへ、それはわかりますけれども、わたくしどもの美しいと申しますのは、あなたがたのお考えとは違い、わたくしの指という目で見るのであり、世間でいう美しさとはまったく違ったくらやみの世界の美しさでございます」と応えるのであった。

次は、最年少の「大内麗子」であったが、「……どう？ その人は、あなたの指では、美しい？ それとも美しくない？」と、松崎大夫人が無遠慮に訊ねると、例の生きている十本の指で、麗子の背中を一巡なでまわしておいて、さて答えたものである。「……おや、こいつはどうも、恐ろしいほどの美しさだ。ほんとうのことを申しますと、わたしや生まれてから、こんなすばらしいおからだは、このかたでたった三人目でございます。エへへ……」と言うと、「……当たったわ、あんまさん、そのかたは、あたしたち女でさえほればれするような、それはそれは美しい人なのよ。顔も、はだも、そして年も、娘さんといつていいほど若いのよ」と、やっぱり松崎大夫人が応えるのであった。

そして、「……それはそうと、あんまさん、あなたが生まれてから三人という、そのほかのふたりは、どんな人だったの？」と、下田夫人が尋ねると、最初、盲人はなかなか言わずにもったいぶっていたが、麗子にもぜひ聞きたいわと言われるので、やがて、「……びっくりなすつてはいけませんよ。ひとりとは水木蘭子、ご存じですか、浅草に出ていたレビュー・ガールです。それから、もうひとりとは、俗に真珠夫人と呼ばれていた『カフェ・パール』のおかみさん」と言うと、一同は一斉にシーンと静まり返って、「……まあ、おまえさん、それはほんとうなの？」となり、「……わたしたちも知ってるわ。聞けば、あの

恐ろしい犯人は、まだつかまっていけないというじゃないの」、「……ええ、つかまりませんよ。今の警察の腕前じゃあね」と言うのであった。すると、麗子も、「……まあ、いやだわ、あたしもあんな目に会うんじゃないかしら」と言うと、「へへへ……ご用心なさいませ。こういう美しいおからだのかたは、あぶのうございますよ」と、盲獣は、不得要領の笑い方（要領を得ないあいまいな笑い方）をするのであった。

二三、ゴム人形

さて、それから、四人の未亡人は、次々とふとんに寝そべって奇怪なもみ療治を受け、あるいはそれをながめて、いまわしき楽しみを尽くしたのであるが、それから一ヶ月後のある日、四人組の一人である「下田未亡人」が、「大内麗子」の自宅を訪ねてきた。それは、あれ以来、二度のクラブの会合にも顔を見せなかったもので、それを心配してわざわざ訪ねて来たのであった。そして、離れの洋館に案内されると、部屋にはすでに一人の洋装姿の婦人が大きなテーブルの前に行儀よく腰かけているのであった。それは、「……ハハハハハ、これゴム人形よ。よくできているでしょう。麗子第二世なの」と言うと、下田未亡人は、「……まあ、ずいぶんね。でも、なんてよくできているんでしょう。麗子さんそっくりよ。それはそうと、こんなお人形を何になさるの？ この人とお話でもして遊ぶの？」ということになるが、やがて、麗子の手足やその他のゴム人形なども見せられて、下田夫人は、「……まあ、気味が悪い。ブヨブヨしているのね。しかし、こんな人形だとか、手足や、胴体や、生首まで作らせて、あんたいったい何をしようとしているの？」と聞くので、麗子夫人は、「……それについて、お話があるのよ」ということになり、「……実はあたし、あれからあのあんまさんに、たびたびあつていたのよ」、そして、「……これはただわたしの妄想で、なんの証拠もないんだけど、なんとなく、あれよ。ほら、第六感で、あたし、ちゃんとわかってしまったの」と言うのであった。

そこで、下田夫人は、「……まあ、何がわかったの？」と聞くと、「……あたしが近いうちに殺されて、手や足をばらばらに切り離されるってことが」と言うと、「まあ、いやだわ。おどかしちゃ」、「……だれがあんたを殺すって言うの？ それもわかっているの？」と聞くので、麗子夫人は、「……ええ、わかっているわ。その下手人は、あの気味のわるいめくら三助だわ。あいつ、たしかに、あたしを三番目の犠牲者にしようとならっているのよ」、「……ほら、第一は水木蘭子、第二は真珠夫人、そして、第三は大内麗子っていう順番なのよ」と言うと、下田夫人は、「……エ、では、あのめくら三助が世間を騒がせた殺人狂だつていうの？ まあ、あんたどうかしているんじゃない。目の不自由な男に、あんなすばしっこい芸当ができると思つて」と、あつけにとられて、美しい麗子の顔を見つめるのであった。

二四、女怪対盲獣

「……まあ、あんなめくらが、どうしてそんなだいそれたことを」と、下田夫人は、信じられないという調子で言うと、「……世間の人みんな、あんたみたいにお人好しですからよ。まさかめくらがと思ひ込んでいるからよ。あの悪がしこいめくらは、そこへつけ

込んだのよ。これほどあぶなっかしくて、その実これほど安全な犯罪はないといってもいいわ」と、麗子夫人は、得意らしく述べるのであった。そして、「……最後には警察の力を借りるしかありませんけれど、そのまえに、あたし、ちよとばかりあいつをなぶってやろうと思うのよ」と言うと、「……まあ、あなたが？　およしなさい。もしものことがあったらどうするのさ」となるが、麗子夫人は、「……命がけだからこそ、すばらしくおもしろいのよ。安全にきまつてる冒険なんて、しないほうがましだわ」と言うと、下田夫人は、あっけにとられて、「……で、あなたの計略は？」と聞くので、「……この人形よ。

これをあたしの身代わりに立てるのよ」と言うと、下田夫人は、「……ホホホホ、あなたやっぱりお若いわね。いくらめくらだつて、人間の皮膚とゴム人形のけじめがつかないやつはありませんよ。あいつがそんな甘手に乗ると思つて？」と言うと、「……そうおっしゃるでしょう。ですから、計略があるのよ。あたし、あいつにどこへでも連れられていつて、酒盛りを始めるつもりよ。お酒はごく強い西洋酒を用意し、うまく勧めて、あいつをふらふらに酔っぱらわせてしまふわ。それからよ、人形の身代わりを出すのは。相手はひどく酔っぱらっているでしょう。冷たいゴム人形だつてわかるもんですか。人肌とは違うけれど、形はそっくり同じだし、弾力も人間の肉に似せてこしらえてあるし、そのうえ、その人形は強く切れば血が出るのよ。ゴムの芯に細い隙間すきまが通じていて、全身に犬の血が封じこめてあるのよ。ただうぶ毛や手穴がないだけだわ。どう？　これならうまくいきそうでしょ。相手はまったく目のない酔っぱらいさんなのよ」と言うのであった。

すると、下田夫人は、「……聞いてみると、ひよつとしたらうまくいきそうかもね。しかし、一つまちがえれば命がけよ」と言うと、「……ええ、でも、命がけが好きなんですもの」と言うので、下田夫人も、「……そのけしきが見たいわねえ。あんたいよいよやるときまったら、あたしたちクラブ員にも見せてくださらない。そつとすき見のできる場所だといいただけれど」と言うので、麗子夫人は、「……それは心得ていますわ。わたしも見てもらいたいよ。このすばらしい芸当をひとりで楽しむなんてもったいないわ。日と場所は、きまりしだい皆さんにお知らせするつもりよ。場所はもうちゃんといいたころをみつけてあるのよ」と言うのであった。

二五、裸女虐殺

さて、その日の晩、麗子未亡人は、自宅の人払いの私室へ、盲獣のめくら三助を呼ぶのであった。そして、「……ねえ、あんまさん、あたし松崎さんみたいに銭湯へ行つてもんでもらう勇氣はないけれど、お湯で柔らかくなつたところを、そのままじかに療治りようじしてもらつたら、さぞいい心持ちでしょうね」と言うと、盲獣は、「……へへ……それはもう、こうしておもみしているのとは雲泥うんでいの相違でございますよ」と言うので、麗子夫人は、そこでと、ささやくような声で、「……うちのふろでは女中たちに誤解されるといけないので、巢鴨すがもの端っぽに寂しい一軒家があるのよ。わたしの持ち家で、今はちようどあき家になっているの。そこにはりっぱな湯殿があるので、あんたとふたりでそこへ行つて、その湯殿の中で、あんたに思う存分もんでもらおうかしらと思つているのよ」と言うので、盲獣は、ほくほくとして、「……よろしゅうございますとも、そういう静かなところでしたら、わたくしもじゅうぶん腕がふるえると申すものでございます」と、快諾するのであ

った。そこで、日を定めて自動車でいっしょに行くことにして、あんまを帰し、翌日は、クラブの臨時会を開いて、すき見の打ち合わせをするのであった。

さて、麗子（れいこ）未亡人は、「……でね、あたしはあんまを連れてさきに行き、すっかり酔わせたうえ湯殿に連れ込み、まず最初に自分をほんとうにもませておいて、頃合いを見はからっては、用意の人形と入れ代わり、あたしは湯殿の外へ出て、外のくらやみからそつとのぞいていますから。そこへあんたたち、来ていただくのよ。だって、湯殿の中でほんとうにもませているところを見られちゃ、あたし恥ずかしいんですもの。わかって、あんたたちはね、庭の枝折り戸（しおど）の外まで来て待つてくださるのよ。はいつてもいいという合図にはフクロウの鳴き声で、……ホウ、ホウ、ホウ……ね。この声が合図よ。そうしたら、あたしの左側に、ちょうど一尺（三十センチ）おきくらいに見る穴が三つあけてあるので、ちゃんと順番をきめておいて、そのとおりに並んで、みな黙って、すぐのぞくのよ。その時分には、むろん中のしばいが始まってますからね」と言うのと、三人の会員たちは、激しい期待でわくわくするのであった。

さて、いよいよ約束の当夜となり、三人の年長未亡人たちは、約束の時間に、教えられた巣鴨（すがも）の寂しいあき屋敷の少し手前で車を捨てて、やみの中をひそひそと邸内に忍び込み、例の枝折り戸（しおど）のところで、合図をおそしと待つていると、案外早くフクロウの鳴く声が、三鳴、ホウ、ホウ、ホウと聞こえてきて、近寄ると、麗子（れいこ）が中腰をして、羽目板に顔をくつつけて、一心不乱にのぞき込んでいたので、三未亡人たちも、あらかじめ申し合わせておいた順番で、黙ったまま、その穴へ目を当てると、浴槽（よくそう）は向こう側にあって、その手前に白タイルの流し場があり、そこにぐつたりと横たわっているのは、麗子（れいこ）の身代わりのゴム人形であろう。全裸体で、あおむけに長々と寝そべっている姿が、どう見てもほんものの麗子（れいこ）としか思われぬほど、実に巧みにできていて、そのゴム人形の上に、例の醜惡な盲人が馬乗りになたがり、両手で人形の首をぐいぐいと押しつけている、裸女殺害のすさまじい光景であった。（もちろん、それは、「麗子（れいこ）人形」などではなかったのである。）

二六 イモムシごろごろ

それから半時間後、絞殺され、せめさいなまれ、侮辱のかぎりを受けた麗子（れいこ）人形は、いたましいまでぐつたりとなつて、一個の物体のごとく横たわっていた。盲獣は、「……麗子（れいこ）さん、さすが勝ち気な美人後家さんも、いくじがないね。へへ……お望みに従いまして、これより最後の療治（りようじ）に取りかかりますよ」と言いながら、かたわらに用意してあった大きな出刃包丁を拾い上げると、身の毛もよだつ人肉料理をはじめ、みるみるうちに、首も、手も、足も、コロコロとちよん切られていった。ちよん切るごとに、切り口から黒い血のりがポンプのように飛び上がるのであった。そして、「……へへ……血だ、血だ、なつかしい血のおいだ」と言いながら、切り離れた五体を一つ一つドブドブと浴槽（よくそう）のなかへと投げ込むが、その真つ赤な浴槽（よくそう）の中には、いま切り離れたゴム人形とは別に、麗子（れいこ）がこしらえたばらばらの五体が浮かべてあったので、合わせてふたり分の首、手、足、胴体が、浴槽（よくそう）いっぱいになって、ゴロンゴロンと浮き沈むなか、「……へへ……ああ、たまらねえ、からだじゅうゾクゾクして、心臓をしばらくられるようだ」と、浴槽（よくそう）につかりながら言い、今度は、それらの手や足や首などを湯の中からつかみ上げては、めちやめちやに

流し場へたたきつけ始めた。そして、「……へへ……イモムシごろごろ、イモムシごろごろ、へへ」と、得体の知れぬ歌をうなりながら、かれは五体の山の上を、ゴロゴロゴロとほんとうに断末魔のイモムシのようにころがりまわったのである。

一方、のぞき穴の未亡人たちは、このあまりにも醜悪なる光景を正視するにしのびなかった。たとえゴム人形の切れっぱしにせよ、この刺激はちと強すぎて、さすがのモサたちも、へとへとになってしまった。まず、松崎夫人が隣りのひじを突いて帰ろうと合図し、それからまた隣りへ、ふたりの未亡人は、羽目板を離れて、その場を立ち去ろうとしたが、今夜の主催者の麗子だけは、石像のように羽目板にとりついたまま動こうともしない。山崎夫人は、「まあ」とあきれて、麗子の背中に手をかけて静かに揺り動かしているうちに、何かにひどく驚いたように、「……麗子さんのからだ氷のように冷たいのよ」と、驚きのあまり、声を出してはいけないという「禁制」を破って、蚊のような声でささやいた。残るふたりもびつくりして、麗子のそばに寄つてきては、下田夫人も耳のそばで「麗子さん」とささやきながら、彼女の肩をぐいと押すと、麗子のからだは棒を倒すように地上にころがつては、ポンポンと二度はずんではないか。変だぞと、よく見てみると、麗子の顔は死人のようというよりは、ゴムのように灰色であった。未亡人たちは、きつねに化かされた感じで、一瞬間ぼんやりと突つ立っているだけであつたのである。

それでは、一体、どうしてこういう「結末」になつてしまつたのか？ それは、まず、麗子夫人の「計略」というのは、「……巢鴨の寂しい一軒家に自動車であんまと一緒に行き、そこで相手に強い西洋酒などをうまく飲ませて、すっかり酔わせたうえで湯殿に連れ込み、まず最初は、ほんとうに自分の肉体をもませておいてから、頃合いを見はからつては、用意しておいた人形と入れ代わり、あたしは湯殿の外へ出て、外のくらやみからそつとのぞく」というものであつたが、——実際は、相手をすっかり酔わせたうえで湯殿に連れ込み、まず最初は、ほんとうに自分の肉体をもませるまでは、まさに「計画」通りに行つたに違ひなく、計画通りに行かなかつたのは、次の「……頃合いを見はからつては、用意しておいた人形と入れ代わる」ということが出来なかつたということである。

それは、一体、なぜなのか？ それは、結局、相手に「計略」を見破られてしまつたからである。その場合、最初から見破つていた場合と、もう一つは、途中で初めてそれに気づく場合とがあるかと思うが、そのどちらであれ、それよりも遙かに大事なことは、盲獣自身は、巢鴨の寂しい一軒家の湯殿に二人で行くという話を聞いた時から、恐らく、そこで麗子夫人を「最初から殺害しよう」と計画を立てて乗り込んでいったということであり、その「絶対的証拠」となるものは、まさに「……かたわらに用意してあつた大きな出刃包丁を拾い上げると、身の毛もよだつ人肉料理を始めた」というところであり、最初から「大きな出刃包丁」を用意して出かけて行つたということが最も大事な急所になるのである。

一方、盲獣の最大の「失敗」は、三人の未亡人に直接「麗子殺害現場」を見られてしまつたことであり、それは、「……ほら、第一は水木蘭子、第二は真珠夫人、そして、第三は大内麗子っていう順番なのよ」と言つていた麗子夫人の言葉通りになつたということであり、あの「めくら三助」こそは、まさに世間を騒がせている連続「殺人犯」であることが、はつきりと知られてしまつたということであり。やがて、警察に通報されて、まさに「盲獣」（めくら三助）は、全国的に「指名手配」されることは、もはや時間の問題になつたということである。それゆえ、いわゆる「女怪」（大内麗子）対「盲獣」（めくら三

助」との対決は、いわば「痛み分け」という結果になったのである。

二七、鎌倉ハム大安売り

さて、ゴム人形事件の二、三日のちの真夜中、東京から百里も離れたI湾を、いつそうの汽船が走っていた。船尾の三等船室は、十五、六畳の赤茶けた畳敷きで、鉄の網に包まれた十個ほどの電灯が、魚市場のマグロのようにころがった船客たちを陰気に照らし出していた。その船室の最も薄暗い一隅に、まだ寝ずに話しつづけている四、五人の客があった。一人は、無精ひげの黒い田舎おやじ、一人は、潮風に赤黒く光った顔の海産物仲買人、一人は、錦紗縮緬に似合わぬ不行儀な奥さま、一人は、漁村の小学校の先生、といった人々の真ん中に、会話の中心となっていてのは、黒めがねをかけ、合いトンビを着て、紳士然とおさまった盲獣であった。いくらなんでも、もう東京にはいられない。三人の未亡人が警察へ密告したのは知れたことである。そこで、盲目殺人鬼の都落ちとはなったのであるが、張り巡らされた警察の網の目を、どこをどうしてのがれたのか、かれはこの船室にぬけぬけと陣取っているのである。むろん、船客のだれひとり怪しむものはない。

「……ところで、皆さん、わたしは商人じゃないが、親戚の食料品屋が店じまいをして、実はただみたいな値で手に入れたものがあるんですよ」と言い、それは、「……鎌倉ハムです。あぶらの多い塩かげん上等の、とてもうまい肉です。少しずつ目方は違うが、まあ、一つ千円は下りません、卸し値ですよ。ところで、わたしはこんなにたくさんはいらないので、一つあればじゅうぶんです。で、あとは皆さんにお分けしたいと思うが、ただでは失礼なので、どうです。トランクに入れてここまで来た運賃として三百円では、このでかいやつが一包み三百円ですぜ。中身はだいじょうぶ、会社の倉から出たばかりの新鮮なものです。なんなら、少し小口を切ってごらんすつてもいい」と言うのであった。

すると、最初、海産物仲買人がそれらすべてを買い取ると申し出るが、盲獣は、「……おっと、待ってください。そうあんたひとりに持っていかれては、わたしの気持ちが悪くありません。こうしてご同船を願ったよしみに、皆さんに一つずつお分けしたいのですよ。一つずつ」と言うのであった。そこで、起きていた乗客はもちろん、寝ていた人たちも目をさまして、薄暗い電灯の下で、奇妙な取り引きが始まり、大安売りの鎌倉ハムは、羽が生えたように売れていった。やがて、船はとある南国の漁村にいきなりおろすと、盲獣は、「……では、皆さん、お先へ失礼しますよ」と、例の不気味なニヤニヤ笑いをしながら、その船を降りていくのであった。

一方、客と荷物をおろした船は、再び、いかりを上げて進行を始めるが、四十あまりの漁師体の男が、「……ああ、おらお腹が減っちゃった。この肉は生でも食えるんだね。ひとつごちそうになるべえか」と、かれはハムの包みをベリベリと破り始めると、朱色の布がめくられて、中からべとべとした生肉が現われるのであった。が、なにか妙な顔をして、手を止めて、「……いや、こりゃあ不思議だ。この豚はつめがはえているぞ。見なせえ」と言い、「……一本、二本、三本、四本、五本あるぞ、……」となり、突然、それをポイと遠くの方へと放り出すと、「……なんだ、どうしたんだ」と。小学校の先生は、放り出されたハムの包みを拾ってみると、「……ワア、これあ人間の手だ。しかも、女だぜ。若い女の手だぜ。みんな、いま買ったハムの包みをやぶってみたまえ、早く、早く」となり、

すると、足が出て来る。ももが出て来る、あばら骨が出て来る、中には、顔面を切断して、鼻と口と半分ずつ付いている肉片を発見したおかみさんは、あまりの恐ろしさに、アツと呼んだまま気を失ってしまったほどであった。そして、「……オーイ、船を止めてくれ。重大事件だ。この船に殺人犯人が乗っていたんだ。いま出発した港へ引返すんだ。さつき降りためくらをとつかまなければならぬ。オーイ、船を止める」と、小学教師は甲板に駆けのぼりながら、走りまわって怒鳴るのであった。

二八、盲人天国

さて、船が港へ引返した時には、盲人はどこへ消え去ったのか影もなかった。港の人たちもそんなめくらが上陸したことさえ知らなかった。盲獣はいよいよ大胆不敵となり、すでに「お尋ね者」となった身で、不自由なめくらの旅を続ける一方で、今はまた、未亡人麗子の肉をこまごまに切り碎いては、恐ろしき「鎌倉ハム」を製造し、それを公衆に売りつけては、一体、どうするつもりなのか？　こんなだいそれた所行をして、われとわが犯罪をみせびらかしながら、いつまでも逃げおおせると思っているのだろうか？

だが、かれはむろん、いつまでもその港町をうろろしていたわけではない。夜通し山越しをして、翌朝は、非常に寂しい漁村に辿り着いていた。翌日は、よく晴れたうらかな日和で、海は紺色に美しく光っていて、見渡す限り人影もない海岸の、とある大岩の影に、四人の海女たちがたき火をしてからだを暖めていた。四人とも若くて、はち切れそうな愛くるしいからだをしている。それが男のような赤いふんどしをしめて、そのほかには一糸もまとわず、相撲取りが四股を踏む格好で、たき火にあたっているのであった。

その中の、いちばん年若の一人が、「……お留さ、さあひと仕事しべえよ」と言うのと、「……おまえ先にもぐるがいいよ。働きもんだのう。いろ男の亭主持つと、働きがいもあるべえ」と、年かさのひとりが言うのであった。やがて、若い海女は、海でパチャンと水煙を立てて、それから水中を底へ底へと沈んでいって、岩にすいついているアワビをはがしとっては、海上へと浮かび上がり、「大漁だ」と、片手を上げて、大きなアワビを二つみせびらかしては、やがて、彼女は海岸にはい上がってたき火のそばへ走ってきた。すると、「……アワビですかい、それとも真珠ですかい」と、岩陰からロイドめがねを光らせ、合uitンビを着た一人の盲人が出てきた。若い海女は、「……アワビだよ。真珠なんてめつたにとれるもんじゃねえだよ」と言うのと、「……そうですかい、だが、アワビにしても、たいしたもんだらうね。……」と言いながら、だんだんとたき火のそばへ近づいてきた。そして、盲人は、自分は目は見えないが、「……心眼で、おまえたちのうちで、だれがいちばん美人だか当ててみようか」と言うので、海女たちは、「……ハハハハハ、美人だつてよ。こんなところに美人なんていねえだよ。ハハハハハ」と笑うのであった。

すると、盲人は、「……美人はどこにだっているよ。さあ、おまえたちは四人だね、だれがいちばん美しいだろうな」と言いながら、隣りに立っている一人の肩に手を触れ、背中からおしりのほうへとなでまわすのであった。ふつうであれば、すぐに逃げ出すところであるが、海女たちははだの感触には鈍感になっていて、また、相手が盲人であるという気安さから、別におこりもしなかったのである。そして、盲人は、「……ふむ、これはどうも実に素晴らしいもんだね、都のきやしゃな女のはだは、おまえたちのからだに比べた

ら、まるでうすぎたなくてお話になりやしないよ。このはちきれそうな精気というものが、実に美しいのだよ。おまえたちが美人でなくて、ほかにどこに美人がいるものか」と言うので、四人の海女^{あま}たちは、すっかりその気になってしまい、その奇怪なる盲人は、次から次へと四人の海女^{あま}の裸身のあらゆる部分を手の感触で十分に堪能し天国を味わい尽くしたあと、今度は、懷中からザクザクと重いさいふを取り出して、それを両手にもって遊びながら、いよいよ商談にとりかかったのである。

それは、「……わしはね、おまえたちの取ったアワビをすっかり買ってあげるよ。値はいくら高くてもかまわない。おまえたちのいいなりしだいだ。だがね、それには一つ条件があり、おまえたちの亭主や村の人たちに、このことをしゃべらないという約束をしてもらいたい。つまり、わしは、おまえたち一人ひとりとこっそりと取り引きがしたいのだ」と言うのと、海女^{あま}たちは、顔を見合わせて笑っていたが、この村は貧乏であつたし、海女^{あま}たちには貞操観念も乏しかったので、ただお金に目がくれて、黙々のうちにそれを承諾してしまつたのである。そして、その夕方、盲人は村から遠く離れた無人の境の大きな岩陰に、人待ち顔にたたずんでいた。約束をたがえず真つ先にやつて来たのは、いちばん年上の二十歳そこそこの海女^{あま}であつた。ちゃんと着物を着て、手にはアワビを入れた網袋をさげて、「……まだ、だあれもこないけ」と言うのと、「……来ない。ちようどいいのだ。わしはね、おまえひとりに用事があるんだよ」と言いながら、結局は、かわいそうな第一の海女^{あま}は、今までの「三人同様」に殺人鬼「盲獣」の餌食^{えじき}となり果ててしまふのであつた。

二九 盲人の彫刻

さて、この物語の主人公である「盲獣」は、レビュー団の女王「水木蘭子^{らんこ}」を初めとして、カフェの中年マダム「真珠夫人」を、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子^{れいこ}」を、さらには、たくましい「漁村の海女^{あま}」をもて遊び、殺し、手と足をバラバラに切りきざんでは、その「死骸」を世にも「奇怪なる方法」で公衆の面前にさらしものにしてみせた、不気味にもいまわしき顛末^{てんまつ}を書き続けた。——むろん、かれの悪行は、以上に尽きたわけではなく、本来であれば、第二、第三の海女^{あま}を、かれがいかにむごたしくもて遊び、殺したか、そして、そのバラバラの死体はどのように捨てられたか、さらに、漁村をあとにした盲獣が、その後、どのような女を、どのようにもて遊び、かつ処分したかを書きしるすべきであるが、それらはもはや蛇足^{だそく}である。少なくとも、わが醜悪なる主人公「盲獣」の人となり、その病癖、その所行は、以上の記述によつて、わかり過ぎるほど分かつてしまつたに違いない。——そこで、たった一つ残されていることは、かれ「盲獣」の少々風変わりな「最期」についてである。それは、盲獣がかの漁村を訪れてから一年余りも経つた秋のことである。N美術展覧会の有力な審査員で、奇癖^{きへき}をもつて聞こえていた彫刻家「首藤春秋^{しゅとうしゅうゆ}」氏は、全くの未知の人物から、左記のような手紙を受け取るのであつた。それは、次のようなものであつた。

*

*

わたしは今秋の展覧会に、わたしの生涯をささげた作品を出品したいと切願するものでございます。それはいかなる国、いかなる時代にもかつて前例をみない、うるわしくも不可思議な美術品でございます。わたしは、わたし自身のためにも、美術界のためにも、ど

うしてもこれを先生のご好意をもって世に出していただきたいのです。

先生、私は盲人なのです。盲人が四十余年の生涯をささげて作り上げた触覚の芸術です。それには七人の女性の生き血がこもっており、七人の女性の命がささげられています。

かく申し上げても、先生の好奇心は動かないでしょうか。いや、必ず先生は私の願いをお聞き入れくださることを信じて疑いません。そのためには、私の不思議なアトリエを先生のほうからご訪問くださるほかには、いかなる方法もないのです。わたしはある事情によって、その秘密のアトリエを一步も外に出られない身の上からです。おきみがわるいでしょうか。先生はこの異様な申し出に二の足をお踏みなさるのでしょうか。いやいや、先生は必ず来てくださいます。必ず来てくださいます。

——アトリエへの道程——

麹町区Y町……付近で「お化け屋敷」とお尋ねになればすぐに分かります。必ず先生お一人で訪問し、玄関を上がって正面の廊下を真っ直ぐに突き当たると、壁に大きな鏡がはめてあり、その大きな鏡の右の柱の上の鴨居の裏へ手を伸ばして、小さなボタンを強く押せば、鏡が開いて、その奥に秘密の通路が現われ、そこを二、三間進みますと、箱のようなものにぶつかりますが、それが私の地下のアトリエへの昇降機（エレベーター）であり、その昇降機の操縦法をお心得でございましたら、数秒の後、先生はちゃんとアトリエの内部にご到着されるでしょう。

盲目の一彫刻者より

さて、首藤氏は、一日一晚その手紙のことばかり考えていた。何か犯罪めいた匂いさえ感じられたが、さすがは「美の神」に仕える首藤氏であった。それらの不気味さよりは、さもさも自信ありげに記されたその作品に対する好奇心のほうが大きかった。これは、ひよつとしたら、すばらしい掘り出しものかもしれないという予感が、この美術家を夢中にさせたのである。翌日、単身で指定の場所へ出向くと、そのあき邸宅はすぐにわかった。なるほど「お化け屋敷」に相違なく、玄関も、廊下も、クモの巣だらけで、歩くところには舞い上がり、行き当たりの大鏡もよごれくすんで、大きなひび割れさえあった。首藤氏は用意の懐中電灯を照らして、鴨居の裏の押しボタンを探して、それを押すと、大鏡は開き、その何かの巣箱のようなほら穴を見た時には、さすがの首藤氏もほど引き返そうかと思ったが、「……ええ、かまうものか、踏み込んでやれ」と蛮勇をふるって進んでは、エレベーターにぶつかり、地下のアトリエへと降りていくのであった。

さて、その地下の秘密のアトリエがどのようなものであるかは、すでに読者はよく熟知の通りであり、そこには、あらゆる大きさの、あらゆる姿態の、あらゆる色彩の、女体のあらゆる「部分部分」（パーツ）で満ちあふれた空間であったが、奥へと進むと、ふと円光の中に異様な物の姿が映った。それは一つの「裸女の塑像」らしいものであり、長方形の木製の台の上に、不思議な形で横たわっていた。どこの展覧会でもかつて見たことのない気違いめいた一つのかたまりであったが、首藤氏は、その気違いめいた一つのかたまりの中に含まれている「異様な美」にうちのめされたのだ。そして、美術家の鋭敏な両手の指でむさぼるように塑像の表面をなでさすり始めると、「……すてきだ。すてきだ、この感触はどうだ、この感触はどうだ、実にすばらしい」と、呟くのであった。

三十、悪魔の遺産

さて、首藤氏に手紙を出した盲人は、その地底のアトリエにはもちろん、邸内のどこを捜しても、姿を見せなかった。この驚くべき天才を捜し出そうとほねをおったが、展覧会の締め切りまで、かれはついに姿を現わさなかった。しかし、作者がこの作品を出展したがつていたことは確かであり、首藤氏は他の審査員たちの反対を押しきって、作者不詳としてこの彫塑を選入させることに成功した。そして、N展覧会が開かれると、作者不明の彫塑は世間を騒がせた。それは、「どうしてこんなバカバカしいものを選入させたのか」という非難の声であり、見物人たちは、しろうとも、くろうとも、その彫塑の前に立つて、あつけにとられた。その裸美人は、一体にして三つの顔、四本の手、三本の足を備えて、しかも、その顔、その手足は、あるものは大きく、あるものは小さく、あるものは肥えて、あるものはやせ、全くふぞろいで、ちぐはぐであり、調和とか均整とかいうものが美の要素だとすれば、この作品は美とは正反対のものであるとしか考えられなかった。

それは、乱れた髪の下に一つの首があった。その首の三方に三つの顔がついていた。つまり、この女人は、六つの目と三つの鼻、口を備えているのだ。その奇妙な首を、一本の腕がつきひざをしてささえていた。第二の腕は、後頭部を押さえ、ひじを空さまに立て、第三、第四の腕は、胸の前に何かを抱擁している形に左右から交わっていた。その胸――異様に広い胸には、四つの大小ふぞろいな乳ぶさがふくれ上がっていた。おしりのふくらはきは三つにわかれ、その間には二つの谷間ができていた。そして、足が三本、あるものはまがり、あるものは伸び、あるものは立てひざの不行儀な形でよじれ合っていた。この彫刻の醜さは、それらの多過ぎる手足のためというよりは、むしろ人体各部のつり合いがまるでめちやくちやで、一見して人間という感じが少しもない点にあった。人々はそれを見て、あつけにとられ、次の瞬間には、プツと吹き出さないではいられなかった。

それでは、首藤氏はなぜそんなこっけいな化け物を選入させたのであるか、一体、この彫刻のどこにそれほどの取りえがあったのか。その秘密は、まもなく分かるときが来た。それは、開会后二、三日すると、N展覧会には盲人の入場者が大勢つめかけてきた。この彫刻の作者が盲人であるからだけではなく、ただこの不思議な彫刻のまわりに集まって、いつまでもいつまでも、その女人像をなでさすって楽しんでいるのであった。ちょうど、首藤氏が最初それを発見した時に、まずその表面をなでさすったと同じように。

一方では、ある大新聞の文芸欄に、審査員「首藤春秋」氏の奇妙な論文が掲載されて、百万の読者を仰天させた。その論文は「触覚芸術論」と題するもので、作者不詳の怪彫刻を紹介推薦した連載の長文であったが、その意味は大体左記のようなものであった。

三一、触覚芸術論

この世には、目で見る芸術、耳で聞く芸術、理知で判断する芸術などのほかに、手で触れる芸術が存在してしかるべきである。われわれが日常手に触れるもの、例えば、書物のページだとか、ペン軸だとか、ステッキの握りだとか、ドアの取っ手だとか、毛皮のえり巻きだとかは、目で見た形状、色彩などのほかに、触覚的な美しさが重大な要素となり、制作者はそれを念頭において制作しているに違いない。これは非常に卑近な「触覚美」の

一例に過ぎないが、この種の美を一つの芸術として扱うことはできないであろうか？

われわれの従事している彫刻芸術は、面の凹凸おうとつを取り扱うものであるから、最も「触覚美」に縁が深いはずであるが、古来、触覚のみの美を目的として制作した作者はいない。かれらが狙うところは、ただ目で見た形であって、手で触れた形ではなかった。大理石を材料とする場合にも、かれらが触覚を第一に考えたわけでは決してなかった。実に奇妙なことだが、われわれは視覚ばかりを考え、触覚を少しも意に介しなかった。それはなぜか。それはほかでもない、われわれには目があるからだ。われわれは盲人ではないからだ。もし人間が犬のように嗅覚が敏感であつたら、この世にはもつともつと「においの芸術」が発達していただろう。それとまったく同じように、われわれに目がなかったならば、この世にはもつともつと「触覚の芸術」が発達していたに違いない。

しかし、われわれは盲人ほどではないが、相当敏感な触覚を付与されて生まれている。その「触覚」を、現在のごとく黙殺してよいのだろうか。われわれは閨房けいぼうの遊技のほかに、この鋭敏なる触覚の用い場所はないのであろうか。

触覚のみの芸術！ これこそ、われわれ彫刻家に残された一つの重大なる分野ではないのか。目で見た形と、手で触れた形とは、相似あいたるがごとくにして、実ははなはだしく相違しているものである。従つて、触覚的彫刻は、今あるがごとき彫刻とは全然違ったものでなければならぬ。——わたしは日頃から、半ば夢想的にそのような考えを抱いていたが、ある日、無名の盲人の生涯をかけたという作品に接して、わたしの夢想が決して単なる夢想でなかったことを確かめ、おどろ上がるばかりの歓喜を味わったのである。

それは、目で見た形は、まったく無意味な一つのかたまりに過ぎないが、ひとたび目を閉じて、その表面をなでさすってみるならば、今まで目にしていた形とは全然異なつた一つの新しい世界を発見して、がくぜんとして驚かざるを得ないものである。そこには純然たる「触覚美」が存在するのである。視覚あるがゆえに、妨げられて気づき得なかつた「別の世界」があるのである。それは、盲人でなければ創造し得ない作品であつた。また、盲人でなければ真に鑑賞しえない作品でもあつたのである。

いま展覧中のその盲人の作品の前には、毎日たくさんさんの盲人たちが群がりよつて、美しき触覚を楽しんでいる。これがわたしの触覚芸術論を裏書きする何よりの証拠ではないか。盲人たちはわれわれが見て傑作なりとしている彫像には、指先を触れようとしめないのだ。そして、われわれにこっけいに見えるかの作品に群がり寄つていくのだ。わたしはあの盲人の傑作に接して、生まれてはじめて目のあることを残念に思った。あの作品を十分に味わうほど、触覚が純粹ではないからである。しかし、世の目ある人々よ、諸君は諸君の不幸をそんなに悲しむことはない。盲人ほどではなくても、あの彫刻の美しさは、ある程度まで理解することができるのだ。それがどのような美しさであるか。とうてい文字で表現するすべはない。触覚の「秘密世界」をのぞきたい人は、N展覧会の彫刻室を訪れて、問題の彫刻の前に立ち、瞑目めいもくして静かにそのはだをなでさすってみるがよい。

*

*

この不思議な「論文」が発表されてから、展覧会の入場者にはわかに激増した。そして、今は盲人だけではなく、目のある人々も先を争つて、その彫刻のはだに触れようとした。その美しさのわかる人もあつた。わからない人もあつた。しかし、誰もかも一応はそれに指を触れないでは承知しなかつた。毎日、それらの群衆にもまれて、ひとりの醜い中年の

盲人が、その彫刻の前に立ちつくしていた。かれは別に彫刻に指を触れようとするではなく、ただあちこちと人並みを分けながら、群衆の話し声に聞き入っていた。そして、何かニタニタとひとり悦に入っていた。触覚美術のうわさは日一日と高まっていた。

そして、終に展覧会最終の日が来た。その日も好奇に燃える群衆は、早朝から彫刻室へ詰めかけてきた。そして、かれらはそこに、目ざす彫刻の上に不思議な一物を発見して、ギョツと立ちすくむのであった。

その裸女の彫刻の上に、ひとりの醜い盲人が、おつかぶさるようにとりすがって、死に絶えていた。かれの口からは毛糸のような血のりが一筋タラタラと流れて、彫像の白いはだを美しくいろどっていた。——この盲人こそ、世を騒がせた触覚美術の作者であるとともに、われわれの誰もがよく知るまさに「盲獣」その人であった。盲獣はあらゆる女性の肉体をあさり、その美を味わい尽くした。そして、ついに殺人淫楽にも飽き果てたのであるか、それとも、彼の罪業の数々はすべて手段に過ぎなくて、盲目の世界の芸術をこの世に残すことが、かれの最終の目的であったのか。作者はそのいずれであるかを知らぬけれども、ともかく、罪業の半ばをつぐなうに値するほどのすばらしい贈り物を残して、それに対する輝かしい賞賛の声を耳にして、何の思い残すところもなく、盲獣はかれの作品を愛撫しながら、楽しい「毒薬自殺」を遂げたのであった。

だが、次の一事は、恐らく、何人も気づかなかった。あの彫刻の一つの顔と、一本の腕と、一つの乳ぶさは水木蘭子を、一つの顔と、一本の足は真珠夫人を、二つの乳ぶさと、一つのおしりと、腹部とは大内麗子を、ある部分は漁村の海女を、またある部分は読者の知らぬ美しき被害者を、それぞれにモデルとして、その触感がそっくりそのまま再現されていたこと。それゆえに、あの彫像の手足が、あるいは太く、或いは細く、異様に不均整であったのだし、また、盲獣の手紙の中に、七人の女性の命がこもっているなどと、異様な文句が記されていたのだということを、何人も、当の首藤氏さえも、少しも気づかなかった。そして、恐らくは、あの彫像がいつまで保存されようとも。いかにしてはやされようとも、永久の秘密となつて残ることであろう……。 (本文完結)

*

*

さて、この「触覚芸術論」は、なかなか「優れた内容」であり、多くの人たちの賛同を得るかと思うが、例えば、われわれ人間の場合、四つ足から「直立二足歩行」へと進化することによって、一体、何がどう変わったのかと敢えて問えば、それは、まず、立つことによって、「目」(視覚)と「耳」(聴覚)との「発達」を促すことになった。が、一方では、「嗅覚」や「触覚」などは、むしろ「後退」してしまったのである。そして、われわれ人間の場合、七割から八割近くは、まさに「目」(視覚)に依存しているのである。それゆえ、どうしても「見た目のよいもの」を何より優先的に選ぶことになるのである。

——一方、「目」が不自由になれば、今度は、何より「耳」(聴覚)が発達して来ると同時に、まさに「嗅覚」や「触覚」なども敏感になって来るものである。特に手ざわりの「触」というものは、まさに「物」を直接認識する上では、最も大事な「感覚」になるものであり、それゆえ、手ざわりやはだざわりなどは、目の見える人たちに比べれば、遙かに「敏感になっている」ことは、全く疑いようのないものである。

つまり、われわれ人間の場合、一般的には、どうしても「見た目のよいもの」を何より優先的に選びやすいが、その次は、「音」(音彩)のよいものを選びやすく、その次あたり

に「匂い」や「感触」などがあり、そして、「味」は、何かを食べたり飲んだりする時だけに特化した「感覚」（味覚）になるかと思う。むろん、例えば、草花や料理或いは化粧品などの「匂い」が特に重視される場合もあれば、また、持ち物類や寝具類或いは衣服類などでは「感触」（手ざわりや肌ざわり）などが重視される場合もあるのである。

そして、「……」この世には、目で見る芸術、耳で聞く芸術、理知で判断する芸術などのほかに、手で触れる芸術が存在してしかるべきである」とあり、しかも、「……：触覚のみの芸術！ これこそ、われわれ彫刻家に残された一つの重大なる分野ではないのか。目で見たと、手で触れた形とは、相似たるがごとくにして、実ははなはだしく相違しているものである。従って、触覚的彫刻は、今あるがごとく彫刻とは全然違ったものでなければならぬ。――それは、目で見た形は、まったく無意味な一つのかたまりに過ぎなくとも、ひとたび目を閉じて、その表面をなでさすってみるならば、今まで目にしていた形とは全然異なった一つの新しい世界を発見して、がくぜんとして驚かざるを得ないものである。そこには純然たる『触覚美』が存在するのである」とある。この「触覚のみの芸術」、たとえ見た目は「グロテスク」であっても、その「感触は実に素晴らしい」という世界であり、例えば、「陶器」なども、一見、見た目は「グロテスク」に見えても、ひとたびその「陶器」を手で直接触れて見ると、その「感触は実に素晴らしい」という世界の一つになり得るのかも知れない。（もちろん、見た目も当然重視されてはいるだろうが……）。

また、「論文」とは違ふところで、「……：かれの醜い病癖が、世にも驚くべき遺産を残していった。そして、考え方によつては、かれのあの残酷きわまる一生涯も、実はこの素晴らしい贈り物を産み出すための手段に過ぎなかったのではないかとさえ思われるのだ。もしそうだとすれば、ことごとくは許されないまでも、かれの罪の半ばは消え去ってしまうほど、その贈り物は貴重なものであった」というのがあるが、これは極めて危険な「考え方」であり、それは、どこか「芸術のためなら何でも許される」風な間違つた「芸術至上主義」になつてしまう。――例えば、芥川龍之介の有名な『地獄変』という作品の中でも、もちろん、画家の意志ではなく、無理やりではあつたが、画家は、自分の「実の娘」を犠牲（火だるま）にして、その迫真の「地獄絵」を描き上げる結果になるが、むろん、そのようなことは、まさに「狂気の沙汰」であり、決して許されるものではないのである。なぜなら、もし自分がその「犠牲者」の立場に立つた時に、自分は喜んでその「犠牲者」になれるのか？ なるはずがない。――つまり、「芸術」は、「芸術」であつて、それ「以上」でも、それ「以下」でもなく、「芸術」を何か「絶対視」（何ものにも勝る絶対価値）のように盲目的に考えることは、極めて危険な「考え方」になるのである。

それゆえ、「盲獣」がどれほど優れた「作品」を産み出したとしても、数多くの女性たちを「殺害」した「罪」は、決して許されるものではなく、たとえ「芸術家」として優れていたとしても、人間としてはただの「クズ」（つまり「殺人鬼」）に過ぎなかったのである。――なぜなら、数多くの女性たちを殺す理由などどこにもなく、彼女たちを殺さなくとも、優れた作品を生み出すことはいくらでもでき得るからである。

例えば、政治、経済、教育、社会活動、学問、芸術、芸能、スポーツ、医療、その他、何であれ、何かに「特化した人」の中には、「……：自分は特別の人間、或いは、自分は選ばれた人間だ」と思い込んでしまい、それゆえ、「……：自分は何をやっても許される人間なのだ」という、実に愚かしい「考え方」に取り憑かれてしまう傾向は強く、例えば、「革

命」のためには「……人殺し、破壊活動、強奪、強姦、その他」、何でも許されるのだと思ひ込んでみたり、また、芸術や芸のためなら、その他、何のためであれ、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという実に愚かしい「考え方」に取り憑かれやすいものだが、それらはすべて間違つた「考え方」であり、その人の芸術や芸その他などがどれほど優れていようとも、人間としてはただの「クズ」になつてしまふのである。——つまり、芸術家として優れていることと、人間として優れていることとは、全く全然違うことであり、それぞれの分野での「特化」は、いわば「その道の器用」に過ぎず、例えば、政治や経済が得意、学問が得意、文学が得意、絵が得意、音楽が得意、芸能が得意、スポーツが得意、医療が得意、その他、その人がたとえ何かが得意であつたとしても、それだけを以て、人を踏みつけ犠牲にしてもよいのだという「論理」というのは、実に愚かしい「考え方」であり、なぜなら、例えば、何々のためと言ひながら、実はその人の「欲望や感情」などを満たしているだけの、自分が可愛いだけの、その人の勝手な「エゴ」に過ぎないからである。もちろん、その人の「才能」を高く評価するのはよいが、だからと言って、何をやっても許されるなどという「特権」などは何一つ許されてはいないのであり、何らかの「犯罪」を犯せば、当然のことながら、その「罪」は償わなければならないということである。

三二、結び

さて、この作品の主人公「盲獣」という人は、ある明治の大富豪の一人息子であり、その父親の死後、恐ろしいほどの財産を手に入れ、そこで、一つの「念願」を起こすことになるが、それは、まず、盲目の悲しさは、きれいな女性を直接見ることができない。また、美しい景色も直接見ることはできない。その他、すべて同じことである。おれは、その境遇を憎み、そして、神様を恨んだ。だが、どうなるものでもない。盲人の世界に残されているのは、音と、匂いと、味と、触覚ばかりだ。音（音楽）は、おれには吹き過ぎる風のように物足りない。また、匂いは、人間の鼻（嗅覚）は、犬のように鋭敏ではない。そして、食べ物、ただ腹がふくれるばかりだ。そう考えると、触覚こそ、おれたち盲人に残された唯一無二の享樂であることがわかつた。おれは、このたつた一つの享樂にとりすがつたのである。いろいろな物の中でも、生き物の手ざわりがおれには一番楽しかつた。最初は、犬や猫をはじめ、いろいろな動物たちの手ざわりを楽しんでいたが、どんな生き物も、人間の、それも女性に及ぶものはないことが、はっきりとわかつて来たのである。

おれには女房がいた。顔はきれいだつたが、肉体はやせっぽちだつた。女とはこんなものかと数年一緒に暮らしたが、あるとき、別の女のかからだを知つた。それが闇つきになつて、おれはたくさん女の手のざわりを楽しむようになった。女のかからだの美しさには、いつまでたつても、際限がなかつた。おれは世界じゅうの女のはだに、ひとりひとり触れてみないではがまんができないほどになった。そのうち、財産も少なくなり、最後に思ひついたのがこの部屋であり、五年と残りの財産のほとんどを費やし、あまり有名ではない彫刻家に、過去の女のかからだの中で、すぐれた部分を選び出して、彫刻家に詳しく話しては、その通りに作らせたのである。その苦心はどれほどであつたろう。そして、半年間は、ここに入りびたつて、昼も夜も、一つ一つの彫刻をなでまわして、有頂天になっていた。しかし、相手は死物だ。やがて、生きた人間（女性）が恋しくなつて来たのである。

その頃、まさに「水木蘭子の噂」を聞いたのである。そして、あの美術館会場で彼女の大理石の裸像に触れ、また、あんなに化けて、彼女の身体に直接触れて、評判は間違ではなく、今まで会ったどの女性よりも、彼女は美しかった。おれは一刻も早く彼女を手に入れたくなり、彼女が舞台で倒れたとき、舞台裏にこっそり忍び込み、そして、小村という男からの電話を盗み聞いて、あの自動車の計画を思いついたのである。そして、ままと、こうして「水木蘭子」を手に入れることができたという展開になるのである。

その後、この物語の主人公である「盲獣」は、そのレビュー団の女王「水木蘭子」を初めとして、カフェの中年マダム「真珠夫人」を、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」を、そして、たくましい「漁村の海女」をもて遊び、殺し、手と足をバラバラにきりきざんで、その死骸を世にも奇怪なる方法で、公衆の面前にさらしものにしてみせた、不気味にもいまわしき悪行を続けるのであった。むろん、かれの悪行は、以上に尽きたわけではなく、第二、第三の海女を、かれがいかにむごたしくもて遊び、殺したか、そして、そのバラバラの死体はどのように捨てられたか、さらに、漁村をあとにした盲獣が、その後、どのような女性を、どのようにもて遊び、かつ処分したかを書きしるすべきであるが、それらはもはや蛇足である。少なくとも、わが醜悪なる主人公「盲獣」の人となり、その病癖、その所行は、以上の記述によって、わかり過ぎるほど分かってしまったに違いないとあり、その事細かな「内容」等は、本文を読んでもらえればそれで十分である。

*

*

さて、最後に残された「最大の問題」としては、レビュー団の女王「水木蘭子」を初めとして、カフェの中年マダム「真珠夫人」、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」、そして、たくましい「漁村の海女」、その他の実に数多くの女性たちが、なぜ、どうして醜悪なる「盲獣」の手に堕ちてしまったのかという問題であり、それは、次のようなことになるかと思う。――まず、レビュー団の女王「水木蘭子」の場合であるが、彼女は、醜悪なる「盲獣」のその「計略」にまんまとはまって、彼の不気味な「地下室」へと連れ込まれてしまったのである。それゆえ、レビュー団の女王「水木蘭子」という女性は、当然のことながら、最初のうちは、できる限りの「激しい抵抗」をし続けたのである。

ところが、やがて、「……さすが強情がまんの水木蘭子も、身も心もしびれるようなこの大刺激には、ヘトヘトになって、ついに凶暴なる猛獣の威力に屈服してしまった。屈服したばかりではなく、彼女はおどましくも、このたぐいもあらぬ地底の別世界に、限りなき愛着を覚え始めて、いまわしい盲獣さえも、今は何かしら不思議な魅力をもって彼女の感覚をくすぐるようになり、蘭子はいかに怪盲人の妻たることを承諾し、日とたち月と過ぐるうちに、地底の愛人の情交はますますこまかになっていった」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、たとえ頭の「知性や理性」などでは嫌っていたとしても、その身体への強い「刺激や快感」などを無理やりでも一度受け入れて心を許してしまうと、相手が誰であるかよりも、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」が忘れ難くなり、それゆえ、その「身も心もしびれるような強烈な刺激」を渴望して、次第に自ら積極的にその世界を受け入れるようになってしまう傾向があるのである。それが、まさに「マゾサド世界」（つまり「被虐・加虐」世界）の非日常的な強烈な「刺激世界」や「感覚世界」が成り立つ理由の一つになるのである。そして、蘭子は、かれと離れてはもはや一日も生きていけないほどになってしまったのである。

そして、「……おまえさん、あたしを見捨てないでくださいね。ほんとうに、いつまでも、いつまでも見捨てないでね」と、蘭子ともあろうものが、そんなことを言うほどにかわっていた。そして、蘭子は視覚を失っていった。目の病いを患ったのではない。彼女はほとんどそれを使用しなかった。それほど盲人の「触覚の世界」が彼女には気に入ったのである。——例えば、「性的世界」に深く溶け込んでいる時には、多くの女性たちの「視覚」の働きというのは自然と弱まり、かわって、その身体へのより強い「刺激や快感」などを執拗なまでに追い求めてやまぬという全身「触覚の世界」へと変化して、いって、「もつと、もつとよ」という心理になっているのである。つまり、「……視覚を忘れてこそ、初めて、ほんとうの触覚の『味』がわかるのだ。神秘で、幽玄で、微妙きわまる手ざわりや肌ざわりその他の心地よさがしみじみと味わえるのだ」と。そして、「……ああ、わたしは今こそ、触覚ばかりで生きている目のない下等動物どもの、異様な、甘い、なつかしい感覚がわかるような気がする。かれらはけっして不幸ではないのだ」となるのである。

次に、カフェの中年マダム「真珠夫人」や、また、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」の場合であるが、真珠夫人も「大内麗子」も、その「醜い盲人」（めくら三助）に異様な好奇心を持ち始める。というのも、めくら三助の技術（裸体あんま術）には特殊の魅力が潜んでいて、ぬめぬめとすべる石けんのおぶくの上を、十本の指がまるで「大グモ」のように快い拍子を取って這いまわり、その指の下では客の「肉体」は、まるで「水まくら」のようにダブダブと波打つのであった。そして、客たちは、まるで催眠術にでもかかったように、目を細めて、かれらの裸体をめくらの三助のもて遊ぶがままに任せて、不思議な「陶酔境」にうつとりと酔い痴れていくのであった。それは、身体への強い「刺激や快感」などを執拗に受け続けながら、まるで全身「触覚だけの世界」へと変身して、その不思議な「陶酔境」にどこまでも深く溶け入っては、その「虜」になつてしまつたのである。

その後、カフェの中年マダム「真珠夫人」の場合は、今夜一時「三越」の裏で待つというあんま三助の「肉文字」によつて誘い出されて、やはり例の不気味な「地下室」へと連れ込まれては、そこでありとあらゆる「情痴の遊技」をし尽したあとは、かつての「水木蘭子」と全く同じように、最後はバラバラに殺害されてしまうのである。——一方、未亡人クラブの若き会員「大内麗子」の場合は、めくらの三助を「連続殺人犯」と見破りながら、警察には届け出ず、その前に、麗子そっくりの「ゴム人形」で盲人をからかつてやろうと、巢鴨の端っばに寂しい（持ち家の）一軒家があり、今はちようどあき家で、そこにはりっぱな湯殿があるので、そこへ盲人と一緒に車で行って、その湯殿の中で思う存分もんでもらおうと「策略」を企てるが、逆に、それは、まさに「盲獣」の思うつぽになつてしまい、結局は、前の二人と同様に、バラバラに殺害されてしまう。その後の、漁村の海女の場合も、結局は、同じ運命を辿るのである。それでは、なぜ、この「盲獣」は、次から次へと女性を殺害し、手足をバラバラにし、その手足をわざわざ公衆の面前にさらすようなことをするのだろうか？ それは、作者ではないので何とも分かりかねるが、敢えて言えば、この「盲獣」という人物は、まさに真性の「サディスト」（加虐愛好者）であつたということになるのかも知れない。……

*

*

江戸川乱歩の世界

③ 屋根裏の散歩者
その他

目次

江戸川乱歩の世界

D坂の殺人事件

- 一、 事件の発生
- 二、 事件現場
- 三、 明智の部屋
- 四、 私の推理
- 五、 明智の推理
- 六、 結び
- 七、 心理試験

屋根裏の散歩者

- 一、 素人探偵明智小五郎
- 二、 屋根裏の散歩
- 三、 天井裏からの隙見^{すき}
- 四、 覗きとは
- 五、 ツルの恩返し
- 六、 完全犯罪への誘惑
- 七、 薬の入手と毒薬の調合
- 八、 犯罪の遂行
- 九、 明智小五郎の登場
- 十、 明智の推理
- 十一、 推理の決め手
- 十二、 結び

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
D坂の殺人事件

D坂の殺人事件

例えば、江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』という「作品」は、世間一般には非常に有名な作品ではあるが、その「内容」は、「本」（書物）で読む限りは、映画、その他の「映像」などに比べると、意外と単調（シンプル）という感じを受けるかも知れない。が、ここでは、できるだけ「本文」に寄り添いながら、その「魅力」を少しばかり考察してみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」は、次のようなものである。つまり、「……それは九月の初旬のある蒸し暑い晩のことであつた。私は、D坂の大通りの中ほどにある、白梅軒（はくばいけん）という、行きつけの喫茶店で、冷（ひや）しコーヒを啜（すす）っていた。当時、私は、学校を出たばかりで、まだこれという職業もなく、下宿にゴロゴロして本でも読んでいるか、それに飽きると、あてもなく散歩に出て、あまり費用のかからぬ喫茶店廻（まわ）りをやるくらいが、毎日の日課だつた。この白梅軒（はくばいけん）というのは、下宿屋から近くもあり、どこへ散歩するにも必ずその前を通るような位置にあつたので、いちばんよく出入するわけであつたが、私という男は悪い癖で、喫茶店に入るとどうも長尻（ながじり）になる。それに、元来食欲の少ない方なので、一つは囊中（のうちゆう）（財布の中）の乏しいせいもあつてだが、洋食一皿（ひと）注文するでなく、安いコーヒを二杯も三杯もお代わりして、一時間も二時間もじつとしていたのであつた。そうかと言って、別段、ウェイトレスに思（おほ）し召（めい）し（恋い慕う気持）があつたり、からかつたりするわけでもない。まあ下宿より何となく派手で居心地がいいのだろう」とある。

一、事件の発生

さて、「……私はその晩も、例によつて、一杯の冷（ひや）しコーヒを十分もかかつて飲みながら、いつもの往来に面したテーブルに陣取つて、ぼんやり窓の外をながめていた。大通りを越して白梅軒（はくばいけん）のちょうど真向こうに、一見の古本屋がある。実は、私は先ほどから、その店先をながめていたのだ。みすばらしい場末（さえず）の古本屋であるが、私にはちよつと特別な興味があつた。というのは、私が近頃この白樺軒（はくわけん）で知り合つた、名前は明智小五郎（あさけ こごろう）というのだが、いかにも変り者で、それが頭がよさそうで、探偵小説好きなのだが、その男の幼馴染（おきななじみ）の女が、この古本屋の女房になつていると、彼から聞いたのである。しかも、なかなかの美人で、なんとなく官能的に男をひきつけるところがあるという。彼女は、夜はいつも店番（みせ）をしているのだが、今日は、なかなか出てこない。いいかげんあきらめかけた時に、ふと、店の奥の間との境に閉めてある障子の戸（こうし）（格子）が、ピツシヤリしまるのを見た」とある。それを不思議に思うのだが、それは、蒸し暑い晩で、しかも、万引きされやすい商売であり、たとえ店に出なくても、当然どこかのすき間から店の様子は、見張つていなければならないのに、すべてを閉めきつてしまうのは、何かおかしいと思うのである。

しかも、この喫茶店のウェイトレスたちの噂（うわさ）では、「……古本屋のおかみさんは、あんなにきれいな人だけれど、はだかになると、からだじゅう傷だらけで、たたかれたり抓（つか）られたりした痕（きず）に違（ちが）いがないわ。別に夫婦仲が悪くもないようなのに、おかしいわねえ」とある。すると、別の女性も、「……あの並びのソバ屋の旭屋のおかみさんだつて、よく傷をしているわ。あれもどうも叩（たた）かれた傷に違（ちが）いがないわ」と言うのであつた。これはもちろん、

読者に「或る事」を予感や期待などをさせながら、まさに「話」(ストーリー)は展開して行くという手法であり、一方、作品の「私」は、それを深く気に留めないで、ただ亭主が邪険(じやけん)なのだろうぐらいに考え込んでいて、あとになってそれがわかるという推移なのである。そして、格子を閉めたのは、ちょうど八時頃であり、それから三十分ぐらいじっと見ていると、たまたま通りに明智小五郎が通って、やがて店へと入って来るのであった。

そして、その明智小五郎との間で私は、例えば、「……絶対に発見されない犯罪というものは不可能でしょうか。僕はぜひぶん可能性があると思うのですがね」と言うと、それに対して、明智小五郎は、「……いや、僕はそうは思いませんよ。実際問題としてならともかく、理論的に言って、探偵のできない(謎の解けない)犯罪なんてありませんよ。ただ、現在の警察に(それだけの)偉い探偵がいらないだけです」と言うのであった。そして、そのような話をしながら、二人は、ずっと古本屋の店先の方を見ていて、二人とも気づくのであるが、それは、まさに「本泥棒」(つまり「万引き」)であり、「……君が来てからまだ三十分にもならないのに、三十分に四人も、おかしいですよ。僕は、君の来る前からあすこを見ていたが、一時間ほど前にね、あの障子があるでしょう。あれの格子のようになつたところが、しまるのを見たんですよ」と言うのであった。

そこで、二人は、何かあったかも知れないと思って、喫茶店を出て、古本屋の店の番をする「畳敷き」のところまで行つて、大声で叫んでも何の返事もない。そこで、障子を少し開けて、奥の間を覗いてみると、電灯は消えていて、どうやら人間らしいものが、部屋の隅(すみ)に倒れている様子であり、そこで、二人ともドカドカと奥の間へと上がり込み、明智小五郎が電灯のスイッチをひねる(これは、昔の裸電球のソケットのスイッチをひねる)と、二人は、同時に「アッ」と驚くが、それは、明るくなった部屋の片隅に、女の死体(古本屋の女房)が横たわっていたからである。しかも、それは、まさに「絞殺」(首をしめられ)て、すでに死んでいる状態であり、すぐに警察へ知らせなきやと、明智小五郎は、公衆電話をかけに外へと出て行くという展開になるのである。

二、事件現場

さて、その「部屋」は、ひと間きりの六畳で、奥の方は、右一間は幅の狭い縁側を隔て、二坪ばかりの庭と便所があり、板塀(いたべい)になつている。つまり、店の中からでは、「店番の畳敷き↓障子↓六畳の部屋↓狭い縁側↓二坪の中庭と便所↓板塀↓裏の路地」という配置になつている。そして、夏のこと、あけっぱなしで、すっかり見通せる。――左半間はひらき戸で、その奥に二畳敷きほどの板の間(台所)があり、裏口に接して狭い流しが見え、裏口の腰高障子は閉まつている。また、向かつて右側は、四枚の襖(ふすま)になつていて、中は二階への階段と物入れ場になつている、ごくありふれた安長屋の間取りとある。死骸は、左側の壁寄りで、店の間の方を頭にして倒れている。女は、荒い中形模様の浴衣を着て、ほとんど仰向き(あおむ)顔を上にして倒れている。しかし、着物が膝の上の方までまくれて、腿(もも)がむき出しになつているくらいで、別に抵抗した様子はない。首のところは、どうやら、締められた痕(あと)が紫になつているらしい。そして、店の前は、まさに「大通り」(D坂)で、人の往来は絶えないとなつている。そして、明智が「すぐ来るそうです」と言いながら、帰つて来る。

やがて、一人の制服の警官が背広の男を連れてやって来る。制服の方は、K警察署の司法主任であり、もう一人は、同じ署に属する警察医である。そして、その司法主任に、最初からの事情を大筋説明し、それに加えて、「……この障子の格子が締まったのは、恐らく、八時頃だったと思います。その時はたしか中にも電灯がついていました。ですから、少なくとも八時頃には、誰か生きた人間がこの部屋にもいたことは明らかです」と話すと、司法主任は、それを手帳に書き留めているあいだ、警察医は一応死体の検診を済ませていた。そして、その警察医は、「……絞殺ですね。手でやられたのです。それから、この出血しているのは、爪が当たった箇所です。右手でやったものです。恐らく、死後一時間以上はたっていないでしょう」と言う。そして、司法主任は、主人はどこへ行っているのかねと聞くと、二人は何も知らず、そこで隣の時計屋の主人を明智が連れてきて聞くと、「……この主人は、毎晩、上野の広小路あたりで古本の夜店を出していて、いつも十二時頃でなきや帰って来ません」と言う。そこで、一時間ばかり前に、何か物音を聞かなかったかと聞かれ、別段これという物音は聞かなかったと言う。また、人だかりができた中にいた、一方の隣の足袋屋のおかみさんも、何も物音は聞かなかったと言うのであった。

さて、「大通り」(D坂) から見て、古本屋の右隣りは、時計屋であり、その隣りは、菓子屋である。一方、左隣りは、足袋屋であり、その隣りは、ソバ屋という並びになっている。(つまり、路地の角から順に「菓子屋、時計屋、古本屋、足袋屋、ソバ屋」という並びである)。やがて、表に自動車が停まり、警察からの通報で駆けつけた検事局の連中と、同時に到着したK警察署長、及び当時名探偵という噂の高かった小林刑事などの一行がドヤドヤと入ってきた。そして、先着の司法主任から一通りのことを聞き、特に小林刑事は、現場の様子や死体を念入りに調べた。そして、死体のからだにはたくさんなまきずの生傷があることを知るのである。また、裏の路地は、日当たりが悪く、ぬかるみで、下駄の跡が無数についていたとともに、その路地の先の角に店を出している菓子屋(アイスクリーム屋)の主人に聞いても、この路地に入入したものは誰もいなかったと言う。つまり、犯人の足跡も、また、遺留品も何もなく、唯一の手がかりは、電球のスイッチの「指紋」だけであるが、それは、明智の指紋以外、誰の指紋も出てこなかった。もう一つは、事件のあった八時前後に店の中にいた二人の工業学校の学生は、なにやら奥で物音がしたので、その障子の方を見ると、一人は、「格子」越しに、その格子もすぐに締まったのだが、黒っぽい服を着た男が一人ちらつと見えたといい、もう一人の学生も、「格子」越しに、逆に、白っぽい服を着た男をちよつと見たと言うのであった。この「矛盾」に対しては、明智小五郎は、最終的には、人間の「記憶」などは、あてにならないものだという判断を下すのである。

また、古本屋の主人が駆けつけるが、彼は、「……これ(妻)に限って人様の怨みうらみを受けるようなものではございません」と言い、また、多くの「生傷」なまきずについては、主人は非常に躊躇ちゅうちよしながらも、自分がつけたと言うのであった。

三、明智の部屋

さて、事件から十日が過ぎて、これという進展もなく、私は、煙草屋の二階に間借りをしているという、明智小五郎の「部屋」を初めて訪ねてみるのであった。それは、まず、

店のおかみさんが、下から二階にいる明智に向かって名前を呼ぶと、「オー」と返事があり、下に降りてきて、驚いた顔で、「やあ、上がりなさい」と言うので、彼のあとから二階に上がり、そして、彼の部屋へ一歩足を踏み込んだ時、私は、その部屋のあまりの異様に、アツと驚いてしまったとある。――それは、四畳半の座敷がすべて書物で埋まっていたからである。まん中のところに少し畳が見えるだけで、あとは本の山である。四方の壁や襖ふすまに沿って、下の方はほとんど部屋いっぱいの本だらけであり、天井近くまで四方から書物の土手がせまっている。ほかの家具などは何もない。二人が座るところさえないほどである。仕方なく、私は、やわらかそうな本の上にすわり、二人は、例の「事件」について、その「推理」を話し始めることになるが、その前に、明智小五郎の「人物像」の描写があるので、それを参考までに少し書き留めておきたいと思う。

まず、彼は、これという職業を持たない一種の「遊民」であり、自分は、「人間の研究」をしていると言っているが、彼は、犯罪や探偵などになみなみならぬ興味と、おそるべき豊富な知識を持ち合わせていたのである。また、年は、私と同じくらいの二十五歳ぐらいであり、どちらかと言えば、痩やせた方で、歩く時に変に肩を振る癖がある。それは、決して豪快流のそれではなく、講釈師の「神田伯竜はくりゆう」（若い時の写真ウェブ参照）に似たような歩き方であり、しかも、その「顔つきから声音こゑ」まで、彼にそっくりだとある。いわゆる好男子ではないが、どこことなく愛嬌あいぎょうのある、最も天才的な顔を想像するがよいとある。ただ、明智の方は、髪の毛がもつと長く延びて、モジャモジャともつれ合っていて、人と話している間にも、指でそのモジャモジャの毛を引っ掻かき回すのが癖だとある。服装なども、一行に構かまわぬ方らしく、いつも木綿の着物によれよれの兵児帯へこおびを締めているという。これは、もう有名な探偵「金田一耕助きんだいいちこうすけ」に極似の「特徴」になるかと思う。というのも、過去のすべての「映画やドラマその他」のなかで、明智小五郎がモジャモジャ頭でよれよれの木綿の着物をいつも着ているという設定は、ほとんど皆無ではないかと思う。しかし、これが、江戸川乱歩という作家が描く「若い時の明智小五郎の人物像」になるのである。

四、私の推理

さて、まだ若い明智の「部屋」を訪ねて来た「私」という人物は、次のように話し始めるのであった。それは、実は、今日、ここへ来たのは、例の「事件」について、その後、いろいろ考えてみて、もちろん、考えるだけではなく、探偵のように実地の取調べなども行なってみて、一つの「結論」に達したので、それを君に報告しようと思つて来たのだと言う。しかも、「……僕が到達した結論というのは、どんなものだと思う。それを警察へ訴える前に、君のところへ話しに来たのは、何のためだと思う」と言うのであった。

まず、主人公（私）の最初の「推理」であるが、それは、店の中にいた二人の「学生の証言」のなかで、一人は、黒っぽい服を着ていたと言い、もう一人は、白っぽい服を着ていたという「矛盾した証言」に対して、それは、いくら人間の眼が不確かだと言つても、正反対の「黒と白」とを間違えるのは変だと考える。そこで、むしろ犯人は、白と黒とのんだんだらの着物を着ていて、学生の二人が「障子の格子こうし」のすき間越しに中をちらつと見た時に、一方の場合は、格子のすき間と着物の白地の部分とが一致して見える位置にいて、もう一人の場合は、格子のすき間と黒地の部分とが一致して見える位置にいたからと推理

する。そして、これは珍しい偶然かも知れないが、決して不可能ではなく、この場合、こう考えるほかに方法がないと言う。もちろん、明智小五郎は、ただ黙って聞いている。

次に、電灯のスイッチに「明智の指紋」しか残っていなかったのは、一体、どういうことかの「推理」であるが、それは、次のようなものである。まず、警察の考え方では、多分、明智の指紋が犯人の指紋を隠してしまったのだらうというものである。ところが、主人公（私）は、そうではないという考え方に立つのである。そこで、硯^{すずり}を借りて、一つの実験をして見せるのだが、それは、右手の親指に薄く墨をつけて、半紙の上に一つの指紋を押し、乾いてから、もう一度、方向を変えて重ねて親指を押すと、そこには互いに交錯した「二重の指紋」がハッキリとあらわれる。つまり、「前の指紋」（犯人の指紋）を「後の指紋」（明智の指紋）で完全に消すことなど出来ないのである。それゆえ、犯人が最後に電灯を消したとすれば、必ず、犯人の「指紋」は残っていなければならないという結論である。しかし、これは、犯人が手袋その他をはめている場合、また、付いた指紋を何かで拭き取ったという場合、その他などが全く考慮されていない不十分な「推理」であり、その結果として、次のような間違った「結論」を出すことになるのである。

それは、まず、その男は、太い棒^{ぼう}縞^{しま}の着物を着て、恐らく、死んだ女の幼馴染^{おきななじ}みで、失恋の恨みなどがあり、主人の留守を知っていて、その留守を襲ったのである。また、抵抗した跡^{あと}がないのは、まさに二人は「顔見知り」であり、しかも、死体の発見を遅らせるために電灯を消したのである。——一方、犯人の失敗は、一つは、例の「障子の格子^{こうし}」の開いているのを知らずに、慌てて閉めたが、二人の学生に偶然にも見られてしまったこと。もう一つは、電灯のスイッチに指紋を付けてしまったこと。それに気づいたが、現場に戻るわけにも行かず、そこで、自分が殺人事件の「発見者」になることで、電灯に自分の指紋がついているをごまかそうとしたということである。

この「推理」のなかで、唯一「優れている」と思えるのは、犯人が現場に何らかの「証拠物」その他などを残した時に、再び、現場に戻ることはできにくく、そこで、自分が犯罪の「発見者」となって、その「証拠物」その他などを「隠す」（或いは「消す」という「考え方」である。そして、この「推理」は、当然のことながら、犯人は、まさに「明智小五郎」である、と見ているのである。——さて、そもそも、なぜ、主人公（私）は、わざわざ明智の所にやって来たのか？ それは、自分が到達した「結論」をぜひとも聞いてもらいたいためであり、そして、もう一つは、警察に訴える前に、明智にいわば「自首」を勧めに来たということでもあるのである。それゆえ、主人公（私）は、話をしながら、明智の「顔の表情」を密かに注意して見ていたが、何の変化もなく、相変わらずの「ポーカーフェイス」を保っている。そこで、最後の「切り札」的なものとして、犯人は、まさに「……一体、どこから入り、そして、どこから逃げたのか」という最大の「難題」に対して、次のように「推理」するのである。

それは、古本屋の二つ隣りに「ソバ屋」があるが、その「……店の中は、土間つづきで、裏木戸まで行けるようになっていて。というのも、その裏木戸のすぐそばに便所があるからである。つまり、便所を借りるような感じで店に入り、そして、その便所へ行くような格好で、土間を通って裏木戸の方へと行き、そして、その裏口（裏木戸）から外へと出て行つては、再び、裏口（裏木戸）へと戻って来た」という推理である。——この「推理」は、基本的には、間違っていない。確かに、犯人は、ソバ屋の「裏口」（裏木戸）から

外へと出て行つては、裏の路地を通過して、古本屋の「裏口」(裏木戸)から古本屋の「部屋」へと入る。そして、再び、古本屋の「裏口」(裏木戸)から外へと出て、裏の路地を通過して、再び、ソバ屋の「裏口」(裏木戸)へと戻つて来た。確かに、その通りであるが、ただ、犯人は、いわゆる「明智小五郎」ではないのである。

五、明智の推理

さて、いよいよ「明智の推理」であるが、それは、次のようなものである。まず、主人公(私)の「推理」を黙って聞いていたが、やがて、ガラガラと笑い出すのであった。そして、いや、失敬と言ひ、君の「考え方」は、なかなか面白いが、しかし、あまりに外面的であり、そして、物質的であると言ひ。――つまり、明智の「推理」の仕方は、「……僕の方方は、君とは少し違つて、物質的な証拠なんてのは、解釈の仕方ですらにでもなるものである。いちばんいい探偵方法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことである。だが、これは探偵自身の能力の問題ですがね。……」と言ひのであった。つまり、犯人の「心の中」(つまり「心理」)を深く読むことである。そして、犯人の「心の中」(つまり「心理」)を深く読むためには、外からの様々な「外的事実」などをあれこれ分析的にとらえるだけではまだ不十分であり、それとともに、大事なことは、自ら「犯人」となつて、その「犯人」の「内的世界」(つまり「心の中」)を徹底的に生きてみるることによつてこそ、初めて、犯人の「心の中」(つまり「心理」)というものを、わが身に感じて、実感として、より深く読み解くことができるようになるのである。……

さて、主人公(私)という人は、殺された「女性」(つまり「古本屋の女房」)と明智小五郎とは、いわゆる「幼馴染み」(おさななじみ)と聞いていたので、すぐにでも「二人の恋愛関係」を想像してしまつたが、それに対して、明智は、二人に「恋愛関係」が実際にあつたかどうか、また、彼女を現に恨んでいたかどうか、まさに「内面的に心理的に調べましたか」と聞き、そして、彼女とは、小学校へも入らぬ時分に、別れたきりだと言ひのである。

次に、「指紋」の問題であるが、明智の「推理」は、古本屋の主人からいろいろと話を聞いていたので、「……ハハハ、笑い話ですよ。誰が消したわけでもなく、電球の線が切れていて、自然と電灯は消え、そして、僕があつて電灯を動かしたので、一度切れたタングステンがつながつたんですよ。古い電球は、どうもしないでも、ひとりでに切れることがありますからね」と言ひのであった。――つまり、明智の「指紋」をはじめ、主人や女房の「指紋」などが付いていても不思議なことではなく、それ以外の指紋が付いていれば、それが犯人の「指紋」ともなり得るものであるが、電球は、自然と消えたとすれば、犯人の「指紋」は、電球に残るはずもないのである。つまり、犯人の(仮に)「誰々」といふ人は、この部屋の「電灯」には、一度もさわつたことがなかつたということである。

また、犯人の着物の「色」についても、例えば、『心理学と犯罪』(その中の「錯覚」や「証人の記憶」という章)などを主人公(私)に読ませて、法廷で、実際、一人の証人は、問題の自動車は、徐行していたと言ひ、そして、もう一人の証人は、早く走つていたと証言している。その他、結局、「……人間の観察や人間の記憶なんて、実にたよりないものですよ。あの晩の学生たちも着物の色を思い違へしたかも知れないし、また、格子のすき間から棒縞の浴衣を思ひつた君の着眼は、なかなか面白いが、あまりにおあつら

え向きすぎて、そのような偶然を信じるよりも、僕の潔白を信じてくれないか」と言うのであった。——つまり、われわれ人間の「諸感覚」（つまり「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じる」こと）などは、その時々々の「状況次第」では実際とは違つて感じられることはいくらもあり得るとともに、その時々々の「記憶」にしても、それほど正確かつ厳密なものではなく、むしろ「曖昧かついい加減なもの」も多くて、それゆえ、確かに、「……参考にはなるが、しかし、絶対的なものではない」ということである。

最後に、犯人は、「……一体、どこから入り、そして、どこから逃げたのか」という最大の「難題」であるが、それは、基本的には、主人公（私）の「考え方」と一緒であり、それは、次のようなものである。——つまり、犯人は、ソバ屋の「裏口」（裏木戸）から外へと出て行つては、裏の路地を通過して、古本屋の「裏口」（裏木戸）から古本屋の「部屋」へと入る。そして、再び、古本屋の「裏口」（裏木戸）から外へと出て、裏の路地を通過して、再び、ソバ屋の「裏口」（裏木戸）へと戻つて来た。ただ違ふのは、主人公（私）は、ソバ屋の「主人」に、夜の八時頃、手洗いを借りた人がいたかどうかと尋ねた時に、いましたというような返答をそのまま信じたのに対して、明智の「推理」は、お手洗いを借りた人などいなく、実は、そのソバ屋の「主人」こそは、まさに「真犯人」であるという結論であり、それでは、その「根拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、明智が注意をひいたのは、「……古本屋の女房のからだには、全身に生傷なまきずがあり、また、ソバ屋の女房にも生傷なまきずがある」ということである。これは、一体、どういうことなのか？ というのも、明智は、彼女らの夫たちといういろいろ話をしてみると、彼らは、暴力を振るうような、そんな乱暴者ではなく、また、古本屋にしても、ソバ屋にしても、おとなしそうな物わかりのいい男に見えたからである。それでは、なぜ彼女たちのからだには生傷なまきずが絶えないのかと考えた時に、ふと「ある考え」が浮かんで来たということである。そこで、明智は、まず、古本屋の主人に「なぜ夫人には生傷なまきずがあるのか」と尋ねた時に、古本屋の主人は、非常に躊躇ちゅうちよしながらも、やがて「自分がつけた」と認めるのであるが、しかし、それは、いわゆる「暴力」を振るつてではなく、むしろ「変態遊戯」のなかでついたものなのである。しかも、ここで最も大事なことは、古本屋の「主人」という人は、それほどの本格的な「残虐色情者」ではなく、むしろ「女房」こそは、まさに本格的な「被虐色情者」になつていて、むしろ女房の方がそれを望むようになっていたのである。それゆえ、本格的な「被虐色情者」であつた古本屋の「女房」にとっては、夫との「変態遊戯」だけではどこか物足りない、何か満たされない「想い」を抱いていたということである。

一方、明智は、ソバ屋の「主人」ともいろいろ話をしてみるが、彼は、ああ見えてもなかなかしっかりとした男で、それゆえ、探り出すのにもかなり骨が折れたが、しかし、ある「方法」（それは「心理学上の連想診断法」によつて、うまく成功したとある。そして、実は、ソバ屋の「主人」こそは、まさに「マルキ・ド・サド」の流れを汲む、本格的な「残虐色情者」であつて、それゆえ、ソバ屋の「女房」には、そのからだに生傷なまきずが絶えないのである。しかも、ここで最も大事なことは、ソバ屋の「女房」という人は、それほどの本格的な「被虐色情者」ではなかつたのであり、それゆえ、本格的な「残虐色情者」であつたソバ屋の「主人」にとつては、自分の女房との「変態遊戯」だけではどこか物足りない、何か満たされない「想い」があつたということである。

つまり、ソバ屋の「主人」（それは本格的な「残虐色情者」）と古本屋の「女房」（それは本格的な「被虐色情者」）とは、知らず識らずのうちに、もつと自分を満足させてくれる相手を無意識に「探し求めていた」ということであり、そして、二人がばったりとめぐり逢うことによって、二人の関係は、急速に「親密な仲」になってしまったということである。そして、古本屋の「主人」が夜店に出かけるのを見計らって、夜な夜なソバ屋の「主人」が頻繁にやって来て、いわば「変態遊戯」に耽っていたが、事件のあった日は、その「変態遊戯」に余りに耽り過ぎて、誤って、古本屋の「女房」の首を絞め殺してしまったという事件なのである。それゆえ、ソバ屋の「主人」には、もともと「殺意」というようなものはなかったという結論になるのである。そして、二人が話しているところに、煙草屋のおかみさんが夕刊を持って来るが、その「夕刊」には、ソバ屋の「主人」が、いわば「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などに耐えられず、自ら警察に「自首」して出たという記事が載っているというところで、「本文」は、終わっているのである。

六、結び

さて、これが江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』という作品の内容であるが、その中で、ある「方法」（それは「心理学上の連想診断法」）によって、ソバ屋の「主人」の「心理」を見抜いたとあるので、その部分を『心理試験』という作品ともからめて、少し考えてみたいと思うが、それは、次のようなことである。

まず、『心理試験』という作品であるが、それは、ある「大学生」（ふきやせい 落屋清一郎）という学生は、まれに見る秀才であったが、いわば苦学生に近く、ある時、ふとしたことから同級生の齊藤勇（さいとういさむ）という学生と親しくなる。そして、その「同級生」（さいとういさむ 齊藤勇）という学生は、六十に近い「官吏の未亡人」の素人屋に部屋を借りていたが、彼の話から、家主の「未亡人」である老婆は、奥座敷の「松の植木鉢」の底に「現金」（大金）を隠しているという情報を得る。そこで、主人公（ふきやせい 落屋清一郎）という学生は、その「未亡人」（老婆）を殺害して、まさに「松の植木鉢」の底に隠された「現金」（大金）を手に入れようと、半年もかけて、綿密に「計画」を練りに練り上げて、いわば「完全犯罪」を狙って、夜ではなく、敢えて「昼間」に、実際に犯行を「遂行」してしまうのである。……

その時、主人公（ふきやせい 落屋清一郎）は、なぜか「現金」（大金）をすべて奪わず、現金の「半分」だけを奪い、残り半分は、元の状態に戻し、しかも、その奪った「現金」を縁日で買った新しい「札入れ」に入れて、道で拾ったと警察署に「届け出る」のであった。それは、一年後には、いわば「落し主無し」で自分の「手に入る」と見込んでいるからである。また、「未亡人」（老婆）を手（手袋）で絞め殺した時、「……老婆は、苦しまぎれに空をつかんだ指先が、そこに立ててあった屏風に触れて、少しばかり傷をこしらえてしまう。それは二枚折の時代のついた金屏風で、極彩色の『六歌仙』が描かれたものだ」が、その時は、それほど大した問題にはならないだろうと考えて、老婆の蘇生（生き返り）を恐れて、今度はナイフで胸を刺し、未亡人の家を出た後は、長い時間、公園のベンチに腰かけて、ブランコに乗って遊んでいる子供たちをのどかな顔でながめ、それから、帰りがけに「警察署」（落し物届け）に寄り、そして、自分の下宿の部屋へと帰って来るのであった

さて、翌日、目覚めて、新聞を読んでもみると、同級生の齊藤勇が、何と「身分不相応

の大金を所持している」ということで、老婆殺しの「容疑者」として警察に収監されているとある。その「経緯」は、主人公（ふきやせいいちろう 蔭屋清一郎）による「老婆殺害」後、間もなくして下宿人の齊藤勇が部屋へと帰って来るが、やがて「老婆の死体」を発見する。その時に、ふと「松の植木鉢」の底の「現金」（大金）のことを思い出し、確かめて見ると、お金の包みがあり、それを盗んで「胴巻きの間」に入れたまま、警察に「家主」（老婆）が殺されたと届け出た時、身体検査も同時に受けて、そのまま収監されてしまったらしい。

その後、生前老婆の家に出入りした形跡のある者は、残らず召喚して、綿密に取り調べたが、一人として疑わしい者はなかった。それゆえ、さしずめ最も疑わしい齊藤勇を「犯人」と判断するしかなかった。ところが、一ヶ月後、事件の当日五千二百何十円在中の一個の「札入れ」が、警察署に届けられていて、しかも、その「拾い主」が、何と容疑者の齊藤勇とは親友の「蔭屋清一郎」ということで、さっそく召喚の手紙を送っては、蔭屋を訊問してみたが、大して得るところがなかったのである。そして、この一ヶ月半のあらゆる捜査の結果、彼ら二人を除いては、一人の容疑者も存在しなかった。そこで、万策尽きた笠森判事という人は、いよいよ奥の手を出す時だと思つて、従来しばしば成功した「心理試験」というものを施そうと決心するのであった。

七、心理試験

さて、その「心理試験」であるが、それは、大きく「二つ」に分類できるものであり、その一つは、純然たる「生理上の反応」によるものであり、それは、犯罪に関連した様々な質問を発して、被験者の身体上の微細な反応を、適当な装置によつて記録するものであり、例えば、いわゆる「うそ発見器」などは、まさに「代表的な装置」であり、具体的には、手の微妙な動き、眼球の動き方の記録、呼吸の変化の記録、脈搏の動きの測定、また、手の平の微細な発汗などによる方法、その他、いろいろあるということである。

そして、もう一つは、言葉を通じて行なわれるものであり、例えば、精神分析家が病人を見る時に用いる「連想診断」というものがあり、それは、ある「言葉」を聞いて、それから連想されるものを「答える」というものである。例えば、「財布」と聞いて、「お金」と答える。また、「殺人」と聞いて、「血」や「ナイフ」と答える。つまり、事件とは全く関係ない「言葉」と、事件と何らかに関連する「言葉」とをうまく組み合わせ、次から次へと「質問」をして、その時の「答え」と「答え方」（微妙な反応の仕方）などを厳密に観察をして、容疑者の「心理」をできるだけ深く探ろうとするものである。

例えば、有名な『刑事コロンボ』なども、犯人に様々な「言葉」を投げかけて、その微妙な「反応の仕方」などを厳密に見極めているのである。そして『刑事コロンボ』の場合、犯人は、すべて「知能犯」（完全犯罪を狙う人）であり、しかも、最初から犯人が「人を殺す場面」（つまり「殺人現場」）その他などをすべて見せてしまい、最後に、たった一つだけ残して置いた「決定的な証拠」で、犯人を最後「落とす」という手法なのである。この『心理試験』という作品も、たった一つの「証拠」で決着を付けるのである。

さて、主人公（ふきやせいいちろう 蔭屋清一郎）という人は、いわゆる「心理試験」に備えて、徹底的に練習を積み重ねて、どのような「言葉」に対しても、ためらいも躊躇もなく、ごく自然に反応でき得るように訓練をして、実際の「心理試験」でも、その通りの結果を出すのである。

一方、もう一人の「容疑者」(斉藤勇)の場合には、神経過敏なところもあり、ためらいや躊躇などもあり、主人公(落屋清一郎)に比べると、すべて「遅い反応」になっている。この「結果」を見る限りは、斉藤勇の方が「疑わしい」ことになるが、笠森判事は、自宅の書斎で、もう一つ「確信が得られない」と思っているところに、ある事件から心易くなっていた何と「明智小五郎」が訪ねて来るのであった。そして、この話は、「D坂の殺人事件」から数年後のことで、彼はもう昔の書生ではなくなっていたとある。

そして、もう一度、主人公(落屋清一郎)を「判事の私宅」へと呼び寄せるのだが、それは、「……君を疑ったことをお詫びかたがた、その事情をお話するために、わざわざ来て頂いたわけです」ということで、話もスムーズに進み、いつの間にか時間もたつて、主人公(落屋清一郎)が帰り支度をはじめ、「……では、もう失礼しますが、別にご用はないでしょうか」と聞くと、「おお、すっかり忘れてしまふところだった」と、同席していた明智小五郎は、快活に話し始めるが、もちろん、これは、主人公(落屋清一郎)をすっかり安心させておいて、主人公を「ワナにはめる」ためのお膳立てなのである。そして、「……あの殺人のあった部屋に二枚折りの金屏風が立ててあったのですが、それにちよつと傷がついていたといつて問題になっているのですよ。ご存じないでしょうか……」というような感じで話しかけるのであった。それに対して、主人公(落屋清一郎)という人は、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前であり、その屏風のことなら覚えていますよ。僕が見た時には確か傷なんかなかったですよ」と言うのであった。これは、一体、何のワナを仕掛けたのかと言えば、それは、次のようなことである。つまり、主人公(落屋清一郎)という人は、「……事件の二日前に、屏風を見たと言っている」。実際、二日前に老婆の部屋に入つて世間話をしているのである。それは、一体、何のためかと言えば、それは、斉藤から例の隠し場所を聞いてから、もう半年を過ぎた今、それが当時のままかを確かめるためであり、その方法は、お金を隠しているような噂があるような話をする、彼女の目は、その都度、床の間の植木鉢にそつと注がれ、それを見て、間違いないと確信するのであるが、その日に、屏風を見たと言っているのである。

ところが、その「屏風」というのは、実は、「……事件の前日に持ち込まれたものであり、事件の二日前には、その部屋には屏風などなかった」のである。——つまり、「事件」当日には、確かに「屏風」があり、その「屏風」の小野小町の顔のところに少し傷を付けてしまったために、そのことがあまりに強く「頭」(印象)に深く残ってしまったがために、事件の二日前にも、当然のことながら、その部屋に「屏風」はあったはずだと「錯覚」(勘違い)をしてしまい、つい「その屏風のことが覚えていて」などと軽々しく口走つてしまい、しかも、主人公(落屋清一郎)という人は、その「屏風」には、極彩色の『六歌仙』の絵が描かれている、とまで言つてしまったのである。

それでは、なぜ、これが「致命的な失言」となるのかと言えば、それは、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前である」と言っている。つまり、事件の二日前と言えば、部屋にはまだ「屏風」などなかった状態である。そのなかったはずの「屏風」があつたと言ひ、しかも、その屏風には『六歌仙』の絵が描かれていたなどと、見てもいないのに、どうして言えるのか？ それは、まさに「事件」当日に、その「屏風」を見たからであり、もちろん、見ただけではなく、その「屏風」の小野小町の顔のところに少しばかり傷を付けてしまったというあまりに強い「意識」があつたがために、ま

た、犯人は「斉藤^{さいとう}勇^{いさむ}」で決定ということで、すっかり気をゆるめてしまい、いわばうかれ気分で、このような「致命的な失言」を生み出す要因になってしまったのである。

*

*

江戸川乱歩の世界
屋根裏の散歩者

目次

江戸川乱歩の世界

屋根裏の散歩者

- 一、素人探偵明智小五郎
- 二、屋根裏の散歩
- 三、天井裏うらからの隙見すき
- 四、覗きとは
- 五、ツルの恩返し
- 六、完全犯罪への誘惑
- 七、薬の入手と毒薬の調合
- 八、犯罪の遂行
- 九、明智小五郎の登場
- 十、明智の推理
- 十一、推理の決め手
- 十二、結び

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
屋根裏の散歩者

屋根裏の散歩者

例えば、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』という作品は、誰もがよく知っている「作品名」であるとともに、映画やテレビドラマなどでも何度か観た経験のある人も非常に多いかと思うが、しかし、実際にその作品を本（書物）で読んでいる人たちは、意外に少ないのではないかと思う。そこで、今回も、本（書物）に書かれた「本文」を丁寧に読み辿りながら、江戸川乱歩の『屋根裏の散歩者』の、その「魅力」を探ってみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」部分は、次のようなものである。「……多分それは一種の精神病でもあったのでしょう。郷田三郎は、どんな遊びも、どんな職業も、何をやってみても、いつこうこの世が面白くないのでした。学校を出てから、——その学校とても一年に何日と勘定できるほどこしか出席しなかったのですが——彼にできそうな職業は、片っ端からやってみたのです。けれど、これこそ一生を捧げるに足ると思えるようなものには、まだひとつも出くわさないのです。おそらく彼を満足させる職業などは、この世に存在しないのかもしれない。長くて一年、短いのは一と月ぐらい、彼は職業から職業へと転々とした。そして、とうとう見切りをつけたのか、今では、もう次の職業を探すでもなく、文字通り何もしないで、面白くもないその日その日を送っているのです。」

また、遊びの方もその通りでした。かるた、球突き、テニス、水泳、山登り、碁、将棋、さては各種の賭博に至るまで、とてもここには書き切れない程の、遊戯という遊戯は一つ残らず、娯楽百科全書という様な本まで買込んで、探し廻っては試みたのですが、職業同様、これはというものもなく、彼はいつも失望させられていました。だが、この世には「女」や「酒」という、どんな人間にだって一生涯飽きることのない、すばらしい快楽があるではないか。諸君はきつとそう仰有るでしょうね。ところが、我が郷田三郎は、不思議とその二つのものに対しても興味を感じないのでした。酒は体質に適しないのか、一滴も飲めませんし、女の方は、無論その欲望がないわけではなく、相当遊びなどもやっているのですが、そうかと言って、これあるが為に生き甲斐を感じるといっては、どうしても思えないのです。——「……こんな面白くない世の中に生き長えているよりは、いっそ死んでしまった方がましだ」と、ともすれば、彼はそんなことを考えました。しかし、そんな彼にも、生命を惜しむ本能だけは備わっていたと見えて、二十五歳の今日が日まで「死ぬ」と言いながら、つい死切れずに生き長えているのです」とある。

さて、この「設定」は、江戸川乱歩には実に数多く出て来るものであり、例えば、『赤い部屋』という作品の中でも、「……私という人間は、不思議なほどこの世の中がつまらないのです。生きていることが、もう退屈で退屈でしようがないのです。そこで、終に見つけ出した遊戯とは、人殺しだったのです。私はその遊戯を発見してから今までに、百人に近い男や女や子供の命を、ただ退屈をまぎらす目的のためばかりに奪ってきたのです」と言う。もちろん、それは、直接的な「人殺し」ではなく、いわば間接的な「人殺し」であり、——例えば、交通事故の現場で、近くに病院はないかと尋ねられた時に、適切な「病院」ではなく、敢えて、故意に遠い加減な「病院」を教えて、その結果、負傷者が手遅れで亡くなってしまおうというようなことである。そのような話を次から次へと話して、最後は、今までの話は、すべて「うそ」だったという展開で終わるわけだが、しかし、そ

のように何もやることもなく「退屈」で、しかも何か面白いことはないかと飢えに飢えた「心の隙間」には、ふと「悪魔の囁き」が聞こえて来て、何らかの「犯罪的な行為」などに手を染めてしまうようなことは、意外に数多くあるのではないかと思う。

一、素人探偵明智

さて、彼（郷田三郎）は、二十五歳で、親許から月々の仕送りを受け取り、職業を離れても別に生活には困らなかつたのですが、一つにはそういう安心が、彼をこんな気まま者にしてしまったのかも知れません。そこで彼は、その仕送りの金によつて、せめていくらかでも面白く暮すことに腐心をして、例えば、職業や遊戯と同じように、頻繁に宿所を換えて歩くことなどもその一つでした。彼は、少し大げさに言えば、東京中の下宿屋を、一軒残らず知っていました。一月か半月もいると、すぐに別の下宿屋へと住み換えるのです。無論、その間には、放浪者のように旅をして歩いたり、或いはまた、仙人のように山奥へ引つ込んで見たこともありましたが、でも、都会に住みなれた彼には、とても淋しい田舎に長くいることも出来ず、一寸旅に出たかと思うと、いつの間にか、都会のともし火に、雑沓に、引き寄せられるように、彼は東京へ帰って来るのでした。そして、その度毎に下宿を換えたことは言うまでもありません。

そして、彼（郷田三郎）が今度移り住むところは、東栄館という、新築したばかりの、まだ壁に湿り気のあるような、新しい下宿屋でした。——それでは、なぜ「新築の下宿屋」になるのだろうか？ それは、つまり、「古い屋根裏」というのは、ほこりや蜘蛛の巣あるいは淀んだ空気の臭いなど、その他、そのようなものが「身体」（衣服や手や足の裏）などにも付きまとうとともに、天井板なども、ぎしぎしめりめりと音を出して、とても「天井裏を散歩」して、気楽に楽しめるような環境ではないのである。そこで、真新しい「新築の屋根裏」であれば、そういう心配もなくなるとともに、そこで、新しい「楽しみ」を発見したという事にもなるのである。

ただ、その前に、なぜ、彼（郷田三郎）は、いわゆる「犯罪」に興味を持つようになったのか？ それは、あるカフェで偶然知り合つた、素人探偵明智小五郎という人物と親しくなり、彼（明智）の、聡明らしい容貌や、話しっぷりや、身のこなしなどに、すっかり心惹かれてしまい、しばしば彼（明智）を訪ねたり、また、時には彼（明智）の方が三郎の下宿へ遊びに来るような仲になつたのである。そして、彼（明智）から様々な「犯罪」についての「話」を聞くうちに、いわゆる「犯罪」というものに興味を持ちはじめ、自分からも「様々な犯罪」などに関する書物などを買ひ込んだのは、毎日毎日それを読み耽り、「……ああ、世の中には、まだこんな面白いことがあつたのか！」という感じで、本来、世の中のすべての事柄に興味を感じなくなつていた人物であつたが、事もあるうに、「犯罪」にだけは、いい知れぬ魅力を感じるようになったということである。

しかも、彼（郷田三郎）は、今度は「犯罪」のまね事を始め、犯罪嗜好者らしく、例えば、浅草の遊園地をはじめ、映画街の狭い路地などを好んで歩いたり、また、その辺の壁に矢の印を書いて廻ったり、金持ちらしい通行人を見かけると、スリにでもなつた気で、そのあとを尾行してみたり、また、妙な暗号文を書いた紙きれを公園のベンチの板の間に挟んだり、さらに、例えば、労働者、乞食、学生、その他、特に「女装」が気に入り、町

をさまよい歩いては、男たちを翻弄するようなことを喜んでいたが、しかし、ものの三ヶ月もたつと、そのようなことには、やがて厭きてしまい、また、明智との交際も、だんだんと遠のいて行くのであった。……

二、屋根裏の散歩

さて、彼（郷田三郎）が、出来上がったばかりの「東栄館」へと待ちかねて移ったのは、明智との交際を結んでから、すでに一年以上もたつていた。それゆえ、彼（郷田三郎）は、例の「犯罪」のまね事などにも、ほとんど興味を失い、毎日毎日退屈な日々を送っていたのである。それでも、東栄館に移った当初は、新しい友達などができたりして、いくらか気は紛れていたが、しかし、人間という生き物は、なんでも同じような思想（考え）を同じような顔（表情）をして、同じような言葉で繰り返し繰り返し繰り返しているのだらうか。一週間もたたないうちに、彼はまたしても、底知れぬ倦怠の中に沈み込んでしまふのであった。そして、それから十日ほどたった、ある日のことである。

ある日、彼（郷田三郎）は、ふとある妙なことを思いついた。それは、彼の部屋は、二階にあったが、一間ほどの「押入れ」があり、その「押入れ」は、ふつう上下二つに分かれていて、下には、例えば、数個の行李、その他などを納め、一方、上段には、布団などをのせるのがふつうかと思うが、その「布団」を畳んで入れるのではなく、むしろ拵（ひろ）げて敷き、そのまま寝られるような状態にしたのである。そうすれば、いちいち「布団」を取り出して、座敷の中央に敷く手間と、また、片付ける手間とが省かれ、寝たくなれば、そのまま上段に上がって寝ればよいという「考え方」である。むろん、この「考え方」が成立するためには、やはり「壁がひどく汚れていたり、蜘蛛の巣が張っていたりした」のでは、そこで寝る気にもならないものであり、それゆえ、どうしても真新しい「新築の下宿屋」という設定が、ここでも必要不可欠になって来るのである。

さて、そこで寝て見ると、予想以上に感じがよく、低い天井を眺める気持も、どこか異様な味わいがあり、また、隙間から洩れてくる糸のような電気の光を見てみると、自分が何か探偵小説の人物になったような気がしたり、また、それを細めにあけて、自分の部屋を、まるで泥棒が他人の部屋をでも覗くような気分にもなつて、興味深かったとある。しかし、それも三日もすると、飽きてしまい、あちこち見たりさわったりしているうちに、ちょうど頭の上の一枚の天井板が、釘を打ち忘れたのか、なんだか動くような感じで、手で突っぱって持ち上げてみると、動くが、なんとなく上からおさえつけているような手ごたえがあつたという。さては、大きな青大将でもいるのかと想像するが、それは、結局、石が置いてあり、天井板を動かしている内に、その石は落ちて来るが、それはよけて、ふと天井裏はどうなっているのかと覗いてみると、先ず眼につくのは、縦に長々と横たえられた、太い、曲がりくねった、大蛇のような棟木であり、明るいと言っても屋根裏のことで、そう遠くまでは見通しが利かないのと、それに、細長い下宿屋の建物ですから、實際長い棟木でもあつたのですが、それが向うの方は霞んで見える程、遠く遠く連なっているように思われるのです。そして、その棟木と直角にこれは大蛇の肋骨（ろうごう）（あばら）に当たるたくさんの梁（はり）が、両側へ、屋根の傾斜に沿ってニヨキニヨキと突き出ています。それだけでもずいぶん雄大な景色ですが、その上、天井を支えるために、梁から無数の細い棒が下

っていて、それがまるで鐘乳洞の内部を見るような感じを起こさせる、それらの屋根裏を見廻しては、「……これはすてきだ」と、彼（郷田三郎）は思わずそう呟くのでした。病的な彼は、世間普通一般の興味には惹き付けられないで、むしろ人には下らなく見えるような、こうした事物に、却って、言い知れぬ魅力を感じるのであった。

そして、その日から、彼（郷田三郎）の「天井裏の散歩」が始まるのである。それは、夜となく昼となく、暇さえあれば、彼は泥棒猫のように足音を忍ばせて、棟木や梁の下を伝い歩くのであった。もちろん、新築で汚れる心配もなく、シャツ一枚になって、思うがままに跳梁し、時候もちょうど春で、さして暑くも寒くもなかったとある。これらは、やはり「天井裏を自由に散歩」できるための、どうしても「必要な条件」となるのだろう。しかも、その東栄館の建物は、中央の「庭」（つまり中庭）を囲むように、枡形に部屋が並んでいる作りであり、彼の部屋の天井裏から、グルッとひと廻りして、また、元の彼の部屋まで帰って来るようになっていた。そのような設定をして、次へと展開するのである。

そして、一度天井裏に上がってみると、何とも開放的で、誰の部屋の上を歩き廻ろうとも、まさに「自由自在」であり、しかも、もしその人にその気があれば、盗みを働くことさへできるのである。さらにまた、ここでは他人の秘密を隙見することなどは、もう「勝手次第」であり、新築とは言え、下宿屋の安普請ですから、天井には到る所に隙間があり、希には、節穴さえあるのです。そして、二十人に近い東栄館の二階じゅうの下宿人の秘密を、次から次へと隙見して歩く、そのことだけでも、もう十分愉快なのです。そして、久方ぶりで、彼は、生き甲斐というものを感ぜさえるのでした、とある。

三、天井裏からの隙見

さて 彼（郷田三郎）の身支度は、やがて、さも本ものの犯罪人らしく装い、それは、ピツタリと身についた茶色の手織のシャツ、同じズボン下、また、足袋をはき、手袋をはめ、そして、手には懐中電灯を持つというスタイルであり、夜ともなく昼ともなく、こうして、彼は、有頂天になって、「天井裏の散歩」をつづけたのであった。

そして、天井からの隙見というものが、どれほど異様に興味のあるものかは、実際にやってみた人でなければ、恐らく、想像もできませんまい。たとえ、その下に別段の事件が起こっていないなくても、誰も見ているものがないと信じて、その本姓をさらけ出した人間というものを観察するだけでも、充分面白いのです。——ある人々は、そのそばに他人のいる時と、ひとり切りの時とでは、立居ふるまいはもちろん、その顔の「相好」（表情）まで、まるで変わるものだと言見して驚くとともに、ふだん横から見ているのとはまた違って、真上から見下ろすというのは、ずいぶん異様な景色に感じられるものである。

例えば、ふだん過激な反資本主義の議論を吐いている会社員が、誰も見ていない所では、貰ったばかりの昇給の辞令を、折靴から出したり、しまったりして、幾度も飽きずに眺めては喜んでいる光景とか、また、豪奢ぶりを示している或る相場師が、いざ床につく時には、昼間はさも無造作に着こなしていた着物を、まるで女のように丁寧に畳んだり、また、小さな汚れなどを見つけると、丹念に口で舐めて、クリーニングをしている光景とか、また、何々大学の野球の選手だとかいう青年が、運動家にも似合わない臆病さをもって、女中へのつけ文を、夕食後のお膳の上に、のせたり、引っ込めたり、モジモジと同じこと

を繰り返している光景とか、さらには、大胆にも、淫売婦風の女性などを引き入れては、すさまじいまでの狂態を演じている光景さへも、見ただけ見ることができなのです。

また、下宿人と下宿人との、感情の葛藤なども、非常に興味深いものであり、例えば、同じ人間が、相手によって、さまざまに態度をかえて行く有様、今の先まで、笑顔で話し合っていた相手を、隣りの部屋へきては、まるで不倶戴天ふぐたいてんの仇かたきでもあるように罵ののしつている者もあれば、蝙蝠こうもりのように、どこへ行っても、都合のいいお座かなりを言いって、陰かげでペロリと舌を出している者もあるのです。さらに、二階には一人の女画学生ががくせいがいるが、それは、もう「三角関係」どころではありません。五角六角と、余りにも複雑になり過ぎた関係、それらが手に取るように見えるばかりか、競争者たちの誰も知らない本人の「真意」というものが、局外者の「屋根裏の散歩者」だけには、ハッキリとわかるのであった。

四、覗きとは

さて、それでは、その「覗き」という問題を考えてみたいと思うが、まず、「覗き」というのは、一体、何かと敢えて問えば、それは、まさにわれわれ人間の「好奇心」そのものに他ならないのである。しかも、それは、堂々と見るというよりは、むしろ「こっそりと見る」ということであり、それでは、なぜ「こっそりと見る」のだろうか？ それは、自分の存在を気づかれないようにして、まさにできるだけ「対象」をそのまま（あるがまま）に見てみたいという「好奇心」に他ならないのである。

例えば、人間、動物、植物、自然、人工物、宇宙、その他、何であれ、まさにできるだけ対象をそのまま（あるがまま）に見てみたいという「好奇心」であり、その対象が「人間」であるような場合は、例えば、われわれ人間というのは、他人の前ではどうしても他人を意識した「姿」（言動）などになりやすい傾向があるかと思うが、それゆえ、そのような他人を全く意識しない、その人の、まさに素のまま（あるがまま）の「姿」（言動）などを見てみたいという、そういう「一つの欲求」でもあるということである。

また、女性の部屋をはじめ、女性の風呂場、トイレ、更衣室、その他、そのようなところへの「覗き」も、極めて多いかと思うが、それらに加えて、他人の部屋、ダンスや引出しの中、日記、手紙、写真、その他をはじめ、パソコン、ケータイ、スマートフォン、その他の中を覗いてみたり、また、何らかの「秘密の情報や極秘文書、その他」などを覗いてみたりと、その他、実に多種多様なものがあるかと思うが、それらを一言で言えば、ほんとうのことが知りたい、その「実体」（ほんとうのこと、ほんとうの姿、ほんとうの生なま態、ほんとうの事情、ほんとうの状況、ほんとうの心、その他）、ほんとうの何かが知りたいという、そういう「好奇心」でもあるということである。

*

*

そして、「覗き」という行為は、当然のことながら、「する」側と「される」側とに大別されるかと思うが、「する」側は、面白い、楽しい、興味深い、その他ということになるかと思うが、しかし、一方、「される」側は、いやだ、恥ずかしい、許せない、プライバシーの侵害だ、その他、そういうことになるのだろう。——これは、常に、一方には、「する」側と、もう一方には、「される」側とが同時に存在することになる。そして、一方の「する」側というのは、例えば、面白い、楽しいということになるのかも知れないが、

一方、「される側」は、例えば、いやだ、許せない、プライバシーの侵害だ、その他ということになるのだろう。このことは、徹底的に考えてみなければならぬことであり、「する側」は、よくても、「される側」は、それではたまったものではないのである。これは、すべての「犯罪行為」（或いは「不正行為」）などについて言えることである。

例えば、人を「殺す」方はよくても、「殺される」方はたまったものではない。また、「詐欺」する方はよくても、「詐欺」される方はたまったものではない。また、人を「恐喝」（罵倒）する方はよくても、「恐喝」（罵倒）される方はたまったものではない。また、「放火」する方はよくても、家に「放火」される方はたまったものではない。また、「横領」する方はよくても、「横領」される方はたまったものではない。また、「強姦」する方はよくても、「強姦」される方はたまったものではない。その他、それらは、すべて同じことである。——だからこそ、それらを「犯罪」（或いは「不正行為」）として罰するとう、そういう「法律（刑法）、その他」になっているのである。

五、ツルの恩返し

ところで、「覗き」という言葉を聞いて、誰もが「頭の中」（或いは「心の中」）にふと思い浮かべる「イメージ」の一つとしては、日本では余りにも有名な『鶴の恩返し』という昔話があるかと思うが、その「内容」は、次のようなものである。

*

*

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました。ある寒い冬の日、おじいさんは町へたぎぎを売りに出かけました。すると途中の田んぼの中で、一羽のツルがワナにかかっているのを見かけました。おじいさんは可哀想に思っ、ツルを助けてやりました。するとツルは、「カウ、カウ、カウ」と、鳴いて、飛んで行きました。

その夜、雪の降る中、戸を叩く音がしました。戸を開けると、娘が一人立っていて、道に迷い、行くあてもなく、一晩泊めてください、と頼むのであった。老夫婦は、喜んで娘を泊めてやりました。翌日から、娘は、せつせと食事の手伝いや掃除などをしました。何日も外の大雪は降り止まず、娘は、やがて、この家においてくださいと頼むのであった。

そして、ある日、娘は、機を織りたいので、糸を買って来てくださいと、おじいさんに頼みました。おじいさんは、町で糸を買ってくると、娘は、「機をおっている間は、決して中をのぞかないでください」と頼みました。三日後、娘は、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。娘は、この「布」（織物）を町に持って行って売り、帰りにはまた、糸を買って来て下さいと言うのであった。

娘は、再び、部屋で機を織りはじめ、三日後に、美しい「布」（織物）を持って、外に出て来ました。その「布」（織物）は、町では評判となり、高い値段で売れました。そして、また、娘は、部屋に閉じこもって機を織り始めると、おじいさんとおばあさんは、一体、どのように機を織っているのかという「好奇心」と、次第に痩せてきた娘を「心配」して、終に、覗いてはいけなと言われていた、その「部屋のなか」をそっと覗いてしまったのでした。すると、そこには、一人の娘ではなく、「……一羽のツルが長いくちばしで自分の羽毛を引き抜いては、糸にはさんで機をおっていた」のでした。娘は、「……わ

たしは、いつか助けられたツルでございます。正体を見られては、ここに留まることはできません。もうお別れです」と、おじいさんとおばあさんが止めるのも聞かず、娘は、一羽のツルとなつて空高くへと舞い上がつて行くのでした。……

*

*

さて、これが有名な『鶴の恩返し』であるが、これは、一体、何なのか？ それは、基本的には、まさに「因果応報」ということであり、「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」ということである。——つまり、ツルを助けてやったからこそ、ツルは、その恩返しに來たのであり、一方、覗いてはいけないという約束を破つたから、ツルは、出て行ってしまったのである。また、浦島太郎は、いじめられていたカメを助けたからこそ、カメは、その恩返しに竜宮城へと連れて行くのであり、一方、開けてはいけないという玉手箱を開けてしまったからこそ、まさに「おじいさん」(厳しい現実、社会へと戻る) ことになるのである。

むろん、その他の「笠地蔵、花咲かじいさん、舌切りすずめ、その他」なども、基本的には、同じような「因果応報」に基づいた内容になっているかと思う。

一方、桃太郎というのは、ある日、おばあさんが川でせんたくをしていると、川上から大きな桃が一つどんぶらこどんぶらこと流れてきて、それを拾つて家に持ち帰り、おじいさんと一緒に桃を割ろうとすると、突然、中から元気な赤ちゃんが飛び出して来る。子供のなかった老夫婦は、その子を「桃太郎」と名付けて大事に育てるのでした。やがて、大きくなると、桃太郎は、鬼退治を思い立ちますが、それは、鬼は人の物を盗んだりして迷惑をかけていた存在であり、その「鬼退治」に行く日、おばあさんは、日本一のきみだんごを作つて持たせます。そして、その「鬼退治」に行く途中で、まず、イヌが現われて、お腰の「きみだんご」を一つくださいなと言ひ、そこで、桃太郎は、イヌにきみだんごを一つあげると、そのイヌは、一緒にいつて来る。次に、サルが現われ、最後は、キジが現われて、同じようにきみだんごをもらつて、一緒にいつて来る。これは、一体、何なのかと問えば、それは、まさに「鬼退治ときみだんご」とを媒介としての、いわば「人間関係」の最も基本的な形なのである。

例えば、「会社」と「社員」との関係は、一方の「社員」の方は、会社の仕事を誠実に遂行し、それに対して、一方の「会社側」の方は、その「報酬」(見返り)として「給料」(お金)を支払うという関係である。——さて、船で「鬼ヶ島」へと到着して、大きなくろがねの門の前に立つと、まず、キジが鬼の様子を空から見まわり、また、サルは高い門をよじ登つて行き、門のかんぬきを抜き、そして、イヌと桃太郎は、門を押し開けて、中に入ると、多くの鬼たちが襲つて来ます。しかし、日本一のきみ団子を食べて百人力になつていたイヌ、サル、キジ、桃太郎たちは、多くの鬼たちをこらしめ、ついに降参させます。そして、盗まれた宝物などを持つて、村へと帰つてくるといふ話であります。これはもちろん、まさに「勸善懲惡」であるが、それでは、なぜわれわれ人間は、このような「勸善懲惡」を好むのだろうか？ それは、われわれ人間の「知性や理性」というものが、まさにそういうものを好む特徴(性質)を持つてゐるからである。

そして、その「……善いことをすれば、善い結果がわが身に降りかかり、悪いことをすれば、悪い結果がわが身に降りかかる」といふ「考え方」は、一体、どこから生じて来るのかと敢えて問えば、それはもちろん、われわれ人間の「理知的部分」(それは「知性+

理性十母体のようなもの」から成るもの）ではあるが、その最も「根、源」そのものは、まさに「母体のようなもの」（その内に宿る「善のDNA」）からということになるのだらう。……

六、完全犯罪への誘惑 其の一

さて、或る夜ふけのこと、三郎は、いつものように「散歩」を一巡して、自分の部屋へと帰るために、梁から梁を伝わっていたが、彼の部屋とは、庭を隔てて、ちょうど向かい側の棟の、一方の隅の天井に、ふと、かすかな隙間（明かり）を発見する。それは、かなり大きな「木の節」で、半分以上板から離れて、ちよつとこじ開ければ、なんなく離れそうなので、三郎は外の隙間から下を見て、部屋の人が寝ていることを確かめた上で、音のしないように注意しながら、長い間かかつて、とうとうそれをはがしてしまいました。都合のいいことには、はがした後の節穴が、杯形に下側が狭くなっていますので、その木の節を元通りつめてさえ置けば、下へ落ちるようなことはなく、そこにこんな大きな覗き穴があるのを、誰にも気附かれずに済むのです。

そして、その節穴から下を覗いてみると、偶然にも、東栄館のなかでも、いちばん虫の好かぬ、遠藤という齒科学校卒業生で、今はどこかの歯医者助手をしている男の部屋であり、その江藤が、のつぺりとした顔で、すぐ目の下に寝ているのでした。ばかに几帳面と見えて、部屋の中は、すべてキッチンと整頓されている。例えば、机の上の文房具の位置、本箱の中の書物の並べ方、蒲団の敷き方、枕許に置き並べた、舶来物でもあるのか、見なれぬ形の目醒時計、漆器の巻煙草入れ、色硝子の灰皿、いずれを見ても、それらの品物の主人公が、世にも綺麗好きな、重箱の隅を楊子でほじくる様な神経家であることを証拠立てている。また遠藤自身の寝姿も、実に行儀がいいのです。ただ、それらの光景にそぐわぬのは、彼が大きな口をあけて、雷のようないびきをかいていることでした。

三郎は、何か汚いものでも見るように、眉をしかめて、遠藤の寝顔を眺めました。彼の顔は、綺麗と言えば綺麗です。成程彼自身で吹聴する通り、女などには好かれる顔かも知れません。しかし、何という間延びな、長々とした顔の造作でしょう。濃い頭髮、顔全体が長い割には、変に狭い富士額、短い眉、細い目、始終笑っている様な目尻の皺、長い鼻、そして異様に大ぶりの口。三郎はこの口がどうにも気に入らないのでした。そして、肥厚性鼻炎でもあるのか、始終鼻を詰らせ、その大きな口をポカンと開けて呼吸をしているのです。寝ていて、鼾をかくのも、やつぱり鼻の病気のせいなのでしょう。

三郎は、いつでもこの遠藤の顔を見さえすれば、何だかこう背中がムズムズして来て、彼ののつぺりした頬つぺたを、いきなり殴りつけてやりたい様な気持ちになるのです。

そうして、遠藤の寝顔を見ているうちに、三郎はふと妙なことを考えました。それは、その節穴から唾を吐けば、丁度遠藤の大きく開いた口の中へ、うまく入りはしないかということでした。なぜなら、彼の口は、まるで詠えでもしたように、節穴の真下の所にあったからです。三郎は物好きにも、股引の下にはいていた猿股の紐を抜き出して、それを節穴の上に垂直に垂らし、片目を紐にくっつけて、丁度銃の照準でも定めるように、試して見ますと、不思議な偶然です。紐と節穴と遠藤の口とが、全く一点に見えるのです。つまり節穴から唾を吐けば、必ず彼の口へ落ちるに相違ないことが分かったのです。

しかし、まさかほんとうに唾を吐くわけにも行きませんので、三郎は、節穴を元の通りに埋めて置いて、立ち去ろうとしましたが、その時、不意にチラリと、ある恐ろしい考えが彼の頭に閃きました。彼は思わず、屋根裏の暗闇の中で、まつ青になつて、ブルブルと震えました。それは実に、何の恨みもない遠藤を殺害するという考えだったのです。

彼は遠藤に対して何の恨みもないばかりか、まだ知り合いになつてから、半月も経つてはいないのです。それも偶然二人の引越しが同じ日だったので、それを縁に、二、三度部屋を訪ね合つた程度で別に深い交渉があるわけではないのです。では、なぜその遠藤を殺そうなどと考えたかと言いますと、今も言うように、彼の容貌や言動が殴りつけたい程虫が好かぬということも、多少は手伝つていましたが、三郎のこの「考え」の主たる動機は、相手の人物にあるのではなく、ただ「殺人行為」そのものの興味にあつたのです。先からお話して来た通り、彼（郷田三郎）という人の精神状態は、非常に変態的で、犯罪嗜好癖ともいふべき病氣を持つていて、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じるのは「殺人」なのです。ですから、こうした「考え」の起こるのも決して偶然ではないのです。ただ今までは、たとえ屢々殺意が生ずることがあつても、罪の発覚を恐れて、一度も実行しようなどと思つたことがなかっただけなのです。

ところが、今遠藤の場合は、全然疑いを受けないで、発覚の憂いもなく、殺人が行なわれそうに思われのです。わが身に危険さえなければ、たとえ相手が見ず知らずの人間であらうと、三郎はそんなことを顧慮する（考慮に入れる）ことはないのです。むしろ、その殺人行為が残酷であればあるほど、彼の異常な慾望は、一層満足させられるのでした。それでは、なぜ遠藤に限つて、殺人が発覚しない——少くとも三郎がそう信じていたか——と言いますと、それには、次のような事情があつたのです。

六、完全犯罪への誘惑 其の二

それは、東栄館へ引越して四、五日たった時分でした。三郎は懇意になつたばかりの、ある同宿者と、近所のカフェへ出掛けたことがあり、その時、同じカフェに遠藤も来ていて、三人がひとつテーブルに寄つて酒を（もつとも酒の嫌いな三郎はコーヒーでしたけれど）飲んだりして、三人とも大分いい心持になつて、連れ立って下宿へ帰つたのですが、少しの酒に酔っぱらつた遠藤は、「……まあ僕の部屋へ来て下さい」と無理に二人を彼の部屋へ引っぱり込みました。遠藤は独りではしゃいで、夜が更けているのも構わず、女中を呼んでお茶を入れさせたりして、カフェから持ち越しのろけ話を繰り返すのでした。——三郎が彼を嫌い出したのは、その晩からです。その時、遠藤は、真赤に充血した唇をペロペロと舐めまわしながら、さも得意らしくこんなことを言うのでした。

「……その女とですね、僕は一度情死をしかけたことがあるのですよ。まだ学校にいた頃ですが、ほら、僕のは医学校でしょう。薬を手に入れるのはわけないんです。で、二人が楽に死ぬだけのモルヒネを用意して、聞いて下さい、塩原へ出かけたもんです」

そう言いながら、彼はフラフラと立ち上がつて、押入れの前に行き、ガタガタ襖を開けると、中に積んであつた一つの行李の底から、ごく小さい、小指の先ほどの、茶色の瓶を探して来て、聴き手の方へ差し出すのでした。瓶の中には、底の方にホンのぼつちり、何かキラキラと光つた粉が入っているのです。

「……これですよ。これっぽっちで、充分二人の人間が死ねるのですからね。……しかし、あなた方、こんなことしやべっちゃいやですよ。ほかの人に」

そして、彼ののろけ話は、さらに長々と、止めどもなく続いたことですが、三郎は今、その時の毒薬のことを、計らずも思い出したのです。「……天井の節穴から、毒薬を垂らして、人殺しをする！　まあ何という奇想天外な、すばらしい犯罪だろう」と。

彼は、この妙案に、すっかり有頂天になってしまいました。よく考えて見れば、その方法は、如何にもドラマティックなだけ、可能性には乏しいものだということが分るのですが、そしてまた、何もこんな手数のかかることをしないで、ほかにいくらかも簡便な殺人法があったはずですが、異常な思いつきに幻惑させられた彼は、何を考える余裕もないのでした。そして、彼の頭には、ただもうこの計画についての都合のいい理窟ばかりが、次から次へと浮かんで来るのです。

先ず薬を盗み出す必要がありました。が、それは訳のないことでした。遠藤の部屋を訪ねて話し込んでいれば、そのうちには、便所へ立つとか何とか、彼が席を外すこともあるでしょう。その暇に、見覚えのある行李から、茶色の小瓶を取り出しさえすればいいのです。遠藤は、始終その行李の底を検べているわけではないのですから、二日や三日で気の付くこともありますまい。たとえまた気づかれたところで、そんな毒薬を持っていることがすでに違法なのですから、表沙汰になるはずもなく、それに、上手にやりさえすれば、誰が盗んだのかも分かりはしません。

そんなことをしないで、天井から忍び込む方が楽ではないのか？　いやいや、それは危険です。先にも言うように、いつ部屋の主が帰って来るか知れませんし、硝子障子の外から見られる心配もあります。第一、遠藤の部屋の天井には、三郎の室のように、石ころで重しをした、あの抜け道がないのです。どうしてどうして、釘づけになっている天井板をはがして忍び入るなんて危険なことが出来るのですか。

さて、こうして手に入れた粉薬を、水に溶かして、鼻の病氣のために始終ひらきっぱなしの、遠藤の大きな口へ垂らし込めば、それでいいのです。ただ心配なのは、うまく呑み込んでくれるかどうかという点ですが、なに、それも大丈夫です。なぜと言って、薬がごく少量で、溶き方を濃くして置けば、ほんの数滴で足りるのですから、熟睡している時なら、氣も付かないくらいでしょう。また、氣がついたにしても、恐らく吐き出す暇なんかありません。それから、モルヒネが苦い薬だということも、三郎はよく知っていました。が、たとえ苦くとも分量がわずかでし、なおその上に砂糖でも混ぜて置けば、万々失敗する氣遣いはありません、誰にしても、まさか天井から毒薬が降って来ようなどとは想像もしないでしょうから、遠藤が、咄嗟の場合、そこへ氣のつくはずはないのです。

しかし、薬がうまく利くかどうか、遠藤の体質に対して、多過ぎるか或いは少な過ぎるかして、ただ苦悶するだけで死に切らないというようなことはあるまいか。これが問題です。なるほど、そんなことになれば非常に残念ではありますが、でも、三郎の身に危険を及ぼす心配はないのです。というのは、節穴は元通り蓋をしてしまいますし、天井裏にも、そこにはまだ埃など溜っていない。ですから、何の痕跡も残りません。指紋は手袋で防いであります。たとえ天井から毒薬を垂らしたことが分っても、誰の仕業だか知れるはずはありません。ことに彼と遠藤とは、昨今の交際で、恨みを含むような間柄でないことは、周知の事実なのです。から、彼に嫌疑のかかる道理がないのです。いや、そうまで考えなく

でも熟睡中の遠藤に、薬の落ちて来た方角などが、分かるものではありません。

これが、三郎の屋根裏で、また部屋へ帰ってから、考え出した虫のいい理窟でした。読者はすでに、たとえ以上の諸点がうまく行くとしても、そのほかに一つの重大な錯誤（誤り）のあることに気づかれたことと思います。が、彼はいよいよ実行に着手するまで、不思議にも、少しもそこへ気がつかないのです。

七、薬の入手と毒薬の調合

さて、三郎が、都合のよい折を見計らって、遠藤の部屋を訪問したのは、それから四、五日たった時分でした。むろん、その間には、彼はこの計画について、繰り返し繰り返し考えた上、大丈夫危険がないと見極めをつけることが出来たのです。のみならず、色々と新しい工夫をつけ加えもしました。例えば、毒薬の瓶の始末についての考案もそれです。

若しうまく遠藤を殺害することが出来たならば、彼は二重の利益が得られます。一方では、置くことに決めました。そうすることによって、彼は二重の利益が得られます。一方では、若し発見されれば、重大な手掛りになる所のその瓶を、隠匿する世話がなくなることで、他方では、死人の側に毒物の容器が落ちていれば、誰しも遠藤が自殺したのだと考えるに相違ないこと、そして、その瓶が遠藤自身の品であるということは、いつか三郎と一緒に彼にのろけ話を聞かされた男が、うまく証明してくれるに違いないのです。なお都合のよいのは、遠藤は毎晩、キチンと締りをして寝ることでした。入口はもちろん、窓にも、中から金具で止めをしてあって、外部からは絶対に入れないことでした。

さて、その日、三郎は非常な忍耐力を以て、顔を見てさえ虫唾の走る遠藤と、長い間雑談を交えました。話の間に、屢々それとなく、殺意をほめかして、相手を怖がらせてやりたいという、危険極まる慾望が起こつて来るのを、彼はやつとのことで喰い止めました。「……近いうちに、ちつとも証拠の残らないような方法で、お前を殺してやるのだぞ、お前がそうして、女のようにベチャクチャしゃべれるのも、もう長いことではないのだ。今のうち、せいぜいしゃべり溜めて置くがいいよ」と、三郎は、相手の止めどもなく動く、大ぶりの唇を眺めながら、心の内でそんなことを繰り返していました。この男が、間もなく、青ぶくれの死骸になつてしまうのかと思うと、彼はもう愉快でたまらないのです。

そうして話し込んでいるうちに、案の定、遠藤が便所に立つて行きました。それはもう、夜の十時頃でもあつたでしょうか、三郎は抜目なくあたりに気を配って、ガラス窓のそとなども十分調べた上、音のしないように、しかし手早く押入れを開けて、行李の中から例の薬瓶を探し出しました。いつか入れ場所をよく見ておいたので、探すのに骨は折れません。でも、さすがに胸がドキドキして、脇の下からは冷汗が流れました。実を言うと、彼の今度の計画のうち、一番危険なのはこの毒薬を盗み出す仕事でした。どうしたことで遠藤が不意に帰って来るかも知れませんが、また、誰かが隙見をしていないとも限らぬのです。が、それについては、彼はこんな風に考えていました。若し見つかったら、或いは見つからなくても、遠藤が薬瓶のなくなったことを発見したら——それはよく注意していればじき分かることです。殊に彼には天井の隙見という武器があるのですから——殺害を思い止まりさえすればいいのです。ただ毒薬を盗んだというだけでは、大した罪にもなりませんからね。

それはともかく、結局彼は、先ず誰にも見つからずに、うまうまと薬瓶^{びん}を手に入れることが出来たのです。そこで、遠藤が便所から帰って来ると間もなく、それとなく話を切り上げて、彼は自分の部屋へ帰りました。そして、窓には隙間なくカーテンを引き、入口の戸には締りをして置いて机の前に坐ると、胸を躍らせながら、懷中から可愛らしい茶色の瓶を取り出して、さてつくづく眺めるのでした。(MORPHINE)

多分遠藤が書いたのでしょう。小さいレットテルにはこんな文字が記してあります。彼は以前に薬物学の書物を読んで、モルヒネのことは多少知っていましたけれど、実物にお眼^めにかかるのは今が始めてでした。多分それは塩酸モルヒネというもののなのでしょう。瓶^{びん}を電燈の前に持つて行って、透かしてみますと、小匙^{さし}に半分もあるかなしの、ごく僅かの白い粉が、綺麗^{きれい}に透いて見えています。一体、こんなもので人間が死ぬのかしら、と不思議に思われるほどでした。

三郎は、むろん、それをはかるような精密な秤^{はかり}を持つていないので、分量の点は遠藤の言葉を信用しておく外はありませんでしたが、あの時の遠藤の態度口調は、酒に酔っていたとは言え決して出鱈目^{でたらめ}とは思われません。それにレットテルの数字も、三郎の知っている致死量の、丁度二倍ほどなのですから、よもや間違いはありますまい。

そこで、彼は瓶^{びん}を机の上に置いて、そばに用意の砂糖やアルコールの瓶^{びん}を並べ、薬剤師のような綿密さで、熱心に調査を始めるのでした。下宿人たちはもう皆寝てしまったと見えて、あたりは森閑^{しんかん}と静まり返っています。その中で、マッチの棒に浸したアルコールを、用意深く、一滴一滴と、瓶^{びん}の中へ垂らしていますと、自分自身の呼吸が、悪魔のため息のように、変に物凄^{ものすご}く響くのです。それがまあ、どんなに三郎の変態的な嗜好を満足させたことでしょう。ともすれば、彼の目の前に浮かんで来るのは、暗^{やみ}の洞窟^{どうくつ}の中で、ふつふつと泡立^{あわだ}ち煮える毒薬の鍋^{なべ}を見つめて、ニタリニタリと笑っている、あの古い物語の恐ろしい妖婆^{ようば}の姿でした。

しかしながら、一方においては、その頃から、これまで少しも予期しなかった、ある恐怖に似た感情が、彼の心の片隅^{かたすみ}に湧き出していました。そして時間の経つにしたがつて、少しずつ少しずつ、それが拡がって来るのです。——誰かの引用で覚えていた、あのシェークスピアの不気味な文句が、眼もくらめくような光を放って、彼の脳髓に焼きつくのです。この計画には、絶対に破綻^{はたん}がないと、かくまで信じながらも、刻々に増大して来る不安を、彼はどうすることも出来ないのです。

何の恨みもない一人の人間を、ただ殺人の面白さに殺してしまうとは、それが正気の沙汰か。お前は悪魔に魅入^{みい}られたのか、お前は気が違ったのか。いったいお前は、自分自身の心を空恐ろしくは思わないのか。長い間、夜の更けるのも知らないで、調合してしまつた毒薬の瓶^{びん}を前にして、彼は物思いに耽^{かた}っていました。一層この計画を思い留まることにしよう。幾度そう決心しかけたか知れませんが、でも、結局は彼はどうしても、あの人殺しの魅力^{みちり}を断念する気にはなれないのでした。

ところが、そうしてあれこれと考えているうちに、ハッと、ある致命的な事実が、彼の頭に閃^{ひらめ}きました。「ウフフフ………」と、突然三郎は、おかしくて堪^たらないように、しかし寝静つたあたりに気を兼ねながら、笑い出したのです。「……馬鹿^{ばか}野郎。お前は何とよく出来た道化役者だ！ 大真面目^{おおまじめ}でこんな計画を目標^{もくろ}むなんて。もうお前の麻痺^{まひ}した頭には、偶然と必然の区別さえつかなかったのか。あの遠藤の大きく開いた口が、一度、

例の節穴の真下にあったからと言って、その次にも同じようにそこにあるということが、どうして分かるのだ。いやむしろ、そんなことは先ずあり得ないではないか」と。

それは実に滑稽極まる錯誤（誤り）でした。彼のこの計画は、すでにその出発点において、一大迷妄に陥っていたのです。しかし、それにしても、彼はどうしてこんな分り切ったことを今まで気づかずになっていたのでしょうか。実に不思議と言わねばなりません。恐らくこれは、さも利口ぶっている彼の頭脳に、非常な欠陥があった証拠ではありますまいか。それはともかく、彼はこの発見によって、一方では甚しく失望しましたけれど、同時に他の一方では、不思議な気安さを感じるのでした。「……お蔭でおれはもう、恐ろしい殺人罪を犯さなくても済むのだ。ヤレヤレ助かった」と。

そう言うものの、その翌日から、「屋根裏の散歩」をするたびに、彼は未練らしく例の節穴を開けて、遠藤の動静をさぐることを怠りませんでした。それは一つは、毒薬を盗み出したことを遠藤が勘づきはしないかという心配からでもありましたけれど、しかしまた、どうかしてこの間の間に、彼の口が節穴の真下へ来ないかと、その偶然を待ちこがれていなかったとは言えません。現に彼は、いつの「散歩」の場合にも、シャツのポケットからあの毒薬を離れたことはないのです。

七、完全犯罪への誘惑（その要旨）

さて、或る夜ふけのこと、三郎は、いつものように「散歩」を一巡して、自分の部屋へと帰るために、梁から梁を伝わっていたが、彼の部屋とは、庭を隔てて、ちょうど向かい側の棟の、一方の隅の天井に、ふと、かすかな隙間（明かり）を発見する。それは、かなり大きな「木の節」で、半分以上板から離れて、ちよつとこじ開ければ、なんなく離れそうなので、三郎は、部屋の人が寝ていることを確かめた上で、音がしないようにそれをそうつとはがし、また、それを元にもどせば、節穴がふさがりような状態にしたのでした。

そして、その節穴から下を覗いてみると、偶然にも、東栄館のなかでも、いちばん虫の好かぬ、遠藤という歯科学校卒業生で、今はどこかの歯医者（は）の助手をしている男の部屋であり、その江藤が、のつぺりとした顔で、すぐ目の下に寝ていたのでした。ばかに几帳面と見えて、部屋の中は、すべてキッチンと整頓されている。ただ、それにふさわしくないのは、大きな口をあけて、雷のようないびきをかいていること。その寝顔を見ているうちに、ふと妙なことを思いつき、そこで、猿股（さるまた）のひもを抜き出して、それを節穴の上から垂らすと、ちょうど遠藤の口のところに当たるのでした。三郎は、節穴を塞いで、立ち去ろうとしたが、その時、ふと「恐ろしい考え」が閃くのであった。それは、何の恨みもない遠藤を殺害するというものであり、自分でもぞつとして身震いするのであった。

ただ、彼（郷田三郎）という人は、非常に変態的で、犯罪嗜好癖ともいうべき病気を持っていて、その犯罪の中でも彼が最も魅力を感じるのには「殺人」であり、しかも、絶対に犯行がバレないような「完全犯罪」ともなれば、ならさることなのである。

それは、東栄館へ引越して四、五日たった頃、三郎は、ある同居人と近くのカフェに行くとき、そこに遠藤も来ていて、そこで三人で酒（三郎は嫌いで飲まず）やコーヒを飲んだ後、三人で東栄館へと戻るが、その時、酒に酔っていた遠藤は、自分の部屋へと二人を誘い、そして、酒に酔った勢いで、自分は、実は「ある女性と情死しかけたことがある」

と言ひ、そして、押入れの「行李」の中から、その時に使い残したモルヒネの「小さな瓶」を見せるのであつた。そのことを想ひ出した三郎は、その「モルヒネ」を使って、天井からその「毒薬」を垂らせば、まさに「完全犯罪」も可能だと考えるのであつた。

そこで、四、五日後、彼（郷田三郎）は、遠藤の部屋を訪ねては、遠藤が便所へと行くチャンスをはたらき狙ひ、ようやく、夜の十時頃、便所に立つた後、すぐに押入れの「行李」の中から、例のモルヒネの入った「小さな瓶」をまんまと手に入れては、自分の部屋へと帰つて来るのであつた。そして、深夜、孤独、そのモルヒネの「小さな瓶」の中に砂糖少量とマツチ棒に浸したアルコールを一滴一滴と垂らして調査し、まさに「毒薬」を作り出したのであつた。ところが、ふと自分の「計画」にある決定的な「ミス」（欠陥）があることに気づくのであるが、それは、この前は、偶然にも天井の「節穴」の真下に遠藤の「口」があつたが、いつもそのような状態になるはずもなく、自分の愚かさに気づいて、非常に失望したり、また、これで殺人罪を犯さずにすんだと安堵したりするが、しかし、彼はなお未練たらしき、例の節穴をあけては、遠藤の様子をチェックすることを怠らなかつただけではなく、いつか前と全く同じような状態になることを心密かに願つていたのである。

八、犯罪の遂行

ある夜のこと——それは三郎が「屋根裏の散歩」を始めてからもう十日ほどもたつていました。十日の間も、少しも気づかれることなしに、毎日何回となく、屋根裏を這い廻つていた彼の苦心は、ひと通りではありません。綿密なる注意、そんなありふれた言葉では、とても言い表わせられないようなものでした。——三郎はまたしても遠藤の部屋の天井裏をうろついていました。そして、何かおみくじでも引くような心持で、吉か凶か、今日こそは、ひよつとしたら吉ではないかな。どうか吉が出てくれますようにと、神に念じさえしながら、例の節穴を開けて見るのでした。

すると、ああ、彼の眼がどうかしていたのではないのでしょうか。いつか見た時と寸分違わない恰好で、そこに軒をかいている遠藤の口が、ちょうど節穴の真下へきていたではありませんか。三郎は、何度も目をこすつて見直し、また猿股の紐を抜いて、目測さえて見ましたが、もう間違いはありません。その「紐と穴と口」とが、まさしく一直線上にあるのです。彼は思わず叫び声を上げそうになるのを、やっと堪えました。遂にその時が来た喜びと、一方では言い知れぬ恐怖と、その二つが交錯した、一種異様の興奮のために、彼は暗やみの中で、真っ青になつてしまいました。

彼はポケットから、毒薬の瓶を取り出すと、独りでに震え出す手先を、じつとためながら、その栓を抜き、紐で見当をつけておいて——おお、その時の何とも形容の出来ない心持！——ポトリ、ポトリ、ポトリと数滴。それがやつとでした。彼はすぐさま目を閉じてしまったのです。「……気がついたか、きつと気がついた。きつと気がついた。そして、今にも、おお、今にもどんな大声で叫び出すことだろう」と、彼はもし両手があいていたら、耳をもふさぎたいほどに思いました。

ところが、彼のそれほどの気遣いにもかかわらず、下の遠藤はウンともスンとも言わないのです。毒薬が口の中へ落ちたところは確かに見たのですから、それに間違いはありません。でも、この静けさはどうしたというのでしょうか。三郎は恐る恐る目をひらいて、節

穴を覗いて見ました。すると、遠藤は、口をムニヤムニヤさせ、両手で唇をこするような恰好かっこうをして、ちょうどそれが終わった所なのでしょう。またもやグーグーと寝入ってしまうのでした。案ずるよりは産むがやすいとはよく言ったものです。寝呆ねぼけた遠藤は、恐ろしい毒薬を飲み込んだことを少しも気づかないのでした。

三郎は、可哀かわいそうな被害者の顔を、身動きもしないで、食い入るように見つめていました。それがどれほど長く感じられたか、事実は、二十分とはたっていないのに、彼には二、三時間もそうしていたように思われたことです。するとその時、遠藤はフツと目をひらきました。そして、半身を起こして、さも不思議そうに部屋の中を見廻しています。目まいでもするのか、首を振ってみたり、目をこすってみたり、うわごとのような意味のないことをブツブツとつぶやいてみたり、いろいろ気違いめいた仕草をして、それでも、やっとまた枕まくらにつきましたが、今度は盛んに寝返りを打つのです。

やがて、寝返りの力がだんだん弱くなつて行き、もう身動きをしなくなつたかと思うと、その代りに、雷かみなりのような鼾いびき声が響き始めました。見ると、顔の色がまるで酒にでも酔つたように、真っ赤になつて、鼻の頭や額には、玉の汗がふつふつとふき出しています。熟睡している彼の身内で、今、世にも恐ろしい生死の争闘が行なわれているのかも知れません。それを思うと身の毛がよだつようです。

さて、しばらくすると、さしも赤かつた顔色が、徐々にさめて、紙のように白くなつたかと思うと、見る見る青藍色せいらんしよくに変つて行きます。そして、いつの間にか鼾いびきがやんで、どうやら、吸う息、吐く息の度数が減つてきました。……ふと胸のところが動かなくなつたので、いよいよ最期かと思つていきますと、暫しばらくくして、思い出したように、また唇がビクビクして、鈍い呼吸が帰つて来たりします。そんなことが二、三度繰り返されて、それでおしまいでした。……もう彼は動かないのです。グツタリと枕をはずした顔に、われわれの世界とはまるで別な一種のほほえみが浮かんでいます。彼はついに、いわゆる「仏」になつてしまつたのでしよう。

息をつめ、手に汗を握つて、その様子を見つめていた三郎は、はじめてホツとため息をつきました。とうとう彼は殺人者になつてしまつたのです。それにしても、何という楽々とした死に方だつたでしょう。彼の犠牲者は、叫び声ひとつ立てるでなく、苦悶くもんの表情さえ浮かべないで、鼾いびきをかきながら死んで行つたのです。「……なあんだ。人殺しなんてこんなあつけないものか」と、三郎は何だかガツカリしてしまいました。想像の世界では、もうこの上もない魅力であつた殺人ということが、やって見れば、ほかの日常茶飯事と何の変わりもないのでした。このあんばいなら、まだ何人だつて殺せるぞ。そんなことを考える一方では、しかし、気抜けのした彼の心を、何とも得体の知れぬ恐ろしさが、ジワジワと襲い始めていました。

節穴から死体を見つめている自分の姿を、三郎は俄にわかに君悪くなつてきました。妙に首筋の所がゾクゾクして、ふと耳をすますと、どこかで、ゆっくりゆっくり、自分の名を呼び続けているような気さえます。思わず節穴から目を離して、暗やみの中を見廻しても、久しく明るい部屋を覗いていたせいでしょう。眼の前には、大きいや小さいのや、黄色い環わのようなものが、次々に現われては消えていきます。じつと見ていきますと、その環わのうしろから、遠藤の異様に大きな唇が、ヒョイと出てきそうにも思われるのです。

*

*

でも彼は、最初計画したことだけは、先ず間違ひなく実行しました。節穴から薬瓶——その中にはまだ数滴の毒液が残っていたのです——を抛り落とすこと、その跡の穴をふさぐこと、万一天井裏に何かの痕跡が残っていないか、懐中電燈を点じて調べることに、そして、もうこれで手落ちがないと分かると、彼は大急ぎで梁を伝つて、自分の部屋へ引つ返したのです。「……いよいよこれで済んだ」と、頭もからだも、妙に痺れて、何かしら物忘れでもしているような不安な気持を、強いて引き立てるようにして、彼は押入れの中で着物を着はじめました。が、その時ふと気がついたのは、例の目測に使用した猿股の紐を、どうしたかということ。ひよつとしたら、あそこへ忘れてきたのではあるまいか。そう思うと、彼はあわただしく腰のあたりを探ってみました。どうも無いようです。彼はますます慌てて、体じゅうを調べました。すると、どうしてこんなことを忘れていたのでしょうか。それはちゃんとシャツのポケットに入れてあったではありませんか。やれやれよかつた、ひと安心して、ポケットの中から、その紐と懐中電燈とを取り出そうとしますと、ハッと驚いたことには、その中にまだほかの品物が入っていたのです。……毒薬の瓶の小さなコルクの栓が入っていたのです。

彼は、さつき毒薬を垂らす時、あとで見失つては大へんだと思つて、その栓をわざわざポケットへしまつて置いたのですが、それをど忘れしてしまつて瓶だけ下へ落してきたものと見えます。小さなものですけれど、このままにして置いては、犯罪発覚のもとです。彼はおびえる心を励まして、再び現場へ取つて返し、それを節穴から落としてこなければなりません。

その夜、三郎が床についたのは——もうその頃は、用心のために押入れで寝ることはやめていました——午前三時頃でした。それでも、興奮しきつた彼は、なかなか寝つかれないのです。あんな栓を落とすのを忘れてくるほどでは、ほかに何か手ばかりがあつたかも知れない。そう思うと、彼はもう気が気ではないのです。そこで、乱れた頭を強いて落ちつけるようにして、その晩の行動を順序を追つて一つ一つ思い出して行き、どっかに手取りがなかったかと調べてみましたが、少なくとも彼の頭では、何事も発見できないのです。彼の犯罪には、どう考えて見ても、寸分の手落ちもないのです。

彼はそうして、とうとう夜の明けるまで考え続けていましたが、やがて、早起きの下宿人たちが、洗面所へ通うために廊下を歩く足音が聞えだすと、つと立ち上がつて、いきなり外出の用意を始めるのでした。彼は遠藤の死骸が発見されるのを恐れていたのです。その時、どんな態度をとつたらいいのでしょうか。ひよつとしたら、後になつて疑われるような、妙な挙動があつては大へんです。そこで彼は、そのあいだ外出しているのが一番安全だと考えたのですが、しかし、朝飯もたべないで外出するのは、いっそう変ではないでしょうか。「……ああ、そうだつて、何をうっかりしているのだ」と、そこへ気がつく、彼はまたもや寢床の中へもぐり込むのでした。

それから朝飯までの二時間ばかりを、三郎はどんなにビクビクして過ごしたことでしょうか、幸いにも、彼が大急ぎで食事をすませて、下宿屋を逃げ出すまでは、何事も起こらないで済みました。そうして下宿を出ると、彼はどこという当てもなく、ただ時間をつぶすために、町から町へとさまよい歩くのでした。

八、犯罪の遂行（その要旨）

それは、ある夜のことで、三郎は、またしても遠藤の部屋の屋根裏をうろついていた、今日こそは、どうか吉が出てくれますようにと、神に念じさえしながら、例の節穴をあけてみると、何といつか見た時と全く同じような状態になっている。そこで、猿股の紐を抜いて、確かめてみても、まさに「紐と穴と口」とが、正しく「一直線上」にあるのでした。彼は、思わず叫びそうになったが、やっとこらえて、遂にその時が来た「喜び」と、一方では言い知れぬ「恐怖」とが交錯をして、一種異様の「興奮」のために、彼の顔は、真つ青になっていった。そして、「……彼はポケットから、毒薬の瓶を取り出すと、独りで震え出す手先を、じつとためながら、その栓を抜き、紐で見当をつけておいて、ポトリ、ポトリ、ポトリ、と数滴、下に落として、それがやつとでした」とある。

一方、下で寝ている遠藤は、口をムニャムニャと動かしたり、両手で口をぬぐったり、また、何度も寝返りなどをうちながら、大声を発して苦しみ叫ぶでもなく、やがて、大きなびきをかいてから、しだいに静かになって動かなくなるのでした。――主人公（郷田三郎）は、人殺しなんてこんなあつけないものかと、なんだかガツカリしながらも、まだ数滴残っている「小さな瓶」を下に抛り落として、まさに「自殺」に見せかけるのでした。そうして、節穴をふさいで、天井裏に何か痕跡を残していないか懐中電灯で確かめてから、主人公（郷田三郎）は、自分の部屋へと戻って来るのであった。

そして、彼は、自分の部屋の「押入れ」の中で着物を着はじめが、ふと猿股の「紐」は、どうしたかと思い出して、どこかに置き忘れて来たかと不安になり、あわてて体じゅうを両手でさがしまわると、シャツのポケットに入っているのを見つけてほっとするのであるが、ところが、そのポケットにはもう一つ毒薬の瓶の「コルクの栓」も一緒に入っていて、仕方なく、再び、屋根裏に戻って、遠藤の天井裏の「節穴」から、その「栓」を下に落とすのであった。そして、主人公（郷田三郎）が床に付いたのは、午前三時頃であったが、まだ何か抜かりはないかと、その晩の行動を一つ一つ思い出しては確認をして、もう何もないだろうというようにして、夜が明けるまで考え続けていたのでした。

やがて、早起きの下宿人たちが、洗面所へ通るために廊下を歩く足音が聞こえて来ると、主人公（郷田三郎）は、あわてて外出の準備をはじめが、それは、遠藤の死体が発見されるのを恐れて、そのあいだは外出しているのがいちばん安全と考えたが、朝飯も食べずに外出するのは、逆におかしいと考え直して、二時間ほどビクビクした気持ちで床の中にいてから、朝食を急いで食べては、下宿屋を出て、それからどこへいくという当てもなく、ただ時間をつぶすただけに、町から町へとさまよい歩くのであった。

そして、主人公（郷田三郎）が昼ごろに外から帰って来ると、すでに遠藤の死体はかたづけられていて、警察の臨検もすっかりすんでいたが、聞けば、遠藤は、失恋か何かを苦にして、恐らく、自殺したのだらうと、誰もが彼の「自殺」を疑うような気配はなかったという展開から、いよいよ素人探偵「明智小五郎」の登場になるのである。

九、明智小五郎の登場

結局、彼の計画は見事に成功しました。彼がお昼ごろ外から帰った時には、もう遠藤の死骸は取り片づけられ、警察からの臨検もすっかり済んでいましたが、聞けば、案の定、誰

一人遠藤の自殺を疑うものではなく、その筋の人たちも、ただ形ばかりの取調べをすると、じきに帰ってしまったということでした。

遠藤がなぜ自殺したかというその原因は少しも分りませんでした。彼の日頃の素行から想像して、多分痴情の結果であろうという事に皆の意見が一致しました。現に最近、ある女に失恋していたという様な事実まで現われて来たのです。なに、「失恋した、失恋した」というのは、彼のような男にとっては、一種の口癖みたいなもので、大した意味があるわけではないのですが、ほかに原因がないので、結局それにきまったわけでした。

のみならず、原因があつてもなくても、彼の自殺したことは、一点の疑いもないのです。入口も窓も、内部から戸締りがしてあつたのですし、毒薬の容器が枕許にころがつていて、それが彼の所持品であつたことも分かつているのですから、もう何と疑つて見ようもないのです。天井から毒薬を垂らしたのではないかなどと、そんな馬鹿馬鹿しい疑いを起こすものは、誰もありませんでした。

それでも、何だかまだ安心しきれないような気がして、三郎はその日一日、ビクビクものでいましたが、やがて一日二日と経つにしたがつて、彼はだんだん落ちついて来たばかりではなく、はては、自分の手際を得意がる余裕さえ生じて来たのです。「……どんなものだ。さすがは俺だな。見ろ、誰一人としてここに、同じ下宿屋の一間に、恐ろしい殺人犯人がいることなどには気づかないではないか」と。

彼は、この調子では、世間にどれくらい隠れた処罰されない犯罪があるか、知れたものではないと思うのでした。「……天網恢恢疎にして漏らさず」なんて、あれはきつと昔からの為政者たちの宣伝に過ぎないので、或いは人民どもの迷信に過ぎないので、その実は、巧妙にやりさえすれば、どんな犯罪だって、永久に現われないで済んで行くのだ。彼はそんな風にも考えるのでした。もつとも、さすがに夜などは、遠藤の死顔が目先にちらつくような気がして、何となく気味が悪く、その夜以来、彼は例の「屋根裏の散歩」も中止している始末でしたが、それはただ、心の中の問題で、やがては忘れてしまうことです。実際、罪が発覚させねば、もうそれで十分ではありませんか。

*

*

さて、遠藤が死んでからちょうど三日目のことでした。三郎が今、夕飯を済ませて、小楊子を使いながら、鼻唄なんか歌っている所へ、ヒョッコリと久し振りに明智小五郎が訪ねて来たのでした。「やあ」、「ごぶさた」と、彼らはさも心安げに、こんなふうの挨拶を取り交わしたのですが、三郎の方では、折が折なので、この素人探偵の来訪を、少々気味わるく思わないではいられませんでした。「……この下宿で毒を飲んで死んだ人があるつて言うじゃないか」と、明智は、座につくと、さっそくその三郎の避けたがつている事柄を話題にするのでした。恐らく彼は、誰かから自殺者の話を聞いて、幸い同じ下宿に三郎がいるので、持ち前の探偵興味から、訪ねてきたのに相違ありません。

「……ああ、モルヒネだね。僕は丁度その騒ぎの時に居合わせなかったから、詳しいことは分からないけれど、どうも痴情の結果らしいのだ」と、三郎は、その話題を避けたがつていることを悟られまいと、彼自身もそれに興味を持っているような顔をして、こう答えるのでした。すると、「……一体どんな男なんだい」と、また明智が尋ねるのでした。それから暫くの間、彼らは遠藤の人となりについて、死因について、自殺の方法について、問答を続けました。三郎は、始めのうちこそビクビクもので明智の問いに答えていま

したが、慣れて来るにしたがつて、だんだんと横着になり、はては、明智をからかつてやりたいような気持にさえなるのでした。

「……君はどう思うね。ひよつとしたら、これは他殺じやあるまいか。なに別に根拠があるわけじゃないけれど、自殺に相違ないと信じていたのが、実は他殺だったりすることが、往々あるものだからね」と。どうだ、さすがの名探偵もこればかりは分かるまいと、心の中で嘲りながら、三郎はこんなことまで言ってみるのでした。それが彼には愉快で堪らないのです。「……そりや何とも言えないね。僕も実は、ある友だちからこの話を聞いた時に、死因が少し曖昧だという気がしたのだよ。どうだろう、その遠藤君の部屋を見るわけには行くまいか」と聞くと、「……造作ないよ」と、三郎はむしろ得々として答えるのであった。「……隣りの部屋に遠藤の同郷の友だちがいてね。それが遠藤の親父から荷物^{おやじ}の保管を頼まれているんだ。君のことを話せば、きっと喜んで見せてくれるよ」

それから、二人は遠藤の部屋へ行ってみることにしました。その時、廊下を先頭になつて歩きながら三郎はふと妙な感じにうたれたことです。「……犯人自身が、探偵をその殺人の現場へ案内するなんて、じつに不思議なことだな」と、ニヤニヤと笑いそうになるのを、彼はやつとのことでこらえました。三郎は、生涯のうちで、恐らくこの時ほど得意を感じたことはありませんまい。「イヨー、親玉ア」、自分自身にそんな掛け声でもしてやりたいほど、水際立つた悪党ぶりでした。

遠藤の友だち——それは北村といって、遠藤が失恋していたという証言をした男です——は、明智の名前をよく知っていて、快く遠藤の部屋を開けてくれました。遠藤の父親が、国もとから出て来て、仮葬^{かそう}を済ませたのが、やつと今日の午後のことで、部屋の中には、彼の持ち物が、まだ荷造りもせず、置いてあるのです。

遠藤の変死が発見されたのは、北村が会社へ出勤したあとだったので、発見の刹那^{せつな}の有様はよく知らないようでしたが、人から聞いたことなどを綜合して、彼はかなり詳しく説明してくれました。三郎もそれについて、さも局外者らしく、べらべらとうわさ話などを述べ立てるのでした。明智は二人の説明を聞きながら、如何にも玄人^{くわんと}らしい目くばりで、部屋の中をあちらこちらと見廻していましたが、ふと机の上に置いてあった「目覚まし時計」に気づくと、何を思ったのか、長い間それを眺めているのです。多分、その珍奇な装飾が彼の目を惹いたのかも知れませんが。「……これは目覚まし時計ですね」、「……そうですよ」と、北村は多弁に答えるのであった。「……遠藤の自慢の品です。あれは几帳面な男でしてね、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずこれを捲いて置くのです。私なんかいつも隣りの部屋のベルの音で目をさましていたくらいです。遠藤の死んだ日だってそうですよ。あの朝もやつぱりこれが鳴っていましたので、まさかあんなことが起こつていようとは、想像もしなかったのですよ」

それを聞くと、明智は長く延ばした頭の毛を指でモジャモジャ掻き廻しながら、何か非常に熱心な様子を示しました。「……その朝、目覚ましは鳴ったことは間違いないでしょうね」、「……エエ、それは間違いありません」、「……あなたは、そのことを、警察の人におっしゃいませんか」、「……いいえ、……でも、なぜそんなことをお聞きなさるのです」、「……なぜって、妙じやありませんか。その晩に自殺しようと決心した者が、明日の朝の目覚ましを捲いて置くというのは」、「……なるほど、そう言えば変ですね」と、北村は迂闊^{うかつ}にも、今までこの点に気づかないでいたらしいのです。そして、明智の言

うことが何を意味するかも、まだはっきりと飲み込めない様子でした、が、それも決して無理ではありません。入口の締りのしてあったこと、毒薬の容器が死人のそばに落ちていたこと、その他、すべての事情が、遠藤の自殺を疑いがないものに見せていたのですから。

しかし、この問答を聞いた三郎は、まるで足もとの地盤が不意に崩れ始めたような驚きを感じました。そして、なぜこんな所へ明智を連れて来たのだろうと、自分の愚かさを悔まないではいられませんでした。

明智はそれから、一層の綿密さで、部屋の中を調べ始めました。むろん天井も見逃すはずはありません。彼は天井板を一枚一枚たたき試みて、人間の出入した形跡がないかを調べまわったのです。が、三郎の安堵したことには、さすがの明智も、節穴から毒薬を垂らして、そこをまた、元通り蓋しておくという新手には、気づかなかったと見えて、天井板が一枚もはがれていないことを確かめると、もうそれ以上の詮索はしませんでした。

さて、結局その日は別段の発見もなく済みしました。明智は遠藤の部屋を見てしまうと、また三郎の所へ戻って、しばらく雑談を取り交したのち、何事もなく帰って行つたのです。ただ、その雑談の間に、次のような問答のあったことを書き洩らすわけには行きません。なぜと言つて、これは一見ごくつまらないように見えて、その実、このお話の結末に最も重大な関係を持っているのですから。

その時、明智は、袂から取り出した煙草に火をつけながら、ふと気がついたようにこんなことを言つたのです。「……君はさつきから、ちつとも煙草を吸わないようだが、よしたのかい」と。そう言われてみると、なるほど、三郎はこの二、三日、あれほど大好物の煙草を、まるで忘れてしまったように、一度も吸っていないのでした。「……おかしいね。すっかり忘れていたんだよ。それに、君がそうして吸っていても、ちつとも欲しくならないんだ」と言つと、「……いつから？」と聞かれ、「……考えて見ると、もう二、三日吸わないようだ。そうだ、ここにある敷島を買つたのが、たしか日曜日だったから、もうまる三日の間、一本も吸わないわけだよ。一体、どうしたんだろう」と言うので、「……じゃ、ちょうど遠藤君が死んだ日からだね」と言われ、それを聞くと、三郎は思わずハツとするのでした。しかし、まさか遠藤の死と、彼が煙草を吸わないこととの間に因果関係があるうとも思われませんので、その場合は、ただ笑つてすませたことですが、後になつて考えて見ますと、それは決して笑ひ話にするような、無意味な事柄ではなかったのです。——そして、この三郎の煙草嫌ひは、不思議なことに、その後いつまでも続きました。

十、明智の推理

さて、明智小五郎が、主人公（郷田三郎）のところにやつて来るのは、遠藤が死んでから三日目のことであつた。それは、夕食をすませて、ゆったりとしてるところに、ひよつこりと現われて、「やあ」、「ごふさた」というような感じで、お互いに挨拶をし合い、明智は、「……この下宿で毒を飲んで死んだ人があるつていうじゃないか」と言つと、「……ああ、モルヒネでね、僕はその時いかなかったが、どうも痴情の結果らしいのだ」と応えるのであつた。——とところで、「推理小説」には、必ず、「隠し球」（いわば「決め手」）というものがあつて、まさにその決定的な「証拠」を相手（犯人）に突きつけると、相手（犯人）は、ついに観念して「犯行を認める」というようなものである。

そして、この「小説」にも、当然のことながら、まさに「二つの隠し球」が用意されているが、それは、最初から終盤まで「完全に伏されているもの」であり、犯人も（読者も）、それを全く知らないのである。そして、例えば、明智なら明智が、最後に、相手（犯人）を追い詰めていく時に、初めて、まさに「登場して来る」ものであり、それまでは、相手（犯人）は、自分の「犯行」には絶対的な「自信」を持っていて、絶対にバレるはずはないと思っているわけである。ところが、その決定的な「隠し球」（いわば「決め手」）を突きつけられると、相手（犯人）は、一気に「心が動揺して」きて、まさに「絶対的な自信」がたがたと音を立てて崩れはじめ、そして、最後には「犯行を認める」ような展開へとなっていくが、むろん、その場面こそは、まさに一番の「見せ場」になるのである。さて、明智は、遠藤とは「いったいどんな男なんだい」と聞くと、主人公（郷田三郎）は、いろいろと説明しながらも、明智をちよつとからかってやろうという気持ちにさえないって、「……君はどう思うね、ひよつとしたら、これは他殺じゃあるまいか」など言うつたりするが、それに対して、明智は、「……それは何とも言えないね。……どうだろう、その遠藤君の部屋を見るわけにはいくまいか」と聞くと、「造作ないよ」、「……隣りの部屋に遠藤の同郷の友だちがいて、（有名な）君のことを話せば、きつと喜んで見せてくれるよ」ということで、やがて三人で遠藤の「部屋」へと入ることになるが、その遠藤の友だちというのは、北村といって、遠藤の（部屋の管理や）失恋を証言した男でもあり、明智は、遠藤の部屋の中をあちこち見まわしていたが、ふと机の上に置いてある目覚まし時計に気づくのであった。そして、「これは目覚まし時計ですね」と言うと、次こそ、まさに「隠し球」の一つであるが、北村は、「そうですね」、「……遠藤の自慢の品です。あれは几帳面な男でしてね、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずにこれを捲いておくのです。私なんかいつも隣りの部屋のベルの音で眼をさましていたくらいです。遠藤の死んだ日だってそうですよ。あの朝もやっぱこれが鳴っていました」と言うのである。

まず、遠藤は、几帳面な男であった。この「設定」は、まさに「絶対条件」であり、仮に「いいかげんな性格」であれば、いつもきつちりと「同じ場所（位置）」で寝るようなこともないだろうし、また、朝の六時に鳴るように、毎晩欠かさずに目覚まし時計のねじを捲いておくことも、成り立たないことになってしまうからである。そこで、明智は、「あの朝、目覚まし時計が鳴ったことは間違いないでしょうね」と、念を押して聞いている。それは、まさに「決定的な決め手」の一つとなり得るからである。なぜなら、これから「自殺を図ろう」と決心している人が、わざわざ目覚まし時計のねじなど捲くものだろうかという問題である。もちろん、毎日の習慣でほとんど無意識的に捲いてしまったという可能性も残るので、これだけではまだ不十分なのである。それゆえ、もう一つの「隠し球」（いわば「決め手」）がどうしても必要不可欠になって来るとともに、それは、最後の最後まで取って置くという「手法」になっているのである。そして、このことは、主人公（郷田三郎）にとっては、まるで足許の地盤が不意に崩れ始めたような驚きを感じた、とある。

一方、明智は、いつそう綿密に部屋の中を調べはじめたが、それはもちろん、天井も見逃すはずはなく、天井板一枚一枚をたたいて試して、人間の出入りした形跡はないかを調べまわったが、これという新たな発見もなく、遠藤の部屋を出ては、再び、三郎の部屋に戻り、しばらく雑談をするが、その中にこそ、まさに第二の「隠し球」（いわば「決め手」）となるヒントが隠されているのである。それは、次のような内容である。つまり、明智は、

袂から煙草を取り出して、それに火をつけて吸い始めるのだが、その時に、「……君はさつきから、ちっとも煙草を吸わないね、よしたのかい」と聞かれて、三郎は、「……おかしいね、すっかり忘れていたんだ。君が吸っていても少しもほしくならない」のだと言う。あれほど好きだった煙草を、「いつから？」と聞かれると、「……もう二、三日吸わないようだ」と、三郎にもその理由がよく分からない状態であり、明智は、「……じゃあ、ちやうど遠藤君の死んだ日からだ」と言うのであった。もちろん、それには、当然のことながら、深い理由がはつきりとあるのだが、それこそ、まさに第二の「隠し球」（いわば「決め手」となるものである。やがて、明智は、何事もなく帰って行くのであった。

十一、推理の決め手

三郎は、その当座、例の目覚まし時計のことが、何となく気になって、夜もおちおち眠れないのでした。たとえ遠藤が自殺したのでないということが分かつて、彼がその手下人だと疑われるような証拠は、一つもないはずですから、そんなに心配しなくともよさそうなのですが、でも、それを知っているのがあの明智だと思うと、なかなか安心はできないのです。——ところが、それから半月ばかりは何事もなく過ぎ去ってしまいました。心配していた明智もその後一度もやって来ないのです。「……やれやれ、これでいよいよおしまい」と、そこで三郎は、ついに気を許すようになりました。そして、時々恐ろしい夢に悩まされることはあっても、大体において、愉快な日々を送ることができたのです。殊に彼を喜ばせたのは、あの殺人罪を犯して以来というもの、これまで少しも興味を感じなかったいろいろな遊びが、不思議と面白くなつて来たことです。ですから、この頃では、毎日のように、彼は家を外にして、遊びまわっているのです。

ある日のこと、三郎はその日も外で夜をふかして、十時頃に家へ帰ったのですが、さて寝ることにして、蒲団を出すために、何気なく、スーツと押入れの襖をあけた時でした。「ワッ」と、彼はいきなり恐ろしい叫び声を上げて、二、三步あとへよろめきました。彼は夢を見ていたのでしょうか。それとも、気でも狂ったものではありますまいか。そこには、押入れの中には、あの死んだ遠藤の首が、髪の毛をふり乱して、薄暗い天井から、逆さまにぶら下がっていたのです。

三郎は、いったんは逃げ出そうとして、入口の所まで行きましたが、何かほかのものを間違えたのではないかという様な気もするものですから、恐る恐る引き返して、もう一度、そつと押入れの中を覗いてみますと、どうして、見違いでなかったばかりか、今度はその首は、いきなりニツコリと笑ったではありませんか。

三郎は、再びアツと叫んで、ひと飛びに入口の所まで行つて障子を開けると、やにわに外へ逃げ出そうとしました。すると、「……郷田君。郷田君」、それを見ると、押入れの中では頻りに三郎の名前を呼び始めるのです。「……僕だよ。僕だよ。逃げなくつてもいいよ」と、それは、遠藤の声ではなくて、どうやら聞き覚えのある、ほかの人の声だったものですから、三郎はやつと逃げるのを踏みとどまって、こわごわり返つて見ますと、「失敬失敬」と、そう言いながら、以前よく三郎自身がしたように、押入れの天井から降りて来たのは、意外にも、あの明智小五郎でした。

「……驚かせて済まなかった」と、押入れから出た洋服姿の明智が、ニコニコしながら

言うのです。「……ちよつと君の真似をして見たのだよ」と。それは実に、幽霊なぞよりはもつと現実的な、いっそう恐ろしい事実でした。明智はきつと、何もかも悟ってしまったのに相違ありません。

その時の三郎の心持は、実に何とも形容のできないものでした。あらゆる事柄が、頭の中で風車のように回転して、いっそう何も思うことがない時と同じように、ただぼんやりとして、明智の顔を見つめている外はないのです。「……早速だが、これは君のシャツのボタンだろうね」と、明智は、いかにも事務的な調子で始めました。手には小さな貝ボタンを持って、それを三郎の眼の前につき出しながら、「……ほかの下宿人たちも調べて見たけれども、誰もこんなボタンをなくしているものはないのだ。ああ、そのシャツのだね。そら、二番目のボタンがとれているじゃないか」と言うのであった。

ハッと思つて、胸を見ると、なるほど、ボタンが一つとれています。三郎は、それがいつとれたのやら、少しも気がつかないでいたのです。「……形も同じだし、間違いないね、ところで、このボタンをどこで拾つたと思う。天井裏なんだよ、それも、あの遠藤君の部屋の上でだよ」と。それにしても、三郎はどうして、ボタンなどを落として、気づかないでいたのでしょうか。それに、あの時、懐中電燈で十分検べたはずではありませんか。「……君が殺したのではないかね。遠藤君は」と、明智は無邪気にニコニコしながら、——それがこの場合一層気味悪く感じられるのです——三郎のやり場に困つた眼の中を、覗き込んで、とどめを刺すように言うのでした。

三郎は、もう駄目だと思ひました。たとえ明智がどんな巧みな推理を組み立てて来ようとも、ただ推理だけであつたら、いくらでも抗弁の余地があります。けれども、こんな予期しない証拠物をつきつけられては、どうすることもできません。三郎は今にも泣き出そうとする子供のような表情で、いつまでもいつまでも黙りこくつて突つ立っていました。時々ぼんやりと霞んで来る目の前には、妙なことに、遠い遠い昔の、例えば、小学校時代の出来事などが、幻のように浮き出して来たりするのでした。

*

*

それから二時間ばかりのち、彼らはやつぱり元のままの状態で、その長い間、ほとんど姿勢さえもくずさず、三郎の部屋で相對していました。「……ありがとう、よくほんとうのことを打ち開けてくれた」と、最後に明智が言うのでした。「……僕は決して君のことを警察へ訴えなぞしないよ、ただね僕の判断が当たっているかどうか、それが確めたかったのだ。君も知っている通り、僕の興味はただ『真実を知る』という点にあるので、それ以上のは、実はどうでもいいのだ。それにね、この犯罪には、一つも証拠というものが、ないのだよ。シャツのボタン、ハハ……、あれは僕のトリックさ。何か証拠品がなくては、君が承知しまいと思つてね。この前君を訪ねた時、その二番目のボタンがとれていることに気づいたものだから、ちよつと利用して見たのさ。なに、これは僕がボタン屋へ行つて仕入れて来たのだよ。ボタンがいつとれたなんていうことは、誰しもあまり気づかないことだし、それに、君は興奮している際だから、多分うまく行くだろうと思つてね。

僕が遠藤君の自殺を疑ひ出したのは、君も知つていゝように、あの目覚まし時計からだ。あれから、この管轄の警察署長を訪ねて、ここへ臨検した一人の刑事から、詳しく当時の模様を聞くことができたが、その話によると、モルヒネの瓶が、煙草の箱の中にころがっていて、中味が巻煙草にこぼれかかつていたというのだ。警察の人たちはこれに別段注意

を払わなかったようだが、考えて見ればはなはだ妙なことはないか、聞けば、遠藤は非常に几帳面な男だと言うし、ちゃんと床に這入って死ぬ用意までしているものが、毒薬の瓶を煙草の箱の中へ置くさえあるに、しかも中味をこぼすなどというのは、何となく不自然ではないか。

そこで、僕はますます疑いを深くしたわけだが、ふと気づいたのは、君が遠藤の死んだ日から煙草を吸わなくなっていることだ。この二つの事柄は、偶然の一致にしては、少し妙ではあるまいか。すると、僕は、君が以前犯罪の真似ごとなどをして喜んでいたことを思い出した。君には変態的な犯罪嗜好があったのだ。

僕はあれからたびたびこの下宿へ来て、君に知れないように遠藤の部屋を調べていたのだよ。そして、犯人の通路は天井の外にないということが分かったものだから、君のいわゆる『屋根裏の散歩』によって、下宿人たちの様子を探ることにした。殊に、君の部屋の上では、たびたび長い間うずくまっていた。そして、君のあのイライラした様子を、すっかり隙見してしまつたのだよ。

探れば探るほど、すべての事情が君に指さしている。だが、残念なことには、確証というものが一つもないのだ。そこでね。僕はあんなお芝居を考え出したのだよ、ハハハハハハ。じゃ、これで失敬するよ。多分もう御目にかかれまい。なぜって、そら、君はちゃんと自首する決心をしているのだからね」

三郎は、この明智のトリックに対しても、もはや何の感情も起こらないのでした。彼は明智の立ち去るのも知らず顔に、「……死刑にされる時の気持は、一体どんなものだろう」と、ただそんなことを、ぼんやりと考え込んでいたのでした。

彼は毒薬の瓶を節穴から落した時、それがどこへ落ちたのかを見なかったように思っていましたけれど、その実は、巻煙草に毒薬のこぼれたことまで、ちゃんと見ていたのです。そして、それが意識下に押しこめられて、心理的に彼を煙草嫌いにさせてしまつたのでした。(完)

十一、推理の決め手(その要旨)

さて、明智がその「姿」を再び主人公(郷田三郎)の前に見せるのは、それから半月ばかり経った後であり、その間は、言うまでもなく、ずっと「推理と捜査」などをし続けていて、そして、ついにその「推理の結論」が出たからこそ、再び、その「姿」を現わすという展開になるのである。一方、そのあいだ、主人公(郷田三郎)は、例の目覚まし時計のことなどが気になっていたが、しかし、たとえ遠藤が「自殺」ではなく、まさに「他殺」だとしても、自分の犯行だという「証拠」など何一つ残していないのだから、そんなに心配することもないかと思ひながらも、しかし、相手が名探偵「明智小五郎」だけになかなか安心はできずにいたが、半月もその「姿」を自分の前に見せないの、「やれやれ、これでいよいよおしまい」と、ついに気を許すようになっていたのである。そして、犯行以降は、今まで興味を感じなかった色々な遊びが、不思議と面白くなって来たのである。

さて、ある日のこと、外から夜の十時頃に「自分の部屋」へと帰ってきて、さて寝ようと、布団を出すために、押入れの襖をあけた途端に、突然、天井から死んだ遠藤の首が髪を振り乱して逆さまにぶら下がっているのを見て、主人公(郷田三郎)は、思わず「ワ

ッ」と大声で叫んで、二、三步、後ずさりして、入り口まで逃げるが、再び、確かめに戻ってきて、押入れの中を覗いて見ると、今度は、その首がいきなりニコリと笑うのであった。もちろん、それは、明智小五郎であるが、「ちよつと君のまねをしてみたのだよ」と言うのであった。——つまり、明智小五郎も、まさに「屋根裏の散歩」を実際に何回も行なっていて、そして、遠藤の「天井裏」に、この「ボタン」（それは「三郎が今着ているシャツのボタン」）が一つ落ちていたなどという、まさに「大ウソ」（実際はボタン屋で買って来たもの）を見せて、主人公（郷田三郎）の驚く「反応」（度肝を抜かれた様子）などを確かめ見極めようとしているのである。そして、「……君が殺したのではないのかね、遠藤君を」という言葉に対して、主人公（郷田三郎）は、もうだめだと思うのであった。

それは、最初、何の前ぶれもなく、まさに完全に安心しきっていた「心の状態」の時に、何気なく押入りの襖を開けた途端、突然として、死んだ遠藤の首が髪を振り乱して逆さまにぶら下がっているのを見た時には、さすがの主人公（郷田三郎）も、まさに「度肝を抜かれてしまった」とともに、それに加えて、遠藤の「天井裏」に何と自分のシャツの「ボタン」が一つ落ちていたなどと、まさに自分の目の前にその具体的な証拠まで突きつけられるという、これらの明智の巧みな「トリック」（つまり「人をだます仕掛け」）によって、主人公（郷田三郎）という人は、完全に打ちのめされてしまい、もう明智と戦って反論するという気力さえ奪われてしまったのである。

そして、いわゆる「主人公」（郷田三郎）こそは、真犯人である、という「結論」を出すまでの、まさに「推理の経緯」については、次のように語っているのである。

まず、明智小五郎が、最初に遠藤の「自殺」に疑問を抱いたのは、やはり例の「目覚まし時計」からであり、そこで、「……管轄の警察署を訪ねては、その現場を臨検した一人の刑事から、当時の模様を詳しく聞くことができた」とある。その話によると、「……モルヒネの瓶が、煙草の箱の中にくらがっていて、中身が巻煙草にこぼれかかっていたというのである。……そこで、ふと気づいたのは、主人公（郷田三郎）が遠藤の死んだ日から煙草を吸わなくなっている」ということであつた。そこで、半月前から、明智は、たびたびこの下宿屋にやって来ては、主人公（郷田三郎）に知られないように「遠藤の部屋」を調べていたとともに、いわゆる「屋根裏の散歩」によって、下宿人の様子などもさぐることにしたが、特に主人公（郷田三郎）の部屋の上では、たびたび長くうずくまっていた、彼のイライラする様子なども上から隙見していたと言うのである。そして、さぐればさぐるほど君が疑わしくなるが、しかし、これという「確証」が何一つないので、仕方なく、あのような「お芝居」をしたと言うのである。——つまり、主人公（郷田三郎）のその「驚く姿」（反応の仕方）を見て、まさに「真犯人であるという確証を得た」ということである。一方、主人公（郷田三郎）という人は、やがて、「自首」を覚悟するのであつた。

そして、『屋根裏の散歩者』という作品の「本文」の最後は、次のような「文章」で終わっている。それは、「……彼は毒菓の瓶を節穴から下に落としたりした時、それがどこへ落ちたかを見なかったように思っていたが、しかし、その実は、巻煙草に毒菓のこぼれたことまで、ちゃんと見ていて、それが意識下に押し込められて、心理的に彼を煙草嫌いにさせてしまった」という結論になるのである。そして、これこそは、まさに第二の「隠し球」であるとともに、まさに事件解決の「決め手」ともなっているものである。

十二、結び

例えば、前述の『心理試験』という作品の中にも、当然のことながら、いわゆる「推理小説」である限りは、必ず、「隠し球」（いわば「決め手」）というものが用意されていて、まさにその決定的な「証拠」を相手（犯人）に突きつけると、相手（犯人）は、ついに観念して「犯行を認める」というようなものである。それは、一体、どういうものだったかと問えば、それは、次のようなものである。——つまり、苦学生的主人公（ふきやせいしろう 落屋清一郎）という大学生は、「……事件の二日前に、屏風を見たと言っている」のである。実際、二日前に老婆の部屋に入って世間話をしているのである。それは、一体、何のためかと言えば、それは、斉藤から例の隠し場所を聞いてから、もう半年を過ぎた今、それが当時のままかを確かめるためであり、その方法は、お金を隠しているような噂があるような話をすると、彼女（老婆）の目は、その都度、床の間の植木鉢にそつと注がれ、それを見て、間違いないと確信するのであるが、その日に、屏風を見たと言っているのである。

ところが、その「屏風」というのは、実は、「……事件の前日に持ち込まれたものであり、事件の二日前には、その部屋には屏風などなかった」のである。——つまり、「事件」当日には、確かに「屏風」があり、その「屏風」の小野小町の顔のところに少し傷を付けてしまったために、そのことがあまりに強く「頭」（印象）に深く残ってしまったがために、事件の二日前にも、当然のことながら、その部屋に「屏風」はあったはずだと「錯覚」（勘違い）をしてしまい、つい「その屏風のことがなら覚えている」などと軽々しく口走ってしまった、しかも、主人公（ふきやせいしろう 落屋清一郎）という人は、その「屏風」には、極彩色の『六歌仙』の絵が描かれている、とまで言ってしまったのである。

それでは、なぜ、これが「致命的な失言」となるのかと言えば、それは、「……あの部屋に入ったのはたつた一度きりで、しかも、事件の二日前である」と言っている。つまり、事件の二日前と言えば、部屋にはまだ「屏風」などなかった状態である。そのなかったはずの「屏風」があつたと言ひ、しかも、その屏風には『六歌仙』の絵が描かれていたなどと、見てもいないのに、どうして言えるのか？ それは、まさに「事件」当日に、その「屏風」を見たからであり、もちろん、見ただけではなく、その「屏風」の小野小町の顔のところに少しばかり傷を付けてしまったというあまりに強い「意識」があつたがために、また、犯人は「さいとういさむ 斉藤勇」で決定ということ、すっかり気をゆるめてしまい、いわばうかれ気分、このような「致命的な失言」を生み出す要因になってしまったのである。

*

*

つまり、それは、最初から終盤まで「完全に伏されているもの」であり、作者以外、誰も、犯人も（読者も）、そのことを全く知らないものである。そして、例えば、明智なら明智が、最後に、相手（犯人）を追い詰めていく時に、初めて、まさに「登場して来る」ものであり、それまでは、相手（犯人）は、自分の「犯行」には絶対的な「自信」を持っていて、絶対にバレるはずはないと思っているのである。——ところが、その決定的な「隠し球」（いわば「決め手」）を突きつけられると、相手（犯人）は、一気に「心が動揺して」きて、まさに「絶対的な自信」ががたがたと音を立てて崩れはじめ、そして、最後には「犯行を認める」ような展開へとなっていくとともに、その場面展開こそは、まさに「推

理小説」の一番の「見せ場」にもなっている行くのである。

*

*

例えば、有名な『刑事コロンボ』の場合にも、基本的には全く同じことであり、犯人は、すべて「知能犯」（完全犯罪を狙う人）であり、しかも、最初から犯人が「人を殺す場面」とその後の「推移」その他などもすべて（九十九%まで）見せてしまい、最後に、たった一つだけ残して置いた「決定的な証拠」（残りの1%だけ）を以って、犯人を最後追い詰める、そして、終に「落とす」という手法なのである。その一つの例として、記憶は極めて不確かであるが、確か次のような内容の作品があったかと思う。――それは、まず、完全犯罪を狙う犯人は、相手がある「密室」へと閉じ込めてしまうのである。その「部屋」というのは、（例えば、銀行の何か金庫室のような部屋で）、内からは絶対に外に出られないような「完全なる密室」という設定なのである。そして、その「完全なる密室」に閉じ込められてしまった人は、土、日は、会社は休みなので、誰も助ける人もなく、やがて「酸欠」で死んでしまうのである。そして、月曜日になって、その「完全なる密室」を開けると、そこには閉じ込められていた人が床に倒れて死んでいるのである。彼をずっと捜していた刑事コロンボをはじめ、それを見た人たちはみな、彼は誤って密室に閉じ込められてしまい、内から外に出られずに死んでしまったのだと、まさに誰もが「事故死」だと思いつ込んでしまい、そこに茫然と立ち尽くすばかりとなるとともに、そこに居合わせていた犯人も、これで「完全犯罪」が成立したとニンマリと微笑むのである。……

そして、カメラは、床に倒れている人に近づいていき、最後は顔をアップに撮って、確かに死んでいることを確かめるのである。それから、カメラは、ずっと引いて、今度は、右側の方の白い壁を映し出すのである。最初は、何もないが、ゆっくりとカメラを右側へと移動していくと、その白い壁に何か「傷か汚れ」のようなものが付いている。あれは一体何だろうという感じで、カメラは、ゆっくりとその「傷か汚れ」のように見えるものと近づけていくと、そこには何と死んだ人が死ぬ前に書いた「ダイニング・メッセージ」が書いてあり、それは、もう助からないと覚悟を決めた時に、自らの手首を切って、その真っ赤な血を使って指で書いた文字であり、「……私は、誰々に閉じ込められて、殺された」と書いてあるのである。そして、ドラマは、この場面で音楽が流れて終わるのである。つまり、最後の最後になって、初めて、誰一人知らない、とっておきの「隠し球」（つまり「決め手」）が登場して来るといって典型的な例になるのである。

*

*

江戸川乱歩の世界
④ 陰獣

目次

江戸川乱歩の世界

陰獣

- 一、 二人の出逢い
- 二、 女性の顔や姿の様子
- 三、 静子の生い立ち
- 四、 最初の脅迫の手紙
- 五、 大江春泥の作風と生活
- 六、 春泥の新たなる脅迫状
- 七、 屋根裏からの時計の音
- 八、 屋根裏の遊戯の探索
- 九、 屋根裏の遊戯のまとめ
- 十、 六郎氏変死事件
- 十一、 寒川の最初の推理
- 十二、 洋館の硝子窓に人の影
- 十三、 事件から約一ヶ月間
- 十四、 二人の関係の急接近
- 十五、 寒川の「二つの思いつき」
- 十六、 本格的な推理一（全容を語る）
- 十七、 本格的な推理一（その検証）
- 十八、 ひとときの逢瀬
- 十九、 本格的な推理二（そのきっかけ）
- 二十、 本格的な推理二（きっかけの解説）
- 二一、 静子からの構曳の手紙
- 二二、 静子の衣装と土蔵の中
- 二三、 本格的な推理二（天井裏の鉤）
- 二四、 本格的な推理二（三つの推理）
- 二五、 本格的な推理二（二つの一致）
- 二六、 本格的な推理二（最終的推理）
- 二七、 本格的な推理二（全容を語る）
- 二八、 推理後の「二人の様子」
- 二九、 事件の結末

※ 参考文献

江戸川乱歩の世界
陰獣

江戸川乱歩の「陰獣」

例えば、江戸川乱歩には実に多種多様な「作品」があるかと思うが、その中でも、比較的评价の高い『陰獣』を取り挙げて、その「内容」をいろいろと考察してみたいと思う。

*

*

まず、本文の「冒頭」は、次のような内容から始まるものである。つまり、「……私は時々思うことがある。探偵小説家というものには二種類あって、一つの方は犯罪者型とも言いか、犯罪ばかりに興味を持ち、たとえ推理的な探偵小説を書くにしても、犯罪の残酷な心理を思うさま書かないでは満足しないような作家であるし、もう一つの方は探偵型とも言いか、ごく健全で、理智的な探偵の径路にのみ興味を持ち、犯罪者の心理などには一向頓着しないような作家であると。そして、私がこれから書くこうとする探偵作家大江春泥は前者に属し、私自身は恐らく後者に属するのだろう。従って、私は、犯罪を取扱う商売にも拘らず、ただ探偵の科学的な推理が面白いので、聊かも悪人ではない」とある。もちろん、江戸川乱歩という作家は、その「両方」を兼ね合わせた作家であつたということになるのだろう。

そして、この前の「事件」を振り返っては、「……恐らく、私ほど道徳的に敏感な人間は少ないと言ってもいいのだろう。そのお人好して善人な私が、偶然にもこの事件に関係したというのが、抑も事の間違いであつた。若し私が道徳的にもう少し鈍感であつたならば、私にくらかでも悪人の素質があつたならば、私はこうまで後悔しなくても済んだであろう。こんな恐ろしい疑惑の淵に沈まなくても済んだであろう。いや、それどころか、私はひよつとしたら、今頃は美しい女房と身に余る財産に恵まれて、ホクホクもので暮らしていたかも知れないのだ」とある。

一、二人の出逢い

それは、昨年の秋、十月なかばのこと、「……私は古い仏像が見たくなつて、上野の帝室博物館の、薄暗くガラシとした部屋を、足音を忍ばせて歩き廻つていた。部屋が広くて人気がないので、一寸した物音が怖いような反響を起こすので、足音ばかりではなく、咳払いさえ憚れるような気持であつた。博物館というものが、どうしてこうも不人気であるかと疑われる程そこには人影がなかった。陳列棚の大きなガラスが冷たく光り、リノリウム（建材で主に床材）には小さなほこりさえ落ちていなかった。お寺のお堂みたいに天井の高い建物は、まるで水の底にでも在るように、森閑と静まり返つていた。

丁度私が、ある部屋の陳列棚の前に立つて、古めかしい木彫りの菩薩像の、夢のようなエロティックに見入つていた時、うしろに、忍ばせた足音と、幽かな衣ずれの音がして、誰かが私の方へ近づいて来たのが感じられた。私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た。そこには、今の菩薩像と影を重ねて、黄八丈の様な柄の袴を着た、品のいい丸髻姿の女が立っていた。女はやがて私の横に肩を並べて立止り、私の見ていた同じ仏像にじっと眼を注ぐのであつた」とある。

*

*

さて、これが、有名な「二人の出逢い」の場面であるが、ここで最も大事なことは、次

のようなことである。つまり、「……どうしてこうも不人気であるかと疑われる程そこには人影がなかった」とある。それなのに、そのような場所に、どうして「女性がたった一人」で、このような不人気な博物館に來たのだろうか？ しかも、展示されている陳列品などは、いたるところに数多くあるというのに、なぜ、彼女は、主人公のいるところへと敢えて近づいて來たのだろうか？ それは、主人公自身、「……誰かが私の方へ近づいて來たのが感じられた。私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た」とある。それは、一人の男性としてドキドキするような気持ちとともに、「……なにかおかしい、こんなところに、女がたった一人で來るのもおかしいし、また、迷うことなく、自分の方へと近づいて來るのもおかしい」と、直感的に感じたからこそ、まさに「……私は何かしらゾツとして、前のガラスに映る人の姿を見た」のである。つまり、ほかに誰もいない、しかも、どこの誰かも知れない男一人でいるところに、しかも、いつ何をされるかも知わらないそんな男一人のところに、何の躊躇もなく、女がたった一人で近づいていくものだろうか？ ふつう、警戒するものだろう。——つまり、彼女は、彼が誰であるかはよく知っていて、最初から、すべて「計画的に主人公に近づいて行つた」ということである。だからこそ、彼女にはためらいというものが無いのである。

二、女性の顔や姿の様子

さて、私は、あさましいことだけれど、仏像を見ているような顔をして、時々チラチラと女の方へ眼をやらないではいられなかった。それ程その女は私の心を惹いたのだ。彼女は、青白い顔をしていたが、あんなに好ましい青白さを私は嘗て見たことがなかった。それは、この世に若し人魚というものがあるならば、きつとあの女のような優艶な肌を持つているに相違ない。どちらかと言えば、昔風の瓜実顔で、眉も鼻も口も首筋も、悉くの線が優に弱々しく、なよなよとしていて、よく昔の小説家が形容したような、触れば消えて行くかと思われる風情であつた。私は今でも、あの時の彼女のまつげの長い、夢見るようなまなざしを忘れることは出来ない。

どちらが初め口を切つたのか、私は今妙に思い出せぬけれど、恐らくは私が何かのきっかけを作つたのであろう。彼女と私とはそこに並んでいた陳列品について二言三言口を利き合つたのが縁となつて、それから博物館を一巡して、そこを出て上野の山内を山下へ通り抜けるまでの長い間、道づれとなつてポツリポツリと、色々の事を話し合つたのである。——そうして話をして見ると、彼女の美しさは一段と風情を増して來るのであつた。中でも彼女が笑う時の、恥らい勝ちな、弱々しい美しさには、私は何か古めかしい油絵の聖女の像でも見ているような、またはあのモナリザの不思議な微笑を思い起こすような、一種異様な感じに打たれないではいられなかった。彼女の糸切歯は真白で大きくて、笑う時には、唇の端がその糸切歯にかかつて、謎のような曲線を作るのだが、右の頬の蒼白い皮膚の上の大きな黒子が、その曲線に照応して、何とも言えぬ優しく懐しい表情になるのだつた。

だが、若し私が彼女の項にあの妙なものを発見しなかつたならば、彼女はただ上品で優しく弱々しい、触れば消えてしまふような美しい人という以上に、あんなにも強く私の心を惹かなかつたであらう。彼女は巧みに衣紋をつくらつて、少しも態とらしくなく、そ

れを隠していたけれど、上野の山内を歩いている間に、私はチラと見てしまった。彼女の項には、恐らく、背中の方まで深く、赤痣のような太い蚯蚓腫れが出来ていたのだ。それは生れつきの疵のようにも見えたし、また、そうではなくて、近頃出来た傷痕のようにも思われた。蒼白い滑らかな皮膚の上に、格好のいいなよとした項の上に、赤黒い毛糸を這わせたように見えるその蚯蚓腫れが、その残酷味が、不思議にもエロティックな感じを与えた。それを見ると、今迄夢のように思われた彼女の美しさが、俄かに生々しい現実味を伴って、私に迫って来るのであった。

*

*

さて、この場面は、彼女の「容姿・容貌」の特徴などを事細かに描いているが、しかし、大事なことは、見た目は、いかにも上品で優しく弱々しい、触れば消えてしまいそうな美しい人という印象を与えているが、しかし、その実は、彼女の「項から背中の奥へと赤痣の様なものを持つ女性」として、決して「ふつう一般の女性とは少し違う」という印象を与えているのである。——そして、彼女は、合資会社碌々商會の出資社員の一人である実業家小山田六郎氏の夫人、静子であること、また、彼女は、探偵小説の読者であって、殊に私の作品は好きで愛読しているということで、（それを聞いた時私はゾクゾクする程嬉しかったことを忘れないが）、作者と愛読者との関係から、二人は、自然と親しくなり、その美しい人と、それから度々手紙のやり取りをする程の間柄となるのである。

私は、若い女の癖に人氣のない博物館などへ来ていた静子の上品な趣味も好ましかったし、探偵小説の中でも最も理智的だと言われている私の作品を愛読している彼女の好みも懐しく、私は全く彼女に溺れ切ってしまった形で、誠に屢々彼女に意味もない手紙を送ったものであるが、それに対して、彼女は一々鄭重な、女らしい返事をくれた。独身で寂しがり屋の私は、この様なゆかしい女友達を得たことを、どんなに喜んだことであろう。もちろん、そのような関係になる事こそ、静子の、まさに「狙い」そのものである。

三、静子の生い立ち

さて、静子と主人公との手紙の上での交際は、そうして数ヶ月の間続いた。文通を重ねて行くうちに、私は非常にびくびくしながらも、私の手紙に、それとなく、ある意味を含ませていたこともいえないのだが、気のせいかな、静子の手紙にも、通り一遍の交際以上に、誠につつましやかではあったが、何かしら暖い心持がこめられて来る様になった。打聞けて言うのと、恥かしいことだけれど、私は、静子の夫の小山田六郎氏が、年も静子よりは余程とつていた上に、その年よりも老けて見える方で、頭などもすっかりはげ上がつている様な人だという事を、苦心をして探り出していた。が、今年の二月頃になって、静子の手紙に妙な所が見え始め、彼女は何かしら非常に怖がっている様に感じられた。

すると間もなく、静子から、「……一度御相談したいことがあるから、御伺いしても差支ないですか」という端書が来た。私はその「御相談」の内容をおぼろげには感じていたけれど、まさかあんな恐ろしい事柄だとは想像もしなかったので、愚かにも浮き浮きと嬉しがって、彼女との二度目の対面の楽しさを、様々に妄想していた程であったが、「お持ちしています」という私の返事を受け取ると、直ぐその日のうちに私を訪ねて来た静子は、もう私が下宿の玄関へ出迎えた時に、私を失望させた程も、うちしおれていて、彼女の「相

談」というのが又、私の先の妄想などはどこかへ行ってしまった程、異常な事柄だったのである。「……私本当に思いあまつて伺ったのでございます。先生なれば、聞いていただける様な気がしたものですから。でも、まだ昨今の先生にこんな打割った御相談をしましては失礼ではございませんかしら」と言うのであった。

彼女の思い込んだ様子を見ると、私もつい真剣になって、「……私に出来ることなら」と答えると、彼女は、「……本当に気味の悪いことでございますの」と前置きしてから、その「いきさつ」を彼女の幼年時代からの身の上話なども交えながら、次のような異様な事実を私に語るのであった。

*

*

まず、彼女の郷里は静岡であり、そこで彼女は女学校を卒業する間際まで、至極幸福に育ったとある。たった一つの不幸と言えるのは、彼女が女学校の四年生の時、平田一郎という青年の巧みな誘惑に陥って、ほんの少しの間彼と恋仲になったことであつた。なぜそれが不幸かというと、彼女は十八の娘のちよつとした出来心から恋の真似事をして見ただけで、決して真から相手の平田青年を好いていなかったからだ。そして、彼女の方では本当の恋でなかったのに、相手は真剣であつたからである。彼女はうるさくつき纏う平田一郎を避けよう避けようとする、そうされればされる程、青年の執着は深くなる。はては、深夜黒い人影が彼女の家の塀外をさまよつたり、郵便受けに気味の悪い脅迫状が舞い込んだりし始めた。十八の娘は彼女の出来心の恐ろしい報いに震え上がってしまったが、両親もただならぬ娘に心附いて、胸を痛めるのであった。

丁度その時、静子にとっては、寧ろそれが幸いであつたとも言えるのだが、彼女の一家に大きな不幸が訪れ、それは、当時経済界の大変動から、彼女の父は、弥縫出来ない（取り繕えない程の）多額の借財を残し、商売を畳んで、殆ど夜逃げ同然に、身を隠さねばならぬ羽目になったのである。この予期せぬ変化のために、静子は今少しという所で女学校を中途退学になったが、一方では、突然の転宅によって、気味の悪い平田一郎の執念からは逃れることが出来たので、彼女はホッと胸なでおろす気持だったのである。

ただ、彼女の父親はそれが元で、病の床につき、間もなく死んで行つたが、それから、たった二人になった母親と静子の上に、暫くの間みじめな生活が続いたが、その不幸は大して長くはなかった。やがて、彼女等が世を忍んでいた同じ村の出身者である実業家の小山田氏が彼女等の前に現われた。それが救いの手であつた。小山田氏はある垣間見（ちらつと見）に静子を深く恋して、伝手を求めて結婚を申し込んだ。静子も小山田氏が嫌いではなかった。年こそ十歳以上も違っていたけれど、小山田氏のスマートな紳士振りに、あるあこがれを感じていた。縁談はスラスラと運んで行つたのである。

そして、小山田氏は母親とともに、花嫁の静子を伴つて東京の邸に帰つた。それから七年の歳月が流れた。彼等が結婚してから三年目かに、静子の母親が病死したこと、それから暫くして、小山田氏が会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をしたこと（帰京したのはつい一昨年の暮れであつたが、その二年の間、静子は毎日、茶、いけ花、音楽等の師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという事）などを除いては、彼等の一家にはこれという出来事もなく、夫婦仲も至極円満であり、幸せな月日が続いていたが、ただ、結婚する時、静子は、小山田に嘘をついて、平田一郎のことをつい隠してしまい、あくまで小山田の他には男は知らないと言ひ張つていたのである。

＊

＊

さて、ここまでの内容は、静子の「生い立ち」と家族との関係や小山田氏との出逢いから今日までの経過などが、実に事細かによく説明されていて、現在までの状況がはっきりと分かるとともに、夫の小山田氏は大の奮闘家で、その七年間にメキメキと財をふやし、今では同業者の間に押しも押されぬ地盤を築いていたのである。その実業家小山田氏の夫人として、静子は、毎日、幸せな生活を送っていたが、突然、かつての恋人であった平田一郎から脅迫を受けるようになるのである。しかも、そのかつての恋人平田一郎という人は、今やなんと有名な探偵小説家の「大江春泥」となっていたのである。

四、脅迫の手紙

さて、静子は、「……本当にお恥かしいことですが、わたくし、結婚の時、小山田に嘘を附いてしまったのでございます。その平田一郎のことを、つい隠してしまったのです。（中略）、そして、その嘘を今でも続けているのでございます。小山田が疑えば疑うだけ、私は余計に隠さなければならなかったのです。人の不幸って、どんな所に隠れているのか、本当に恐ろしいと思いますわ。七年前の嘘が、それも決して悪意でついた嘘ではありませんでしたのに、こんなにも恐ろしい姿で、今わたくしを苦しめる種になりました」と、そう言つて、その平田から来たという数通の手紙を見せた。私はその後それらの手紙の保管を頼まれて、今でもここに持っているが、そのうち最初に来たものは、話の筋を運んで行くのに都合がよいので、それをここに貼り付けておきたいと思う。

＊

＊

静子さん、私はとうとう君を見つけた。君の方では気づかなんだけれど、私は君に出逢った場所から君を尾行して、君の邸を知ることが出来た。小山田という今の君の姓も分かった。君はまさか平田一郎を忘れはしないだろう。どんなに虫の好かぬ奴だったかを覚えていよう。私は君に捨てられてどれ程悶えたか、薄情な君には分かるまい。悶えて、深夜君の邸の周りをさまよった事幾度であつたらう。だが、君は、私の情熱が燃え立てば燃え立つ程、益々冷かになつて行つた。私を避け、私を恐れ、遂には私を憎んだ。君は恋人から憎まれた男の気持を察することが出来るか。私の悶えが嘆きとなり、嘆きが恨みとなり、恨みが凝つて、復讐の念と変わつて行つたのが無理であろうか。君が家庭の事情を幸いに、一言の挨拶もなく、逃げるように私の前から消去した時、私は数日、飯も食わないで書斎に座り通していた。そして、私は復讐を誓つたのだ。私は若かつたので、君の行衛を探す術を知らなんだ。多くの債権者を持つ君の父親は、何人にもその行先を知らせないで、姿をくらましてしまった。私はいつ君に逢えるか分からなんだ。だが、私は長い一生を考えた。一生の間君に逢わないで済もうとはどうしても考えられなかった。

私は貧乏だった。食う為に働かねばならぬ身の上だった、一つはそれが、あくまで君の行衛を尋ね廻ることを妨げたのだ。一年、二年、月日は矢のように過ぎ去つて行つたが、私はいつまでも貧困と闘わなければならなかった。そして、その疲労が、忘れるともなく君への恨みを忘れさせた。私は食うことで夢中だったのだ。だが、三年ばかり前、私に予期せぬ幸運が巡つて来た。私はあらゆる職業に失敗して、失望のどん底にある時、うさはらしに一遍の小説を書いた。それが機縁となつて、私は小説で飯の食える身分となつたの

だ。君は今でも小説を読んでるのだから、多分大江春泥という探偵小説家を知っているだろう。彼はもう一年ばかり何も書かないけれど、世間の人は恐らく彼の名前を忘れてはいない。その大江春泥こそかく言う私なのだ。君は、私が小説家としての虚名に夢中になって、君に対する恨みを忘れてしまったとも思うのか。否、否、私のあの血みどろな小説は、私の心に深き恨みを蔵していたからこそ書けたとも言えるのだ。あの猜疑心、あの執念、あの残虐、それらが悉く私の執拗なる復讐心から生まれたものだ」と知ったならば、私の読者達は、恐らく、そこに籠れる妖気に身震いを禁じ得なかったであろう。

静子さん。生活の安定を得た私は、金と時間の許す限り、君を探し出す為に努力した。勿論君の愛を取戻そうなどと不可能な望みを抱いた訳ではない。私には已に妻がある。生活の不便を除く為に娶った形ばかりの妻がある。だが、私にとって、恋人と妻とは全然別個のものだ。つまり、妻を娶ったからと言って、恋人への恨みを忘れる私ではないのだ。

静子さん、今こそ私は君を見つけ出した。私は喜びに震えている。私の多年の願いを果たす時が来たのだ。私は長い間、小説の筋を組み立てる時と同じ喜びを以て、君への復讐手段を組み立てて来た。――君が最も苦しみ、また、君が最も怖がる方法を熟慮して来た。いよいよそれを実行する時が来たのだ。私の歓喜を察してくれ給え。

君は警察その他の保護を仰ぎ私の計画を妨げることは出来ない。私の方にはあらゆる用意が出来ているのだ。ここ一年ばかりというものの、新聞記者、雑誌記者の間に私の行衛不明が伝えられている。これは何も君への復讐の為にしたことではなく、私の厭人癖と秘密好みから出た韜晦なのだが、それが計らずも役に立った。私は一層の綿密さを以て世間から私の姿をくramsすであろう。そして、着々君への復讐計画を進めて行くであろう。

君は私の計画を知りたがっているに相違ない。だが、私は今その全体を洩らすことは出来ぬ。恐怖は徐々に迫って行く程効果があるからだ。しかし、君がたって聞きたいと言うならば、私は私の復讐事業の一端を洩らすことを惜しむものではない。例えば、私は今から三日以前、即ち、一月三十一日の夜、君の家の中で君の身边に起こったあらゆる些事を、寸分の間違いもなく、君に告げることが出来る。

それは、午後七時より七時半まで、君は君たちの寝室にあてられている部屋の小机に凭れて小説を読んだ。小説は広津柳浪の短編集「変目伝」であった。七時半から七時四十分まで、女中に茶菓を命じ、風月の最中を二個、お茶を三碗喫した。七時四十分から上廁（便所）約五分にして、部屋へと戻る。それから九時十分頃まで、編物をしながら物思いに耽った。九時十分主人帰宅で、九時二十分頃から十時少し過ぎまで主人の晩酌の相手をして雑談した。その時君は主人に勧められて、グラスに半分ばかり葡萄酒を喫した。晩酌が終るとすぐ女中に命じて二つの床のべさせ、兩人上廁（便所）の後就寝する。それから十一時まで兩人とも眠らず、君が再び君の寢床に横たわった時君の家のおくれたボンボン時計が十一時を報じた。――君は、この汽車の時間表のように忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか。

二月三日深夜　我が生涯より恋を奪いし女へ

復讐者より

*

*

例えば、本文のその中に、「……私は君に捨てられて、どれ程悶え苦しんだか、薄情な君には分かるまい。悶えに悶えて、深夜君の邸の周りをさまよった事幾度であったろう。だが、君は、私の情熱が燃え立てば燃え立つ程、益々冷かになって行つた。私を避け、

私を恐れ、遂には私を憎んだ。——君は恋人から憎まれた男の気持を察しることが出来るか。私の悶え（苦しみ）が嘆きとなり、その嘆きが恨みとなり、その恨みが凝つて、復讐の念と変わって行つたのが無理であろうか？」とある。これは、まさに「ストーリー心理」そのものである。——つまり、「……自分は、なぜ、そこまで嫌われ、また、なぜ、そこまで憎まれなければならないのか！」と。私は、それがどうしても「許せない」という心理である。その結果、——君が最も苦しみ、また、君が最も怖がる方法で、愈々、その「復讐」を実行する時が来たということである。……これは、何度も繰り返すようであるが、これは、まさに「ストーリーカードの犯罪心理」そのものである。

また、有名な探偵作家「大江春泥」という人は、三年前に、突然、文壇に登場して来て、人気を博し、二年間、文筆活動をしたあと、彼はもう一年ばかり何も書いていないとある。これは、例えば、四年前、「……小山田氏が会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅をし、帰国したのは一昨年の暮れであり、その二年の間（夫の留守の間）、静子は、毎日、茶、いけ花、音楽などの師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという」時期と、ぴつたりと符合するのである。——つまり、静子は、夫が二年間海外に旅に出ている間、毎日、茶、いけ花、音楽等の稽古に通つて、独居の淋しさを慰めていたという名目で、実は、いわゆる「大江春泥」という作家名で、探偵小説などを書いていたのである。そして、一年前、夫が帰国したので、その時から文筆活動はやめていたのである。つまり、恋人「平田一郎」も探偵作家「大江春泥」というのも、恐らく静子の「一人芝居」に過ぎないのであり、それゆえ、この「脅迫状」も、静子自身が書いたものであり、だからこそ、「……今から二日前、即ち、一月三十一日の夜、君の家の途中で君の身辺に起つたあらゆる些事を、十分の間違いもなく、君に告げることが出来る。（中略）、君は、この汽車の時間表の様に忠実な記録を読んで、恐怖を感じないでいられるだろうか」とあるが、それは、まさに「静子自身」が脅迫状を書いているからこそ、そういうことができるのである。つまり、かつての恋人「平田一郎」という存在は、ほんとうに実在していて、しかも、実際に静子と「恋愛関係」があつたのかどうかは（最後まで）厳密にはよく分からないのであるが、しかし、少なくとも探偵作家「大江春泥」とその「妻」という存在は、静子が「勝手にでつち上げた架空の人物たち」であるとともに、それは、まさに「静子自身」が実際に自ら演じていたものになるのである。

*

*

ところで、平田の「脅しの手紙」は、その他に三通ばかりあつたが、いずれ大同小異で、（消印はどれも違つた局からであつたが）、復讐の呪詛の言葉のあとに、静子のある夜の行為が、細大漏らさず、正確な時間を附加えて記入してあることに変りはなかつた。殊に、彼女の寝室での秘密は、どの様な淫靡な点までも、はれがましくもまざまざと描き出されていた。顔の赤らむ様なある仕草や、ある言葉さえもが冷静に描写してあつたのである。静子は、その様な手紙を他人に見せることは、どれ程恥ずかしく苦痛であつたか、察するに余りあつたが、それを忍んでまで、彼女が私を相談相手に選んだのは、よくよくのことと言わねばならぬ。それは一方では、彼女が過去の秘密を、つまり、彼女が結婚以前既に処女でなかつたという事実を、夫の六郎氏に知られることを、どれ程恐れていたかということを示すものであり、同時にまた、一方では、彼女の私に対する信頼がどんなに厚いかを示すものであつたのである。

また、静子は、「……わたくし、主人側の親類の他には、身内と言つては一人もございませんし、お友達にこんなことを相談するような親身の方はありませんので、本当に不躰だとは思いましたけれど、わたくし、先生におすがりすれば、私がどうすればよいか、お教え下さるでしようと思ひましたものですから」と。彼女にそんな風に言われると、この美しい女がこんなにも私を頼っているかと思うと、私は胸がワクワクするほど嬉しかった。私がおおえしゆんでいと同じ探偵作家であつたこと、少なくとも小説の上では、私が仲々巧みな推理家であつたことなどが、彼女が私を相談相手に選んだ幾分の理由を為していたに相違ないが、それにしても、彼女が私に対して余程の信頼と好意を以ていないでは、こんな相談がかけられるものではないのだ。

言うまでもなく、私は静子の申出を容れて、出来るだけの助力をすることを承諾した。大江春泥が静子の行動を、これ程巨細に知る為には、小山田氏の召使を買収するか、彼自身が邸内に忍び込んで、静子の身近く身をひそめているか、またはそれに近い悪巧みが行なわれていたと考える他はなかった。彼の作風から推察しても、春泥はそんな変てこな真似をし兼ねない男なのだから。私はそれについて、静子に心当りを尋ねて見たが、不思議なことには、その様な形跡は少しもないということであつた。召使達は気心の分かつた長年住込みのものばかりだし、彼の邸の門や塀などは主人が人一倍神経質の方で、かなり嚴重に出来ているし、それに仮に邸内に忍び込めたところで、召使達の目にふれないで、奥まつた部屋にいる静子の身辺に近づくことは、殆ど不可能ということであつた。つまり、「……大江春泥が静子の行動を、これ程巨細に知る為には……」、一つは、小山田氏の「召使」などを買収して、その静子の色々な「秘密の情報」などを得るという方法があるが、それは全面的に否定されている。そして、もう一方の、「……彼の邸の門や塀などは主人が人一倍神経質の方で、かなり嚴重に出来ているし、それに仮に邸内に忍び込めたところで、召使達の目にふれないで、奥まつた部屋にいる静子の身辺に近づくことは、殆ど不可能ということであつた」が、しかし、たった「一つ」だけその「方法」があつたという展開になるのである。

五、大江春泥の作風と生活

そこで、探偵作家（寒川）は、先ず、大江春泥の所在をつきとめようとする。というのも、私は以前から私と正反対の傾向の春泥を、ひどく虫が好かなんだ。女の腐った様な猜疑に満ちた繰言で変態読者をやんやと言わせて得意がっている彼が無性に癢に触っていた。だから、あわよくば、彼のこの陰險な不正行為をあばいて、吠面をかかせてやりたいものだと思つていた。ところが、彼の行衛（行動）を探ることが、あんなにも難しからうとは、まるで予想していなかった。

大江春泥は彼の手紙にもある通り今から四年ばかり前、商売違いの畑から突如として現われた探偵小説家であつた。彼が処女作を発表すると、当時日本人の書いた探偵小説というものが殆どなかった読書界は、物珍らしさに非常な喝采を送つた、大げさに言えば、彼は一躍にして読書界の寵児になつてしまつたのだ。彼は非常に寡作ではあつたが、それでも色々な新聞雑誌に次々と新しい小説を発表して行つた。それは一つ一つ、血みどろで、陰險で、邪悪で、一読肌に粟を生じる体の、不気味ないまわしいものばかりであつたが、

それが却って読者を惹きつける魅力となり、彼の人気は仲々衰えなかった。

私も殆ど彼と同時ぐらいに、従来の少年少女から探偵小説の方へ鞍替えしたのであるが、そして人の少ない探偵小説界では、相当名前を知られるようになったのであるが、大江春泥と私とは、作風が正反対と言ってもいい程違っていた。彼の作風が暗く、病的で、ネチネチしていたに反して、私のは明るく、常識的であった。当然の勢いとして、私たちは妙に制作を競い合うような形になっていた。そして、お互いに作品をけなし合いさえした。と言つても癢に触れることには、多くは私の方で、春泥は時たま私の議論を反駁して来ることもあったが、大抵は超然として沈黙を守っていた。そして、次々と恐ろしい作品を発表して行つた。私はけなしながらも、彼の作に籠る一種の妖氣にうたれないではいらなかった。彼は何かしら燃え立たぬ陰火のような情熱を持っていた。(それが彼の手紙にある様に静子への執念深い怨恨からであつたとすれば、やや肯くことが出来るのだが)、得体の知れぬ魅力が読者を捉えた。実を言うと、私は、彼の作品が喝采される毎に、言ひ様の無い嫉妬を感じずにはいらなかった。私は子供らしい敵意をさえ抱いた。どうかして彼奴に打ち勝つてやりたいという願ひが、絶えず私の心の隅に蟠っていた。だが、彼は一年ばかり前から、ばつたりと小説を書かなくなり所在をさえくらましてしまった。人氣が衰えたわけではなく、雑誌記者などは散々彼の行衛を探し廻つた程であつたが、どうしたわけか、彼はまるで行衛不明であつた。私は虫の好かぬ彼ではあつたが、さていなくなつて見れば、一寸寂しくもあつた。子供らしい言ひ方をすれば、好敵手を失つたという物足りなさが残つた。そういう大江春泥の最近の消息が、しかも極めて変てこな消息が、小山田静子によって齎されたのだ。私は恥ずかしいことだけれど、かくも奇妙な事情の下に、昔の競争相手と再会したことを、心密かに喜ばないではいらなかった。

*

*

だが、大江春泥が探偵物語の組立てに注いだ空想を、一転して実行まで押し進めて行つたことは、考えて見れば、或いは当然の成行きであつたかも知れない。このことは世間でも大方は知っている筈だが、ある人が言つたように、彼は一個の「空想的犯罪生活者」であつた。彼は、丁度殺人鬼が人を殺すのと、同じ興味を以て、同じ感激を以て、原稿紙の上に彼の血みどろの犯罪生活を営んでいたのだ。彼の読者は、彼の小説につき纏つて一種異様の鬼氣を記憶するであらう。彼の作物が常に、並々ならぬ猜疑心、秘密癖、残酷性を以て、満たされていたことを記憶するであらう。彼はある小説の中で、次のような不気味な言葉さえ洩らしていた。

「……遂に彼は單なる小説では満足できない時が来るのではあるまいか。彼はこの世の味気なさ、平凡さにあきあきして、彼の異常な空想を、せめては紙の上に書き現わすことを楽しんでいたので。それが彼が小説を書き初めた動機だったのです。でも、彼は今、その小説にさえあきあきしてしまつたのです。この上は、彼は一体どこに刺激を求めたらよいのでしょうか。犯罪、アア、犯罪だけが残されていました。あらゆることをし尽くした彼の前には、世にも甘美なる戦慄だけが残されていました。……」

彼は又、作家としての日常生活に於ても、甚だしく風変わりであつた。彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡っていた。訪問者が彼の書齋に通されることは極めて稀であつた。彼はどんな先輩にも平気で玄關払いを喰わせた。それに、彼はよく転居したし、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかったのだ。

る。噂によると、彼は昼も夜も万年床の中に寝そべって、食事にしろ執筆にしろ、すべて寝ながらやっているということであった。そして、昼間も雨戸をしめ切って、熊と五燭の電燈をつけて、薄暗い部屋の中で、彼一流の不気味な妄想を描きながら、蠢いているのだということであった。

私は彼が小説を書かなくなつて、行衛不明を伝えられた時、ひよつとしたら、彼はよく小説の中で言っていたように、浅草あたりのゴミゴミした裏町に巢喰つて、彼の妄想を実行し始めたのではあるまいかと、ひそかに想像をめぐらしていたのだが、果たせるかな、それから半年もたたぬ内に、彼はまさしく一個の「妄想実行家」（小説の中の殺人ではなく、いまや現実の中での殺人を実行しよう）として、私の前に現われたのであった。

私は春泥の行衛を探すのには、新聞社の文芸部か雑誌社の外交記者に聞き合せるのが最も早道であると考えた。それにしても、春泥の日常が甚だしく風変わりで、滅多に訪問客にも会わなかったというほどだし、雑誌社などでも、一応は彼の行衛を探したあとなのだから、よほど彼と昵懇であつた記者を捉えなければならぬのだが、幸いにも丁度おあつたえ向きの人物が、私の心易い雑誌記者の中にあつた。それはその道では敏腕の聞こえ高い博文館の本田という外交記者で、彼は殆ど春泥係りの様にして、春泥に原稿を書かせる仕事をやっていた時代があつたし、彼はその上、外交記者（事件を追つて社外で取材活動をする記者）だけあつて、探偵的な手腕も仲々あなどり難いものがあるのだ。

そして、本田の言う所によると、春泥は小説を書き始めた頃は郊外の池袋の小さな借家に住んでいたが、それから文名が上り、収入が増すに従つて、少しずつ手広な家へ（と言つても大抵は長屋だつたが）転々として移り歩いた。牛込の喜久井町、根岸、谷中初音町、日暮里、金杉等々、本田はそうして春泥の約二年間に転居した場所を七つほど列挙した。根岸へ移り住んだ頃から、春泥は漸く流行つ子となり、雑誌記者などが随分おしかけたものであるが、彼の人間嫌いはその当時から、いつも表戸をしめて、奥さんなどは裏口から出入りしていると言つた風であつた。折角尋ねても逢つてはくれず、居留守を使つておいて、あとから手紙で、「……私は人嫌いだから、要件は手紙で申送つてくれ」という詫状が来たりするので、大抵の記者はへこたれてしまい、春泥にあつて話をしたものは、ほんの数える程しかなかった。小説家の奇癖には慣れつこになつている雑誌記者も、春泥の人嫌いを持余していた。

しかし、よくしたもので、春泥の細君というのが、仲々の賢婦人で、本田は原稿の交渉や催促なども、この細君を通じてやるが多かつた。でも、その細君に逢うのも仲々面倒で、表戸が締まっている上に、時には「病中面会謝絶」とか、「旅行中」とか、「雑誌記者諸君。原稿の依頼はすべて手紙で願います。面会はお断りです」などという手厳しい掛け札さえぶら下がっているのだから、さすがの本田も辟易して、空しく帰る場合も一度ならずあつた。そんな風だから、転居をしても通知を出すではなく、すべて記者の方で郵便物などを元にして探し出さなければならぬのであつた。

*

*

さて、探偵作家（寒川）は、先ず、大江春泥の所在をつきとめようとする。というのも、私は以前から私と正反對の傾向の春泥を、ひどく虫が好かなんだ。女の腐った様な猜疑に満ちた繰言で変態読者をやんやと言わせて得意がつている彼が無性に癪に触つて、だから、彼のこの陰險な不正行為をあばいてやりたいと思つたからであるが、彼の行衛（行

動）を探ることが、あんなにも難しかろうとは、まるで予想していなかったとある。

それは、彼は極度の人嫌いであり、世間に顔出しをせぬ男であつたからである。つまり、彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡つていた。また、彼はよく転居したり、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかったのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、言うまでもなく、探偵作家「大江春泥」とは、すなわち、「静子自身」であつたからである。そして、そのことを世間や夫に知られることを何よりも恐れていたとともに、もう一つは、静子自身にはもつと恐ろしい「密かな計画」があり、それを遂行するためにはどうしても必要不可欠な道具立てでもあつたのである。また、「……春泥の細君というのが、なかなかの賢婦人で、本田は原稿の交渉や催促なども、その細君を通じてやるが多かつた」とあるが、その「細君」も、当然のことながら、「静子自身」が変装して対応していたのである。一方、その「本田」という人物であるが、彼は、外交記者（事件を追つて社外で取材活動をする記者）であり、また、彼は殆ど春泥係りの様にして、春泥に原稿を書かせる仕事をやつていた時代もあつたので、その「本田」という人にも、いわゆる「春泥捜し」を手伝つてもらふことになるが、例えば、大江春泥は、時々変装なんかして浅草辺りをぶらつくという噂を聞いて、その浅草辺りを探り廻るようなこともするのであつた。

六、新たな脅迫状

さて、問題の「春泥捜し」は、少しも進展しない状況のまま、やがて、静子から主人公（寒川）へ一本の電話がかかつて来る。その「内容」は、次のようなものである。つまり、「……ある日小山田静子から私の宿へ電話がかかつて、大変心配な事が出来たから、一度来て欲しい。主人は留守だし、召使達も、気の置けるような者は、遠方に使いにだし、待つてゐるから」というのであつた。彼女は自宅の電話を使わず、熊々自動電話からかけたらしく、彼女がこれだけのことを言うのに、非常にためらい勝ちであつたものだから、途中で三分の時間が来て、一度電話が切れた程であつた。

主人の留守を幸い、召使は使いにし出して、ソツと私を呼び寄せるといふ、このなまめかしい形式が、一寸私を妙な気持にした。勿論それだからというのではないが、私はすぐさま承諾して、浅草山の宿にある彼女の家を訪ねた。小山田家は商家と商家の間を奥深く入つた所にある。一寸昔の寮といった感じの古めかしい建物であつた。正面から見たのでは分からぬけれど、多分裏を大川が流れているのではないかと思われた。——この「家の裏は大川」ということが、やがて起こる事件と深く関わつて来るのである。

ところで、寮の見立てにふさわしくないのは、新しく建増したと見える、邸を取り囲んだ甚だしく野暮なコンクリート塀と（その塀の上部には盗賊除けのガラスの破片さえ植えてつてあつたが）母屋の裏の方にそびえている二階建ての西洋館であつた。その二つのものが、如何にも昔風の日本建てと不調和で、黄金万能の泥臭い感じを与えていた。（この「二階建て」と「塀の上部に盗賊除けのガラスの破片が植えてつてある」というのも、実は事件と「深い関係」を持つて来るのである。）

さて、刺を通ずる（名刺を出して面会を求める）と、田舎者らしい小女の取次で、二階建ての「西洋館」の方の「応接間」へと案内されたが、そこには静子が、ただならぬ様子

で待ち構えていた。彼女は幾度も幾度も、私を呼びつけた無駭を詫びたあとで、何故か小聲になって、「……先ずこれを見てくださいまし」と言って、一通の封筒を差し出した。そして、何を恐れるのか、うしろを見る様にして、私の方へ寄って来るのだった。それはやっぱり「大江春泥」からの手紙であつたが、内容がこれまでのものとは少々違っているので、左にその全文を貼りつけて置くことにするとある。

*

静子、お前の苦しんでいる様子が目に見えるようだ。お前が主人には秘密で、私の行衛をつきとめようと苦心していることも、ちゃんと私は分かっている。だが、無駄だから止すがいい。たとえお前に私の脅迫を主人に打聞ける勇気があり、その結果警察の手を煩わしたところで、私の所在は分かりつこないのだ。私がどんなに用意周到な男であるかは、私の過去の作品を見ても分かるはずではないか。

さて、私の小手調べも、この辺で打ち切り時だろう。私の復讐事業は第二段に移る時期に達したようだ。それについて私は少く予備知識を与えておかねばなるまい。私がどうしてあんなにも正確に、夜毎のお前の行為を知ることが出来たか。もうお前にも大方想像がついているだろう。つまり、私はお前を発見して以来、影のようにお前の身辺につきまといつてゐるのだ。お前の方からはどうしても見ることは出来ないけれど、私の方からはお前が家にいる時も、外出した時も、寸時の絶え間もなくお前の姿を凝視しているのだ。私はお前の影になり切ってしまったのだ。現に今、お前がこの手紙を読んで震えている様子をも、お前の影である私は、どこかの隅から、目を細めてじつと眺めているかも知れないのだ。

お前も知っている通り、私は夜毎のお前の行為を眺めている内に、当然お前達の夫婦仲の睦じさを見せつけられた。私は無論烈しい嫉妬を感じないではいられなかった。これは最初復讐計画を立てた時、勘定に入れて置かなかった事柄だったが、しかし、そんな事が毫も私の計画を妨げなかったばかりか、却って、この嫉妬は私の復讐心を燃え立たせる油となった。そして、私は私の予定にいささかの変更を加える方が、一層私の目的にとって有効であることを悟った。というのは外でもない。最初の予定では、私はお前を窘めに窘め抜き、恐わがらせに恐わがらせ抜いた上で、徐ろにお前の命を奪おうと思つてゐたのだが、此間からお前達の夫婦仲を見せつけられるに及んで、お前を殺すに先だつて、お前の愛している夫の命を、お前の目の前で奪い、それから、その悲歎を充分味わせた上で、お前の番にした方が、仲々効果的ではないかと考える様になった。そして、私はそれに極めたのだ。だが慌てることはない。私はいつも急がないのだ。第一、この手紙を読んだお前が、充分苦しみ抜かぬ内に、その次の手段を実行するというのは、余りに勿体ないことだからな。

三月十六日深夜

復讐鬼より

静子殿

*

*

さて、今回の新たな「脅迫状」は、最初の「静子へのひたすらの恨み」とは違って、それは、「……夜毎のお前の行為を眺めている内に、お前達の夫婦仲の睦じさに烈しく嫉妬して、お前を殺す前に、お前の愛する夫の命を奪うことに極めた」というものである。これは、一体、何を意味するのだろうか？　つまり、今回は、なぜか「夫婦仲の睦じさ」

を殊更に強調している。それは、一体、なぜなのか？ それは、静子の「真の目的」は、実は「夫殺し」にあるのである。それゆえ、「夫婦仲の睦じさ」を殊更に強調しておく必要性が、何が何でもあったということである。というのも、「……夫が殺されて、最初に疑われるのは、誰でもない、それは、妻だからである」。――つまり、警察に、夫との「夫婦仲」は、どうだったと疑われた時に、二人の「夫婦仲」は、誰もが嫉妬するほどの「睦じさ」であつたと、主人公（寒川）に心の底からそう言わせるための、つまり、「生き証人」に仕立てるための、まさに巧妙な「仕掛け」でもあるのです。それは、最初から今度の「脅迫状」に至る迄、夜毎の「夫婦の行為」を微に入り細に入るまで事細かに描き出すことによって、「夫婦仲の睦じさ」を徹底して主人公（寒川）の「頭の中」（或いは「心の中」）に刷り込ませ、静子が「疑われた時」に、「……彼女（静子）には、夫を殺す理由（動機）など何もない」と、主人公（寒川）に証言してもらうための、まさに巧妙な「仕掛け」でもあるのである。つまり、静子は、探偵小説家の「寒川」を巧みに利用して、まさに「夫殺し」の「完全犯罪」を綿密に計画して、それを今、現に実行しようとしているのである。

七、屋根裏からの時計の音

さて、春泥のこの残忍酷薄を極めた文言を読むと、私は流石にゾツとしないではないしなかったが、私は強いて平気を装いながら、「……この脅迫状は小説家の妄想に過ぎないことを繰り返して説く外はなかった」のです。すると、「……どうか、先生、もっとお静かにおっしゃって下さいまし」と言いながら、時々じつと一つ所を見つめて、耳をすます様な仕草をするのであつた。そして、「……先生、わたくし、頭がどうかしたのではないかと思いますわ。でも、あんなことが本当だったのでしょか」と言うので、主人公（寒川）は、「……何かあつたのですか」と聞くと、「……この家の中に平田さんがいるのでございます」と言うので、「……どこにですか」と、私は彼女の意味が呑込めないで、ぼんやりとしていた。すると、静子は思ひきつたように立ち上がって、真っ青になって、私をさし招くのです。それを見ると、私も何かしらワクワクして彼女のあとに従った。彼女は途中で私の腕時計に気付くと、何故か私にそれはずさせ、テーブルの上へ置きに帰った。それから、私たちは足音をさええ忍ばせて短い廊下を通して、日本建ての方の静子の居間だという部屋へ入って行ったが、その襖を開ける時、静子は、すぐその向こう側に曲者が隠れてでもいるような恐怖を示した。

すると、主人公（寒川）は、「……変ですね。昼日中、あの男が御宅へ忍び込んでいるなんて、何かの思い違いじゃありませんか」と、私がそんなことを言いかけると、彼女はハッとしたようにそれを手真似で制して、私の手を取って、部屋の一隅へ連れて行くと、目をその上の天井に向けて、「……黙って聞いてごらん下さい」というような合図をするのだった。そして、「……時計のコチコチという音が聞こえませんか？」と、静子は聞き取れぬ程の小声で私に尋ねた。「……いいえ、時計って、どこにあるんです」と聞くと、静子はまた黙って、暫く聞き耳を立てていたが、やっと安心したものか、「……もう聞こえませんか」と言って、また私を招いて洋館の元の部屋に戻ると、彼女は異常な息づかいで、次のような妙なことを話し始めたのです。それは、次のようなものである。

＊

＊

彼女は、その時、居間で一寸した編物をしていたが、そこへ女中が先に貼り付けた春泥の手紙を持つて来た。もうこの頃では、上封を見ただけで一目でそれと分かるようになっていたので、彼女はそれを受け取ると何とも言えぬいやな気持ちになったが、でも、開けて見ないでは、一層不安なので、怖々封を切つて読んで見た。そして、事が主人の上にまで及んで来たのを知ると、もうじつとしてはいらなかった。彼女は何故ということもななく立ち上がつて、部屋の隅へ歩いて行つた。そして、丁度筆箱の前に立止つた時、頭の上から、非常に微かな地虫の鳴き声でもあるような物音が聞こえて来るように感じた。

「……私、耳鳴りではないかと思つたのですけれど、じつと辛抱して聞いていますと、耳鳴りとは違つた、金のふれ会うような、カチ、カチつていう音が、確かに聞こえてくるのでございます」とある。(それでは、なぜここに「時計」が出て来るのか？ それは、春泥の手紙には「……必ず詳細な時刻が記されている。それは、この汽車の時間表のように忠実な記録とある様に、そのためには、春泥は、常に「懐中時計」を身につけていなければならず、その「時計」の音が天井裏から聞こえて来るということである。)

それは、その天井板の上に人が潜んでいるのだ。その人の胸の懐中時計が秒を刻んでいるのだ。もしか考えられなかった。偶然彼女の耳が天井に近くなつたのと、部屋が非常に静かであつた為に、神経が鋭くなつていた彼女には、天井裏の微かな微かな金属の囁きが聞こえたのであろう。若しや違つた方向にある時計の音が、光線の反射みたいな理屈で、天井からのように聞こえたのではないかと、その辺を隈なく調べて見たけれど、近くに時計など置いてなかった。

彼女はふと「……現に今、お前がこの手紙を読んで震えている様子をも、お前の影である私は、どこかの隅から、目を細めてじつと眺めているかも知れないのだ」という手紙の文句を思い出した。すると、丁度その天井が少しそり返つて、隙間が出来ているのが彼女の注意を惹いた。その隙間の奥の方の真暗な中で、春泥の目が細く光っているようにさえ思われて来た。「……そこにいらつしやるのは、平田さんではありませんか」、その時、静子は、ふと異様な興奮に襲われた。彼女は思いきつて、敵の前に身を投げ出すような気持ちで、ハラハラと涙をこぼしながら、屋根裏の人物に話しかけたのであつた。

「……私、どんなになつても構いません。あなたのお気の済むように、どんなことでも致します。たといあなたに殺されても、少しもお恨みには思いません。でも、主人だけは助けてください。私はあの人に嘘をついたのです。その上私のためにあの人々が死ぬようなことになつては、私、あんまり空恐ろしいのです。助けてください。助けてください」と、彼女は小さな声ではあつたが、心をこめてかき口説いた。だが、上からは何の返事もないのだ。彼女は一時の興奮からさめて、気拔けたように、長い間そこに立ちつくしていた。しかし、天井裏にはやつぱり幽かに時計の音がしているばかりで、外には少しの物音も聞こえては来ないのだ。陰獣は闇の中で、息を殺して、啞のように黙り返っているのだ。その異様な静けさに、彼女は突然非常な恐怖を覚えた。彼女は矢庭に居間を逃げ出して、家の中にも居たままなくて、何の気であつたか、表へかけ出してしまつたと言うのだ。そして、ふと私のことを思い出すと、矢も盾もたまず、そこにあつた自動電話に入つたというのであつた。「これは、なぜ自宅の電話からではなく、家の外の「自動電話」からだったのかという疑問に応えている形になるが、実はもっと深い意味があり、それは、二

人が頻繁に連絡し合い逢っているようなことが家の者たちの噂となり夫にも知られるようになったら、それこそ凡ての「計画」(夫殺し)がぶち壊しになり兼ねないのであり、それゆえ、「……ある日小山田静子から私の宿へ電話がかかって、大変心配な事が出来たから、一度来て欲しい。主人は留守だし、召使達も、気の置けるような者は、遠方に使いにし、待っているから」という言葉のこれがまさに「真意」になるのである。」

私は静子の話を聞いている内に、大江春泥の不気味な小説『屋根裏の遊戯』を思い出さないではいられなかった。若し静子の聞いた時計の音が錯覚でなく、そこに春泥がひそんでいたとすれば、彼はあの小説の思いつきを、そのまま実行に移したものであり、誠に春泥らしいやり方と肯くことが出来た。私は『屋根裏の遊戯』を読んでいただけに、この静子の一見突飛な話を、一笑に付し去ることが出来なかったばかりでなく、私自身激しい恐怖を感じないではいられなかった。私は屋根裏の暗闇の中で、真赤なとんがり帽と、道化服をつけた太つちようの大江春泥が、ニヤニヤと笑っている幻覚をさえ感じた。

八、屋根裏の遊戯の探索

私たちは色々相談をした末、結局私が「屋根裏の遊戯」の中の素人探偵のように、静子の居間の天井裏へ上がって、そこに人のいた形跡があるかどうか、若し居たとすれば、一体どこから出入したのであるかを、確かめて見ることになった。静子は、「そんな気味の悪いことを」と言っただけに止めたけれど、私はそれをふり切って、春泥の小説から教わった通り、押入れの天井板をはがして、電燈工夫のようにその穴の中へもぐって行った。丁度屋敷には、さつき取次に出た少女の外に誰もいなかったし、その少女も勝手元の方で働いている様子だったから、私は誰に見とがめられる心配もなかったのだ。

屋根裏なんて、決して春泥の小説のように美しいものではなかった。古い家ではあったが、暮の煤掃の折、灰汁洗屋を入れて、天井板をはずしてすっかり洗わせたとのことで、ひどく汚くはなかったけれど、それでも、三月の間にはほこりも積んでいるし、蜘蛛の巣もはついていた。第一真暗でどうすることも出来ないで、私は静子の家にあった手提電燈を借りて、苦心をして梁を伝いながら、問題の箇所へ近づいて行った。そこには、天井板に隙間が出来ていて、多分灰汁洗いをしたために、そんなに板がそり返ったのであろう。下から薄い光がさしていたので、それが目印になった。だが、私は半間も進まぬうちにドキンとするようなものを発見した。私はそうして屋根裏に上がりながらも、実はまさかまさかと思っていたのだが、静子の想像は決して間違っていないかったのだ。そこには梁の上にも、天井板の上にも、確かに最近人の通ったらしい跡が残っていた。私はゾーツと寒気を感じた。小説を知っているだけで、まだ逢ったことのない、毒蜘蛛のような、あの大江春泥が、私と同じ恰好で、その天井裏を這い廻っていたのかと思うと、私は一種名状しがたい戦慄に襲われた。私は堅くなって、梁のほこりの上に残った手だか足だかの跡を追って行った。時計の音のしたという場所は、なるほど、ほこりがひどく乱れて、そこに長い間人のいた形跡があった。

私はもう夢中になって、春泥と覚しき人物のあとをつけ始めた。彼は殆ど家中の天井裏を歩き廻ったらしく、どこまで行っても、梁の上のほこりの痕は尽きなんだ。そして、静子の居間と静子等の寝室の天井に、板のすいた所があつて、その箇所だけはほこりが余

計に乱れていた。

私は屋根裏の遊戯者を真似て、そこから下の部屋を覗いてみたが、春泥がそれに陶醉したのも決して無理ではなかった。天井板の隙間から見た「下界」の光景の不思議さは、誠に想像以上であった。殊にも、丁度私の目の下にうなだれていた静子の姿を眺めた時には、人間というものが、目の角度によつては、こうも異様に見えるものかと驚いた程であった。われわれはいつも横の方から見られつけているので、どんなに自分の姿を意識している人でも真上から見た恰好までは考えてはいない。そこには非常な隙がある筈だ。隙があるだけに少しも飾らぬ生地のままの人間が、やや不恰好に暴露されているのだ。静子の艶々した丸髷には、（真上から見た丸髷というものの形からして、すでに変であつたが）前髪と髷との間の凹みに、薄くではあつたが、ほこりが溜つて、外の綺麗な部分とは比較にならない程汚れていたし、曲げに続く項の奥には、着物の襟と背中との作る谷底を真上から覗くので、背筋の凹みまで見えて、そして、そのねっとり蒼白い皮膚の上には例の毒々しい蚯蚓腫れが、ずつと奥の暗くなつて見えぬ所までも、いたいたしく続いているのだ。上から見た静子は、やや上品さを失つたようではあつたが、その代わりに、彼女の持つ一種不可解なオブリシニティ（卑猥さ）が一層濃く私に迫ってくるのを感じた。

それはともかく、私は何か大江春泥を証拠立てるようなものが残されていないかと、手提電燈の光を近づけて、梁や天井の上を調べ廻つたが、手型も足跡も、皆曖昧で、無論指紋などは識別されなかった。春泥は定めし『屋根裏の遊戯』をそのままに、足袋や手袋の用意を忘れなかつたのであろう。ただ一つ、丁度静子の居間の上の、梁から天井をつるした支え木の根元の、一寸目につかぬ場所に、小さな鼠色の丸いものが落ちていた。艶消の金属で、うつろな碗の形をしたボタンみたいなもので、表面にR・K・BROS・CO・という文字が浮彫りになっていた。それを拾つた時私は直ぐさま『屋根裏の遊戯』に出て来るシャツのボタンを思い出したが、しかし、その品はボタンにしては少し変だつた。帽子の飾りか何かではないかとも思つたけれど、確かなことは分からぬ。あとで静子に見せても、彼女も首をかしげるばかりであつた。

*

*

無論私は、春泥がどこから天井裏に忍び込んだかという点をも綿密に調べて見た。ほこりの乱れた跡をしたつて行くと、それは玄関横の物置きの上で止まつていた。物置きの粗末な天井板は、持上げて見ると難なくとれた。私はそこに投込んだある椅子のこわれを足場にして、下におり、内部から物置きの戸を開けて見ると、その戸には錠前がなくて、訳もなく開いた。そのすぐ外には、人の背よりは少し高いコンクリートの塀があつた。恐らく大江春泥は、人通りのなくなつた頃を見はからつて、この塀をのり越え、（塀の上には前にも言つたようにガラスの破片が植えてあつたけれど、計画的な侵入者にはそんなものは問題ではないのだ）今の錠前のない物置から屋根裏へ忍び込んだものであろう。そうしてすっかり種が分かつてしまうと、私は聊かあつけない気がした。不良少年でもやりそうな、子供らしい悪戯じゃないかと、相手を軽蔑してやりたい気持ちだつた。妙な得体の知れぬ恐怖がなくなつて、その代りに現実的な不快ばかりが残つた。（だが、そんな風に相手を軽蔑してしまつたのは、飛んでもない間違いであつたことが、後になつて分かつた）静子は無性に恐がつて、主人の身には換えられぬから、彼女の秘密を犠牲にしても、警察の手を煩わす方がよくはないかと言ひ出したが、私は相手を軽蔑し始めてい

もののだから、彼女を制して、まさか『屋根裏の遊戯』にある天井から毒薬をたらすような、馬鹿馬鹿しい真似が出来るはずはないし、天井裏へ忍び込んだからと言って、人が殺せるものではない。こんな怖がらせは、如何にも大江春泥らしい稚氣で、こうしてさも何か犯罪を企んでいるように見せかけるのが、彼の手ではないか。高が小説家の彼に、それ以上の実行力があるとは思われぬ。という風に彼女を慰めたのであった。そして、余り静子が恐がるものだから、気休めに、そんなことを好きな私の友達を頼んで、毎夜物置きあたりの辺の掘外を見張らせることを約束した。静子は丁度西洋館の二階に客用の寢室があるのを幸い、何か口実を設けて、当分彼女達夫婦の寢間をそこへ移すことにすると言っていた。西洋館なれば、天井の隙見など出来ないのだから。

そして、この二つの防御方法は、その翌日から実行されたのであったが、だが、陰獣大江春泥の恐るべき魔の手は、そのような姑息手段を無視して、それから二日後の三月十九日深夜、彼は予告を厳守して、遂に第一の犠牲者を屠ったのである。小山田六郎氏の息の音を絶ったのであった。

九、屋根裏の遊戯 其のまとめ

さて、静子は、居間で縫物ぬいものをしていた時、女中が「春泥の手紙」を持って来たので、怖々封を切って読んでみると、前述のような内容であり、もうじつとしておられず、何とはなく部屋の隅へと歩いて行くと、頭の上から、「……金のふれ合う様な、カチ、カチつていう音が、非常に幽かであるが、確かに聞こえて来た」と言うのであった。そこで、主人公（寒川）は、「……結局、私が『屋根裏の遊戯』の中の素人探偵の様に、手提電燈を持ち、静子の居間の天井裏へ上って、そこに人のいた形跡があるかどうか、若し居たとすれば、一体どこから出入したのかなどを、確かめて見ることになった」とある。そして、そこには梁の上にも、天井板の上にも、確かに最近人の通ったらしい跡が残っていた。私はもう夢中になって、そのあとをつけ始めた。彼は殆ど家中の天井裏を歩き廻ったらしく、どこまで行っても、梁の上のほこりの痕は尽きない。そして、静子の居間と静子等の寢室の天井に、板のすいたところがあり、その箇所だけほこりが余計に乱れていた。

むろん、それは、静子自身、事前に天井裏を歩いて、手足の痕を付けておいたものであるが、それは、なぜかと言えば、それは、言うまでもなく、大江春泥は、天井裏から「夫婦の行為」を覗いていたからこそ、脅迫状にあるような「事細かな描写」も可能だったとするためである。——そして、主人公（寒川）は、下の部屋を覗いてみたが、天井板の隙間から見た「下界」の光景の不思議さは、誠に想像以上であった。人間というものが、目の角度によつては、こうも異様に見えるものかと驚いた程であった。そこには少しも飾らぬ生地のままの人間が、そのまま暴露されているのだ。上から見た静子は、やや上品さを失った様ではあったが、その代わりに、彼女の持つ一種不可思議なオブリニティ（卑猥さ）が一層色濃く私に迫って来るのを感じた。そして、丁度静子の居間の上のところに、小さな鼠色の丸い鉦が一つ落ちていた。そして、ほこりの乱れた痕を辿って行くと、それは玄関横の物置きの上で止まっていて、物置きの粗末な天井板は、持ち上げると難なくとれた。恐らく、大江春泥は、人通りのなくなった頃を見はからい、人の背よりは少し高いコンクリートの塀を乗り越えて、錠前のない物置きから、屋根裏に忍び込んでいたので

ある。そこで、（怖がる）静子は、（もちろん、夫には平田や春泥のことなど何も言わないで）、何か他の口実をつけて、西洋館の二階に「客間の寝室」があるので、夫婦の「寝室」をそちらへと移したのである。西洋館ならば、天井からの隙見も出来ないからである。

しかし、この表面的には「何気ない変化」（つまり洋館の「二階に寝室」を移すということ）こそは、静子が密かに計画していた、その夫殺しの「完全犯罪」を完成させるためには、何が何でも必要不可欠の、まさに「必須の条件」だったのである。

そして、脅迫から二日後の三月十九日深夜、彼の予告の通り、第一の犠牲者として、小山田六郎氏の息の根を絶ったのである

十、六郎氏変死事件

さて、主人公（寒川）は、春泥の手紙には六郎氏殺害の予告に附加えて、「……だが慌てることはない。わたしはいつも急がないのだ」という文句があった。それにも拘らず、彼はどうしてあんなに慌てて、たった二日しか間を置かないで、強行を演じることになったのだろうか。それは或は、わざと手紙では油断をさせて置いて、意表に出るという、一種の策略であつたかも知れないのだが、私はふとまったく別の理由があつたのではないかと疑った。静子が時計の音を聞いて、屋根裏に春泥が潜んでいると信じ、涙を流して六郎氏の「命乞い」をしたということ聞いた時、已に私はそれを虞れたのだが、春泥はこの静子の純情を知るに及んで、一層激しい嫉妬を感じ、同時に身の危険をも悟つたに相違ない。そして、「……よし、それ程お前の愛している亭主なら、長く待たさないで、早速やつつけて上げることしよう」という気持ちにもなったのだろうかと推察する。（勿論、そうではなく、寒川に屋根裏を探らせて、実際に屋根裏に春泥の痕跡があつたと信じ込ませ、そこに鉤を一つ落としておく。また、夫婦の「寝間」を洋館の二階の寝室へと移すことにより、完全犯罪への凡ての要件が出揃つたので犯行を遂行したのである）。それは兎も角、小山田六郎氏の変死事件は、極めて異様な状態に於て発見されたのである。

*

*

では、その変死事件の「経緯」であるが、それは、次のようなものである。「……私は静子からの知らせで、その日の夕刻小山田家に駆けつけ、初めて凡ての事情を聞き知つたのであるが、六郎氏は、その前日、別段変わった様子もなく、いつもより少し早めに会社から帰宅して、晩酌を済ませると、川向うの小梅の友人の所へ、暮を囲みに行くのだと言って、暖い晩だったので大島の裕に鹽瀬の羽織だけで、外套も着ず、ブラリと出掛けた。それが午後七時頃のことであり、遠い所でもないのに、彼はいつもの様に、散歩旁々、吾妻橋を迂回して、向島の土手を歩いて行つた。そして、小梅の友人の家に十二時頃までいて、やはり徒歩でそこを出たという所まではハッキリ分かつているが、それから先が一切不明なのである。——一晩待ち明かしても、帰りがないので、しかもそれが丁度大江春泥から恐ろしい予告を受けていた際なので、静子は非常に心をいたため、朝になるのを待ち兼ねて、知っている限り、心当りの所へ電話や使いで聞き合わせたが、どこにも立ち寄つた形跡がない。彼女は無論私の所へも電話をかけたのだけれど、丁度その前夜から私は宿を留守にしていた、やっと夕方頃帰つたので、この騒動は少しも知らなかったのである。やがて、いつもの出勤時刻が来ても、六郎氏は会社へも顔を出さない。会社の方でも色々手

を尽くして探してみたが、どうしても行衛が分らぬ。そんなことをしている内に、もうお昼近くになってしまったが、丁度そこへ『象潟警察』から電話があつて、六郎氏の変死を知らせて来たのであつた。」……

それは、三月二十日の朝八時頃、浅草仲店の商家の若いお神さんが、千住へ用達しに行く為に、吾妻橋の汽船発着所へ来て、船を待合せる間に、女の便所（下は川水）に入つたが、入つたと思うと、キャツと悲鳴を上げて飛び出して来た。切符売りのお爺さんが聞いて見ると、便所の長方形の穴の真下に、青い水の中から、一人の男の顔が彼女の方を見上げていたと言うのだ。切符売りのお爺さんは、最初は、船頭か何かの悪戯だと思つたが、（そういう水の中の出歯亀事件は、時たま無いでもなかったもので）、とにかく便所へ入つて調べて見ると、やつぱり穴の下一尺ばかりの所に、ポツカリと人の顔が浮いていて、水の動揺につれて、顔が半分隠れるかと思うと、またヌツと人の顔が現われる。まるでゼンマイ仕掛けの玩具のようで、凄いつたらなかったと、あとになって爺さんが話した。

それが人の死骸だと分かると、爺さんは俄かに慌て出して、大声で発着所にいた若い者を呼んだ。船を待合せていた客の中にも、いなせな肴屋さんなどがいて、若い者と共力して死体引上げにかかったが、便所の中からでは逆も上げられないので、外側から竿で死骸を広い水の上までつき出した所が、妙なことに、死骸は猿股一つ切りで、丸裸体なのだ。四十前後の立派な人品だし、まさかこの陽気に隅田川で泳いでいたとも受取れぬので、変だと思つて尚よく見ると、どうやら背中に刃物の突傷があるらしく、水死人にしても水も含んでいない様な鹽梅なのだ。ただの水死人ではなくて殺人事件だと分かると、騒ぎは一層大きくなつたが、さて、水から引上げる段になつて、又一つ奇妙なことが発見された。

それは、知らせによつて駆けつけた花川戸交番の巡査の指図で、発着所の若い者が、もじやもじやした死骸の頭の毛を掴んで引上げようとすると、その頭髮が頭の地肌から、ズルズルとはがれて来たのだ。若い者は、余りに気味悪さに、ワツと言つて手を離してしまつたが、入水してからそんなに時間が経っている様でもないのに、髪の毛がズルズルむけて来るのは変だと思つて、よく調べて見ると、何のことだ、髪の毛だと思つたのは、鬘で、本人の頭はテカテカに禿げ上がつていたのであつた。

これが静子の夫であり、碌々商会の重役である小山田六郎氏の、悲惨な亡骸であつたのだ。つまり、六郎氏の死体は、裸体にされた上、禿頭にふさふさとした鬘まで冠せて、吾妻橋下に投込まれていたのであつた。しかも、死体が水中で発見されたにも拘らず、水を呑んだ形跡はなく、致命傷は背中の中肺部に受けた、鋭い刃物の突傷であり、致命傷の外に数ヶ所浅い突傷があり、犯人は幾度も突きそこなつたものに相違なかつた。警察医の検診によると、その致命傷を受けた時間は、前夜の深夜一時頃らしいということであつたが、何分死体には着物も持物もないので、何所の誰とも分からず、警察でも途方に暮れていた所へ、幸いにも昼頃になつて、小山田氏を見知るものが現われたので、早速、小山田邸と碌々商会へと、電話をかけたということであつた。

十一、寒川の最初の推理

夕刻、私が小山田家を訪ねた時には、六郎氏側の親戚の人達や、碌々商会の社員、故人の友人などがつめかけていて、家の中は非常に混雑していた。丁度今し方警察から帰つた

所だと言つて、静子はそれらの見舞客にとり囲まれて、ぼんやりとしていた。六郎氏の死体は、都合によつては解剖に附せなければならぬと言うので、まだ警察から下渡されず、仏壇の前に白布で覆われた台には急拵えの位牌ばかりが置かれ、それに物々しく香華がたむけてあつた。

私はそこで、静子や会社の人から、右に述べた死体発見の顛末を聞かされたのであるが、私は春泥を軽蔑し、二三日前静子が警察に届けようと言つたのを止めたばかりに、この様な不祥事を惹起したかと思うと、恥と後悔とで、座にもいたたまれぬ思いがした。私は下手人は大江春泥の他にはないと思つた。春泥はきつと、六郎氏が小梅の暮友達の家を辞して、帰途、吾妻橋を通りかかった折、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行を演じ、死体を河中へ投棄したものに相違ない。時間の点から言つても、春泥が浅草辺りにうろろろしていたという本田の言葉から察しても、いや現に彼は六郎氏の殺害を予告さえしていたのだから、下手人が春泥であることに、疑を挟む余地はないのだ。だが、それにしても、六郎氏は何故真裸体になつていたのか、また変な鬘などを冠つていたのか、若しそれも春泥の仕業であつたとすれば、彼は何故そのような途方もない真似をしなければならなかつたのか、洵に不思議という他はなかつた。

*

*

さて、主人公（寒川）の「最初の推理」は、帰途、吾妻橋を通りかかった時に、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行に及び、その死体を河中へ投棄したとともに、下手人は、春泥であることに、疑を挟む余地はないと考えるのであつた。そして、今度は、静子の番に違いないと考えると、静子と主人公（寒川）は、二人して春泥に脅迫されていたことを警察に届け出て、保護を求めることになるのである。

十二、洋館の硝子窓に人の影

さて、私は折を見て、静子と私だけが知っている秘密について相談する為に、「ちよつと」と言つて、彼女に別室へ来てもらつた。静子はそれを待っていたように、一座の人に会釈すると、急いで私のあとに従つて来たが、人目がなくなると、「先生」と小声で叫んで、いきなり私にすがりつき、じつと私の胸の辺を見つめていたかと思うと、長いまつげが、ギラギラと光つて、まぶたの間がふくれ上がったと見るまに、それがやがて大きな水の玉になって、蒼白い頬の上を、ツルツ、ツルツと流れるのだ。涙はあとからあとからと、ふくれ上がつて来ては、止めどもなく流れるのだ。

「……僕はあなたに、何と言つてお詫びをしていいか分からない。全く僕の油断からです。あいつにこんな実行力があるうとは、本当に思いがけなかつた。僕が悪いのです。僕が悪いのです……」と、私もつい感傷的になつて、泣き沈む静子の手をとると、力づけるように、それを握りしめながら、繰り返して繰り返して詫言をした。（私が静子の肉体にふれたのは、あの時が初めてだった。そんな際ではあつたけれど、私はあの青白く弱々しい癖に、芯の方で火でも燃えているのではないかと思われる、熱っぽく弾力のある彼女の手先の、不思議な感触をはつきりと意識し、いつまでもそれを覚えていた）とある。

そして、「……それで、あなたはあの脅迫状のことを、警察でおっしゃいましたか」と、私は静子の泣き止むのを待つて聞いた。「……いいえ、私どうしていいか分からなかつた

ものですから」と答えると、「……まだ言わなかったのですね」、「……ええ、先生に御相談しようと思って」と、あとから考えると変だけれど、私はその時もまだ静子の手を握っていた。静子もそれを握られたまま、私にすぎる様にして立っていた。「……あなたも無論、あの男の仕業だと思っているでしょう」、「……ええ、それに、昨夜妙なことがありましたの」、「……妙なことって」、「先生のご注意で、寢室を洋館の二階に移しましたでしょう。これで、もう覗かれる心配はないと安心していたのですけれど、やっぱりあの、覗いていた様ですの」と言うので、「……どこからです」と聞くと、「……ガラス窓の外から」と。そして、静子はその時の怖かったことを思い出したように、目を大きく見開いて、ポツリポツリと話すのであった。「……昨夜は十二時頃、ベツトに入ったのは入ったのですけれど、主人が帰らないものですから、心配で心配で、それに天井の高い洋室にたった一人でやすんでいますので、怖くなって来て、妙に部屋の間々が眺められるのです。窓のブラインドが、一つだけおり切っていないで、一尺ばかり下があいているので、そこから真暗な外の見えているのが、もう怖くて、怖いと思えば、余計その方へ眼が行って、しまいに、そのガラスの向うに、ぼんやり人の顔が見えて来るじゃありませんか」、「……幻影じゃなかったのですか」と聞くと、「……少しの間で、直ぐ消えてしまいましたが、今でも私、見違いやなんかではなかったと思っていますわ。もじやもじやした髪の毛をガラスにピツタリくっつけて、うつむき気味になって、上目使いにじつと私の方を睨んでいたのが、まだ見える様ですわ」と言う。「……平田でしたか」と聞くと、「……ええ、外にそんな真似をする人なんて、ある筈がないのですもの」と言う。

私達は、その時、こんな風の会話を取交したあとで、六郎氏の殺人犯人が大江春泥の平田一郎に相違ないこと、彼がこの次には静子をも殺害しようと企んでいることを、静子と私が同道で警察に申出て、保護を願うことに話を極めた。——この事件の係りの検事は、糸崎という法学士で、幸いにも私たち探偵作家や医学者や法律家などで作っている猟奇会の会員だったので、私が静子と一緒に、所謂捜査本部である象潟警察へ出頭すると、検事と被害者の家族というような、しかつめらしい関係ではなく、友達につき合いで、親切に私達の話聞き取ってくれた。彼もこの異様な事件には余程驚いた様子で、また深い興味をも感じたらしかったが、ともかく全力を尽して大江春泥の行衛を探させること、小山田家には特に刑事を張り込ませ、巡査の巡回の回数を増して、充分静子を保護するという約束してくれた。大江春泥の人相については、世に流布している写真は余り似ていないという私の注意から、博文館の本田を呼んで、詳しく彼の知っている容貌を聞き取ったのであった。

*

*

さて、この「場面」で最も大事なところは、静子の、「……やつぱりあの、覗いていた様ですの、（洋館二階の）ガラス窓の外から」という言葉であり、それは、「……昨夜は十二時頃、ベツトに入ったのは入ったのですけれど、主人が帰らないものですから、心配で心配で、それに天井の高い洋室にたった一人でやすんでいますので、怖くなって来て、妙に部屋の間々が眺められるのです。窓のブラインドが、一つだけおり切っていないで、一尺（約三十センチ）ばかり下があいているので、そこから真暗な外の見えているのが、もう怖くて、怖いと思えば、余計その方へ眼が行って、しまいに、そのガラスの向うに、ぼんやり人の顔が見えて来るじゃありませんか」、「……少しの間で、直ぐ消えてしま

ましたけれど、今でも私、見違いやなんかではなかったと思っていますわ。もじやもじやした髪の毛をガラスにピツタリくつつけて、うつむき気味になって、上目使いにじつと私の方を睨んでいたのが、まだ見える様ですわ」、「……平田でしたか」と聞かれて、「……ええ、外にそんな真似をする人なんて、ある筈がないのですもの」と言うのであった。

さて、静子のこのような「昨夜の出来事」というのは、もちろん、実際にはなかった「大うそ」ではあるが、それでは、何のためにこのような「大うそ」を言ったのか？ それは、次のようなことである。——つまり、静子は、密かに夫殺しの「完全犯罪」を綿密に計画していたのである。そして、その「静子」という女性には、探偵小説家「寒川」の書く小説の愛読者でもあり、それゆえ、探偵小説家「寒川」の「推理の仕方」(その「特徴や傾向」)などは、よく熟知していたのである。そこで、探偵作家「大江春泥」でもある「静子」は、探偵小説家「寒川」であれば、こういう様々な「材料」を与えれば、必ず、こういうふうな「推理」するだろうという、そういう「筋立て」を考えに考え抜いて、まさに夫殺しの「完全犯罪」を密かに狙っていたのである。

そして、主人公(寒川)の最初の本格的な「推理」では、まさに静子の「思惑」(計画)通りに、「……(洋館二階の)ガラス窓の外から、もじやもじやした髪の毛をガラスにピツタリくつつけて覗いていた」のは、実は「平田一郎」(大江春泥)などではなく、むしろ「小山田六郎氏」であり、その時、誤って足を踏み外し、下の大川へと落ちて、その死体が吾妻橋の汽船発着所へと流れ着いたという「推理」へと誘い込むのである。

十三、事件から約一ヶ月間

さて、約一ヶ月間、警察は全力を上げて大江春泥を搜索していたし、私も本田に頼んだり、其外の新聞記者や雑誌記者など、逢う人毎に、春泥の行動について、何か手掛かりになるような事実を聞き出そうと骨折っていたにも拘らず、春泥は如何なる魔法を心得ていたのであるか、杳としてその行動が分からないのであった。彼一人なれば兎も角、足手纏いの細君と二人連れで、彼はどこにどうして隠れていたのであるか。彼は果して、糸崎検事が想像したように密航を企てて、遠く海外に逃げ去ってしまったのだろうか。

それにしても、不思議なのは、六郎氏変死以来例の脅迫状がばったり来なくなってしまうことであつた。春泥は、警察の探索が怖くなつて、当の目的であつた静子の被害を思い止まり、ただ身を隠すことに汲々としていたのであるうか。いや、いや、彼のような男に、その位のことが予め分からなかった筈はない。とすると、彼は今もなお東京のどこかに潜伏していて、じつと静子殺害の機会を窺っているのではなからうか。(もちろん、これらの疑問《絡繰り》は、やがて解明《解かれて行く》ことになるが、ただ、真の目的は、「静子殺し」にあるのではなく、むしろ「夫殺し」にあつたということである。)

*

*

さて、象潟警察長は、部下の刑事に命じて、嘗て私がした様に、春泥の最後の住居であつた上野桜木町三十二番地付近を調べさせたが、流石に専門家である、その刑事は苦心の末春泥の引越し荷物を運搬した運送店を発見して(それは同じ上野でもずっと隔たった黒門町辺の小さな運送店であつたが)それからそれへと彼の引越し先を追つて行つた。その結果分かつた所によると、春泥は桜木町を引払つてから、本所区柳島町、向島須崎

町と、段々品の悪い所へ移って行つて最後の須崎町などはバラック同然の、工場と工場にはさまれた汚らしい一軒建ちの借家であつたが、彼はそこに数ヶ月の前家賃で借り受け、刑事が行つた時にも、家主の方へはまだ彼が住まっていることになっていたが、家の中を調べて見ると、道具も何もなく、はこりだらけで、いつから空家になっていたか分からぬほど、荒れ果てていて、春泥の行方は一向要領を得なかつたのである。

一方、博文館の本田は本田で、彼は段々様子が分かつて来ると、根がこうしたことの好きな男だものだから、非常に乗氣になつてしまつて、浅草公園で一度春泥に合つたのを元にして、原稿取りの仕事の暇々には、熱心に探偵の真似事を始めた。彼は先ず、嘗て春泥が広告ビラを配つていたことから、浅草付近の広告屋を、二、三軒歩き廻つて、春泥らしい男を傭つた店はないかと調べて見たが、困つたことには、それらの広告屋では忙しい時には、浅草公園あたりの浮浪人を、臨時に傭つて、衣装を着せて一日だけ使うような事もあるので、人相を聞いても思い出せぬところを見ると、あなたの探していらつしやるのも、きつとその浮浪人の一人だつたのでしよう。ということであつた。

そこで、本田は今度は、深夜の浅草公園をさまよつて、暗い木陰のベンチなどを一つ一つ覗き廻つて見たり、浮浪人が泊まりそうな本所あたりの木賃宿へ、わざわざ泊まり込んで、その宿泊人達と懇意を結んで、若しも春泥らしい男を見かけなかつたかと尋ね廻つて見たり、それはそれは苦勞をしたのであるが、いつまでたつても、少しの手掛かりさえ掴むことは出来なかつた。

本田は、一週間に一度ぐらいは私の宿に立ち寄つて、彼の苦心談を話して行くのであつたが、ある時、彼は大黒様のような顔を ニヤニヤさせて、こんな話をしたのである。「……寒川さん、僕この間ふつと、近頃蜘蛛女だとか首ばかりで胴のない女だという見世物が、方々ではやっているのを知っているでしょう。あれと類似のものでね。首ではなくて、反対に胴ばかりの人間っていう見世物があるんですよ。横に長い箱があつて、それが三つに仕切つてあつて、二つの区切りの中に、大抵は女なんですが、胴と足とが寝ているのです。そして、胴の上に当る一つの区切りはガランドウで、そこに首から上（顔の部分）が見えていなければならぬのに、それがまるつきりないのです。

つまり、女の首なし死体が長い箱の中に横たわつていて、しかも、そいつが生きている証拠には、時々手足を動かすのです。とても不気味で、かつまたエロティックな品物ですよ。種は例の鏡を斜めに置いて、そのうしろをガランドウの様に見せかける、幼稚なものだけれど、ところが、僕はいつか牛込の江戸川橋ね。あの橋を護国寺の方へ渡つた角の所の空き地で、その首なしの見世物を見たんですが、そのの胴ばかりの人間は、ほかの見世物のような女ではなくて、垢で黒光りに光つた道化服を着たよく太つた男だつたのです」

「……分かるでしょう、僕の考えが。僕はこう思つたのです。一人の男が、万人に身体を晒しながら、しかも完全に行衛をくります一つの方法として、この見世物の首から上を隠して一日寝ていればいいのです。これは如何にも大江春泥の考えつきそんなお化けじみた韜晦法（姿を隠す方法）じゃないでしょうか。事に、春泥はよく見世物の小説を書いたし、この類のことは大好きなんですかね」とあるが、これは、まさに「江戸川乱歩自身が大好き」ということになるのだろう。

そこで、僕は早速江戸川橋の所へ行つて見たんですが、仕合せとその見世物はまだありません。僕は木戸（銭）を払つて中へ入り、例の太つた首無し男の前に立つて、どうすれ

ばこの男の顔を見ることが出来るかと、色々考えて見たんです。で、気づいたのは、この男だつて一日に幾度かは便所へ立たなければならぬだろうということでした。僕は、その一つの便所へ行くのを、気長く待ち構えていたんですよ。暫くすると多くもない見物が皆出て行つてしまつて、僕一人になった。それでも辛抱して立っていますとね。首なし男が、ポンポンと拍手を打ったのです。妙だなと思つていると、説明をする男が、僕の所へやつて来て、一寸休憩をするから外へ出てくれと頼むのです。そこで、僕はこれだなと感じて、外へ出てから、ソツとテント張りのうしろへ廻つて、布の破れ目から中を覗いてみると、首なし男は、説明者に手伝つてもらつて箱から外へ出ると、無論首はあつたのですが、見物席の土間の隅の所へ走つて行つて、シャアシャアと始めたんです。さっきの拍手は、笑わせるじゃありませんか、小僧の合図だったのですよ。ハハハ……」と言ひ、「……いや、そいつは全く人違いで、失敗だつたけれど、……苦心談ですよ。僕が春泥探しでどんなに苦心しているかという、一例をお話したんですよ」と弁解する。

これは余談だけれど、われわれの春泥搜索は、まあそんな風で、いつまで経つても一向曙光（夜明けの太陽の光）は認められなかつたのである。

だが、たつた一つだけ、これが事件解決の鍵ではないかと思われる、不思議な事実が分かつたことを、ここに書き添えて置かねばなるまい。というのは、私は六郎氏の死体の冠つていた、例の鬘に着目して、その出所がどうやら浅草付近らしく思われたので、その辺の鬘師を探し廻つた結果、千束町の松居という鬘屋で、とうとうそれらしいのを捜し当てたのだが、ところがこの主人の言う所によると、鬘そのものは、死体の冠つていたのとすっかり当てはまるのだけれど、それを注文した人物は、私の予期に反して、いや私の非常な驚きにまで、大江春泥ではなくて、小山田六郎氏その人であつたのだ。人相もよく合つていた上に、その人は注文する時、小山田という名前をあらかじめ告げて、出来上ると（それは昨年の暮も押し詰まつた時分であつたが）彼自身足を運んで受取りに來たということであつた。その時、六郎氏は禿頭を隠すのだと言つていた由であるが、それにしては、誰も、彼の妻であつた静子さえも、六郎氏が生前鬘を冠つていたのを見なかつたのは、一体どうしたわけであらう。私はいくら考えても、この不可思議な謎を解くことが出来なかつた。（この「鬘の問題」は、やがて説明されるので、此所では敢えて伏します」が、そのヒントとしては、例えば、「……《洋館二階の》ガラス窓の外から、もじやもじやした《髪の手》をガラスにピツタリくつつけて覗いていた」のは、一体、誰だつたかという様なこととも深く関わつて來る問題なのである。）

十四、二人の關係の急接近

さて、静子（今は未亡人）と主人公（寒川）との間柄は、いわゆる「六郎氏変死事件」を境にして、俄かに親密の度を加えて行つた。行掛り上私は静子の相談相手であり、保護者の立場にあつた。六郎氏側の親戚の人達は、私の屋根裏調査以來の心尽しを知ると、無下に私を排斥することは出来なかつたし、糸崎検事などは、そういうことになれば丁度幸いだから、ちよいちよい小山田家を見舞つて、未亡人の身辺に氣をつけて上げてくださいと、口添えをした程であり、私は公然と彼女の家に出入りすることが出来たのである。

静子は初対面の時から、私の小説の愛読者として、私に少なからぬ好意を持っていたこ

とは、先に記した通りであるが、その上に二人の間に、こういう複雑な関係が生じて来たのだから、彼女が私を二なきものに頼つて来たのは、誠に当然のことであつた。そうして、しょっちゅう逢つてみると、殊に未亡人という境遇になつて見ると、今迄は何かしら遠い所にあるものの様に思われていた彼女のあの青白い情熱や、なやなよと消えてしまひそうな、それでいて不思議な弾力を持つ肉体の魅力が、俄かに現実的な色彩を帯びて、私に迫つて来るのであつた。殊に、偶然彼女の寢室から、外国製らしい小型の鞭を見つけ出してからというもの、私の悩ましい欲望は、油を注がれたように恐ろしい勢いで燃え上がったのである。

私は心なくも、その鞭を指さして、「……ご主人は乗馬をなすつたのですか」と尋ねたのだが、それを見ると、彼女はハツとした様に、一瞬間真青になつたかと思うと、見る見る火の様に顔を赤らめたのであつた。そして、いとも幽かに「いいえ」と答えたのである。私は迂闊にも、その時になつて初めて、彼女の項の蚯蚓腫れの、あの不思議な謎を解くことが出来た。思い出して見ると、彼女のあの傷痕は、見る度毎に少しずつ位置と形状が変わつていた様である。当時変だとは思つたけれど、まさか彼女のあの温厚らしい禿頭の夫が、世にもいまわしい残酷色情者であつたとは氣附かなかつた。いやそればかりではない。六郎氏の死後一ヶ月の今日では、いくら探しても、彼女の項には、あの醜い蚯蚓腫れが見えぬではないか。それこそ思い合わせば、たとえ彼女の明らさまな告白を聞かずとも、私の想像の間違ひではないことは分かり切つてゐるのだ。だが、それにしても、この事実を知つてからの、私の心の耐え難き悩ましさは、どうしたことであつたか。若しや私も、非常に恥かしいことだけれど、故六郎氏と同じ変質者の一人ではなかつたのであるうか。

*

*

まず、静子（今は未亡人）と主人公（寒川）との間柄は、いわゆる「六郎氏変死事件」を境にして、俄かに親密の度を加えて行つたとある。それは、行掛り上、私は静子の相談相手であり、また、保護者の立場でもあつたからであり、しかも、静子は初対面の時から、私の小説の愛読者として、私に少なからぬ好意を持つていたことに加えて、さらに、二人の間には、こういう複雑な関係が生じて来たのだから、彼女が私を二なきものに頼つて来たのは、誠に当然のことであり、しかも、しょっちゅう逢つて見ると、殊に未亡人という境遇になつて見ると、今迄は何かしら遠い所にあるものの様に思われていた彼女のあの青白い情熱や、なやなよと消えてしまひそうな、それでいて不思議な弾力を持つ肉体の魅力が、俄かに現実的な色彩を帯びて、私に迫つて来るようになり、殊に、偶然彼女の寢室から、外国製らしい小型の鞭を見つけ出してからというもの、私の悩ましい欲望は、油を注がれた様に、恐ろしい勢いで燃え上がったとある。

さて、この場面でも最大なところは、実は次の箇所（文章）であり、それは、主人公（寒川）は、「……偶然彼女の寢室から、外国製らしい小型の鞭を見つけ出した」というところであり、それでは、「……なぜ、静子は、小型の鞭を敢えて隠そうとしなかつたのだらうか？ 隠そうと思えば、幾らでも容易に出来たはずであり、それを敢えて主人公（寒川）に見せたのは、一体、なぜなのか？」という問題である。——これは、静子の夫「小山田六郎氏」という人は、二年の外国生活を経て、帰国後、実は本格的な「惨虐色情者」（サディスト）になつていた。つまり、小山田六郎氏は、実は本格的な「惨虐色

情者」(サディスト)であることと、その為に、静子夫人の身体には生傷が絶えないようになったこと、この「二つ」をはっきりと知らしめるための仕掛けなのである。そして、それがまさに次のような「文章」へと連なっていくのである。……

つまり、私は心なくも、その鞭を指さして、「……ご主人は乗馬をなすつたのですか」と尋ねたのだが、それを見ると、彼女はハッとした様に、一瞬間真青になったかと思うと、見る見る火の様に顔を赤らめたのであった。そして、いとも幽かに「いいえ」と答えたのである。私は迂闊にも、その時になって初めて、彼女の項の蚯蚓腫れの、あの不思議な謎を解くことが出来た。(今まではそうではないかと推測していた状態から、はつきりと事実として確認が出来たのである)。思い出して見ると、彼女のあの傷痕は、見る度毎に少しずつ位置と形状が変わっていた様である。当時変だとは思ったけれど、まさか彼女のあの温厚らしい禿頭の夫が、世にもいまわしい残酷色情者であったとは氣附かなかった。いやそればかりではない。六郎氏の死後一ヶ月の今日では、いくら探しても、彼女の項には、あの醜い蚯蚓腫れが見えぬではないか。それこそ思い合わせば、たとえ彼女の明らかな告白を聞かずとも、私の想像の間違いではないことは分かり切っているのだ。だが、それにしても、この事実を知ってからの、私の心の耐え難き悩ましきは、どうしたことであつたか。若しや私も、非常に恥かしいことだけれど、故六郎氏と同じ変質者の一人ではなかったのであらうか、とあるが、小山田六郎氏という人は、実は本格的な「残酷色情者」(サディスト)(つまりは変質者)であつたという事実を踏まえて、主人公(寒川)の最初の、「本格的な推理」が展開されることになるのである。

十五、事件解明切掛けの「二つの思いつき」

さて、四月二十日は、故人の命日に当るので、静子は仏参をしたのち、夕刻から親戚や故人と親しかった人々を招いて、仏の供養を営んだ。私もその席に連つたのであるが、その晩、湧き起つた二つの「新しい事実」は、恐らく、一生涯忘れることの出来ない、大きな感動を私に与えたのである。

その時、私は静子と並んで、薄暗い廊下を歩いていて、客が皆帰ってしまったから、私は暫く静子と私だけの話題(春泥搜索のこと)について話合つた後、十一時頃であつたか、余り長居をしては、召使の手前もあるので、別れを告げて、静子が御出入の帳場から呼んでくれた自動車にのって帰宅したのであるが、その時、静子は私を玄関まで見送る為に、私と肩を並べて廊下を歩いていたので、廊下には庭に面して、幾つかのガラス窓が開いていたが、私達がその一つの前を通りかかった時、静子は突然恐ろしい叫び声を立てて私にしがみついて来たのである。(もちろん、それは、静子の仕掛けでもあるが……)。

主人公(寒川)は、「……どうしました。何を見たんです」と、私が驚いて尋ねると、静子は片手には、まだしっかりと私に抱きつきながら、一方の手でガラス窓の外を指さすのだ。私も一時は春泥のことを思い出して、ハッとしたが、だがそれは何でもなかったことが、間もなく分かった。見ると窓の外の庭の樹立の間を、一匹の白犬が、木の葉をカサカサ言わせながら、暗闇の中へ消えて行つた。「……犬ですよ、犬ですよ、怖がることはありませんよ」と、私は、何の氣であつたか、静子の肩を叩きながら、いたわる様に言つたものだが、そうして何でもなかったことが分かつてしまつても、静子の片手が私の背

中を抱いていて、生暖かい感触が、私の身内まで伝わっているのを感じると、アア、私はとうとう、矢庭に彼女を抱き寄せ、八重歯のふくれ上った、あのモナ・リザの唇を盗んでしまったのである。そして、それは私にとって幸福であったか不幸であったか、彼女の方でも、決して私をしりぞけなかったばかりか、私を抱いた彼女の手先に、私は遠慮勝ちな力さえ覚えたのであった。しかも、それが亡き人の命日であっただけに、私達は罪を感じる事が一入深かった。二人はそれから私が自動車に乗ってしまうまで、一言と口を利かず、目さえそらす様にしていたのを覚えている。

そして、まず一つの思いつきは、その「車の中」で起こるのである。主人公（寒川）は、車の中でも静子のことばかり考えていて、「……熱くなった唇には、まだ彼女の唇が感じられ、鼓動する胸には、まだ彼女の体温が残っていて、飛び立つばかりの嬉しさと、一方、深い自責の念とが複雑に錯綜していた」が、前の運転手のハンドルを握る手袋のホックの飾釦を見ているうちに、主人公（寒川）は、やがて、小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」とは、実は手袋の「飾釦」だったのかとふと思うのであった。そこで、運転手に「手袋」のことをいろいろ聞いてみると、「……寒い時分に、亡くなった小山田の旦那から（釦がとれて使えなくなったので、まだ新しかったけれども）もらったものであり、飾釦は、最初から右手にはとれてなかった」と言うのであった。それを聞いて、主人公（寒川）は、もし小山田家の天井裏で拾ったあの「金属の丸いもの」が、もし「小山田六郎氏」の手袋のものだとすれば、天井裏を散歩していた人物とは、実は「小山田六郎氏」ということにならないかと思うのであった。そこで、主人公（寒川）は、その「手袋」を相当の代価で譲り受けたのであったが、（自分の）部屋に入って、例の天井裏で拾った「金物」を出して、比べて見ると、やっぱり寸分違わなかったし、その「金物」は、手袋のホックの座金にもピッタリとはまったのである。

そして、もう一つ変なことに気づいた。それは、頭の中に、「……大きなUの字が現われた。Uの字の左端上部には山の宿がある。一方、右端の上部には小梅町（六郎氏の基友達の家の所在地）がある。そして、Uの字の底に当る所は丁度吾妻橋に該当するのだ。あの晩、六郎氏は、Uの右端上部を出て、Uの字の下部の吾妻橋までやって来て、そこで春泥の為に殺害されたとばかり考えていたが、しかし、大川は、Uの上部から下部に向って流れているのだ。若しも死体が流れて来たとすれば、それは、一体、どこから流れて来たのか。つまり、凶行は、一体、どこで演じられたのか？」と、私は、深く深く「妄想の泥沼」へと沈み込んで行くのであった。……

十六、本格的な推理一（その全容）

私は、幾晩も幾晩もそのことばかり考え続けた。静子の魅力もこの奇怪なる疑いには及ばなかったのか、私は不思議にも静子のことを忘れてしまったかの如く、ひたすら奇妙な妄想の深味へ陥って行った。私はその間にも、あることを確かめる為に二度ばかり静子を訪ねは訪ねただけで、用事をすませると、至極あっさりと別れをつけて、大急ぎで帰ってしまったので、彼女はきつと妙に思っていたに相違ない。私を玄関に見送る彼女の顔が、寂しく悲しげにさえ見えた程だ。（静子を忘れる程妄想に独り耽入ったという事である。）

そして、五日ばかりの間に、私は実に途方もない妄想を組立ててしまったのである。私

はそれをここに叙述する煩い（わづら）を避けて、その時糸崎検事に送る為に書いた私の意見書が残っているから、それにいくらか書入れをして、左に写して置くことにするが、この推理は、私達探偵小説家の空想力を以てでなければ、恐らく組立て得ない体のものであったとある。これは、一体、どのようなことを意味するのかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。――つまり、静子は、密かに夫殺しの「完全犯罪」を綿密に計画していたのである。そして、その「静子」という女性には、探偵小説家「寒川」の書く小説の愛読者でもあり、それゆえ、探偵小説家「寒川」の「推理の仕方」（その「特徴や傾向」）などは、よく熟知していたのである。そこで、探偵作家「大江春泥」でもある「静子」は、探偵小説家「寒川」であれば、こういう様々な「材料」を与えれば、必ず、こういうふうな「推理」するだろうという、そういう「筋立て」を考えに考え抜いて、まさに夫殺しの「完全犯罪」を密かに狙っていたのである。

それは、最初の「出逢い」から始まり、親しくなったところで、今度は、昔の恋人「平田一郎」からの「脅迫状」、しかも、その昔の恋人「平田一郎」は、何と探偵作家「大江春泥」になっていた。そして、夜毎の「夫婦の睦じさ」に烈しく嫉妬して、静子より先に「愛する夫殺し」を予告して、実際に「殺害」してしまう。むろん、探偵小説家「寒川」であれば、昔の恋人「平田一郎」や探偵作家「大江春泥」などの「からくり」は、やがては「見抜く」に違いない。そこで、今度は、探偵作家「大江春泥」の作品『屋根裏の遊戯』に似せた「からくり」を創り出す。それは、先ず、天井裏に「手袋の飾釦」を一つ落としておく。それから、六郎氏が変死した深夜一小时前、（洋館二階の）ガラス窓に人影を見たと話す。また、寒川に「屋根裏を探らせ、一つの釦を拾わせる」、それは、実は小山田氏の手袋の飾釦であり、それを小山田氏からもらって運転手が持っていた」という展開にし、さらに、寝室の鞭、鍵のかかった本棚、その他、つまり、すべては、静子のまさに「仕掛け」であり、その「仕掛け」に添うように、探偵小説家「寒川」は、次のように「推理」するのである。その「本文」は、実に長いが、敢えて「全文」を記してみたい。

*

*

（前略）そういう訳で、私は、小山田邸の静子の居間の天井裏で拾った金具が、小山田六郎氏の手袋のホックから脱落したものと考える外はないことを知りますと、今まで私の心の隅の隅（わだかま）りとなっていた色々の事実が、この私の発見を裏書きでもするように、続々思い出されて来るのでありました。六郎氏の死体が髪を冠っていたこと、その髪は六郎氏自身が註文して拵えさせたものであったこと。（死体がはだかであったことは、後に述べるような理由で、私にはさして問題ではありませんでした）六郎氏の変死と同時に、まるで申合せたように、平田の脅迫状がバツタリ来なくなったこと、六郎氏が見かけによらぬ（こうしたことは多くの場合見かけによらぬものです）恐ろしい惨虐色情者（サディスト）であったこと等、これらの事実は、偶然様々の異常が集合したかに見えますけれども、よくよく考えますと、悉くある一つの事柄を指示していることが分かります。私はそこへ気がつきますと、私の推理を一層確実にする為、出来るだけの材料を集めることに着手しました。私は先ず小山田家を訪ね、夫人の許しを得て、故六郎氏の書斎を調べさせて貰いました。書斎程、その主人公の性格なり秘密なりを如実に語ってくれるものはないのですから。私は夫人が怪しまれるのも構わず、殆ど半日がかりで、書棚という書棚、抽斗（ひきだし）という抽斗を調べ廻ったことですが、間もなく私は、数ある本棚の中に、たった一つ

だけ、さも嚴重に鍵のかかっている箇所のあるのを発見しました。鍵を尋ねますと、それは六郎氏が生前時計の鎖につけて、終始持ち歩いてしたこと、変死の日にも兵児帯に巻き付けて家を出たままだということが分かりました。仕方がないので、私は夫人を説いて、やつとその本棚の戸を破壊する許しを得ました。

さて、本棚を開けて見ますと、その中には、六郎氏の数年間の日記帳、幾つかの袋に入った書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていましたが、私はそれを一々丹念に調べた結果、この事件に関係ある「三冊の書冊」を発見したのであります。

第一は、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、婚礼の三日前の日記の欄外に、赤インクで、次のような注意すべき文句が記入してあったのです。「……（前略）余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。されど、静子は中途その青年を嫌い始め、彼が如何なる手段を講ずるもその意に应ぜず、遂には、父の破産を好機として彼の前より姿を隠せる由なり。それにてよし。余は既往の詮議立てはせぬ積りなり云々」、つまり、六郎氏は結婚の当初から、何らかの事情により、夫人の秘密を知悉（知り尽く）していたのであるが、それを夫人には「一言」も言わなかったのです。

第二は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』であります。かかる書物が、実業家小山田六郎氏の書齋に見るとは、何という驚きでありましょう。静子夫人から、六郎氏が生前仲々の小説好きであったということを知くまでは、私は私の目を疑ったほどでした。さて、この短編集の巻頭にはコロタイプ版の春泥の肖像が掲げられ、奥付には著者「平田一郎」と彼の本名が印刷されてあったことは、注意すべきであります。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号です。これには春泥の作品は掲載されていませんでしたけれど、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ている、余白に「大江春泥氏の筆蹟」と説明がついていました。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ますと、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の跡のようなものが付いているのです。これは誰かが写真の上に「薄い紙」を当てて、鉛筆で春泥の「筆蹟」を幾度もなすったものとしたか考えられません。私の想像が次々と適中して行くのが怖いようでした。

その同じ日、私は夫人に頼んで、六郎氏が外国から持ち帰った手袋を探してもらいました。それは探すのにかなり手間取ったのですけれど、遂に私が運転手から買い取ったものと、寸分違わぬ品が一揃だけ出て来ました。夫人はそれを私に渡した時、確かに同じ手袋がもう一揃あった筈なのに、不審顔でした。これらの証拠品、日記帳、短編集、雑誌、手袋、天井裏で拾った金具類は、御指図によって、いつでも提出することが出来ます。

さて、私の調べ上げた事実は、その外にも数々あるのですが、それらを説明する前に、仮りに上述の諸点だけによつて考えましても、小山田六郎氏が世にも不気味な性格の所有者であり、温厚篤実なる仮面の下に、甚だ妖怪じみた陰謀をたくましくしていたことは明らかであります。

我々は、大江春泥という名前に執着し過ぎてはいはしなかったでしょう。彼の血みどろな作品、彼の異常な日常生活の知識などが、我々をして、この様な犯罪は春泥でなくては出来るものでないと、てんから独りぎめに極めさせてしまったものではありますまいか。彼はどうしてかくも完全に姿をくらましてしまうことが出来たのでしょうか。彼が犯人であつたとしては、少し妙ではありませんか。彼が無実であればこそ、単に彼の持前の厭人

癖から（彼が有名になればなるほど、その名に對しても、この種の厭人病は極度に昂進するものであります）世間から韜晦（姿を隠）したのであればこそ、この様に探しにくいのではないのでしょうか。彼は嘗てあなたがおつしやった様に、海外に逃出してしまつたのかも知れません。そして、例えば、上海の志那人町の片隅に、志那人になりすまして水煙草でも吸っているのかも知れませんが、そうでなくて、若し春泥が犯人であつたとすれば、あの様にも綿密に、執拗に、長年月を費して企まれた復讐計画が、彼にしては道草の様なものであつた六郎氏殺害のみを以て、肝腎の目的を忘れたように、バツタリと中断されたことを、何と説明したらいいのでしょうか。彼の小説を読み、彼の日常を知っているものには、これは余りに不自然な、ありそうもないことに思われるのです。

いやそれよりも、もっと明白な事実があります。彼はどうして小山田六郎氏所有の手袋の釦を、あの天井へ落して来ることが出来たのでしょうか。手袋が内地では手に入らぬ外国製のものであること、六郎氏が運転手に与えた手袋の飾釦がとれていたことなど思い合わせれば、かの屋根裏に潜んでいた者は、当の小山田六郎氏ではなく、大江春泥であつたと、そんな不合理な事が考えられるでしょうか。（ではそれが六郎氏であつたとしたら、彼はなぜその大切な証拠品を、迂闊にも運転手などに与えたかとの御反問があるかも知れません。しかし、それは後に述べますように、彼は別段法律上の罪惡を犯してなどいなかつたからです。変態好みの一種の遊戲をやつていたに過ぎなかつたからです。ですから、手袋の釦がとれたところで、たとえそれが天井に残されていたところで、彼にとつては何でもなかつたのです。犯罪者のように、この釦の取れたのは、若しや天井裏を歩いていた時ではなかつたかしら。証拠になりはしないかしら。などと心配する必要は少しもなかつたのです。）

春泥の犯罪を否定すべき材料は、まだそればかりではありません。右に述べた日記帳、春泥の短編集、新青年等の証拠品が、六郎氏の書斎の錠前つき本棚にあつたこと、その錠前の鍵は一つしかなく、六郎氏が行住坐臥所持していたことは、それらの品が六郎氏の陰險な惡戯を証拠立てているというばかりではなく、一步譲つて、春泥が六郎氏に疑いをかける為に、その品々を偽造し六郎氏の本棚へ入れて置いたと考えることさえ、全然不可能なのです。第一日記の偽造など出来るものではありませんし、その本棚は六郎氏でなければ開けることも閉めることも出来なかつたではありませんか。

かく検して来ますと、我々が今まで犯人と信じ切つていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかつたと考えの外はありません。我々をして左様に信じさせたものは、小山田六郎氏の驚嘆すべき欺瞞であつたとか考えられないのであります。金満紳士小山田氏が、かくの如き綿密陰險なる稚氣の所有者であつたことは、彼が表に温厚篤実を装いながら、その寢室においては、世にも恐るべき惡魔と形相を變じ、可憐なる静子夫人を外国製乗馬鞭を以て、打擲し続けていたことと共に、我々の誠に意外とする所でありすけれど、温厚なる君子と、陰險なる惡魔とが、一人物の心中に同居したためしは、世にその例が乏しくないのであります。人は、彼が温厚でありお人好しであればある程、却つて惡魔の弟子入りし易いとも言えるのではありますまいか。

*

*

さて、私は斯様に考えるのであります。小山田六郎氏は今より約四年以前、社用を帯びて欧州に旅行をし、ロンドンを中心として、その他に二、三の都市に二年間滞在していたの

ですが、彼の悪癖は、恐らくそれらの都市の何れかに於いて芽生え、發育したものでありましょう。(私は碌々商会の社員から、彼のロンドンでの情事の噂を洩れ聞いて居ります。)

そして、一昨年九月、帰朝と共に、彼の治し難い悪癖は彼の溺愛する静子夫人を対象として、猛威をたくましくし始めたものでありましょう。私は昨年十月、静子夫人と初対面の折、すでに彼女の項にかの無気味な傷痕を認めたほどですから。

この種の悪癖は、例えば、かのモルヒネ中毒のように、一度染んだなら一生涯止められないばかりでなく、日と共に月と共に恐ろしい勢いでその病勢が昂進して行くものであります。より強烈なより新しい刺激をと、追いつめるものであります。今日は昨日のやり方では満足出来ず、明日は又今日の仕草では物足りなく思われて来るのです。小山田氏も同様に、静子夫人を打擲するばかりでは満足が出来なくなつて来たことは、容易に想像出来るではありませんか。そこで、彼は物狂わしい新しい刺激を探し求めなければならなかつたであります。

丁度その時、彼は何かのきっかけで、大江春泥作『屋根裏の遊戯』という小説のあることを知り、その奇怪なる内容を聞いて、一読して見る気になつたのかも知れません。ともかく、彼はそこに不思議な知己(友)を発見したのです。異様な同病者を見つけ出したのです。彼が如何に春泥の短編集を愛読したか、その本の手擦れのあとでも想像することが出来るではありませんか。春泥はあの短編集の中で、たつた一人でいる人を(殊に女を)少しも気づかれぬ様に隙見することの、世にも不思議な楽しさを、繰返し説いていますが、六郎氏がこの彼にとつては恐らく新発見であつた所の、新しい趣味に共鳴したことは想像に難くありません。彼は遂に春泥の小説の主人公を真似て、自から屋根裏の遊戯者となり、自宅の天井裏に忍んで静子夫人の独居を隙見しようと企てたのであります。小山田家は門から玄関まで、相当の距離がありますので、外出から帰つた折など、召使達に知れぬよう、玄関脇の物置に忍び込み、そこから天井伝いに静子の居間の上に達するのは、誠に雑作もないことです。私は、六郎氏が夕刻から、よく小梅の友達達の所へ碁を囲みに出かけたのは、この屋根裏の遊戯の時間をこまかす手段ではなかつたか、とさえ邪推するのであります。

*

*

さて、その様に『屋根裏の遊戯』を愛読していた六郎氏が、その奥付の作者の本名を発見し、それが嘗て静子にそむかれた彼女の恋人であり、彼女に深い恨みを抱いているに相違ない平田一郎と同一人物ではないかと疑い始めたのは、さもありそうな事ではありませんか。そこで、彼は大江春泥に関する、あらゆる記事、ゴシップを漁り、遂に春泥が嘗ての静子の恋人と同一人物であつたこと、また、彼の日常生活が甚だしく厭人的であり、当時、すでに筆を絶つて行方さえくらましていたことを、知悉(細かい点まで知り尽す)ことに至つたのでしよう。つまり、六郎氏は、一冊の『屋根裏の遊戯』によつて、一方では彼の病癖のこよなき知己を、一方では彼にとつては憎むべき昔の恋敵を、同時に発見をして、その知識に基づいて、実に驚くべき悪戯を思いついたのであります。

静子の独居の隙見はなるほど甚だ彼の好奇心をそそつたには相違ないのですが、惨虐色情者の彼が、それだけで、そんな生ぬるい興味だけで満足しよう筈はありません。鞭の打擲に変わるべき、もつと新しい、もつと残酷な何かの方法がないものかと、彼は病人の異常に鋭い空想力を働かせたものでしょう。そして、結局平田一郎の脅迫状という誠に

前例のないお芝居を思いつくに至ったのであります。それには、彼はすでに「新青年」第六卷十二号巻頭の写真版の御手本を手に入れて居りました。お芝居をいやが上にも奥深く、誠にやかにする為に、彼は、その写真版によつて丹念にも春泥の筆蹟の手習いを始めました。あの写真版の鉛筆の跡がそれを物語つて居ります。

六郎氏は、平田一郎の脅迫状を作製すると、適当な日数を置いて、一度毎に違った郵便局からその封筒を送りました。商用で車を走らせている途中、もよりのポストへそれを投げ込ませるのは訳のないことでした。脅迫状の内容については、彼は新聞雑誌の記事によつて春泥の経歴の大体に通じていましたし、静子の細かい動作も、天井からの隙見と、それで足らぬ所は、彼自身静子の夫であつたのですから、あの位のことは訳もなく書けたのです。つまり彼は、静子と枕を並べて、寝物語をしながら、その時の静子の言葉や仕草を記憶して置いて、それをさも春泥が隙見したかの如く書き記した訳なのです。何という悪魔でありましょう。かくして彼は、人の名を騙つて脅迫状を認め、それを自分の妻に送るという犯罪めいた興味と、妻がそれを読んで震え戦く様を天井裏から胸を轟かせながら隙見するという悪魔の喜びとを、合せ得ることが出来たのです。しかも、彼はその間々には、やはりかの鞭の打擲を続けていたと信ずべき理由があります。何故と言つて、静子の項の傷は、六郎氏の死後になつて、やつとその痕が見えなくなつたのですから。言うまでもなく、彼はこの様に妻の静子を責めさいなんではいましたけれど、それは決して彼女を憎むが故ではなく、寧ろ静子を溺愛すればこそ、この惨虐を行なつたのであり、この種の変態性慾者の心理は無論あなたも充分承知のこととは思ひますけれど。さて、かの脅迫状の作製者が小山田六郎氏であつたという、私の推理は以上で尽きました。だが、では、単に変態性慾者の「悪戯」に過ぎなかつたものが、どうしてあの様な殺人事件となつて現われたか。しかも殺されたものは当の六郎氏であつたばかりでなく、彼は何故にあの奇妙な鬘を冠り、真裸体になつて、吾妻橋下に漂つていたのであるか。彼の背中の突傷は何者の仕業であつたのか。大江春泥がこの事件に存在しなかつたとすれば、では外に別の犯罪者があつたのであるか。等々の疑問が続出して来るであります。それについて、私はさらに私の観察と推理とを申し述べねばなりません。

簡単に言えば、小山田六郎氏は、彼の余りにも悪魔的な所業が、神の怒りに触れたのでありましょうか、天罰を被つたのであります。そこには何等の犯罪も下手人もなくて、ただ六郎氏の過失死があつたばかりであります。では、背中の致命傷はとの御尋ねがありましょう。けれど、その説明はあとに廻して、先ず順序を追つて、私がそのような考えを抱くに至つた筋路からお話しなければなりません。

*

*

私の推理の出発点は、他ならぬ彼の鬘でありました。あなたは多分、三月十七日私が天井裏の探險をした翌日から、静子は隙見をされぬよう、洋館の二階へ寢室を移したことを御記憶でありましょう。それには静子がどれ程巧みに夫を説いたか、六郎氏がどうしてその意見に従う氣になつたかは明瞭でありませんけれど、とにかく、その日から六郎氏は天井の隙見が出来なくなつてしまつたのです。しかし、想像をたくましくするならば、六郎氏はその頃は、もう天井の隙見にもやや飽きが来ていたのかも知れません。そして、寢室が洋館に代つたのを幸いに、また別の悪戯を考案しなかつたとは言えませんが。何故と言つて、ここに鬘があります。彼自身注文した所のふさふさとした鬘があります。彼がそ

の鬘かつらを注文したのは昨年末ですから、無論最初からそのつもりではなく、別に用途があったのでしようが、それが今、図らずも間に合ったのです。

彼は、『屋根裏の遊戯』の口絵で、春泥しゅんでいの写真を居ります。その写真は春泥しゅんでいの若い時分のものだと言われている程ですから、無論六郎氏のように禿頭ではなく、ふさふさとした黒髪があります。ですから、若し六郎氏が手紙や屋根裏の陰に隠れて静子を怖がらせることから、一步を進み、彼自身大江春泥しゅんでいに化け、静子がそこにいるのを見すまして、洋館の窓の外からチラリと顔を見せて、ある不思議な快感を味あじわおうと企らんだならば、彼は何よりも先ず、彼の第一の目印である禿頭を隠す必要に迫られたに相違ありませんが、丁度それには持つて来いの鬘かつらがあつたのです。鬘かつらさえ冠かぶれば、顔などは、暗いガラスの外ではあり、チラツと見せるだけでよいのですから、（そして、その方が一層効果的なのです）恐怖に戦っている静子に見破られる心配はありません。

あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅こうめの碁友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達に知れぬ様、ソツと庭を廻つて洋館の階下の書斎に入り（これは静子から聞いたのですが、彼はその鍵を例の本棚の鍵と一緒に鎖に下げていたのです）その時はもう階上の寝室に入つていた静子に悟られぬ様、闇の中で例の鬘かつらを冠かぶり、外に出て、立木を伝つて、洋館の軒蛇腹のきじやばらに上り、寝室の窓の外へ廻つて行つて、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いたのであります。のちに静子が窓の外に人の顔が見えたと私に語ったのは、この時のことであつたのです。

さて、それでは、六郎氏はどうして死ぬ様なことになつたか、それを語る前に、私は一応、私が六郎氏を疑い出してから二度目の小山田氏を訪ね、洋館の問題の窓から、外を覗いて見た時の観察を申述べねばなりません。これはあなた自身行つて御覧なされば分かることです。くだくだしい描写は省はぶくことに致しますが、その窓は隅田川に面して、外は殆ど軒下程の空地もなく、すぐ例の表側と同じコンクリート塀へいに囲まれ、塀へいは直ちに余程高い石崖いしがけに続いています。地面を倏約する為に、塀へいは石崖いしがけのはずれに立ててあるのです。水面から塀へいの上部までは約二間（約三・六メートル）、塀へいの上部から二階の窓までは一間（約一・八メートル）程あります。そこで、六郎氏が軒蛇腹のきじやばら（それは巾が非常に細いのです）から足を踏み外ははずして転落したとしますと、余程運がよくて、塀へいの内側へ（そこは人一人やつと通れる位の細い空地です）落ちることも不可能ではありませんが、そうでなければ、一度塀へいの上部にぶつつかつて、そのまま外の大川へ墜落する外はないのです。そして、六郎氏の場合は無論後者だつたのであります。

私は最初、隅田川の流れというものに思い当つた時から、死体が投げ込まれた現場に止つていたと考えるよりは、上流から漂つて来たと解釈する方が、より自然だとは気づいていました。そして、小山田家の洋館の外はすぐ隅田川であり、そこは吾妻橋よりも上流に当ることも知っていました。それ故、若しかしたら、六郎氏がその窓から落ちたのではないかと、考えたことは考えたのですが、彼の死因が水死ではなくて、背中つみきの突傷つみきだつたものですから、私は長い間迷わなければなりませんでした。

*

*

では、六郎氏の背中つみきの肺部に達する程もひどい突傷は何によつて生じたか、あんなにも刃物と似た傷をつけ得るものは一体何であつたか。それは外でもない、小山田家のコンクリート塀べいの上部に植えつけてあつた、ビール壘びんの破片なのです。それは表門の方も同様に

植えつけてありますから、あなたも多分御覧なすったことがあります。あの盗賊よけのガラス片は所々に飛んでもない大きな奴がありますから、場合に依つては、充分肺部に達する程の突傷を拵えることが出来ます。六郎氏は軒蛇腹から転落した勢いで、それにぶつかったのです。ひどい傷を受けたのも無理はありません。なおこの解釈によれば、あの致命傷の周囲の沢山の浅い突傷の説明もつく訳であります。

かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏みはずし、塀にぶつかって致命傷を受け、その上隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳であります。以上で本件に関する私の新解釈は大体陳述しました。一二申し残した事を付け加えますと、六郎氏の死体はどうして裸体にされていたかという疑問については、吾妻橋界限は浮浪者、乞食、前科者の巢窟であつて、溺死体が高価な衣類を着用していたなら（六郎氏はあの夜大島の袷に鹽瀬の羽織を重ね、白金の懷中時計を所持して居りました）深夜人なきを見て、それをはぎ取る位の無謀者は、ごろごろしていると申せば充分であります。（註、この私の想像は、後に事実となつて現れ、一人の浮浪人があげられたのだ）それから、静子が寢室にいて、何故六郎氏の墜落した物音を気づかなかつたという点は、その時彼女が極度の恐怖に、氣も顛動していたこと、コンクリート作りの洋館のガラス窓が密閉されていたこと、窓から水面までの距離が非常に遠いこと、また、かりに水音が聞こえたとしても、隅田川は時々徹夜の泥舟などが通るので、その水竿の音と混同されたかも知れないこと、などを御一考願いたいと存じます。なお注意すべきは、この事件が毫も犯罪的の意味を含まず、不幸変死事件を誘発したとは言え、全く悪戯の範圍を出でなかつたという点であります。若しそうでなかつたならば、六郎氏が証拠品の手袋を運転手に与えたり、本名を告げて鬘を註文したり、錠前つきとは申せ自宅の本棚に大切な証拠物を入れて置いたりした、馬鹿馬鹿しい不注意を何とも説明のしようがないからであります。（後記）

以上、私は余りに長々と私の意見書を写し取つたが、これをここに挿入したのは、あらかじめ右の私の推理を明らかにして置かないと、これから後の私の記事が、甚だ難解なものになるからである。私はこの意見書で、大江春泥は最初から存在しなかつたと言つた。だが、事実は果してそうであつたかどうか。若しそうだとすれば私がこの記録の前段に於いて、あんなにも詳しく彼の人となりを説明したことが、全く無意味になってしまうのだが。

十七、本格的な「推理一」の検証、

私は、あの天井裏で拾つた金属が、小山田氏の手袋のホックから脱落したものだのと知ると、私の心の隅に蟠りとなつていた色々の事実が、この私の発見を裏書きでもする様に、続々思い出されて来たのである。六郎氏の死体が鬘を冠つていたこと。その鬘は六郎氏自身注文して拵えたものであること、六郎氏の変死と同時に、まるで申し合せた様に、平田の脅迫状がバツタリ来なくなつたこと、六郎氏が見かけによらぬ、恐ろしい「惨虐色情者」（サディスト）であつたこと等、これらの事実は、よくよく考えると、悉くある一つの事柄を示唆していることが分かる。私の推理を一層確實にする為、出来るだけの

材料を集めることに着手した。そこで、故六郎氏の書斎を調べてみると、鍵のかかった本棚が見つかるが、その鍵はなく、許可を得て壊して開けてみると、その中には、六郎氏の数年の日記帳、幾つかの袋に入った書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていたが、それを丹念に調べた結果、この事件に係る「三冊の書冊」を発見したのである。

まず、その一つは、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、婚礼の三日前の日記の欄外に、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。されど、静子は中途その青年を嫌い始め、彼が如何なる手段を講ずるもその意に応ぜず、遂には、父の破産を好機として彼の前より姿を隠せる由なり。それにてよし。余は既往の詮議立てはせぬ積りなり云々」。つまり、六郎氏は、結婚の当初から、夫人の秘密は知っていたが、それを夫人には「一言」も言わなかったとある。しかし、なぜ、「赤インク」なのか？これは恐らく、静子を書き加えたものであり、平田一郎も彼との「恋愛関係」も、実際はどうであつたかはよく分からないのであるが、しかし、もし「平田一郎」という人物が実在人物だとすれば、いつひよつこりとその「姿」を現わし、何を語るかも分からない。そんな危険を敢えて冒すだろうか？——それゆえ、平田一郎も彼との「恋愛関係」も、どこまで本当のことなのか厳密にはよく分からないままなのである。

第二は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』である。かかる書物を、実業家小山田六郎氏の書斎で発見とは、何という驚きかとあるが、これも、静子が入れて置いたものであり、それは、この本を真似て、小山田六郎氏は、天井裏を散歩するようになる。その時に、指紋消しとして手袋を使用した、その手袋の「飾釦」をうっかり落としてしまったという、そういう展開（つまり推理）を、主人公（寒川）にさせるためのものである。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号である。これには春泥の作品は掲載されていないが、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ていて、余白に「大江春泥の筆蹟」と説明がついていた。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ると、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の痕のようなものがついている。これは誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆蹟を、幾度もなすつたものとか考えられない。これも、「大江春泥の筆蹟」を真似て、小山田六郎氏が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）に「推理」させるためのものである。

また、同じ日、夫人に頼んで、六郎氏が外国から持ち帰った手袋を探してもらうと、その結果、私が運転手から買取ったものと、寸分違わぬ品が一揃だけ出て来る。夫人は、それを私に渡した時、確かに同じ手袋がもう一揃あるはずなのにと、不審顔であつた。（この部分は、手袋が六郎氏のものに間違いないことをより強調している）。——かくして、我々が今まで犯人と信じ切っていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかったと考える外はありませんとなり、結局、小山田六郎氏自身が、実は犯人であつたという寒川の最初の「本格的な推理」になるのである。

*

*

さて、小山田六郎氏は、今より約四年前、社用を帯びて欧州に旅行をし、ロンドンを主として、その他、二、三の都市に二年間滞在していたが、彼の悪癖は、恐らく、それらの都市の何れかにおいて芽生え、発育したものでしょう。もし、そうだとすれば、静子と結婚したのは、七年前であるから、その頃はまだそれほど異常ではなかったが、去年の九月の帰国後、六郎氏は、本格的な「惨虐色情者」（サディスト）となり、静子夫人の身体

には生傷が絶えないようになってしまふ。それは、ここ半年ぐらいのことになるのだらう。つまり、昨年の九月、帰国（事件は三月）とともに、彼の治し難い悪癖は、彼の溺愛する静子夫人を対象として、猛威をたくましくし始めたものでしよう。私は昨年十月（博物館での出会い）、静子夫人と初対面の折、已に彼女の項にかの不気味な傷痕を認めた程である。——この種の悪癖は、例えば、かのモルヒネ中毒の様に、一度染んだなら一生涯止められないばかりでなく、日と共に月と共に恐ろしい勢いでその病勢が昂進して行くものであり、より強烈なより新しい刺激をと、追い求めるものである。今日は昨日のやり方は満足出来ず、明日は又今日の仕草では物足りなく思われて来る。小山田氏も同様に、静子夫人を打擲するばかりでは満足が出来なくなつて来たことは、容易に想像出来ます。そこで、彼は物狂おしい新しい刺激を探し求めなければならなかつたのである。

丁度、その時、何かのきっかけで、大江春泥作の『屋根裏の遊戯』という小説を知り、それを読んでみると、異様な同病者を見つけ出し、遂には自ら自宅の天井裏に忍び込んで、静子夫人の独居を隙見しようとしてたのである。むろん、それだけでは飽き足らず、『屋根裏の遊戯』を愛読していた六郎氏は、その奥付の作者の本名を発見し、それが嘗つて静子にそむかれた彼女の恋人であり、彼女に深い恨みを抱いているに相違ない平田一郎と同一人物だと知ると、今度は、平田一郎の名を騙つて「脅迫状」を作成して、それを自分の妻に送るという犯罪めいた趣味と、妻がそれを読んで震え戦く様を天井裏から胸を轟かせながら隙見するという悪魔の喜び、むろん、その間々には、かの「鞭の打擲」も相変わらず続けていたのである。これらの理由により、かの「脅迫状」の制作者は、実は「小山田六郎氏」であつたという、主人公（寒川）の本格的な「推理」になるのである。むろん、これは、明らかに間違つた「推理」であるが、しかし、そのような間違つた「推理」へと仕向けたのは、誰でもない、それは、まさに「静子」その人なのである。

つまり、鍵のかかつた本棚の中から出て来た「三冊の書冊」を根拠にして、組み立てた「推理」であり、一つは、結婚の年の日記帳に、赤インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。されど、静子は中途その青年を嫌い始め、彼が如何なる手段を講ずるも其意に應ぜず、遂には、父の破産を好機として彼の前より姿を隠せる由なり。それにてよし。余は既往の詮議立てはせぬ積りなり云々」とあるが、その「内容」は、つまり、「……自分は、青年平田と静子との関係を知つたが、静子は中途からその青年を嫌い始め、彼がどのような手段を講じてもそれに應ぜず、しかも、父の破産を好機として彼の前からその姿を完全に隠したのであり、それゆえ、自分はその過去を敢えて詮議（取り調べて問い直すようなことをする）つもりはないのだ」となり、これは、静子が書き加えたものに過ぎず、もともと平田一郎との「恋愛関係」も、また、「平田」という存在そのもの自体、実際のところ、どこまで本当のことなのかはよく分からないのである。つまり、静子が勝手に「でっち上げた存在」なのかも知れないのである。

次は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』が、その書斎の本棚にあつたというのも、もちろん、静子がそこに入れて置いたものであり、それゆえ、実際の実業家小山田六郎氏という人は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』など読んだこともなければ、ましてや「屋根裏の散歩」などしたこともないのである。そして、もう一つは、雑誌「新青年」に載つた「口絵」に大江春泥の原稿の写真版が原寸のまま大きく出ていて、余白に「大江春泥の筆蹟」とあるが、妙なことには、誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆

蹟を、幾度もなすったような痕跡があるというのも、そのようなものを静子が自ら作り出して、それを入れて置いたのであり、それは、「大江春泥の筆蹟」を真似て、小山田六郎氏が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）にそう「推理」させるためのものであり、すべては、静子の「仕掛け」であり、すべては、静子の「思い通り」（つまり「思う壺」）になったということである。

*

*

さて、元々は、単に「変態性慾者」の「趣味行為」に過ぎなかったものが、どうしてあの様な「殺人事件」となって現われたのか。しかも殺されたのは当の六郎氏であつたばかりでなく、彼はなぜにあの奇妙な「鬘」を冠り、真裸になつて、吾妻橋下に漂つていたのか。また、彼の背中の突傷は何者の仕業であつたのか。大江春泥がこの事件に関与しなかつたとすれば、外に別の犯罪者があつたのであるか、等々の疑問が次々と生じて来るかと思うが、それについては、私の「観察と推理」とを申し述べねばならないとある。

そこで、まず、彼の「鬘」の問題から考えてみたいと思うが、それは、小山田六郎氏自らが注文したものであり、その本来の「目的」は、元々、いわば「変態遊戯」を行なう時に、禿げ頭では様にならないと考え、それを隠す変装用のものであつたが、一方、主人公（寒川）の「推理」では、洋館へと移つてからは、天井裏の遊戯ができず、そこで今度は、彼自身大江春泥に化けて、静子がそこにいるのを見すまして、洋館の窓の外からチラリと顔を見せて、ある不思議な快感を味おうと企んだのだと考える。また、その「猿股一つ」に関しても、それは、まさに「変態遊戯」を行なつていた「最中の姿」であつたが、主人公（寒川）の「推理」では、吾妻橋下に「屍体」で漂つてゐる時に、周辺に住む浮浪者か乞食などに「着物や高級時計」などは剥ぎ取られたのだらうと考えるのであつた。

それでは、いよいよ「主人公」（寒川）の、その最初の「本格的な推理」の「結論」（クライマックス）であるが、それは、次のようなものである。

つまり、「……あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅の基友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達に知られぬ様、ソツと庭を廻つて洋館の階下の書斎に入り、闇の中で例の鬘を冠り、外に出て、立木を伝つて洋館の軒蛇腹に上り、寝室の窓の外へ廻つて行つて、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いていたのである。しかも、その洋館の窓は、隅田川に面して、外は殆ど軒下程の空地もなく、コンクリート塀で囲まれていたが、そのコンクリート塀の上部には（盗賊除けの）ビール瓶の破片が植え付けられていて、六郎氏は、軒蛇腹から転落した勢いで、その（盗賊除けの）ビール瓶の破片にぶつかつて、背中の肺部に達する程のひどい突傷を負つたというのである。

つまり、「……かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏み外し、塀の上部（ビール瓶の破片）にぶつかつて、致命傷を受け、その上、隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳である」と考える。（つまり「事故死」と見ているのである）。これが、主人公（寒川）の、最初の「本格的な推理」、「二番目の推理」であるが、しかし、これは、まさに静子の「仕掛け」通りの、また、静子の「思い通り」の（つまり「思う壺」の）「推理」になつてゐるのである。

さて、糸崎検事に提出する為に、右の意見書を書き上げたのは、それにある日、付けによると四月二十八日であったが、私はまずこの意見書を静子に見せて、もはや大江春泥の幻影におびえる必要のないことを知らせ、安心させてやろうと、書き上げた翌日小山田家を訪ねたのである。私は六郎氏を疑ってからも二度も静子を訪ねて、家宅搜索みたいなことをやっていながら、実はまだ彼女には何も知らせてはなかったのだ。

当時、静子の身辺では、六郎氏の遺産処分につき、毎日のように親族の者が寄り集まって、色々面倒な問題が起こっていたらしかったが、殆ど孤立無援状態の静子は、余計私を頼りにしていて、私が訪問をすれば、大騒ぎをして歓迎してくれるのであった。私は例に依って、静子の居間に通されると、甚だ唐突に、「……静子さん、もう心配はなくなりましたよ。大江春泥なんて、初めからいかなかったのです」と言い出して、静子を驚かせた。無論彼女には何のことだか意味が分からぬのだ。そこで、私は、私が探偵小説を書き上げた時いつもそれを友達に読みかせるのと同じ心持で、持参した意見書の草稿を、静子のために朗読したのである。というのは、一つには静子に事の仔細を知らせて安心させるため、また、一つにはこれに対する彼女の意見も聞き、私自身でも原稿の不備な点を見つけ、充分訂正を施したいからであった。

六郎氏の惨虐色情を説明した箇所は、甚だ残酷であった。静子は顔赤らめて、消えも入りたい風情を見せた。手袋を説明した箇所では、彼女は、「……私も、確かにもう一揃あったのに、変だ変だと思っていました」と口を入れた。六郎氏の過失死の所では、彼女は非常に驚いて、真っ青になり、口も利けない様子であった。だが、すっかり読んでしまうと、彼女は暫くは「マア」と言ったり、ぼんやりしていたが、やがて、その顔にほのかな安堵の色が浮かんで来た。彼女は大江春泥の脅迫状が偽物であって、もはや彼女の身に危険がなくなつたと知って、ほっと安心したものに相違ない。私の手前勝手な邪推を許すならば、彼女はまた、六郎氏の醜悪な自業自得を聞いて、私との不義の情交について抱いていた自責の念を、いくらか軽くすることが出来たに相違ない。「……あの人がそんなひどいことをして私を苦しめていたのだから、私だって……」という弁解の道がついたことを、彼女は喜んでに相違ない。

丁度、夕食時だったので、気のせいかわ彼女はいいそとして、洋酒などを出して、私をもてなしてくれた。私は私で、意見書を彼女が認めてくれたのが嬉しく、勧められるままに、思わず酒を過した。酒に弱い私は、じき真赤になって、すると私はいつも却って憂鬱になってしまふのだが、余り口も利かず、静子の顔ばかり眺めていた。静子はかなり面やつれをしていただけど、その青白さは彼女の生地であつたし、身体全体にしなした弾力があつて、芯に陰火の燃えている様な、あの不思議な魅力は、少しも失せていなかったばかりか、その頃はもう毛織物の時候で、古風なフランネルを着ていた彼女の身体の線が、今までになくなまめかしくさえ見えたのである。私は、その毛織物をふるわせてくねくねと蠢く、彼女の四肢の曲線を眺めながら、まだ知らぬ着物に包まれた部分の彼女の肉体を、悩ましくも心の内に描いて見るのだった。

そうして暫く話している内に、酒の酔いが私にすばらしい計画を思いつかせた。それは、どこか人目につかぬ場所に、家を一軒借りて、そこを静子と私との媾曳の場所と定め、誰にも知られぬ様に、二人だけの「秘密の逢瀬」を楽しむということであった。その時私

は、女中が立ち去ったのを見届けて、浅ましいことを白状しなければならぬが、いきなり静子を引き寄せ、彼女と第二の接吻を交わしながら、そして私の両手は彼女の背中のフラインネルの毛触りを楽しみながら、私はその思いつきを彼女の耳に囁いたのだ。すると彼女は私のこの不躰な仕草を拒まなかったばかりでなく、微かに首をうなずかせて、私の申し出をも受け入れてくれたのである。

それから二十日余りの、彼女と私との、あの屢々の構曳を、ただれ切った、悪夢の様なその日その日を、何と書き記せばよいのだろう。私は根岸御行の松のほとりに、一軒の古めかしい土蔵つきの家を借り受け、留守は近所の駄菓子屋のお婆さんに頼んで置いて、静子としめし合わせては、多くは昼日中、そこへ落合ったのである。私は恐らく初めて、女というものの情熱の烈しさを、すさまじさを、しみじみと味わった。ある時は、静子と私とは、幼い子供に返つて、古ぼけた化物屋敷の様に広い家の中を、獵犬の様に舌を出して、ハッハッと肩で息をしながら、もつれ合つて駈け廻った。私が掴もうとすると、彼女はいるかみたいに身をくねらせて、巧みに私の手をすり抜けては走った。グツタリと死んだ様に折重なつて倒れてしまうまで、私達は息を限りに走り廻った。ある時は、薄暗い土蔵の中に閉じ籠つて一時間も二時間も静まり返っていた。若し人あつて、その土蔵の入口に耳をすましていたならば、中からさも悲しげな女のすすり泣きに混じつて、二重奏の様に太い男の手離しの泣き声が、長い間続いているのを聞いたであらう。

だが、ある日、静子が芍薬の大きな花束の中に隠して、例の六郎氏常用の外国製乗馬鞭を持つて来た時には、私は何だか怖くさえた。彼女はそれを私の手に握らせて、六郎氏の様に彼女のはだかの肉体を、打擲せよと迫るのだった。恐らくは、長い間の六助氏の残虐が、とうとう彼女にその病癖をうつし、彼女は被虐色情者の、耐え難い慾望にさいなまれる身となり果てていたのである。そして、私も亦、若し彼女との「逢瀬」がこのまま半年も続いたなら、きつと六郎氏と同じ病に取り憑かれてしまつたに相違ない。なぜと言つて、彼女の願いを斥けかねて、私がその鞭を彼女のなやかな肉体に加えた時、その蒼白い皮膚の表面に、俄かに脹れ上つて来る、毒々しい蚯蚓腫れを見た時、ゾツとしたことには、私はある不可思議な愉悅（心から喜び楽しむ）さえ覚えたからである。

しかし、私はこの様な男女の情事を描写する為に、この記録を書き始めたのではなかった。それらは、他日私がこの事件を小説に仕組む折、もつと詳しく書き記すこととして、ここには、その情事生活の間に、私が静子から聞き得た、一つの事実を書き添えて置くに止めよう。それは例の六郎氏の鬢のことであったが、あれは正しく六郎氏がわざわざ注文して拵えさせたもので、そうしたことには極端に神経質であつた彼は、静子との寢室の遊戲の際、絵にならぬ彼の禿頭を隠す為、静子が笑つて止めたにも拘らず、子供の様に真剣になつて、それを注文しに行ったとのことであつた。「……なぜ今まで隠していたの」と私が尋ねると、静子は、「……だつて、そんなこと恥ずかしくつて、言えませんでしたわ」と答えたのである。（これは、まさに「隠し球」であり、ここで初めて登場する事実であり、この事実が最初から分かっていたら、寒川の「春泥に化ける為に鬢を冠つた」というような推理も、少しは違ったものになつたかも知れない。）

さて、糸崎検事に提出する為の、右の「意見書」を書き上げたのは、四月の二十八日であつたが、主人公（寒川）は、翌日、早速、静子を安心させようと、小山田家を訪ねるのであつた。当時、静子の身辺では、六郎氏の遺産処分をめぐる、毎日のように親族たちが寄り集まつては、色々面倒な問題が起つていたらしかったが、殆ど孤立無援状態の静子は、余計に私を頼りにして、私の訪問を大騒ぎをして歓迎してくれたとある。そして、主人公（寒川）は、「……静子さん、もう心配はなくなりましたよ。大江春泥なんて、初めからいなかつたのです」と言い出し、静子を驚かせ、持参した意見書の草稿を、静子のために朗読したのである。——もちろん、静子の「心の中」では飛び上がりた嬉しさが、口には出ないが、そういう表情を少しも見せるともなく、ただ、「マア」と言つたきり、ぼんやりしていたが、やがて、その顔にはほのかな安堵の色が浮かんで来たのである。そして、丁度、夕食時だったので、気のせいかわからないが、洋酒などを出して、私をもてなしてくれた。私は私で、意見書を彼女が認めてくれたのが嬉しく、勧められるままに、思わず酒を過ぎたのである。——これはもちろん、男でも女でも相手に酒をたらふく飲ませては、相手を何とかしようという常套手段の一つに過ぎないのである。

そうして暫く話している間に、酒の酔いが私にすばらしい計画を思いつかせた。それは、どこか人目につかぬ場所に、家を一軒借りて、そこを静子と私との構曳の場所と定め、誰にも知られぬ様に、二人だけの秘密の「逢瀬」を楽しむということであつた。その時、私は、女中が立ち去つたのを見届けてから、いきなり静子を引き寄せ、彼女と第二の接吻を交しながら、私はその思いつきを彼女の耳に囁いたのである。すると彼女は、それを拒まなかつたばかりか、僅かに首をうなずかせて、私の申し出を受け入れてくれたのである。

それから二十日余りの、彼女と私との、あの屢々の構曳を、ただれ切つた、悪夢の様なその日その日を、何と書き記せばよいのだろう。私は根岸御行の松のほとりに、一軒の古めかしい土蔵つきの家を借り受け、留守は近所の駄菓子屋のお婆さんに頼んで置いて、静子としめし合わせては、多くは昼日中、そこへ落合つたのである。私は恐らく初めて、女というものの情熱の烈しさを、すさまじさを、しみじみと味わつた。ある時は、静子と私とは、幼い子供に返つて、古ぼけた化物屋敷の様に広い家の中を、獐犬の様に舌を出して、ハッハッと肩で息をしながら、もつれ合つて駆け廻つた。私が掴もうとすると、彼女はいるかみたいに身をくねらせて、巧みに私の手をすり抜けては走つた。グツタリと死んだ様に折重なつて倒れてしまふまで、私達は息を限りに走り廻つた。（これは恐らく、二人とも全裸で動き廻つたのだろう）。ある時は、薄暗い土蔵の中に閉じ籠つて一時間も二時間も静まり返つていた。若し人あつて、その土蔵の入口に耳をすましていたならば、中からさも悲しげな女のすすり泣きに混じつて、二重奏の様に太い男の手離しの泣き声が、長い間続いているのを聞いたであらう。……

だが、ある日、静子が芍薬の大きな花束の中に隠して、例の六郎氏常用の外国製乗馬鞭を持つて来た時には、私は何だか怖くさへなつた。彼女はそれを私の手に握らせて、六郎氏の様に彼女のはだかの肉体を、打擲せよと迫るのだつた。恐らくは、長い間の六郎氏の残虐が、とうとう彼女にその病癖をうつし、彼女は被虐色情者の、耐え難い欲望にさいなまれる身となり果てていたのである。そして、私も亦、若し彼女との「逢瀬」がこのまま半年も続いたなら、きつと六郎氏と同じ病に取り憑かれてしまつたに相違ない。なぜと言つて、彼女の願いを斥けかねて、私がその鞭を彼女のなやかな肉体に加えた時、

その蒼白い皮膚の表面に、俄かに脹れ上つて来る、毒々しい蚯蚓腫れを見た時、ゾツとしたことには、私はある不可思議な愉悦（心から喜び楽しむ）さえ覚えたからである。

＊

さて、それが他人にどれほど異常と見えようとも、静子にしてみれば、女学校以来の「夢」が、まさに「現実のものとなった」のである。それゆえ、静子の「頭の中」（或いは「心の中」）では、この上もない「無上の喜びに満たされていた」に違いない。それをもつと言え、静子のその全「人生」の中で、いちばん「幸せな時期」でもあったのである。

＊

＊

つまり、静子という女性とは、恐らく、女学校時代から、探偵小説家「寒川」の作品を熱心に愛読していただけではなく、その「寒川」という探偵小説家を、一人の男性としても、彼に強く心惹かれていて、いわば「恋愛感情」のようなものを持つていた、まさに「心の恋人」でもあったのである。それを、もっと具体的に敢えて言えば、静子という女性とは、その探偵小説家「寒川」という男性に、いつか「抱かれることをずっと夢見てきた」ということでもある。その「夢が叶う」（つまり「現実のものにする」）ための、まさに「夫殺し計画」でもあるのである。それゆえ、相談相手は、何が何でも、探偵小説家「寒川」でなければならぬし、また、それは、「夫」がことさらに憎くて殺したのもなく、また、「財産」がことさらに欲しくて殺したのもないのである。そうではなくて、彼女が「心の底」から欲したものは、一つは、夫の「束縛」からの解放であり、そして、もう一つは、「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」にすることだったのである。そのためには、夫の存在、その夫からの「解放」、それがどうしても必要不可欠だったのである。——ここに、初めて「夫殺し」という「考え方」が、はつきりと芽生えて来るのである。

それでは、もう一度、再確認しておきたいと思うが、静子は、女学校を卒業する間際まで、至極幸福に育ったとある。その後の、平田一郎という青年との恋愛は、うそとも本当とも判別し難いが、少なくとも平田一郎、即、春泥ではなく、春泥は、静子であり、丁度、その時、彼女の一家に大きな不幸が訪れ、彼女の父は、多額の借財を残して、殆ど夜逃げ同然に、身を隠さねばならなくなったのである。——その結果、彼女は、女学校を中途退学となり、父親は、それが元でやがて病気で亡くなり、母親との貧しい二人暮らしが始まるのである。そのような時に、やがて実業家小山田六郎氏が彼女を見染め、結婚を申し込む。静子も小山田氏が嫌いではなかった。年こそ十歳以上も違っていたが、小山田氏のスマートな紳士振りに、あるあこがれを感じていたのである。そして、母親と共に、東京の邸に住むようになる。それから七年の歳月が流れ、彼女の母親は、三年後に病気で亡くなることになるが、ここまでは、静子は、恐らく、幸せだったに違いない。

やがて、小山田氏は会社の要務を帯びて、二年ばかり海外に旅行することになるが、その二年の間に、小山田六郎氏は、何時しか本格的な「惨虐色情者」（サディスト）となつて帰って来るのである。一方、静子は、毎日、茶、いけ花、音楽などの師匠に通つて、独居の淋しさを慰めていたという。むろん、そのようなことを実際にどの程度行なっていたのか、また、いわゆる「大江春泥」という作家名で、探偵小説などをもつぱら書いていたのかは、なかなか判別しがたいが、それは、どちらでも大きな問題ではなく、それよりも遙かに大事なことは、この二年間、静子は、夫から完全に解放されて、まさに「自由を満喫」していたのである。——ところが、夫の帰国後、そのような「自由」は完全に奪われ

てしまったとともに、夫の小山田六郎氏は、やがて本格的な「惨虐色情者」(サディスト)となつて、静子夫人の身体には生傷が絶えないような状態になつてしまうのである。

むろん、もし静子という女性が、ひたすら「性的快感」だけを追い求める女性であつたならば、或いは、それは、それで幸せであつたかも知れない。しかし、静子は、理智と文才とに恵まれた女性であり、このままでは、夫・小山田六郎氏の「性奴隷」として縛られ続け、自分のやりたいことも何も出来ずに一生を終えてしまう。それには、やはり抵抗があつたのである。できるならば、その夫の「束縛」から解放されて、もっと「自由」になりたいという、そういう想いが生じて来ても、何も不思議なことではない。つまり、誰かに「救い」を求めるような「心的状態」になつたということである。そのような時に、女学校時代から愛読していた探偵小説家「寒川」のことをふと思い出しては、その探偵小説家「寒川」に救いを求めるような形で、彼に近づき、そして、相談を持ちかけるようになったのである。……

十九、本格的な推理二(きつかけ)

さて、そんな日が二十日ばかりも続いた頃、あまり顔を見せないのも変だというので、私は口を拭つて小山田家を訪ね、静子に逢つて一時間ばかり、しかつめらしく談話を交したのち、例の御出入の自動車に送られて、帰宅したのであつたが、その自動車の運転手が、偶然にも嘗てわたしが手袋を買取つた、青木民蔵であつたことが、またしても私があの奇怪な白昼夢へと引き込まれて行くきつかけとなつたのである。

手袋は違つていたが、ハンドルにかかった手の形も、古めかしい紺の春外套も、(彼はワイシャツの上にすぐそれを着ていた)その張り切つた肩の恰好も、前の風よけガラスも、その上の小さな鏡も、すべて約一ヶ月以前の様子と少しも違わなかつた。それが私を変な心持ちにして行つた。私はあの時、この運転手に向かつて、「大江春泥」と呼びかけて見たことを思い出した。すると、私は妙なことに、大江春泥の写真の顔や、彼の作品の変てこな筋や、彼の不思議な生活の記憶で、頭の中が一杯になつてしまつた。しまいには、クツションの私のすぐ隣に春泥が腰かけているのではないかと思う程、彼を身近に感じ出した。そして、一瞬間、ぼんやりしてしまつて、私は変なことを口走つた。

「……君、君、青木君、この間の手袋ね、あれは一体いつ頃小山田さんに貰つたのだい」と聞くと、「へエ?」と運転手は、一ヶ月前の通りに顔をふり向けて、あつけにとられた様な表情をしたが、「……そうですね。あれは、無論去年でしたが、十一月の……たしか帳場から月給を貰つた日で、よく貰いものをする日だと思つたことを覚えてますから、十一月の二十八日でしたよ。間違いありませんよ」と。「……へエ、十一月のねえ、二十八日なんだね」と、私はまだぼんやりしたまま、譫言のように相手の返事を繰り返した。「……だが、旦那、なぜそう手袋のことばかり気になさるんですか。何かあの手袋に曰くでもあつたのですか」と、運転手はニヤニヤ笑つてそんなことを言つていたが、私はそれに返事もしないで、じつと風よけガラスについた、小さなほこりを見つめていた。車が四、五丁走る間、そうしていた。だが、突然、私は車の中で立上がつて、いきなり運転手の肩を掴んで、怒鳴つた。……君、それは本当だね、十一月二十八日ということは。君は裁判官の前でもそれが断言出来るかね」と聞くと、車がフラフラとよろめいたので、運転手はハ

ンドルを調節しながら、「……裁判官の前ですって、冗談じゃありませんよ。だが、十一月二十八日に間違いはありません。証人だつてありますよ。私の助手もそれを見ていたんですから」と、青木は、私が余り真剣なので、あつけにとられながらも、真面目に答えた。「……じゃ、君、もう一度引返すんだ。小山田さんへ引返すんだ」と言うのであつた。

運転手は益々面喰らつて、やや怖れをなした様子だったが、それでも私の言うがままに、車を帰して、小山田家の門前についた。私は車を飛び出すと、玄関へかけつけ、そこにいた女中を捕えて、いきなりこんなことを聞き訊すのであつた。それは、「……去年の暮れの煤掃きの折、この家では、日本間の方の天井板をすつかりはがして、灰汁洗いをした相だね。それは本当だろうね」と。それは先にも述べた通り、私はいつか天井裏へ上つた時、静子にそれを聞いて知っていたのだ。女中は私が気でも違つたと思つたかも知れない。暫く私の顔をまじまじと見ていたが、「……エエ、本当でございます。灰汁洗いではなく、ただ水で洗わせたのですけれどね、灰汁洗い屋が来たことは来たのです。あれは暮れの二十五日でございます」と答える。「……どの部屋の天井も？」と聞くと、「……エエ、どの部屋の天井も」と言うのであつた。

それを聞きつけたのか、奥から静子も出て来たが、彼女は心配そうに私の顔を眺めて、「……どうなすつたのです」と尋ねるのであつた。私はもう一度さっきの質問を繰り返し、静子からも女中と同じ返事を聞くと、挨拶もそこそこに、また、自動車に飛び込んで、私の宿へ行くように命じたまま、深々とクツシヨンに凭れ込み、私の持前の泥のような妄想に陥つて行くのだった。

小山田家の日本間の天井板は昨年十二月二十五日、すつかり取りはずして水洗いをした。それでは、例の「飾釦」が天井裏へ落ちたのは、その後でなければならぬ。然るに一方では、十一月二十八日に手袋が運転手に与えられている。天井裏に落ちていた「飾釦」が、その手袋から脱落したものであることは、先に屢々述べた通り、疑うことの出来ない事実だ。すると、問題の手袋の釦は、落ちぬ先になくなっていったことになる。このアインシュタイン物理学の実例めいた不可思議な現象は、抑も何を語るものであるか、私はそこへ気がついたのであつた。私は念の為にガレージに青木民蔵を訪ね、彼の助手の男にも会つて、聞き訊して見たけれど、十一月二十八日に間違ひはなく、また、小山田家の天井洗いを引受けた請負人をも訪ねて見たが十二月二十五日に間違ひはなかった。彼は、天井板をすつかりはずしたのだから、どんな小さな品物にしろ、そこに残っている筈はないと請け合つてくれた。

それでもやはり、あの釦は六郎氏が落としたものと強弁する為には、こんな風にも考える外はなかった。即ち、手袋からとれた釦が六郎氏のポケットに残っていた。六郎氏は、それを知らずに釦のない手袋は使用できぬので運転手に与えた。それから少なく見て一ヶ月後、多分は三ヶ月後に（脅迫状が来始めたのは二月頃からであつた）同氏が天井裏へ上つた時、洵に偶然にも釦がそのポケットから落ちたという、持つて廻つた順序なのだ。手袋の釦が外套でなくて服のポケットに残っていたというのも変だし、（手袋は多く外套のポケットへしまうものだ。そして、六郎氏が天井裏へ外套を着て上つたとは考えられぬ。いや、洋服を着て上つたと考えることさえ、かなり不自然だ）それに六郎氏のような金満紳士が、暮れに着ていた服のままで春を越したとも思われぬではないか。

これがきっかけとなつて、私の心にはまたしても陰獣大江春泥の影がさして来た。六

郎氏が惨虐色情者であったという近代の探偵小説めいた材料が、私にとんでもない錯覚を起させたのではなかったか。(彼が外国製乗馬鞭で静子を打擲したことだけは、疑いもない事実だけれど)、そして、彼はやっぱり何者かの為に殺害されたのではあるまいか。大江春泥、アア、怪物大江春泥の俤が、しきりに私の心にねばりついて来るのだ。

一度そんな考えが芽生えたと、凡ての事柄が、不思議に疑わしくなってくる。一介の空想小説家に過ぎない私に、意見書に記したような推理があんなに易々と組立てられたということも、考えて見ればおかしいのだ。現に私はあの意見書のどこやらに、とんでもない錯覚が隠れているような気がしたものだから、一つは静子との情事に夢中だったせいもあるけれど、草稿のまま清書もしないで放つてある。事実私は何となく気が進まなんだ。そして、今ではそれが却つてよかったと思うようにさえなつて来たのだ。

考えて見ると、この事件には証拠が揃い過ぎていた。私の行く先々に、待ち構えていたように、御あつらえ向きの証拠品がゴロゴロしていた。当の大江春泥も彼の作品で言っていた通り、探偵は、多過ぎる証拠に出会った時こそ、警戒しなければならぬのだ。第一あの真に迫った脅迫状の筆蹟が、私の妄想した様に六郎氏の偽筆だったというのは、甚だ考え難いことではないか。嘗て本田も言ったことだが、たとえ春泥の文字は似せることが出来ても、あの特徴のある文章を、しかも方面違いの実業家であった六郎氏に、どうして真似ることが出来たのであろう。私はその時まで、すっかり忘れていたけれど、春泥作『一枚の切手』という小説には、ヒステリイの医学博士夫人が、夫を憎む余り、博士が彼女の筆蹟を手習して、贋の書置きを作ったような証拠を作り上げ、博士を殺人罪に陥れようと企らんだ話がある。ひよつとしたら、春泥はこの事件にも、その同じ手を用いて、六郎氏を陥れようと計つたのではないだろうか。

見方によつては、この事件はまるで大江春泥の傑作集の如きものであった。例えば、天井裏の隙見は、『屋根裏の遊戯』であり、証拠品の鉤も同じ小説の思いつきであるし、春泥の筆筆を手習したのは、『一枚の切手』だし、静子の項の生傷が残酷色情者を暗示したのは『B坂の殺人』の方法である。それから、ガラスの破片が突傷を拵えたことと言ひ、はだかの死体が便所の下に漂つていたことと言ひ、その他、事件全体が大江春泥の体臭に充ち満ちているのだ。これは偶然にしては余りに奇妙な符合ではなかったか。初めから終わりまで、事件の上に春泥の大きな影がかぶさっていたのではなかったか。私はまるで、大江春泥の指示に従つて、彼の思うがままの推理を組立てて来たような気がするのだ。春泥が私にのりうつたのではないかとさえ思われたのだ。

春泥はどこかにいる。そして、事件の底から蛇のような目を光らせていたに相違ない。私は理屈ではなく、そんな風に感じないではいられた。だが、彼はどこに居るのだ。私はそれを下宿の部屋で、蒲団の上に横になつて考えていたのだが、流石肺臓の強い私も、この果てしない妄想にはうんざりした。考えながら、私は疲れ果ててウトウトと睡つてしまった。そして、妙な夢を見てハッと目が醒めた時、ある不思議なことを思い浮かべたのだ。

一、大江春泥の細君の特徴

さて、夜が更けていたけれど、私は彼の下宿に電話をかけて、本田を呼び出してもらつ

た。そして、「……君、大江春泥の細君は丸顔だったと言ったねえ」と、私は本田が電話口に出ると、何の前置きもなく、こんなことを尋ねて、彼を驚かした。すると、「……エエ、そうでしたよ」と、本田は暫くして私だと分かったのか眠そうな声で答えた。そこで、「……いつも洋髪に結っていたのだね」と聞くと、「……エエ、そうでしたよ」と答えるので、「……近眼鏡をかけていたのだね」、「……………エエ、そうですよ」、「……金歯を入れていたのだね」と聞くと、「……エエ、そうですよ」と答えるのであった。

そこで、「……歯が悪かったのだね。そして、よく頬に歯痛止めの貼り薬をしていたというじゃないか」、「……よく知ってますね、春泥の細君に逢ったのですか」、「……いや、桜木町の近所の人に聞いたのだよ。だが、君の逢った時も、やっぱり歯痛をやっていたのだね」、「……エエ、いつもですよ。よっぽど歯の性が悪いのでしょうか」、「……それは右の頬だったかね」、「……よく覚えてないけれど、右のようでしたね」、「……しかし、洋髪の若い女が、古風な歯痛止めの貼り薬は少しおかしいね。今時そんなもの貼る人はいからね」、「……そうですね。だが、一体どうしたんです。例の事件、何か手掛りが見つかったのですか」、「……まあ、そうだね。詳しいことはそのうち話そうよ」と言ったわけで、私は前に聞いて知っていたことを、もう一度念のために本田にただして見たのであった。「さて、これも初めて出て来る「隠し玉」(新しい情報)であり、大江春泥の細君の特徴は、まず、髪型は、洋髪に結っており、顔は、丸顔で、歯には、金歯をはめ、眼には、近眼鏡をかけていて、右の頬には、歯痛止めの貼り薬を貼っていたという特徴であるが、これはもちろん、静子の特徴を隠す為の変装になるのである。」

それから、私は机の上の原稿紙に、まるで幾何の問題でも解くように、様々の形や文字や公式のようなものを、殆ど朝までも書いては消し書いては消ししていたのである。

二十、本格的な推理二(きっかけの解説)

さて、「物語」(ストーリー)は、いよいよ「佳境」(クライマックス)へと向かうわけであるが、その「きっかけ」は、やはり同じ「車の中」であり、それは、次のようなものである。つまり、「……さて、あまり顔を見せないのも変だということで、私は、小山田家を訪ねて、一時間ばかり談話をしたのち、例の御出入の自動車に送られて、帰宅をした」が、その自動車の運転手が偶然にも嘗て私が手袋を買取った、青木民蔵であったので、何気なく、「……君、この間の手袋ね、あれは一体いつ頃小山田さんに貰ったのだい」と聞くと、「そうですね、あれは、無論去年でしたが、十一月の……たしか帳場から月給を貰った日で、よく貰いものをする日だと思ったことを覚えてますから、十一月の二十八日でした。間違いありませんよ」と言うのであった。「……へエ、十一月のねえ、二十八日なんだね」と、ぼんやりと考えているうちに、主人公(寒川)は、何かにふと気づいたように、「……君、それは本当だね、十一月二十八日というのは。君は裁判官の前でもそれが断言出来るかね」と聞かれて、車は急にフラフラよろめき出して、運転手はそれをハンドルの調節しながら、「……裁判官の前ですって、冗談じゃありませんよ。だが、十一月二十八日に間違いはありません。証人だってありますよ。私の助手もそれを見ていたんですから」と、私が余り真剣なので、あつけにとられながらも、真面目に答えた。「……じゃ、君、もう一度引返すんだ、小山田邸へ」と叫ぶと、運転手は益々面食らって、やや恐れを

なした様だったが、それでも私の言うがままに車を帰して、小山田家の門前にと着いた。私は車から飛び出すと、玄関へかけつけ、そこにいた女中を捕えて、「……去年の暮れの煤掃きの折、この家では、日本間の方の天井板をすっかりはがして、灰汁洗いをした相だね。それは本当だろうね」と聞いた。それは先にも述べた通り、私はいつか天井裏へ上った時、静子にそれを聞いて知っていたのだ。女中は私が気でも違ったと思ったかも知れない。暫く私の顔をまじまじと見ていたが、「……エエ、本当でございます。灰汁洗いはなく、ただ水で洗われたのですけれどね、灰汁洗い屋が来たことは来たのです。あれは暮れの二十五日でございました」と言うのであった。小山田家の日本間の天井板は、昨年十二月二十五日、すっかり取り外して水洗いしたのである。それは、天井洗いを引受けた請負人をも訪ねてみたが、やはり、彼は、「……天井板をすっかり外したのだから、どんな小さな品物にしろ、そこに残っている筈はない」と請け負ってくれたのである。

*

*

さて、これは、一体、何が問題になっているのかと言えば、それは、天井裏に落ちていた例の小山田氏の手袋の「飾釦」のことであるが、運転手は、「……それを十一月二十八日にもらった」と言い、一方、女中は、「……天井板の掃除は、十二月二十五日でした」と言っている。――まず、大事なことは、運転手が手袋をもらった時には、右の手袋には、すでに「飾釦」は付いていなかった。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とすのは、運転手が手袋をもらった十一月二十八日以前でなければならぬ。一方、天井板の掃除は、十二月二十五日に行ない、天井裏には何もない状態になった。だとすれば、天井裏に落ちていた手袋の「飾釦」は、十二月二十五日以降でなければならぬ。これは、まったく一致しない。つまり、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とせるのは、運転手に手袋を与える十一月二十八日以前までであり、運転手に手袋を与えた十一月二十八日以降は、自分の手元にその手袋自体がないのだから、天井裏に落としようがないのである。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落としたのではなく、ほかの誰かでなければならぬ。それは、結局、静子が、十二月二十五日以降、天井裏に小山田氏の手袋の「飾釦」を意図的に落としたということである。

そして、考えて見ると、この事件には証拠が揃い過ぎていた。私の行く先々に、待構えていた様に、御あつらえ向きの証拠品がゴロゴロしていた。探偵は、多過ぎる証拠に出会った時こそ、警戒しなければならぬのだ。私はまるで、大江春泥の指示に従って、彼の思うがままの推理を組み立てて来た様な気がする。――そう考えると、主人公（寒川）は、もう一度、一から、すべてを徹底的に考え直してみることにするのであった。

二一、静子からの嬌曳の手紙

ところで、いつも私の方から出す嬌曳の打合せの手紙が、三日ばかり途切れたものだから、待ちきれなくなつたものか、静子から明日の午後三時頃、きつと例の隠れが来てくれる様にとの速達が来た。それには、「……私という女の、余りにもみだらな正体を知つて、あなたはもう私がいやになつたのではありませんか、私が怖くなつたのではありませんか」と怨じてあった。私はこの手紙を受け取っても、妙に気が進まなかった。彼女の顔を見るのがいやでしうがなかった。だが、それにも拘らず、私は彼女の指定してきた

時間に、御行の松の下、あの化物屋敷へ出向いて行つた。(本文)

*

さて、これはどういう「心理」になるのか？ 一方では、気が進まない気持ちと、一方では、それにも拘らず、出向いて行く心理。主人公(寒川)は、一方では、誰が真犯人かの謎はすでに解いて知っているのであり、だからこそ、妙に気が進まないとともに、彼女の顔を見るのがいやでしようがないのである。若しも何も知らなかったならば、彼はもちろん、喜んでそこに出向いて行つたに違いない。また、一方では、いやでも出向いて行かなければならないのは、いわゆる「六郎氏変死事件」をこのまま放置は出来ず、それにまさに「決着」を附けなければならぬからであり、それはまた、愛する「静子」をどこまでも「問い詰め」「問い正す」作業にならざるを得ないのであり、そのような様々な「複雑な想い」が錯綜しているのである。

二二、静子の衣装と土蔵の中

さて、それはもう六月に入っていたが、梅雨の前のそこひの様に憂鬱な空が、押しつける様に頭の上に垂れ下がって、気違いみたいにむしむしと暑い日だった。電車をおりて、三、四丁(一丁は約一〇九段)歩く間に、脇の下や背筋などが、ジメジメと汗ばんで、触つて見ると富士絹のワイシャツが、ネットリと湿っていた。

静子は、私より一足先に来て、涼しい土蔵の中のベットの腰かけて待っていた。土蔵の二階には絨毯を敷きつめ、ベットや長椅子を置き、幾つも大型の鏡を並べなどして、私達は遊戯の舞台を出来るだけ効果的に飾り立てたのだが、静子は私が止めるのも聞かず、絨毯にしる、ベットにしる、出来合ではあつたけれど、馬鹿馬鹿しく高価な品を、惜しげもなく買入れたのである。

静子は、派手な結城紬の一重物に、桐の落ち葉の刺繍を置いた黒緇子の帯をしめて、例によって艶々とした丸髷のつむりをふせ、ベットの純白のシーツの上に、フワリと腰をおろしていたが、洋風の調度と、江戸好みな彼女の姿とが、ましてその場所が薄暗い土蔵の二階なので、甚しく異様な対照を見せていた。私は、夫をなくしても変えようとしなない、彼女の好きな丸髷(本来既婚女性の髪型)の匂やかに艶々しく輝いているのを見ると、直ぐ様、その髷がガックリとして、前髪がひしゃげた様に乱れて、ネットリしたおくれ毛が、首筋の辺にまきついていて、あのみだらがましき姿を目に浮かべないではいられなかった。彼女はその隠家から帰る時には、乱れた髪をときつけるのに、鏡の前で三十分も費すのが常であつたから。(本文)

*

*

まず、季節は六月に入っていて、梅雨の前の憂鬱な空が、押しつける様に頭の上に垂れ下がって、気違いみたいにむしむしと暑い日だったとある。また、電車をおりて、三、四丁(約三、四〇段)歩く間に、脇の下や背筋などが、ジメジメと汗ばんで、触つて見ると富士絹のワイシャツが、ネットリと湿っていたほどであつたともある。それなのに、静子は、派手な結城紬の一重物に、桐の落ち葉の刺繍を置いた黒緇子の帯をしめて、例によって艶々とした丸髷の髪型という、いわば「盛装」でやって来ているのである。例えば、女性は、好きな「恋人」と逢う時には、必ず、今日はどのような「服装や髪型」にす

るかを考えるものであるが、それは、恋人に、「……いま一番綺麗な自分を見せたい」と思うからであり、それがまさに「静子の姿」なのである。また、静子の好きな丸髻は、事が進むに連れて、前髪はひしゃげた様に乱れて、ネットリしたおくれ毛が、首筋の辺りに巻き付いているような、あの淫らがましき姿となり、その乱れた髪をときつけるのに、鏡の前で三十分も費すのが常であったとなるのである。

また、二人の「構曳」場所の「土蔵」のその二階には、「……絨毯を敷きつめ、ベッドや長椅子を置き、幾つも大型の鏡を並べなどして、私達は遊戯の舞台を出来るだけ効果的に飾り立てたのだが、静子は私が止めるのも聞かず、絨毯にしる、ベッドにしる、出来合ではあったけれど、馬鹿馬鹿しく高価な品を、惜しげもなく買入れたのである」とある。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、静子にとって、主人公（寒川）との「情事」は、極めて特別のものであり、それは、静子という女性は、女学校時代から、探偵小説家「寒川」の作品を熱心に愛読していただけではなく、その「寒川」という探偵小説家を、一人の男性としても、彼に強く心惹かれていて、いわば「恋愛感情」のようなものを持っていた、まさに「心の恋人」でもあったのである。それを、もっと具体的に言えば、静子という女性は、その探偵小説家「寒川」という男性に、いつか「抱かれることをずっと夢見てきた」のであり、その「夢が叶う」（つまり「現実のものにする」）ための、まさに「夫殺し計画」でもあったのである。つまり、「心の恋人」でもあった「寒川」を本当の「恋人」（やがては二人で暮らす）ためには、夫の存在、（夫がいては出来ない）、その夫からの「解放」、それがどうしても必要不可欠だったのである。そのためにこそ、静子は自分の人生のすべてを賭けてしまったのである。

二三、本格的な推理二（天井裏の釦）

さて、静子は、「……この間、灰汁洗い屋のことを、態々聞きに戻っていらつしやたのは、どうしたんですの。あなたの慌て様たらなかったのね。あたし、どういう訳だかと、考えて見たんですけど、分かりませんのよ」と、私が入って行くと、直ぐそんなことを聞いて来た。（それは何か感づかれたのではないかと心配になったからである）。そこで、「……分からない？ あなたには」と、私は洋服の上衣を脱ぎながら答えた。「……大変なことなんだよ。僕は大間違いをやっていたのさ。天井を洗ったのが十二月の末で、小山田さんの手袋の釦のとれたのがそれより一月以上も前なんです。だって、あの運転手に手袋をやったのが十一月の二十八日だって言うから、釦のとれたのはそれ以前に決まっているんだからね。順序がまるであべこべなんですよ」と言うと、「まあ」と静子は非常に驚いた様子であったが、まだはつきりとは事情がのみ込めぬらしく、「……でも、天井裏へ落ちたのは、釦がとれたよりはあとなのでしょう」と聞くと、「……あととはあとだけれど、その間の時間が問題なんだよ。つまり、釦は小山田さんが天井裏へ上がった時、その場でとれたんでなければ、変だからね。正確に言えば、成る程あとだけれど、とれると同時に天井裏へ落ちて、そのままそこに残されていたのだからね。それがとれてから、落ちるまでの間に一月以上もかかるなんて、物理学の法則では説明出来ないじゃないか」と言うのと、「そうね」と、彼女は少し青ざめて、まだ考え込んでいた。

例えば、「……とれた釦が、小山田さんの服のポケットにでも入っていて、それが一月

のちに偶然天井へ落ちたとすれば、説明がつかぬことはないけれど、それにしても、小山田さんは去年の十一月に着ていた服で、春を越したのかい」と聞くと、「……いいえ、あの人がおしやれさんだから、年末には、ずっと厚手の暖かい服に替えていましたわ」と言うのであった。「……それごらんない。だから、変でしよう」と、「……じゃあ、やつぱり、平田が……」と、言いかけて、口をつぐんだ。「……そうだよ。この事件には、大江春泥の体臭が余り強過ぎるんだよ。で、僕はこの間の意見書をまるで訂正しなければならなくなった」と言うのであった。（この釦の問題は、すでに解かれていますのであり、それを静子に説明している場面である。）（本文）

二四、本格的な推理二（寒川の三つの推理）

さて、私はそれから前章に記した通り、この事件が大江春泥の傑作集の如きものであること、証拠の揃い過ぎていたこと、偽筆が余りにも真に迫っていたことなどを、彼女の為に簡単に説明した。「……あなたは、よく知らないだろうが、春泥の生活というものが、実に変なんだ。彼奴は、なぜ訪問者に逢わなかったか、なぜあんなにも度々転居したり、旅行をしたり、病気になったりして、訪問者を避けようとしたか、おしまいには、向島須崎町の家を、無駄な費用をかけて、なぜ借りっぱなしにして置いたか、いくら人厭いの小説家にしろ、あんまり変じゃないか。人殺しでもやる準備行為でなかったとしたら、あんまり変じゃないか」と、私は静子の隣にベットに腰をおろして話していたのだが、彼女は、やつぱり春泥の仕業であつたかと思うと、俄かに怖くなった様子で、ぴつたりと私の方へ身体をすり寄せて、私の左の手首を、むず痒く握りしめるのであった。

「……考えてみると、私はまるで彼奴の傀儡にされた様なものだね。彼奴の予め拵えて置いた偽証を、そのまま、彼奴の推理をお手本にして、おさらいさせられたも同然なんだよ。アハハハ……」と、私は自ら嘲る様に笑った。「……あいつは恐ろしい奴ですよ。僕の物の考え方をちゃんと呑込んでいて、その通りに証拠を拵え上げたんだからね。普通の探偵やなんかでは駄目なんだ。僕のような、推理好みの小説家でなくては、こんな廻りくどい突飛な想像が出来るものではないのだから。だが、若し犯人が春泥だとすると、色々無理が出来て来る。その無理が出来て来る所が、この事件の難解な所以で、春泥が底の知れない悪者だという訳だけれどね。無理というのはね、煎じ詰めると、二つの事柄なんだが、一つは、例の脅迫状が小山田さんの死後バツタリ来なくなつたこと、もう一つは、日記帳だとか春泥の著書とか「新青年」なんか、どうして小山田さんの本棚に入っていたかということです。この二つだけは、春泥が犯人だとすると、どうも辻褄が合わないことになるんだよ。たとえ日記帳の例の欄外の文句は、小山田さんの筆癖を真似て書込めるにしたところで、また新青年の口絵の鉛筆のあとなんか、偽証を揃える為にあいつが作って置いたとしたところが、どうにも無理なのは、小山田さんしか持っていない、あの本棚の鍵を、春泥がどうして手に入れたかということです。そして、あの書齋に忍び込めたかということだよ。私はこの三日の間、その点を頭の痛くなる程考え抜いたのだがね。その結果、どうやら、たった一つの解決法（それは「犯人を仮に静子と見る見方」）を見つけたように思うのだがとなるのである。（本文）

*

*

まず、探偵作家「大江春泥」というのは、極度の人嫌いであり、世間に顔出しをせぬ男であり、彼の厭人病と秘密病は、作家仲間や雑誌記者の間に知れ渡っていた。また、彼はよく転居したり、殆ど年中病氣と称して、作家の会合などにも顔を出したことがなかった。それは、一体、なぜなのか？ それは、言うまでもなく、探偵作家「大江春泥」とは、すなわち、「静子自身」であつたからである。そして、そのことを世間や夫に知られることを何よりも恐れていたとともに、もう一つは、静子自身にはもつと恐ろしい「密かな計画」があり、それを遂行するためにはどうしても必要不可欠な道具立てでもあつたのである。そして、いわゆる「六郎氏変死事件」についての、主人公（寒川）の「最初の推理」は、Uの右端の上部には小梅町（六郎氏の暮友達の家所在地）がある。そのUの右端上部を出て、Uの字の下部の吾妻橋までやって来た時、彼を汽船発着所の暗がりへ連れ込み、そこで凶行に及び、その死体を河中へ投棄したとともに、下手人は、春泥であることに、疑を挟む余地はないと考えるのであつた。

ところが、ある時、御出入の運転手のハンドルを握る手袋のホックの飾釦を見ているうちに、主人公（寒川）は、やがて、小山田家の天井裏で拾つたあの「金属の丸いもの」とは、実は手袋の「飾釦」だつたのかとふと思ひ、そこで、運転手に「手袋」のことを聞いてみると、「……寒い時分に、亡くなつた小山田の旦那からもらつたものであり、飾釦は、最初から右手にはなかつた」と言うのであつた。それを聞いて、主人公（寒川）は、もし小山田家の天井裏で拾つたあの「金属の丸いもの」が、もし「小山田六郎氏」の手袋のものだとすれば、天井裏を散歩していた人物とは、実は「小山田六郎氏」ということにならないかと思うのであつた。また、六郎氏が見かけによらぬ、恐ろしい本格的な「惨虐色情者」（サディスト）であつたことも知るのである。

それらに加えて、故六郎氏の書齋を調べてみると、鍵のかかつた本棚が見つかるが、その鍵はなく、許可を得て壊して開けてみると、その中には、六郎氏の数年の日記帳、幾つかの袋に入つた書類、手紙の束、書籍などが一杯入っていたが、それを丹念に調べた結果、この事件に関係ある「三冊の書冊」を発見するのであつた。

まず、その一つは、六郎氏と静子夫人との結婚の年の日記帳で、赤、インクで、「……余は平田一郎なる青年と静子との関係を知れり。……」と。つまり、六郎氏は、結婚の当初から、夫人の秘密は知っていたが、それを夫人には一言も言わなかつたとある。しかし、なぜ、「赤、インク」なのか？ これは恐らく、静子を書き加えたものになるのだろう。

第二は、大江春泥短編集『屋根裏の遊戯』である。かかる書物を、実業家小山田六郎氏の書齋で発見とは、何という驚きかとあるが、これも、静子が入れて置いたものであり、それは、この本を真似て、小山田六郎氏は、天井裏を散歩するようになる。その時に、指紋消しとして手袋を使用した、その手袋の「飾釦」をうっかり落としてしまったという、そういう展開（つまり推理）を、主人公（寒川）にさせるためのものである。

第三は、博文館発行の雑誌「新青年」第六卷第十二号である。これには春泥の作品は掲載されていないが、その代り、口絵に彼の原稿の写真版が原寸のまま原稿紙半枚分程、大きく出ている。余白に「大江春泥の筆蹟」と説明がついていた。妙なことは、その写真版を光線に当ててよく見ると、厚いアートペーパーの上に、縦横に爪の痕のようなものがついている。これは誰かが写真の上に薄い紙を当てて、鉛筆で春泥の筆蹟を、幾度もなすつたものとしか考えられない。これも、「大江春泥の筆蹟」を真似て、小山田六郎氏

が、まさに「脅迫状」を書いたと、主人公（寒川）に「推理」させるためのものである。かくして、我々が今迄犯人と信じ切っていた大江春泥こと平田一郎は、意外にも、最初からこの事件に存在しなかったと考える外はなく、結局、小山田六郎氏自身が、実は犯人（実行犯）であつたという寒川の最初の「本格的な推理一」になるのである。

それは、「……あの夜（三月十九日）、六郎氏は小梅の暮友達の所から帰り、まだ門が開いていたので、召使達に知られぬ様、ソツと庭を廻つて洋館の階下の書斎に入り、闇の中で例の髪を冠り、外に出て、立木を伝つて洋館の軒蛇腹に上り、寝室の窓の外へ廻つて行つて、そのブラインドの隙間から、ソツと中を覗いていたのである。しかも、その洋館の窓は、隅田川に面して、外は殆ど軒下程の空地もなく、コンクリート塀で囲まれていたが、そのコンクリート塀の上部には（盗賊除けの）ビール瓶の破片が植え付けられていて、六郎氏は、軒蛇腹から転落した勢いで、その（盗賊除けの）ビール瓶の破片にぶつかつて、背中の肺部に達する程のひどい突傷を負つたというのである。

つまり、「……かようにして、六郎氏は自業自得、彼のあくどい病癖の為に、軒蛇腹から足を踏み外し、塀の上部（ビール瓶の破片）にぶつかつて、致命傷を受け、その上、隅田川に墜落し、流れと共に吾妻橋汽船発着所の便所の下へ漂いつき、とんだ死に恥をさらした訳である」と考える。（つまり「事故死」と見ているのである）。これが、主人公（寒川）の、最初の「本格的な推理一」（二番目の推理）であるが、しかし、これは、まさに静子の「仕掛け」通りの、また、静子の「思い通り」の（つまり「思う壺」の）「推理」になつてゐるのである。

*

*

さて、三番目の「推理」（その「きつかけ」）は、やはり天井裏に落ちていた例の小山田氏の手袋の「飾釦」のことからであり、運転手は、「……それを十一月二十八日にもらつた」と言い、一方、女中や業者は、「……天井板の掃除は、十二月二十五日であり、天井裏には何もない状態になつた」と言つてゐる。だとすれば、天井裏に落ちていた手袋の「飾釦」は、十二月二十五日以降でなければならぬし、一方、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落とせるのは、運転手に手袋を与えた十一月二十八日以前でなければならぬ。これは、まったく一致しない。だとすれば、小山田氏が天井裏に「飾釦」を落としたのではなく、ほかの誰かでなければならぬ。そこで、再び、大江春泥（平田一郎）の存在が浮び上つて来るが、主人公（寒川）は、若し犯人が春泥だとすると、色々無理が出来て来る。それを煎じ詰めると、二つの事柄なんだが、一つは、例の脅迫状が小山田さんの死後バツタリ来なくなつたこと、静子を殺すことこそが、第一の目的ではなかったのか。また、もう一つは、日記帳だとか春泥の著書とか「新青年」なんか、どうして小山田さんの本棚に入つてゐたかということである。この二つだけは、春泥が犯人だとすると、どうも辻褄が合わなくなるのである。たとえ日記帳の例の欄外の文句は、小山田さんの筆癖を真似て書き込めるにしたところで、また、新青年の口絵の鉛筆のあとなんか、偽証を揃える為にあいつが作つて置いたところ、どうにも無理なのは、小山田さんしか持つてゐない、あの本棚の鍵を、春泥がどうして手に入れたかということだよ。そして、あの書斎に忍び込めたかということだよ。（それが出来る人間は、いったい誰か？）私はこの三日の間、その点を頭の痛くなる程考え抜いたのだがね。その結果、どうやら、たつた一つの解決法を見つけた様に思うのだけれど、と推理は展開するのである。

二五、本格的な推理二（二つの不思議な一致）

さて、「……僕はさつきも言った様に、この事件に春泥の作品の匂いが充ち満ちていることから、彼奴の小説をもっとよく研究して見たら、何か解決の鍵が掴めやしないかと思つて、あいつの著書を出して読んで見たんだよ。それにはね、あなたにはまだ言つてないけれど、博文館の本田という男の話によると、春泥はとんがり帽に道化服という変な姿で、浅草公園にうろついていたと言ふんだ。しかも、それが広告屋で聞いて見ると、公園の浮浪人だったとしか考えられないんだ。春泥が浅草公園の浮浪人の中に混じつていたんで、まるでスチブンスンの『ジキル博士とハイド』みたいじゃないか。僕はそこへ気づいて、春泥の著書の中から、似た様なのを探して見ると、あなたも知つて居るでしょう。あいつが行衛不明になるすぐ前に書いた『パノラマ国』という長編と、それよりは前の作の『一人二役』という短編と、二つもあるのです。それを読むと、あいつが『ジキル博士とハイド』式なやり方に、どんなに魅力を感じていたか、よく分かるのだ。つまり、一人でいながら、二人の人物に化けることにね」と言う。

すると、「……あたし怖いわ」と、静子はしつかり私の手を握りしめて言った。「……あなたの話し方、気味が悪いのね。もうよしましうよ。そんな話。こんな薄暗い蔵の中じやいやですわ。その話はあとにして、今日は遊びましうよ。あたし、あなたとこうしていれば、平田のことなんか、思い出しもしないのですもの」と言うのであった。

主人公（寒川）は、「……まあ御聞きなさい。あなたにとつては、命にかかわる事なんですよ。もし春泥がまだあなたをつけねらつているとしたら」と、私は恋の遊戯どころではなかった。「……僕はまた、この事件の内から、ある不思議な一致を二つだけ発見した。学者臭い言い方をすれば、一つは空間的な一致で、一つは時間的な一致なんだけれど、ここに東京の地図がある」と、私はポケットから用意して来た簡単な東京地図を取り出して、指で差し示しながら、「……僕は大江春泥の転々として移り歩いた住所を、本田と象潟署の署長から聞いて覚えてるが、それは、池袋、牛込喜久井町、根岸、田中初音町、日暮里金杉、神田末広町、上野桜木町、本所柳島町、向島須崎町と、大体こんな風だった。このうち池袋と、牛込喜久井町だけは大変離れているけれど、あとの七カ所は、こうして地図の上で見ると、東京の東北の隅の狭い地域に集まつている。これは春泥の大変な失策だったのですよ。池袋と牛込が離れているのは、春泥の文名が上つて、訪問記者などがおしかけ始めたのは、根岸時代からだという事実を考え合わせると、よくその意味が分かる。つまりあいつは喜久井町時代までは、凡て原稿の用紙を手紙だけで済ませていたのだからね。ところで、根岸以下の七カ所を、こうして線でつないで見ると、不規則な円周を描いていることが分かるが、その円の中心を求めたならば、そこにこの事件解決の鍵が隠れているのだよ。何故そうなのかということは、今説明するけれど」と言うのであった。

すると、その時、静子は何を思ったか、私の手を離して、いきなり両手を私の首にまきつけると、例のモナ・リザの唇から、白い八重歯を出して「怖い」と叫びながら、彼女の頬を私の頬に、彼女の唇を私の唇に、しっかりとくっつけてしまった。やや暫くそうしていたが、唇を離すと、今度は私の耳を人差し指で、巧みにくすぐりながら、そこへ口を近づけて、まるで子守歌の様な甘い調子で、ボソボソと囁くのだった。

「……あたし、そんな怖い話で、大切な時間を消してしまうのが、悔しくてたまらないのですわ、あなた、あなた、私のこの火の様な唇が分かりませんの、この胸の鼓動が聞えませんの。さあ、あたしを抱いて。ね、あたしを抱いて」と言うのであった。

すると、主人公（寒川）は、「……もう少した。もう少したから辛抱して僕の考えを聞いて下さい。その上で、今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから」と言い、私は構わず話し続けて行つた。「……それから時間的な一致というのはね。春泥の名前がバツタリ雑誌から見えなくなつたのは、私はよく覚えていますが、おとしの暮からなんだ。それとね、小山田さんが外国から帰国した時期と——あなたはそれをやっぱり、おとしの暮だつて言つたでしょう。この二つがどうして、こんなにもぴつたり一致しているのかしら。これが偶然だろうか。あなたはどう思う？」

私がそれを言い切らぬ内に、静子は、部屋の隅から例の外国製乗馬鞭を持って来て、無理に私の右手に握らせると、いきなり着物を脱いで、うつむきにベッドの上に倒れ、むき出しのなめらかな肩の下から、顔だけを私の方にむりむけて、「……それがどうしたの、そんなこと、そんなこと」と何か訳の分からぬことを、氣違いみたいに口走つたが、「……サア、ぶつて！　ぶつて！」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであった」となるのである。（本文）

*

*

さて、主人公（寒川）は、まず、天井裏の「飾釦」の「疑問」から話を始めるが、それは、前述の通りであり、ここでは省略をして、次の「疑問」は、春泥の生活というものが、実に変で、なぜあんなにも度々転居したり、旅行をしたり、病氣になったりして、訪問者を避けようとしたか、いくら人厭いの小説家にしろ、あんまり変じゃないかということ、春泥が「犯人」だとすると、なぜ脅迫状が小山田氏の死後バツタリ来なくなつたのか、「……静子を殺すことこそが、第一の目的ではなかったのか？」と。また、日記帳や春泥の著作或いは「新青年」などが、どうして小山田氏の本棚に入つていたのか、小山田氏しか持つていないはずの、あの本棚の鍵を、春泥はどうやって手に入れたかという疑問である。（それは、静子を仮に犯人とすれば、すべて解ける問題なのである。）

だからこそ、静子は、「……あたし怖いわ。あなたの話し方、氣味が悪いのね。もうよみましょうよ。そんな話。その話はあとにして、今日は遊びましょうよ。あたし、あなたとこうしていれば、平田のことなんか、思い出しもしないのですもの」と言うのであった。

主人公（寒川）は、「……まあ御聞きなさい」と言い、「……僕は、この事件の内から、ある不思議な一致を二つだけ発見した」と言う。その一つは、いわゆる「空間的な一致」であり、それは、大江春泥が転々として移り歩いた住所を、こうして地図の上で見ると、二ヶ所を除く、あとの七ヶ所（それは「……春泥の文名が上つて、訪問記者などがおしかけ始めた以降」）は、不規則な円周を描いていることが分かる。その「円の中心」を求めれば、そこにこの「事件の鍵」が隠れているのだよ。と言うと、——静子は、いきなり両手を私の首にまきつけると、例のモナ・リザの唇から、「怖い」と叫びながら、彼女の頬を私の頬に、彼女の唇を私の唇に、しっかりとくっつけてしまった。そして、「……あなた、そんな怖い話で、大切な時間を消してしまうのが、悔しくてたまらないのですわ、あなた、あなた、私のこの火の様な唇が分かりませんの、この胸の鼓動が聞えませんの。さあ、あたしを抱いて。ね、あたしを抱いて」と必死に言うのであった。

一方、主人公（寒川）は、「……もう少しだ。もう少しだから辛抱して僕の考えを聞いて下さい。その上で、今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから」と言っている。この「言葉」（今日はあなたとよく相談しようと思つて来たのだから）は、極めて大事な言葉であり、というのも、この時の主人公（寒川）の「知性や理性」は、まだ「健全に機能していた」ということである。そして、もう一つは、いわゆる「時間的な一致」であり、それは、春泥の名前がバツタリ雑誌から見えなくなつた時期と、小山田氏が外国から帰国した時期とが、こんなにもびつたりと一致していることです。この二つがどうして、こんなにもびつたりと一致しているのか？ あなたはどう思うと聞くと、静子は、何を思つたか、部屋の隅から例の外国製乗馬鞭を持つて来て、無理に私の右手に握らせると、いきなり着物を脱いで、うつむきにベットのの上に倒れ、むき出しのなめらかな肩の下から、顔だけを私の方にむりむけて、「……それがどうしたの、そんなこと、そんなこと」と何か訳の分からぬことを口走り、「……サア、ぶつて！　ぶつて！」と叫びながら、上半身を波の様にうねらせるのであつた。（もちろん、これらは、話題を必死に逸らそうとしているとともに、自分の方へと必死に関心を向けさせようとしているのである。）

二六、本格的な推理二（最終的かつ決定的「推理」）

小さな蔵の窓から、鼠色の空が見えていた。電車の響きであろうか、遠くの方から雷鳴の様なものが、私自身の耳鳴りに混つて、オドロオドロと聞えて来た。それは丁度、空から、魔物の軍勢が押しよせて来る、陣太鼓のように気味悪く思われた。恐らく、あの天候と、土蔵の中の異様な空気が、私達二人を気違いにしたのではなかつたか。静子も私も、あとになって考えて見ると、正気の沙汰ではなかつたのだ。私はそこに横わつてもがいている彼女の汗ばんだ青白い全身を眺めながら、執拗にも私の推理を続けて行つた。

「……一方では、この事件の中に大江春泥がいることは、火の様に明らかな事実なんだ。だが、一方では、日本の警察力がまる二ヶ月かかつて、あの有名な小説家を探し出すことが出来ず、彼奴は煙みたいに完全に消え去つてしまつたのだ。ああ、僕はそれを考えるさえ恐ろしい。こんなことが悪夢でないのが不思議な位だ。何故彼は小山田静子を殺そうとしないのだ。ぶつとりと脅迫状を書かなくなつてしまつたのだ。彼奴はどんな忍術で小山田さんの書斎へ入ることが出来たんだ。そして、あの錠前付きの本棚を開けることが出来たんだ。……僕はある人物を思い出さないではいられなかつた。外でもなく、女流探偵小説家平山日出子だ。世間ではあれを女だと思つている。作家や記者仲間でも、女だと信じている人が多い。日出子の家へは毎日の様に愛読者の青年からのラブ・レターが舞込むそうだと。ところが本当は彼は男なんだよ。しかもれっきとした政府の御役人なんだよ。探偵作家なんて、みんな、僕にしろ、春泥にしろ、平山日出子にしろ、怪物なんだ。男でいて女に化けて見たり、女でいて男に化けて見たり、猟奇の趣味が昂じると、そんな所まで行つてしまうのだ。ある作家は、夜女装をし、浅草をぶらついた。そして、男と恋の真似事さえやつた」と、私はもう夢中になつて、気違いの様に喋りつづけた。顔中に一杯汗が浮かんで、それが気味悪く口の中に流れ込んだ。

「……さあ、静子さん。よく聞いて下さい。僕の推理が間違つていないかい。春泥の住所をつないだ円の中心はどこか。この地図を見て下さい。あなたの家だ。浅草山の宿

だ。皆、あなたの家から自動車で十分以内のところばかりだ。……小山田氏の帰国と一緒に、なぜ春泥はその姿を隠したのか。もう茶の湯と音楽の稽古に通えなくなったからだ。分かりますか。あなたは小山田さんの留守中、毎日午後から夜に入るまで、茶の湯と音楽の稽古に通ったのです。……ちゃんと膳立てをして置いて、僕にあんな推理を立てさせたのは誰だったか。あなたですよ、僕を博物館で捕えて、それから自由自在にあやつたのは。……あなたなれば、日記帳に勝手な文字を書き加えることだって、その外の証拠品を小山田さんの本棚に入れることだって、天井へ鉤を落して置くことだって、自由に出来るのです。僕はここまで考えたのです。外に考え様がありますか。さあ、返事をして下さい。返事をして下さい」と迫るのであった。

静子は、「……あんまりです、あんまりです」と、裸体の静子は、ワツと悲鳴を上げて、私にとりすがって来た。そして、私のワイシャツの上に顔をつけて、熱い涙が私の肌に感じられた程にも、さめざめと泣き入るのだった」。

「……あなたは何故泣くのです。さつきから何故僕の推理を止めさせようとするのです。当り前なれば、あなたには命がけの問題なのだから、聞きたがる筈じやありませんか。これだけでも、僕はあなたを疑わないではいられぬのだ。御聞きなさい。まだ僕の推理はおしまいじゃないのだ。大江春泥の細君は何故眼鏡をかけていた、金歯をはめていた、歯痛止めの貼り薬をしていた。洋髪に結って丸顔に見せていた。あれは春泥の『パノラマ国』の変装法そっくりじやありませんか。春泥はあの小説の中で、日本人の変装の極意を説いている。髪型を変えること、眼鏡をかけること、含み綿をすること、それからまた、『一錢銅貨』の中では、丈夫な歯の上に、夜店の鍍金の金歯をはめる思いつきが書いてある。あなたは人目につき易い八重歯を持っている。それを隠す為に、夜店の鍍金の金歯をかぶせたのだ。あなたの右の頬には大きな黒子がある。それを隠す為に、あなたは歯痛止めの貼り薬をしたのだ。洋髪に結んで瓜実顔を丸顔に見せる位なんでもないことだ。そうしてあなたは春泥の細君に化けたのだ。僕はおととい本田にあなたを隙見させて、春泥の細君と似ていないかを確かめた。本田はあなたの丸鬚を洋髪に変え、眼鏡をかけ、金歯を入れたせたら、春泥の細君にそっくりだと言ったじやありませんか。さあ、言っておしまいなさい。すっかり分かってしまったのだ。それでもあなたは、まだ僕をごまかせようとするのですか」と言うのであった。

私は、静子を突き離すと、彼女はグツタリとベットのの上に倒れかかり、激しく泣き入って、いつまで待っても答えようとはしない。私はすっかり興奮してしまつて、思わず手にしていた乗馬鞭を振るって、ピシリと彼女のはだかの背中を叩きつけた。私は夢中になつて、これでもか、これでもかと、幾つも幾つもうち続けた。見る見る、彼女の青白い皮膚は赤味走って、やがて蚯蚓の這った形に、真赤な血がにじんて来た。彼女は私の鞭の下に、いつもするのと同じみだらな恰好で、手足をもがき、身をくねらせた。そして、絶入るばかりの息の下から、「平田、平田」と細い声で口走った。

すると、主人公（寒川）は、「……平田？ ああ、あなたはまだ私をごまかせようとするのですか。あなたが春泥の細君に化けていたなら、春泥という人物は別にある筈だとも言うのですか。春泥なんているものか。あれは全く架空の人物なんだ。それをごまかす為に、あなたは彼の細君に化けて雑誌記者なんか逢つていたのだ。そして、あんなにも度々住所を変えたのだ。しかし、ある人には、まるで架空の人物ではごまかせないもの

だから、浅草公園の浮浪人を傭って、座敷に寝かして置いたんだ。春泥が道化師の男に化けたのではなくて、道化服の男が春泥に化けていたんだ」と言う。（これは「浅草公園の誰か浮浪人を一人傭って、自分の座敷に寝かして置いて、いかにも「大江春泥」がそこに存在しているかのように見せかけたのである。」）

静子はベットの上で、死んだ様になって、黙り込んでいた。ただ、彼女の背中の赤蚯蚓だけが、まるで生きているかの様に、彼女の呼吸につれて蠢いていた。彼女が黙ってしまったので、私もいくらか興奮がさめて行った。

「……静子さん、僕はこんなにひどくする積もりではなかった。もっと静かに話してもよかったのだ。だが、あなたが、あんまり話を避けよう避けるものだから、そしてあんな嬌態（男にこびるなまめかしい態度や姿）でごまかそうとするものだから、僕もつい興奮してしまったのですよ。勘弁して下さいね。ではね、あなたは口を利かなくてもいい。僕があなたのやって来たことを、順序を立てて言ってみますからね。若し間違っていたら、そうではないと、一言言ってくださいね」と、そして、私は私の推理を、よく分かる様に話し聞かせたのである。（本文）

＊

＊

さて、小さな蔵の窓から、鼠色の空が見えていた。恐らく、あの天候と、土蔵の中の異様な空気が、私達二人を気違いにしたのではなかったか。静子も私も、あとになって考えて見ると、正気の沙汰ではなかったのだ。私はそこに横たわりもがいている彼女の汗ばんだ青白い全身を眺めながら、執拗にも私の推理を続けて行った。それは、「……一方では、この事件の中に大江春泥がいることは、火の様に明らかな事実なんだ。だが、一方では、日本の警察力がまる二ヶ月かかって、あの有名な小説家を探し出すことが出来ず、彼奴は煙のように完全に消え去ってしまった。それらは、一体、何を意味するのか？

主人公（寒川）は、終に、その最終的かつ決定的な「推理」を語るのであった。つまり、それは、「……さあ、静子さん。よく聞いて下さい。僕の推理が間違っているかないか。春泥の住所をつないだ円の中心はどこか。この地図を見て下さい。あなたの家だ。浅草山の宿だ。皆、あなたの家から自動車で十分以内のところばかりだ。……小山田氏の帰国と一緒に、なぜ春泥はその姿を隠したのか。もう茶の湯と音楽の稽古に通えなくなったからだ。分かりますか。あなたは小山田氏の留守中、毎日、午後から夜に入るまで、茶の湯と音楽の稽古に通ったのです。……ちゃんと膳立てをして置いて、僕にあんな推理を立てさせたのは誰だったか。あなたですよ、僕を博物館で捕えて、それから自由自在にあやつたのは。……あなたなれば、日記帳に勝手な文字を書き加えることだって、その外の証拠品を小山田氏の本棚に入れることだって、天井へ鉤を落して置くことだって、自由に来るのです。僕はここまで考えたのです。外に考え様がありますか。さあ、返事をして下さい。返事をして下さい」と迫るのであった。

静子は、主人公（寒川）をずっと愛してきた。その愛する恋人から浴びせられた言葉に對して、静子は、「……あんまりです、あんまりです」と、裸体の静子は、ワツと悲鳴を上げて、私にとりすがって来た。そして、私のワイシャツの上に顔をつけて、熱い涙が私の肌を感じられた程にも、さめざめと泣き入るのだった」とある。——この静子の「心の中」をもう少し詳しく説明をするならば、それは、「……もし夫がいたならば、こうしてあなたと逢うことも出来なければ、また、あなただってわたしとこうなることを望んでい

たのでしよう。それなのに、わたしだけを『悪者扱い』にするなんて、あんまりです、あんまりです。わたしがどれほどあなたのことを愛しているか！ どうしてそれをわかってくれないのですか」と、彼の胸にその顔を沈めて、さめざめと泣いているのです。

一方、主人公（寒川）は、なお容赦なく、あなたは何故泣くのです。さつきから何故僕の推理を止めさせようとするのです。まだ僕の推理はおしまじやないのだ。大江春泥の細君は何故眼鏡をかけ、金歯をはめ、歯痛止めの貼り薬をし、洋髪に結って丸顔に見せていたのか、すべて「変装」のためだ。あなたには八重歯があり、それを隠すために金歯をかぶせ、右の頬の大きな黒子を隠すために、歯痛止めの貼り薬をしていた、洋髪にして瓜実顔を丸顔に見せていたのだ。さあ、言ってしまいなさい、すっかり分かってしまったのだから、まだ、ぼくをごまかそうとするのですか。

私は、静子を突き離すとともに、すっかり興奮してしまつて、思わず手にしていた乗馬鞭を振るつて、ピシリと彼女のはだかの背中を叩きつけた。私は夢中になつて、これでもか、これでもかと、幾つも幾つもうち続けた。見る見る、彼女の青白い皮膚は赤味走つて、やがて蚯蚓腫れの形に、真つ赤な血がにじんで来た。彼女は、いつもと同じみだらな格好で、手足をみがき、身をくねらせていたとある。そして、この「容赦なくとことん追い詰めていく心理、そうせずにはいられない心理」こそは、まさに典型的な「惨虐色情者」（サディスト）の「深層心理」そのものであり、主人公（寒川）自身、すでに何時しか「惨虐色情者」（サディスト）に、一面では染まつていたのである。

一方、静子は、絶入るばかりの息の下から、「平田、平田」と細い声で口走りと、主人公（寒川）は、「……平田？ ああ、あなたはまだ私をごまかそうとするのですか。あなたが春泥の細君に化けていたなら、春泥という人物は別にある筈だとも言うのですか。春泥なんているものか。あれは全く架空の人物なんだ。それをごまかす為に、あなたは彼の細君に化けて雑誌記者なんか逢つていたのだ」と言うのであった。

しかし、この「平田、平田」という「言葉」が、主人公（寒川）の「頭の中」にはつきりと「記憶保存」され、いつまでも「耳の底」に残つては、もしかしたら、実際に「平田一郎」（或いは「大江春泥」という人物は、現実に存在するのではないかと、その後も、主人公（寒川）をずっと悩ませ続けるのであった。

二七、本格的な推理二（その全容を語る）

主人公（寒川）は、では、「あなたは口を利かなくてもいい。僕があなたのやつて来たことを順序を立てて言つて見ますからね。若し間違つていたら、そうではないと、一言言つてくださいね」と。そして、私は私の推理をよく分かる様に話し聞かせたのである。

あなたは女にしては珍らしく「理智と文才」に恵まれていた。それは、あなたが私にくれた手紙を読んだだけでも、充分分かるのです。そのあなたが匿名でしかも男名前で、探偵小説を書いて見る気になつたのは、ちつとも無理ではありません。しかも、その小説が意外に好評を博した。そして、丁度あなたが有名になりかけた時分に、小山田さんが、二年間も外国へ行くことになった。その淋しさを慰める為、且つはあなたの猟奇癖を満足させる為、あなたはふと「一人三役」という恐ろしいトリックを思いついた。あなたは、『一人二役』という小説を書いているが、その上を行つて、一人三役というすばらしいこ

を思いついたのです。あなたは平田一郎の名前で、根岸に家を借りた。その前の池袋と牛込とはただ手紙の受取場所を造って置いてただけでしょう。そして、厭人病や旅行などで、平田という男性を世間の目から隠して置いて、あなたが変装をして平田夫人に化け平田に代わって原稿の話まで一切切り廻していたのです。つまり原稿を書く時には大江春泥の平田になり、雑誌記者に逢ったり、家を借りたりする時には、平田夫人になり、山の宿の小山田家では、小山田夫人になりすましていたのです。つまり「一人三役」なのです。その為に、あなたは殆ど毎日の様に午後一杯、茶の湯や音楽を習うのだと言って、家をあけなければならなかった。半日は小山田夫人、半日は平田夫人と、一つ身体を使い分けていたのです。それには髪も結い変える必要があり、着物を着換えたり変装をしたりする時間が要るので、余り遠方では困るのです。そこで、あなたは住所を変える時、山の宿を中心に、自動車で十分位の所ばかり選んだ訳ですよ。僕は同じ猟奇の徒なんだから、あなたの心持がよく分かります。随分苦勞な仕事ではあるけれど、世の中に、こんなにも魅力のある遊戯は、恐らく外にはないでしょうからね。僕は思い当ることがありますよ。いくつかある批評家が春泥の作を評して、女でなければ持つていない不愉快な程の猜疑心に充ち満ちている。まるで暗闇に蠢く「陰獣」の様だと言ったのを思い出しますよ。あの評論家は本当のことを言っていたのですね。

その内に、短い二年が過ぎ去って、小山田さんが帰って来た。もうあなたは元の様に一人二役を勤めることは出来ない。そこで大江春泥の行方不明ということになったのです。でも、春泥が極端な厭人病者だということを知っている世間は、その不自然な行方不明をさして疑わなかった。だが、あなたがどうしてあんな恐ろしい罪を犯す気になったのか、その心持は男の僕にはよく分からないけれど、変態心理学の書物を読むと、ヒステリイ性の婦人は、屢々自分で自分に当って脅迫状を書き送るものだそうです。日本にも外国にもそんな実例は沢山あります。つまり、自分でも怖がり、他人にも気の毒がつもらいたい気持なんです。あなたもきつとそれだと思います。自分が化けていた、有名な男性の小説家から、脅迫状を受ける。何というすばらしい魅力でしょう。

同時に、あなたは年をとったあなたの夫に不満を感じて来た。そして、夫の不在中に経験した変態的な自由の生活に止み難いあこがれを抱く様になった。いや、もっと突込んで言えば、嘗てあなたが春泥の小説の中に書いた通り、犯罪そのものに、殺人そのものに、言い知れぬ魅力を感じたのだ。それには丁度春泥という完全に行方不明になった架空の人物がある。この者に嫌疑をかけて置いたならば、あなたは永久に安全でいることが出来た上、いやな夫とは別れ、莫大な遺産を受け継いで、半生を勝手気ままに振舞うことが出来るからである。

だが、あなたはそれだけでは満足しなかった。万全を期する為、二重の予防線を張ることを考えた。そして、選り出されたのが僕なんです。あなたはいつも春泥の作品を非難する僕をまんまと傀儡に使って、敵討ちをしてやろうと思ったのでしょうか。だから僕がああ意見書を見せた時には、あなたはどんなにか、おかしかったことでしょう。僕をごまかすのは、造作もなかったですね。手袋の飾釦、日記帳、新青年、『屋根裏の遊戯』それで充分だったのですからね。だが、あなたがいつも小説に書いている様に、犯罪者というものは、どこかにほんのつまらないしくじりを残して置くものですね、あなたは小山田さんの手袋からとれた釦を拾って、大切な証拠品に使ったけれど、それがいつとれたか

をよく検^{しら}べて見なかった。その手袋がとつくの昔^{むかし}運転手に与えられたことを少しも知らずにいたのです。何というつまらないしくじりだったでしょう。小山田^{おやまだ}さんの致命傷はやつぱり僕の前の推察の通りだと思ひます。ただ違^{ちが}うのは、小山田^{おやまだ}さんが窓の外から覗^{のぞ}いたのではなくて、多分、あなたと情痴の遊戯中に（だからあの鬢^{かつら}をかぶっていたのでしょう）あなたが窓の中からつきおとしたのです。（本文）

*

*

さて、あなたは女にしては珍らしく「理智と文才」に恵まれていた。そのあなたが、匿名^{おとし}でもしも男名前^{おとし}前で、探偵小説を書いて見る氣になったのは、無理からぬことであり、その小説が意外に好評を博して、丁度あなたが有名になりかけた時分に、小山田^{おやまだ}氏が、二年間も外国へ行くことになった。その淋しさを慰める為、且^かつはあなたの獵奇癖^{りようき}を満足させる為、あなたはふと「一人三役」という恐ろしいトリックを思いついた。一人は、恋人「平田一郎」（かつ探偵作家大江春泥^{しゅんでい}）、一人は、その妻「平田夫人」（かつ春泥夫人^{しゅんでい}）、そして、もう一人は、実業家小山田六助氏の夫人「小山田静子^{しずこ}」であつた。……

そのために、あなたは殆ど毎日の様に午後一杯、茶の湯や音楽を習うのだと言つて、家をあけなければならなかつた。つまり、半日は小山田夫人、半日は平田夫人と、一つの身体を使い分けていた。それには髪型も変えたり、着物を替えたりする時間が必要であり、そこで、住所を変える時、山^{やま}の宿^{しゆく}を中心に、自動車で十分ぐらいの所ばかりを選んだのである。やがて、小山田^{おやまだ}氏が帰つて来た。もう元の様に一人二役を勤めることは出来ない。そこで大江春泥^{しゅんでい}の行方不明となるのである。だが、あなたがどうしてあんな恐ろしい罪を犯す氣になつたのか、男の僕にはよく分からないが、変態心理学の書物を読むと、自分でも怖がり、他人にも氣の毒がつてもらいたい氣持ちなんですね。それと同時に、あなたは年をとつたあなたの夫に不満を感じてきた。そして、夫の不在中に経験した変態的な自由の生活に止^やみ難いあこがれを抱く様になつた。いや、もっと言えば、犯罪そのものに、殺人そのものに、言い知れぬ魅力を感じたのだ。春泥^{しゅんでい}を犯人に仕立てれば、あなたは永久に安全でいられる上、いやな夫とは別れ、莫大な遺産を受け継いで、半生を勝手氣ままに振る舞うことができるからです。

この主人公（寒川^{さむかわ}）の「推理」は、間違ひではない。間違ひではないが、しかし、最も大事なものが欠落している。それは、一体、何かと問えば、それは、次のようなことである。――つまり、静子が「心の底」から欲したもののは、確かに、一つは、夫からの「解放」ではあるが、しかし、それもこれも、すべて「心の恋人」でもあつた「寒川^{さむかわ}」を本当の「恋人」にすることであり、その愛する「寒川^{さむかわ}」と一緒に暮らすことをずっと夢見ていたのである。この最も大事な静子の「女心」が、主人公（寒川^{さむかわ}）には、十分に読み解^とけていなかった。そのために、愛する静子に必要以上に辛く当たつてしまつたのである、その結果として、静子の「自殺^{い、い}」という悲劇へと向かつてしまふのである。

二八、推理後の「二人の様子」

本格的な推理後、主人公（寒川^{かんがわ}）は、「……さあ、静子さん。僕の推理が間違つていましたか。何とか返事をして下さい。出来るなら僕の推理を打破して下さい。ねえ、静子さん」と言うのであつた。そして、私はグツタリとしている静子の肩に手をかけて、軽く揺^ゆ

さぶつたが、彼女は「恥と後悔」の為に顔を上げることが出来なかったのか、身動きもせず、一言も物を言わなかったのである。

私は言いたいだけ言ってしまうと、ガッカリして、その場に茫然と立ちつくしていた。私の前には、昨日まで私の無二の恋人であった女が、傷ける陰獣の正体をあらわにして、倒れている。それをじっと眺めていると、いつか私の眼は熱くなった。

「……では僕はこれで帰ります」と、私は気を取直して言った。「……あなたは、あとでよく考えて下さい。そして、正しい道を選んで下さい。僕はこの一月ばかりの間、あなたのお陰で、まだ経験しなかった、情痴の世界を見ることが出来ました。そして、それを使うと今でも僕は、あなたと離れ難い気がするのです。しかし、このままあなたとの関係が続けて行くことは、僕の良心が許しません。僕は道徳的に人一倍敏感な男なのです。……では左様なら」と。

私は静子の背中の蚯蚓腫れの上に、心をこめた接吻を残して、暫くの間彼女との情痴の舞台であった、私達の化物屋敷をあとにした。空は愈々低く、気温は一層高まって来た様に思われた。私は身体中無意味な汗にしたりながら、その癖齒と齒をカチカチ言わせて、気違いの様にフラフラと歩いて行つた。(本文)

*

さて、主人公(寒川)は、なおも「推理」を推し進め、あなたは、万全を期するため二重の予防線を張つた。そして、選り出されたのが私なんです。僕をごまかすのは、造作もなかったでしょう。しかし、犯罪者というものは、どこかにほんのつまらないしくじりを残して置くものです。それが、手袋の飾釦であり、何というつまらないしくじりだったでしょう。一方、小山田さんの致命傷は、やっぱり僕の前の推察通りだと思ひます。ただ違ふのは、小山田さんが窓の外から覗いたのではなく、多分、あなたと情痴の遊戯中に、あなたが窓の中から突き落としたのです。さあ、静子さん。僕の推理が間違っていましたか。何とか返事をして下さい。出来るなら僕の推理を打破して下さい。……

静子は、恥と後悔の為に顔を上げることが出来なかったのか、身動きもせず、一言も物を言わなかったとある。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、主人公(寒川)という人は、自分の「推理」に余りにも酔つてしまい、静子の「心」を「思いやる」ことを怠つてしまつたのである。——それは、自分の「推理」の論理展開ばかりに気をとられ、これでもかこれでもかと容赦なく相手を追い詰めるばかりで、静子の「せつない女心」というものを少しも理解しようとはしなかった。そのことが、結果として、静子を「自殺」へと追いやってしまふのである。それは、「静子」にもつとやさしく少しでも言い訳の出来るような余地を残しておくべきだったのである。ところが、主人公(寒川)という人は、自分の「推理」に余りにも酔つてしまい、その責めて一つぐらいは残しておくべき「退路」の、すべての「退路」をすべて断つてしまつたのである。それゆえ、静子は、たつた「一言も言えない」、たつた「一言の言いわけ」も出来ない「精神状態」へと追い込まれてしまつたのである。

*

私は言いたいだけ言ってしまうと、ガッカリして、その場に茫然と立ちつくしていた。私の前には、昨日まで私の無二の恋人であった女が、傷ける陰獣の正体をあらわにして、倒れている。それをじっと眺めていると、いつか私の眼は熱くなった。

そして、「……では僕はこれで帰ります」。「……あなたは、あとでよく考えて下さい。そして、正しい道を選んで下さい。僕はこの一月ばかりの間、あなたのお陰で、まだ経験しなかった、情痴の世界を見ることが出来ました。そして、それを思うと今でも僕は、あなたと離れ難い気がするのです。しかし、このままあなたとの関係が続けて行くことは、僕の良心が許しません。僕は道徳的に人一倍敏感な男なのです。……では左様なら」。私は静子の背中の蚯蚓腫れの上に、心をこめた接吻を残して、暫くの間彼女との情痴の舞台であった、私達の化物屋敷をあとにした、とある。

*

*

さて、主人公（寒川）の「目」は、今や犯罪者を「見る目」に変わっている。静子の「深く傷ついた心」を、今こそ、心から癒すべき「相談相手」（恋人）となつて、これからどうしたらよいかを、親身になり、二人でどこまでも深く話し合うべきところを、主人公（寒川）という人は、その静子の「深く傷ついた心」をそのまま放置したまま、何のやさしい言葉もかけられることなく、一人で帰ってしまったのである。——それは、一体、なぜなのか？ それは、主人公（寒川）という人もまた、知らず識らずのうちに、いわゆる「惨虐色情者」（サディスト）の「心理状態」にどこか染まつてしまい、本来の主人公（寒川）の「健全な精神」の働きが十分に機能しなくなつていたのである。

それでは、その「絶対的証拠」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、まさに「……私は言いたいだけ言つてしまうと、ガッカリして」という、この「言葉」こそは、まさにその「絶対的証拠」の「言葉」であり、それこそは、「……もつともつと何かないのか」という、まさに「惨虐色情者」（サディスト）の心理そのものであり、主人公（寒川）という人も、知らず識らずのうちに、いつの間にか自らも「陰獣」に染まつていたのである。

二九、事件の結末

そして、その翌日の夕刊で、私は静子の自殺を知つたのだつた。彼女は恐らくは、あの洋館の二階から、小山田六助氏と同じ隅田川に身を投じて、覚悟の水死をとげたのである。運命の恐ろしさは、隅田川の流れ方が一定している為に起つたことではあろうけれど、彼女の死体は、やっぱり、あの吾妻橋下の汽船発着所のそばに漂つていて、朝、通行人に発見されたのであつた。何も知らぬ新聞記者は、彼の記事の後へ、「小山田夫人は恐らく、夫六郎氏と同じ犯人の手にかかつて、あえない最期をとげたものである」と附加えた。私はこの記事を読んで、私の嘗つての恋人の可哀想な死に方を憐れみ、深い哀愁を覚えたが、それはそれとして、静子の死は、彼女が彼女の恐ろしい罪を自白したも同然で、まことに当然の成行きであると思つていた。一月ばかりの間は、そんな風に信じ切つていた。だが、やがて、私の妄想の熱度が、徐々に冷えて行くに随つて、恐ろしい疑惑が頭を擡げて来た。私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではなかった。様々な証拠が揃つていたとは言え、その証拠の解釈は凡て私の空想であつた。二に二を加えて四になるという様な、厳正不動のものではあり得なかつた。現に、私は運転手の言葉と、灰汁洗ひ屋の証言だけを以て、あの一度組み立てたまことしやかな推理を、様々な証拠を、まるで正反対に解釈することが出来たではないか。それと同じ事が、もう一つの推理にも起らないとどうして断言出来よう。事実、私はあの土蔵の二階で静子をせめた際にも、最初は何も

ああまでする積もりではなかった。静かに訳を話して、彼女の弁明を聞く積もりだった。それが、話の半ばから、彼女の態度が変に私の邪推を誘ったので、ついあんな手ひどく、断定的に物を言ってしまったのだ。そして、最後に度々念を押しても、彼女が押し黙って答えなかったもので、つっきり彼女の罪を肯定したものと独り合点をしてしまったのだった。だがそれはあくまでも独り合点ではなかったであろうか。

成程、彼女は自殺をした。(だが、果して自殺であったか。他殺！ 他殺だとしたら下手人は何者だ。恐ろしいことだ)。自殺をしたからと言って、それが果して彼女の罪を証することになるであろうか。もつと外に理由があつたかも知れないではないか。例えば、頼りと思う私から、あの様に疑い責められ、全く言い解くすべがないと知ると、心の狭い女の身では、一時の激動から、つい世を果敢なむ気になつたのではあるまいか。とすれば、彼女を殺したものは、手こそ下さぬ、明かにこの私であつたではないか。私はさつき他殺ではないと言つたけれど、これが他殺でなくて何であろう。

だが、私がただ一人の女を殺したかも知れないという疑いだけなれば、まだしも忍ぶことが出来る。ところが、私の不幸な妄想癖は、もつともつと恐ろしいことさえ考えるのだ。彼女は明かに私を恋していた。恋する人に疑われ、恐ろしい犯罪人として責めさいなまれた女の心を考えて見なければならぬ。彼女は私を恋すればこそ、その恋人のとき難い疑惑を悲しめばこそ、遂に自殺を決心したのではないだろうか。また、たとえ私のあの恐ろしい推理が当たっていたとしてもだ。彼女はなぜ長年つれ添つた夫を殺す氣になつたのである。自由か、財産か、そんなものが一人の女を殺人罪に陥れる程の力を持っていたのだろうか。それは恋ではなかったか。そして、その恋人というのは外ならぬ私ではなかったか。ああ、私はこの世にも恐ろしい疑惑をどうしたらよいのであろう。静子が殺人者であつたにしろなかつたにしろ、私はあれ程私を恋慕つていた可哀想な女を殺してしまったのだ。私は私のけちな道義の念を呪わすにはいられない。世に恋程強く美しいものがあるうか。私はその清く美しい恋を、道学者の様なたくな心で、無残にも打ち砕いてしまったのではないか。

だが、若し彼女が私の想像した通り大江春泥その人であつて、あの恐ろしい殺人罪を犯したのであれば、私はまだいくらか安んずるところがある。とは言え、今となって、それがどうして確かめられるのだ。小山田六郎氏は死んでしまった。小山田静子も死んでしまった。そして、大江春泥は永久にこの世から消え去ってしまったとしか考えられぬではないか。本田は静子が春泥の細君に似ていると言つた。だが似ているというだけでそれが何の証拠になるのだ。私は幾度も糸崎検事を訪ねて、その後の経過を聞いて見たけれど、彼はいつも曖昧な返事をするばかりで、大江春泥搜索の見込みがついているとも見えぬ。私は又、人を頼んで、平田一郎の故郷である静岡の町を検べて貰つたけれど、彼が全く架空の人物であつてくれればという空頼みの甲斐もなく、今は行方不明の平田一郎なる人物があつたことを報じて来た。だが、たとえ平田という人物が実在していた所で、彼が誠の静子の嘗つての恋人であつた所で、それが大江春泥であり六郎氏殺害の犯人であつたと、どうして断定することが出来よう。彼は今現にどこにも居ないのだし、静子はただの昔の恋人の名を、一人三役の一人の本名に利用しなかつたとは言えないのだから。更らに、私は親戚の人の許しを得て、静子の持ち物、手紙類などをすっかり調べさせてもらった。それから何等かの事実を探り出そうとしたのだ。しかし、この試みも何の齎すともたら

ころもなかった。

私は私の推理癖を、妄想癖を、悔んでも悔んでも悔やみ足りない程であった。そして、出来るならば、平田一郎の入江春泥の行方を探す為に、たとえそれが無駄だとは分かっている、日本全国を、いや世界の果てまでも、一生涯巡礼をして歩きたい程の気持ちになつてゐる。(だが春泥が見つかつて、彼が下手人であつたとしても、又なかつたとしても、夫々違つた意味で、私の苦痛は一層深くなるかも知れないのだが)。

静子が悲惨な死をとげてから、もう半年にもなる。だが、平田一郎はいつまでたつても現われぬのだ。そして、私の取りかえしのつかぬ、恐ろしい疑惑は、日と共に、月と共に、深まって行くばかりである。(本文・完)

*

*

さて、翌日の夕刊で、私は、静子の自殺を知つたのだつた。彼女は、恐らくは、あの洋館の二階から、小山田六助氏と同じ隅田川に身を投じて、覚悟の水死をとげたのである。彼女の死体は、やっぱり、あの吾妻橋の汽船発着所のそばに漂つていて、朝、通行人に発見されたのであつた。静子の死は、彼女が彼女の恐ろしい罪を自白したと同然で、まことに当然の成行きであると思つてゐた。少なくとも最初の一ヶ月間は、そう信じてゐた。

だが、やがて、恐ろしい疑惑が頭を擡げてきた。私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではなかつた。様々な証拠が揃つてゐたとは言え、その証拠の解釈は凡て私の空想であつた。——なるほど、彼女は自殺をした。だが、それが果たして彼女の罪を証することになるだろうか。もつと外の理由があつたかも知れない。例えば、頼りと思う私から、あの様に疑い責められ、全く言い解くすべがないと知ると、心の狭い女の身では、一時の激動から、つい世を果敢なむ気になつたのではあるまいか。私はさつき他殺ではないと言つたけれど、これが他殺でなくて何であらうか。

彼女は、明らかに私を恋してゐた。恋する人に疑われ、恐ろしい犯罪人として責めさいなまれた女の心を考えて見なければならぬ。彼女は私を恋すればこそ、その恋人の解き難い疑惑を悲しめばこそ、遂に自殺を決心したのではないだろうか。また、たとえ、私のあの恐ろしい推理が当たつてゐたとしてもだ。彼女はなぜ長年つれ添つた夫を殺す氣になつたのだろうか？ 自由か、財産か、そんなものが一人の女を殺人罪に陥れる程の力を持つてゐたのだろうか。それは、恋ではなかつたか。そして、その恋人というのは、外ならぬ私ではなかつたか。——ああ、私はこの世にも恐ろしい疑惑をどうしたらよいのであらう。静子が殺人者であつたにしろなかつたにしろ、私は、あれ程私を恋慕つてゐた可哀想な女を殺してしまつたのだ。私は、私のけちな道義の念を呪わずにはゐられない。世に恋ほど強く美しいものがあるうか。私は、その清く美しい恋を、道学者の様なかたくなな心で、無残にも打ち砕いてしまつたのではないのか、と思ひ悩むのであつた。

*

*

そこで、主人公(寒川)は、その後も、例えば、幾度も磯崎検事を訪ねて、その後の経過を聞いて見たけれど、大江春泥搜索の見込みがついてゐるとも見えぬ。また、人を頼んで、平田一郎の故郷である静岡の町を検べて貰つたけれど、今は行方不明の平田一郎なる人物があつたことを報じて来ただけ、とか、その他、これらは、一体、何のために行なつてゐることかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

つまり、「……私は、自分の推理癖、妄想癖を、悔んでも悔んでも悔み足りない程であ

った」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分の余計な「推理癖・妄想癖」が、結果として、静子を「自殺」へと追いやってしまったからである。しかも、「私は一言さえも、静子の直接の懺悔を聞いた訳ではない」とある。つまり、本人（静子）の「自白」（自供）というものは一言もなかったのである。それに加えて、また、なぜ「夫を殺した」のか、その「動機」もよく分からなければ、どのように殺したのか、その「殺害方法」さへもよく分かっているのではないのである。すべては主人公（寒川）の勝手な「推理・妄想」に過ぎないのである。——つまり、何一つ「確たるもの」はないのである。確かに、「……様々な証拠が揃っていたとは言え、その証拠の解釈は凡て彼の空想（妄想）に過ぎない」のである。また、「平田一郎」についても、静子が言うようなことが実際にあったのかどうか、また、そもそも「平田一郎」という人間は、この世に現実に存在する人間なのかどうか、それすらもよく分からない。それは、探偵作家大江春泥という人物も、どこまでがどうなのか、厳密には何一つ分かっていないのである。すべては主人公（寒川）の勝手な「推理・妄想」に過ぎないのである。だからこそ、もう一度、「平田一郎」や「大江春泥」について、できるだけ「正確な情報」を得ようとしているのである。そして、「……出来るならば、平田一郎の大江春泥の行方を捜す為に、たとえそれが無駄だとは分かっている、日本全国を、いや世界の果てまでも、一生涯巡礼をして歩きたい程の気持ちになっている」とある。それは、一体、なぜなのか？ それは、自分の勝手な「推理・妄想」によつて、愛する静子を無惨にも「自殺」へと追いやってしまったことに対する、まさに「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）であり、それは、つまり、心の底から「すまない」という想いに深く襲われているということである。……

つまり、主人公（寒川）の恋人静子を見る「目」は、今や犯罪者を「見る目」に変わってしまった。本来ならば、静子の「深く傷ついた心」を、今こそ、心から癒すべき「相談相手」（恋人）となつて、これからどうしたらよいかを、親身になり、二人でどこまでも深く話し合うべきところを、主人公（寒川）という人は、その静子の「深く傷ついた心」をそのまま放置したまま、何のやさしい言葉をかけることもなく、一人で帰ってしまったのである。その結果として、愛する静子を無惨にも「自殺」へと追いやってしまったのだ。そのことを主人公（寒川）は、今、心の底から「すまない」と悔いているのである。（完）

「参考文献」

- ※底本 「人間椅子」 江戸川乱歩著（「青空文庫」）
- ※底本 「D坂の殺人事件」 江戸川乱歩著（「青空文庫」）
- ※底本 「屋根裏の散歩者」 江戸川乱歩著（「青空文庫」）
- ※底本 「江戸川乱歩傑作集」 江戸川乱歩著（「新潮文庫」）
- ※底本 「江戸川乱歩文庫十字路他一編」（「春陽堂」）
- ※底本 「陰獣」 江戸川乱歩著（「角川ホラー文庫」）